# 久宝寺北

## （その1～3）

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

—本　文　編—

大阪府教育委員会
財団法人　大阪文化財センター

# 久宝寺北

## （その1～3）

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

―　本　文　編　―

大阪府教育委員会
財団法人　大阪文化財センター

# 序　文

久宝寺遺跡は河内平野南部に位置する大規模な複合遺跡で、その範囲は南北1.5km、東西1.0kmに及んでいる。遺跡の発見は古く昭和10年にさかのぼるが、発掘調査は、昭和49・50年に近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内の試掘調査及びガス管埋設に伴う事前調査が実施されたに過ぎなかった。

このため、今回の発掘調査が本遺跡における最初の大規模調査となったが、調査区域が遺跡の北半部にあたっているため、久宝寺遺跡北地区として、その概要を報告するものである。

調査の結果は本文に述べる通りであるが、縄文時代晩期、弥生時代中期、古墳時代前・中期、奈良・平安時代、江戸時代の各時期の遺構・遺物を多数発見することができた。なかでも、縄文時代晩期については、当該時期の最終末に位置付けられる土器群が出土し、古墳時代中期についても、多量の大陸系土器が出土している。これらの遺物は、現在の考古学界において最も注目されているものの一つであり、その意味で、考古学の今日的課題に新たな一石を投じることになったといえる。さらに、古墳時代前期の土器群も、急激に資料が増えつつある当該地域における同時期の土器の分析・研究のために貴重な資料となるものと考える。

本遺跡の発掘調査にあたっては、日本道路公団大阪建設局、財団法人大阪文化財センターをはじめ調査関係各位並びに多数の方々のご協力、ご援助をいただいた。ここに、深く感謝の意を表すると共に、今後とも温かいご支援を賜るよう切望してやまない。

昭和62年３月31日

大阪府教育委員会
文化財保護課長　吉房康幸

# 序　　文

大阪文化財センターが最初に河内平野の発掘に手を染めたのは、昭和48年度の近畿自動車道天理～吹田線の亀井遺跡等の第１次調査であった。それから今日まで、近畿道関連の調査を主に河内平野という大和川の形成した沖積地の調査に係わってきた。

この沖積地の調査は、遺構面が深く埋没していることや、遺構面の重複という点で困難の多いものである。安全管理の面からしても、鋼矢板の囲繞にも厳密な強度計算を必要とするなど、従来の考古学の知識だけでは対応しきれないものがある。こうした考古学の領域外のものはともかく、発掘調査にかぎって見ても、従来の調査方法とは異なった視点を要求される。

低湿地遺跡の調査における最大の問題は、いささか皮相な見方ではあるが、遺跡の残存状態が良すぎることである。台地や丘陵上の遺跡であれば、遺構面が浅いため、多少とも後世の影響を受けている。そのため、本来遺跡の有している情報も程度の差はあれ減少していると考えて良い。しかし、低湿地遺跡では、当時の生活面がそのまま粘土や砂に覆われて保存されている場合が多く、しかも、河川等の自然の営為による堆積、削剝の繰り返しの中に、そうした遺構面が複雑に重複している。発掘調査では、上層より順次下層に調査を進め、種々の記録を採取する訳であるが、その過程で考慮すべき事象が膨大なものとならざるを得ない。

低湿地遺跡の調査の成否は、そうした遺跡の有する膨大な情報をいかに的確にデータ化し、それらを系統的に的確な解釈を与えられるかどうかに係わってくる。この場合、考古学的な知識だけではなく、自然科学的な知識も大いに必要となるであろう。単に遺構面を検出し、遺構を掘削して平面図、断面図を実測するという通り一遍の調査では、低湿地遺跡の本来有する資料の相当部分が破壊されていくことになる。

そうした意味において、当センターの河内平野における14年の経験は、低湿地遺跡の持つ多彩な有り様に触れえたことで大変貴重なものであった。その過程で、幾多の試行錯誤を繰り返したとはいえ、低湿地遺跡調査の技術的向上に大いに寄与したものと自負している。

本書は、遺跡範囲が長大なため北地区３、南地区２の５つの調査区に分割した久宝寺遺跡の内、北地区の３つの調査区の概要報告書である。今回の久宝寺遺跡の調査では、縄文時代から近世まで途切れることなく膨大な遺構、遺物が検出されている。文字通り、低湿地遺跡調査の醍醐味を存分に堪能させてくれるものであった。これも、偏に大阪府教育委員会、日本道路公団を始めとする関係各機関、諸先生、並びに多数の方々の御協力、御援助の賜物である。ここに感謝の意を表するとともに、今後とも当センターのために暖かい御支援を賜るよう切望して止まない。

昭和62年３月

財団法人 大阪文化財センター
理事長　坪井清足

# 例　　　　　言

1．本書は、日本道路公団が建設を進めている近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査のうち、東大阪市大蓮東５丁目に所在する久宝寺遺跡北地区（その１）・（その２）・（その３）の発掘調査概要報告書である。

2．本調査は、大阪府教育委員会及び財団法人大阪文化財センターが日本道路公団大阪建設局の委託を受けて実施した。

3．本調査に要した費用、（その１）495,110,000円・（その２）385,125,000円・（その３）305,135,000円はすべて日本道路公団が負担した。

4．本調査は、（その１）昭和55年12月１日～昭和60年３月31まで、（その２）昭和55年12月１日～昭和59年８月31日まで、（その３）昭和55年12月１日～昭和59年４月30日までの間実施した。

5．出土遺物の洗浄、注記・遺構図面・撮影写真の基礎的整理業務は、発掘調査と併行して実施した。本書の作成にかかる整理作業は、（その１）昭和60年１月31日～昭和60年３月31日、（その２）昭和59年６月30日～昭和59年８月31日、（その３）昭和59年２月29日～昭和59年４月30日までの各２ケ月間に実施した。

6．本調査は、大阪府教育委員会の指導の下に、財団法人大阪文化財センターが実施した。調査並びに本書作成に関係した者は、以下の組織表のとおりである。

調査関係組織表

| | | |
|---|---|---|
| 事務局 | 理事兼事務局長 | 井上定清 |
| | | 小林廣喜 |
| | 事務局次長兼総務課長 | 大塚恭郎 |
| | 主幹兼庶務係長 | 坂上允子、主査　田中喜代子、主事　秋山芳廣・灰本明子・千野和久・田口宗義・鎗山洋子・宮本哲男 |
| | 主幹兼普及係長 | 福岡澄男、技師　妹尾直子・主事　小島容子 |
| | 業務課主幹 | 椋尾孝彦 |
| 調査総括責任者 | 業務課長 | 堀江門也 |
| | | 中井貞夫 |
| | | 石神怡 |
| 調査担当 | 業務課主幹兼第１係長 | 中西靖人 |

第４係長　高島徹

第３係長　赤木克視

技師　尾谷雅彦（現：河内長野市教育委員会）・

寺川史郎・陣内暢子・金光正裕・山口誠治・

平井貞子・片山彰一

また、調査に際して日本道路公団大阪工事事務所、大阪府八尾土木事務所、八尾・平野両警察署等に格別の配慮を受けた。

7．本調査では、自然遺物の分析、鑑定を以下の諸氏、機関に依頼した。

（花粉）パリノサーヴェイ株式会社、（螢光Ｘ線分析）第四紀地質研究所　井上　厳

（胎土分析）刑部小学校教諭　奥田　尚

8．本調査では、以下の学生諸君の協力を得た。

阿波ゆかり・浅田佳津子・浅野則子・阿古井美登里・井上芳・稲角祐子・井田和代・石川喜子・岩本敦美・家村富貴子・稲地智子・池本友紀子・伊藤佳津江・池端郁代・岩本成市・石谷和子・卯野佳代・上田浩子・遠藤美栄子・緦谷洋子・岡本真智子・大年和雄・大年啓司・荻野試・大川内陽子・大倉啓孝・太田邦子・緒方操・荻山真理・川口智加子・片山久美子・金川欣子・川上真理・木原美也子・北野貴久・北野光信・北野幸子・北山朋子・樹下則子・金光敏・貴田雅彦・菊山考彦・黒田尚子・弦真由美・小西道子・小林央知・合田茂伸・米浪省三・小林千尋・是沢美保・高正龍・斉藤ゆみ・斉木優子・柴田悦子・住本昌代・杉本淳子・関浩子・瀬川真子・高橋伸嘉・田中聖子・高森郁恵・高畠留美・高原淳哉・谷口喜美代・高橋睦美・谷野和人・武林美加代・田口純弘・竹内俊恵・竹林千恵・田森靖人・竹内和江・竹内佳代・辻本美貴・寺前陽代・寺島健司・寺野清美・東条美智子・那須明恵・灘口紀男・成田博重・新名仁智・西村隆男・西野五郎・西岡誠司・西尾真佐江・西村宏幸・布目久夫・野崎智子・畠山勝利・張本洋一・長谷川淳子・原村典子・廣岡邦男・平工夏子・平田真規子・福井聡・藤井登・藤岡和美・福田恵理子・福谷勝之・保田祐子・堀田真澄・松岡ひとみ・枡田真樹子・宮北千秋・三崎洋一・水田裕治・三嶋慰子・向秀雄・向井真紀子・森迫三千代・森継健夫・森国恭子・秦森陽子・山上弘・山崎純美・湯田晴夫・吉野俊一・吉原睦・吉田和正

9．本書の執筆は、中西靖人・尾谷雅彦・寺川史郎・金光正裕・山口誠治・が分担し、一部岸本道昭、鋤柄俊夫、江浦洋の協力を得て、寺川史郎・金光正裕がまとめた。

10．本調査では、写真、実測図などの記録を作成するとともに、カラースライドを多数作成した。また、本書に掲載した資料は、すべて財団法人大阪文化財センターが保管している。広く利用されることを希望したい。

# 凡　　　　例

1．遺構は、アルファベット記号と４桁の数字の組み合わせで表記した。

遺構の種類　　ＳＢ…掘立柱建物、ＳＤ…溝、ＳＥ…井戸、ＳＫ…土坑、ＳＱ…土器群、ＳＴ…水田（畦畔・水口）、ＳＳ…杭列、ＮＲ…自然河川

遺構の番号　　４桁の最初の数字は時代を表す。

１…縄文時代晩期・弥生時代前期、２…弥生時代中期、３…弥生時代後期、４…古墳時代前期、５…古墳時代中期、６…奈良・平安時代、７…近世以降

（例）ＳＢ4001古墳時代前期掘立柱建物１

2．各遺物は、各遺構・出土層ごとに通し番号を与え、木製品は頭にW、石製品は頭にＳを付して表示した。

3．遺物実測図の縮尺率は、特に大型のものを除き、土器、土製品を４分の１、木製品を４分の１、８分の１、３分の１、石製品を分の１に統一した。

4．本文中の遺構実測図の縮尺率は、溝・土坑を1/4・井戸掘立柱建物を1/6に統一した。

5．付図の縮尺率は、全体図を200分の１に統一し、他の縮尺も利用した。

6．遺構実測図は、高さをＴ．Ｐ．で、方位を座標軸北で統一した。

7．各遺構出土韓式系土器図版番号と第Ⅵ章第３節胎土分析と第４節Ｘ線開折の資料番号の対比は、表に示す通りである。

| 遺構 | 図版番号 | 第３節番号 | 第４節番号 | 実　測　図 |
|---|---|---|---|---|
| NR４００３ | １６３－２７ | Ｐ１５９ | ９６ | Ｐ１５９ |
| | 〃　－２９ | Ｐ６５８ | ９７ | Ｐ６５８ |
| | 〃　－３０ | Ｐ１６１ | ９８ | Ｐ１６１ |
| | 〃　－３１ | Ｐ１５８ | ９９ | Ｐ１５８ |
| SB５００３ | １９７－５ | Ｐ８６ | １０１ | Ｐ８６ |
| | 〃　－６ | Ｐ１４ | １００ | Ｐ１４ |
| SD５００１ | ２０１－１３ | Ｐ１３２ | ２６ | Ｐ１３２ |
| | 〃　－１０ | Ｐ２８４ | ２７ | Ｐ２８４ |
| | ２０２－２３ | Ｐ６１４ | ２０ | Ｐ６１４ |
| | 〃　－２４ | Ｐ６０４ | １７ | Ｐ６０４ |
| | 〃　－２５ | Ｐ６２２ | ２５ | Ｐ６２２ |
| | 〃　－２６ | Ｐ２８２ | １３ | Ｐ２８２ |
| | 〃　－２７ | Ｐ６１５ | ２１ | Ｐ６１５ |
| | 〃　－２８ | Ｐ６２０ | ２４ | Ｐ６２０ |
| | 〃　－２９ | Ｐ６１９ | ２３ | Ｐ６１９ |
| | 〃　－３０ | Ｐ６０９ | １９ | Ｐ６０９ |
| | 〃　－３１ | Ｐ６１８ | ２２ | Ｐ６１８ |
| | 〃　－３２ | Ｐ２８６ | １４ | Ｐ２８６ |
| | 〃　－３３ | Ｐ６０８ | １８ | Ｐ６０８ |
| | 〃　－３４ | Ｐ２９６ | １５ | Ｐ２９６ |
| | 〃　－３５ | Ｐ２９８ | １６ | Ｐ２９８ |
| SE５００２ | ２０６－６ | Ｐ１６９ | | Ｐ１６９ |
| | 〃　－７ | Ｐ１７１ | | Ｐ１７１ |
| | 〃　－８ | Ｐ１７０ | | Ｐ１７０ |
| SQ５００１ | ２１５－１０８ | Ｐ７１０ | ９ | Ｐ７１０ |
| | 〃　－１０９ | Ｐ６９４ | １ | Ｐ６９４ |
| | 〃　－１１０ | Ｐ７０６ | ６ | Ｐ７０６ |
| | 〃　－１１１ | Ｐ７０７ | ７ | Ｐ７０７ |
| | 〃　－１１２ | Ｐ６９９ | ３ | Ｐ６９９ |
| | 〃　－１１３ | Ｐ７４２ | １２ | Ｐ７４２ |
| | 〃　－１１４ | Ｐ７１１ | １０ | Ｐ７１１ |

| 遺構 | 図版番号 | 第３節番号 | 第４節番号 | 実測図 |
|---|---|---|---|---|
| ＳＱ５００１ | ２１５－１１５ | Ｐ７０８ | ８ | Ｐ７０８ |
| | 〃　－１１６ | Ｐ７００ | ４ | Ｐ７００ |
| | 〃　－１１７ | Ｐ７０２ | ５ | Ｐ７０２ |
| | 〃　－１１８ | Ｐ６９５ | ２ | Ｐ６９５ |
| | 〃　－１１９ | Ｐ７１２ | １１ | Ｐ７１２ |
| | 〃　－１２０ | Ｐ５９ | | Ｐ５９ |
| | 〃　－１２１ | Ｐ５５ | | Ｐ５５ |
| | 〃　－１２２ | Ｐ５３ | | Ｐ５３ |
| | 〃　－１２３ | Ｐ５４ | | Ｐ５４ |
| ＮＲ５００１ | ２１７－７ | Ｐ | １０３ | $P_2$４８９ |
| | 〃　－１４ | $P_2$ | １０２ | $P_2$ |
| | ２２１－４９ | Ｐ２２７ | ７６ | Ｐ２２７ |
| | 〃　－５０ | Ｐ２２６ | ７７ | Ｐ２２６ |
| | 〃　－５１ | Ｐ２１２ | ７０ | Ｐ２１２ |
| | 〃　－５２ | Ｐ２１５ | ７２ | Ｐ２１５ |
| | 〃　－５３ | Ｐ４８７ | ７１ | Ｐ４８７ |
| | 〃　－５４ | Ｐ２７８ | ６８ | Ｐ２７８ |
| | 〃　－５５ | Ｐ１５７ | ６６ | Ｐ１５７ |
| | 〃　－５６ | Ｐ２１４ | ６９ | Ｐ２１４ |
| | 〃　－５７ | Ｐ７４９ | ６７ | Ｐ７４９ |
| | ２２３－７４ | Ｐ１６９ | ８９ | Ｐ１６９ |
| | 〃　－７５ | Ｐ６７７ | ９２ | Ｐ６７７ |
| | 〃　－７７ | Ｐ６７０ | ９３ | Ｐ６７０ |
| | ２２４－７８ | Ｐ４１９ | ８８ | Ｐ４１９ |
| | 〃　－７９ | Ｐ１３４ | ８７ | Ｐ１３４ |
| | 〃　－８０ | Ｐ１６６ | ９１ | Ｐ１６６ |
| | 〃　－８１ | Ｐ１３０ | ９０ | Ｐ１３０ |
| | ２２５－８２ | Ｐ７３８ | ８０ | Ｐ７３８ |
| | 〃　－８３ | Ｐ７１８ | ８１ | Ｐ７１８ |
| | 〃　－８４ | Ｐ９６ | ９５ | Ｐ９６ |
| | 〃　－８５ | Ｐ７２０ | ７９ | Ｐ７２０ |
| | 〃　－８６ | Ｐ２６５ | ８４ | Ｐ２６５ |
| | 〃　－８７ | Ｐ６６０ | ８３ | Ｐ６６０ |
| | 〃　－８８ | Ｐ６６１ | ８５ | Ｐ６６１ |
| | 〃　－８９ | Ｐ６６８ | ８６ | Ｐ６６８ |
| | 〃　－９０ | Ｐ２７２ | ８２ | Ｐ２７２ |
| | 〃　－９１ | Ｐ１３５ | ９４ | Ｐ１３５ |
| | ２２６－９２ | Ｐ１１０ | ２８ | Ｐ１１０ |
| | 〃　－９３ | Ｐ６１２ | ４３ | Ｐ６１２ |
| | 〃　－９４ | Ｐ７２４ | ４４ | Ｐ７２４ |
| | 〃　－９５ | Ｐ７３３ | ４７ | Ｐ７３３ |
| | 〃　－９６ | Ｐ４４２ | ２９ | Ｐ４４２ |
| | 〃　－９７ | Ｐ１２５ | ３８ | Ｐ１２５ |
| | 〃　－９８ | Ｐ１１５ | ３１ | Ｐ１１５ |
| | 〃　－９９ | Ｐ７２６ | ４５ | Ｐ７２６ |
| | 〃　－１００ | Ｐ１１３ | ３０ | Ｐ１１３ |
| | 〃　－１０１ | Ｐ７３５ | ４８ | Ｐ７３５ |
| | 〃　－１０２ | Ｐ１１９ | ３２ | Ｐ１１９ |
| | 〃　－１０３ | Ｐ７３０ | ４６ | Ｐ７３０ |
| | 〃　－１０４ | Ｐ１２２ | ３５ | Ｐ１２２ |
| | 〃　－１０５ | Ｐ２９２ | ４２ | Ｐ２９２ |
| | 〃　－１０６ | Ｐ１２１ | ３４ | Ｐ１２１ |
| | 〃　－１０７ | Ｐ１２４ | ３７ | Ｐ１２４ |
| | 〃　－１０８ | Ｐ１２３ | ３６ | Ｐ１２３ |
| | 〃　－１０９ | Ｐ１２７ | ３９ | Ｐ１２７ |
| | 〃　－１１０ | Ｐ１２０ | ３３ | Ｐ１２０ |
| | 〃　－１１１ | Ｐ１２９ | ４１ | Ｐ１２９ |
| | 〃　－１１２ | Ｐ１２８ | ４０ | Ｐ１２８ |
| | ２２７－１１３ | Ｐ１１８ | ５３ | Ｐ１１８ |
| | 〃　－１１４ | Ｐ２９４ | ５７ | Ｐ２９４ |
| | 〃　－１１５ | Ｐ６７１ | ６３ | Ｐ６７１ |
| | 〃　－１１６ | Ｐ５８７ | ５９ | Ｐ５８７ |
| | 〃　－１１７ | Ｐ２９３ | ５６ | Ｐ２９３ |
| | 〃　－１１８ | Ｐ１１２ | ５１ | Ｐ１１２ |
| | 〃　－１１９ | Ｐ１０７ | ４９ | Ｐ１０７ |
| | 〃　－１２０ | Ｐ２９９ | ５８ | Ｐ２９９ |
| | 〃　－１２１ | Ｐ７２３ | ６４ | Ｐ７２３ |
| | 〃　－１２２ | Ｐ６１０ | ６２ | Ｐ６１０ |
| | 〃　－１２３ | Ｐ６０５ | ６１ | Ｐ６０５ |
| | 〃　－１２４ | Ｐ１１４ | ５２ | Ｐ１１４ |
| | 〃　－１２５ | Ｐ２８７ | ５４ | Ｐ２８７ |
| | 〃　－１２６ | Ｐ１０８ | ５０ | Ｐ１０８ |
| | 〃　－１２７ | Ｐ２８９ | ５５ | Ｐ２８９ |
| | 〃　－１２８ | Ｐ４１５ | | Ｐ４１５ |
| | | Ｐ５８９ | ６０ | Ｐ５８９ |
| | | Ｐ１００１ | ６５ | Ｐ１００１ |
| | | Ｐ５８３ | ７３ | Ｐ５８３ |
| | | Ｐ５８４ | ７４ | Ｐ５８４ |
| | | Ｐ５９２ | ７５ | Ｐ５９２ |
| | | Ｐ７４８ | ７８ | Ｐ７４８ |

# 久宝寺北

## （その１～３）

### 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
### 埋蔵文化財発掘調査概要報告書

## 目　　次


序文

例言

凡例

第Ⅰ章　調査に至る経過……………………………………………………………………中西靖人……… 1

第Ⅱ章　周辺の遺跡…………………………………………………………………………金光正裕……… 2

第Ⅲ章　調査の目的と方法…………………………………………………………………金光正裕……… 8

第Ⅳ章　基本層序……………………………………………………………………………金光正裕……… 13

第Ⅴ章　調査の成果………………………………………………………………………………………… 16

　第１節　調査成果の概略…………………………………………………………………金光正裕……… 16

　第２節　縄文時代…………………………………………………………………………寺川史郎……… 18

　第３節　弥生時代…………………………………………………………………………寺川史郎……… 34

　　　１．弥生時代中期……………………………………………………………………………………… 34

　　　２．弥生時代後期……………………………………………………………………………………… 52

　第３節　古墳時代…………………………………………………………寺川史郎・金光正裕……… 55

　　　１．古墳時代前期……………………………………………………………………………………… 55

　　　２．古墳時代中期……………………………………………………………………………………… 195

　第４節　奈良・平安時代………………………………………………………………寺川・金光……… 261

　第５節　鎌倉時代以降……………………………………………………………………〃　……… 289

第Ⅵ章　遺構と遺物の検討………………………………………………………………………………… 291

　第１節　久宝寺遺跡出土の布留式土器…………………………………………………金光正裕……… 291

　第２節　久宝寺遺跡出土韓式土器について……………………………………………尾谷雅彦……… 307

　第３節　久宝寺遺跡出土韓式土器胎土の砂礫構成…………刑部小学校教諭　奥田尚……… 343

　第４節　久宝寺遺跡出土韓式土器の胎土分析……………第四紀地質研究所　井上巌……… 358

　第５節　久宝寺遺跡出土遺物遺体の同定（特に種子同定について）………山口誠治……… 379

　第６節　久宝寺遺跡出土木製品の樹種鑑定について…………………………………山口誠治……… 383

第Ⅶ章　まとめ……………………………………………………………………………………………… 387

# 挿　図　目　次

## 第Ⅰ章～第Ⅴ章

第１図　遺跡周辺の旧地形（Ｓ＝1/25,000）…………………………………………………………… 2
第２図　地形分類図（『亀井・城山』より転載）………………………………………………………… 3
第３図　遺跡分布図（Ｓ＝1/50,000）…………………………………………………………………… 7
第４図　トレンチ設定方式（『西岩田』より転載）……………………………………………………… 9
第５図　トレンチ配置図（Ｓ＝1/5,000）………………………………………………………………… 11
第６図　地区割図…………………………………………………………………………………………… 12
第７図　基本層序概念図…………………………………………………………………………………… 15
第８図　Ａ６トレンチＧライン東壁土層断面図………………………………………………………… 18
第９図　Ｈ１トレンチＢライン東壁土層断面図………………………………………………………… 18
第10図　ＮＲ1001出土遺物実測図……………………………………………………………………… 19
第11図　Ａトレンチ14・Ｃ・Ｈライン壁土層断面図…………………………………………………… 21
第12図　ＡトレンチＥ・Ｆライン壁土層断面図………………………………………………………… 22
第13図　縄文時代包含層出土遺物実測図（１）………………………………………………………… 23
第14図　縄文時代包含層出土遺物実測図（２）………………………………………………………… 24
第15図　剥片生産工程模式図……………………………………………………………………………… 27
第16図　石核１実測図……………………………………………………………………………………… 28
第17図　石核２・３実測図………………………………………………………………………………… 29
第18図　石核接合資料１（４・４＋５）実測図…………………………………………………………… 30
第19図　石核接合資料２（６＋７）実測図………………………………………………………………… 31
第20図　剥片８・９実測図………………………………………………………………………………… 32
第21図　剥片10・11実測図………………………………………………………………………………… 33
第22図　ＳＫ2001遺構平面図・土層断面図……………………………………………………………… 34
第23図　ＳＫ2001出土遺物実測図………………………………………………………………………… 34
第24図　ＳＫ2004遺構平面図・土層断面図……………………………………………………………… 35
第25図　ＳＫ2004出土遺物実測図………………………………………………………………………… 35
第26図　ＳＫ2009遺構平面図・土層断面図……………………………………………………………… 35
第27図　ＳＫ2009出土遺物実測図………………………………………………………………………… 35
第28図　ＳＫ2011遺構平面図・土層断面図……………………………………………………………… 36
第29図　ＳＫ2011出土遺物実測図………………………………………………………………………… 36

第30図　ＳＫ2017遺構平面図……………………………………………… 36
第31図　ＳＫ2017出土遺物実測図……………………………………… 37
第32図　ＳＫ2018遺構平面図・土層断面図…………………………… 37
第33図　ＳＫ2018出土遺物実測図……………………………………… 37
第34図　ＳＫ2020出土遺物実測図……………………………………… 38
第35図　ＳＫ2021遺構平面・土層断面図……………………………… 38
第36図　ＳＫ2021出土遺物実測図……………………………………… 38
第37図　ＳＫ2023出土遺物実測図……………………………………… 38
第38図　ＳＫ2024出土遺物実測図……………………………………… 39
第39図　ＳＫ2027出土遺物実測図……………………………………… 39
第40図　ＳＫ2029出土遺物実測図……………………………………… 39
第41図　ＳＫ2030遺構平面図・土層断面図…………………………… 39
第42図　ＳＫ2030出土遺物実測図……………………………………… 40
第43図　ＳＫ2031遺構平面図・土層断面図…………………………… 41
第44図　ＳＫ2031出土遺物実測図……………………………………… 41
第45図　ＳＫ2033遺構平面図・土層断面図…………………………… 41
第46図　ＳＫ2033出土遺物実測図……………………………………… 41
第47図　ＳＥ2001遺構平面図・土層断面図…………………………… 41
第48図　ＳＥ2001出土遺物実測図……………………………………… 42
第49図　ＳＥ2002遺構平面図・土層断面図…………………………… 42
第50図　ＳＥ2002出土遺物実測図……………………………………… 43
第51図　ＳＥ2003遺構平面図・土層断面図…………………………… 44
第52図　ＳＥ2003出土遺物実測図……………………………………… 44
第53図　ＳＤ2001出土遺物実測図（１）……………………………… 45
第54図　ＳＤ2001出土遺物実測図（２）……………………………… 45
第55図　ＳＤ2006出土遺物実測図（１）……………………………… 45
第56図　ＳＤ2006出土遺物実測図（２）……………………………… 45
第57図　ＳＤ2009出土遺物実測図……………………………………… 46
第58図　ＳＤ2010出土遺物実測図……………………………………… 46
第59図　ＳＤ2013出土遺物実測図……………………………………… 46
第60図　ＳＤ2014出土遺物実測図……………………………………… 46
第61図　ＳＤ2016出土遺物実測図……………………………………… 47
第62図　ＳＤ2017出土遺物実測図（１）……………………………… 47
第63図　ＳＤ2017出土遺物実測図（２）……………………………… 47

第64図　ＳＤ2018出土遺物実測図……………………………………………………………………………47
第65図　ＳＤ2020出土遺物実測図……………………………………………………………………………48
第66図　ＳＤ2021出土遺物実測図……………………………………………………………………………48
第67図　弥生時代包含層出土遺物実測図……………………………………………………………………49
第68図　弥生時代遺構・包含層出土石器実測図……………………………………………………………49
第69図　ＡトレンチＥ・Ｆライン土層断面図………………………………………………………………50
第70図　ＮＲ2001出土遺物実測図……………………………………………………………………………52
第71図　ＳＳ3001遺構平面図・断面図………………………………………………………………………53
第72図　ＳＳ3001出土遺物実測図……………………………………………………………………………53
第73図　弥生時代後期遺構土層断面図………………………………………………………………………54
第74図　弥生時代後期遺構出土遺物実測図…………………………………………………………………54
第75図　久宝寺遺跡出土布留式土器分類図（１）－二重口縁壺－…………………………………………56
第76図　久宝寺遺跡出土布留式土器分類図（２）－広口壺・直口壺－……………………………………57
第77図　久宝寺遺跡出土布留式土器分類図（３）－小型壺－………………………………………………57
第78図　久宝寺遺跡出土布留式土器分類図（４）－甕－……………………………………………………58
第79図　久宝寺遺跡出土布留式土器分類図（５）－甕－……………………………………………………60
第80図　久宝寺遺跡出土布留式土器分類図（６）－高坏－…………………………………………………62
第81図　久宝寺遺跡出土布留式土器分類図（７）－高坏脚部－……………………………………………62
第82図　久宝寺遺跡出土布留式土器分類図（８）－鉢－……………………………………………………63
第83図　久宝寺遺跡出土小型丸底壺各部位相関図……………………………………………………………64
第84図　久宝寺遺跡出土布留式土器分類図（９）－小型丸底壺－…………………………………………65
第85図　久宝寺遺跡出土布留式土器分類図（10）－小型器台・小型有段鉢－……………………………65
第86図　ＳＢ4001遺構平面図・断面図………………………………………………………………………66
第87図　ＳＢ4002遺構平面図・断面図………………………………………………………………………67
第88図　ＳＢ4003遺構平面図・断面図………………………………………………………………………67
第89図　ＳＤ4001土層断面図…………………………………………………………………………………68
第90図　ＳＤ4001出土遺物実測図……………………………………………………………………………69
第91図　ＳＤ4002土層断面図…………………………………………………………………………………70
第92図　ＳＤ4002出土遺物実測図……………………………………………………………………………71
第93図　ＳＤ4003土層断面図…………………………………………………………………………………72
第94図　ＳＤ4003遺物出土状況図……………………………………………………………………………72
第95図　ＳＤ4003出土遺物実測図（１）……………………………………………………………………73
第96図　ＳＤ4003出土遺物実測図（２）……………………………………………………………………80
第97図　ＳＤ4003出土遺物実測図（３）……………………………………………………………………81

第98図　ＳＤ4003出土遺物実測図（４）……………………………………………………… 82
第99図　ＳＤ4003出土遺物実測図（５）……………………………………………………… 83
第100図　ＳＤ4003出土遺物実測図（６）……………………………………………………… 84
第101図　ＳＤ4003出土遺物実測図（７）……………………………………………………… 85
第102図　ＳＤ4004・4005・4014土層断面図……………………………………………………… 86
第103図　ＳＤ4004出土遺物実測図（１）……………………………………………………… 93
第104図　ＳＤ4004出土遺物実測図（２）……………………………………………………… 94
第105図　ＳＤ4004出土遺物実測図（３）……………………………………………………… 95
第106図　ＳＤ4004出土遺物実測図（４）……………………………………………………… 96
第107図　ＳＤ4004出土遺物実測図（５）……………………………………………………… 97
第108図　ＳＤ4006出土遺物実測図……………………………………………………… 99
第109図　ＳＤ4007土層断面図……………………………………………………… 99
第110図　ＳＤ4007出土遺物実測図（１）……………………………………………………… 102
第111図　ＳＤ4007出土遺物実測図（２）……………………………………………………… 103
第112図　ＳＤ4008土層断面図……………………………………………………… 104
第113図　ＳＤ4008出土遺物実測図……………………………………………………… 105
第114図　ＳＤ4009土層断面図……………………………………………………… 106
第115図　ＳＤ4009出土遺物実測図……………………………………………………… 107
第116図　ＳＤ4009・4010出土遺物実測図……………………………………………………… 108
第117図　ＳＤ4010土層断面図……………………………………………………… 109
第118図　ＳＤ4010・4012・4013土層断面図……………………………………………………… 110
第119図　ＳＤ4011・4012・4016・4018・pit１出土遺物実測図 ……………………………… 111
第120図　ＳＤ4015・4024土層断面図……………………………………………………… 113
第121図　ＳＤ4026出土遺物実測図……………………………………………………… 115
第122図　ＳＤ4027土層断面図……………………………………………………… 115
第123図　ＳＤ4028土層断面図……………………………………………………… 116
第124図　ＳＤ4029土層断面図……………………………………………………… 116
第125図　ＳＤ4029遺物出土状況 ……………………………………………… 117・118
第126図　ＳＤ4029出土遺物実測図（１）……………………………………………………… 121
第127図　ＳＤ4029出土遺物実測図（２）……………………………………………………… 122
第128図　ＳＤ4029出土遺物実測図（３）……………………………………………………… 123
第129図　ＳＤ4030土層断面図……………………………………………………… 124
第130図　ＳＤ4031土層断面図……………………………………………………… 125
第131図　ＳＤ4031遺物出土状況図（１）……………………………………………………… 125

第132図　ＳＫ4031遺物出土状況図（２）……………………………………………………………… 126
第133図　ＳＤ4030・4031出土遺物実測図（１）…………………………………………………… 127
第134図　ＳＤ4031出土遺物実測図（２）…………………………………………………………… 128
第135図　ＳＤ4031出土遺物実測図（３）…………………………………………………………… 129
第136図　ＳＥ4001土層断面図……………………………………………………………………… 130
第137図　ＳＫ4001出土遺物実測図………………………………………………………………… 130
第138図　ＳＫ4001遺構平面図・土層断面図……………………………………………………… 130
第139図　ＳＫ4002土層断面図……………………………………………………………………… 131
第140図　ＳＫ4002出土遺物実測図………………………………………………………………… 131
第141図　ＳＫ4003遺物出土状況図………………………………………………………………… 132
第142図　ＳＫ4003出土遺物実測図………………………………………………………………… 132
第143図　ＳＫ4004遺構平面図・土層断面図……………………………………………………… 132
第144図　ＳＫ4005遺構平面図・土層断面図……………………………………………………… 133
第145図　ＳＫ4006土層断面図……………………………………………………………………… 133
第146図　ＳＫ4006出土遺物実測図………………………………………………………………… 134
第147図　ＳＫ4007・4008遺構平面図・土層断面図……………………………………………… 135
第148図　ＳＫ4009土層断面図……………………………………………………………………… 135
第149図　ＳＫ4010土層断面図……………………………………………………………………… 136
第150図　ＳＫ4010出土遺物実測図………………………………………………………………… 136
第151図　ＳＫ4011遺構平面図・土層断面図・遺物出土状況図………………………………… 137
第152図　ＳＫ4011出土遺物実測図………………………………………………………………… 138
第153図　ＳＫ4012遺構平面図・断面図…………………………………………………………… 138
第154図　ＳＴ4001遺物出土状況図（１）………………………………………………………… 139
第155図　ＳＴ4001遺物出土状況図（２）………………………………………………………… 139
第156図　ＳＴ4001出土遺物実測図（１）………………………………………………………… 140
第157図　ＳＴ4001出土遺物実測図（２）………………………………………………………… 140
第158図　後背湿地出土遺物実測図………………………………………………………………… 141
第159図　ＮＲ4001～4003全体図…………………………………………………………………… 142
第160図　ＮＲ4001出土遺物実測図………………………………………………………………… 146
第161図　ＮＲ4002出土遺物実測図（１）………………………………………………………… 147
第162図　ＮＲ4002・4003出土遺物実測図（２）………………………………………………… 148
第163図　ＮＲ4002・4003出土遺物実測図（３）………………………………………………… 149
第164図　ＮＲ4002・4003出土遺物実測図（４）………………………………………………… 150
第165図　ＮＲ4002・4003出土遺物実測図（５）………………………………………………… 151

第166図　ＮＲ4002・4003出土遺物実測図（６）…… 152
第167図　Ｃトレンチ包含層直上層－第７層－出土遺物実測図（１）…… 156
第168図　Ｃトレンチ包含層直上層－第７層－出土遺物実測図（２）…… 157
第169図　Ｃトレンチ包含層直上層－第７層－出土遺物実測図（３）…… 158
第170図　Ｃ10トレンチ包含層上面出土遺物実測図…… 159
第171図　Ｃ１トレンチ包含層上面出土遺物実測図（１）…… 161
第172図　Ｃ１トレンチ包含層上面出土遺物実測図（２）…… 162
第173図　Ｃ２トレンチ包含層上面出土遺物実測図（１）…… 164
第174図　Ｃ２トレンチ包含層上面出土遺物実測図（２）…… 165
第175図　Ｃ２トレンチ包含層上面出土遺物実測図（３）…… 166
第176図　Ｃ13トレンチ包含層上面出土遺物実測図（１）…… 169
第177図　Ｃ13トレンチ包含層上面出土遺物実測図（２）…… 170
第178図　ＳＱ4001出土状況図…… 171
第179図　ＳＱ4001出土遺物実測図（１）…… 172
第180図　ＳＱ4001出土遺物実測図（２）…… 173
第181図　ＳＱ4002出土遺物実測図…… 175
第182図　ＳＱ4003出土状況図…… 177
第183図　ＳＱ4003出土遺物実測図…… 178
第184図　ＳＱ4004出土状況図…… 179
第185図　ＳＱ4004出土遺物実測図…… 180
第186図　ＳＱ4004出土状況図…… 182
第187図　ＳＱ4005出土遺物実測図…… 182
第188図　各地区包含層出土遺物実測図（１）…… 186
第189図　各地区包含層出土遺物実測図（２）…… 187
第190図　各地区包含層出土遺物実測図（３）…… 188
第191図　トレンチ部包含層出土遺物実測図（１）…… 191
第192図　トレンチ部包含層出土遺物実測図（２）…… 192
第193図　トレンチ部包含層出土遺物実測図（３）…… 193
第194図　トレンチ部包含層出土遺物実測図（４）…… 194
第195図　ＳＢ5001・5002遺構平面図・断面図…… 195
第196図　ＳＢ5003遺構平面図・断面図…… 196
第197図　ＳＢ5003出土遺物実測図…… 196
第198図　ＳＢ5004遺構平面図・断面図…… 197
第199図　ＳＤ5001土層断面図…… 197

第200図 ＳＤ5001遺物出土状況図…… 198
第201図 ＳＤ5001出土遺物実測図（１）…… 199
第202図 ＳＤ5001出土遺物実測図（２）…… 200
第203図 ＳＥ5001平面図・断面図…… 201
第204図 ＳＥ5001出土遺物実測図…… 202
第205図 ＳＥ5002平面図・断面図…… 203
第206図 ＳＥ5002出土遺物実測図…… 204
第207図 ＳＥ5003平面図・断面図…… 204
第208図 ＳＥ5003出土遺物実測図…… 205
第209図 ＳＱ5001遺構平面図・土層断面図・遺物出土状況図 …… 207・208
第210図 ＳＱ5001出土遺物実測図（１）…… 209
第211図 ＳＱ5001出土遺物実測図（２）…… 210
第212図 ＳＱ5001出土遺物実測図（３）…… 211
第213図 ＳＱ5001出土遺物実測図（３）…… 212
第214図 ＳＱ5001出土遺物実測図（４）…… 213
第215図 ＳＱ5001出土遺物実測図（５）…… 214
第216図 ＮＲ5001・居住域概略図…… 215
第217図 ＣトレンチＮＲ5001出土遺物実測図（１）…… 218
第218図 ＣトレンチＮＲ5001出土遺物実測図（２）…… 219
第219図 Ｄ～ＦトレンチＮＲ5001出土遺物実測図（１）…… 223
第220図 Ｄ～ＦトレンチＮＲ5001出土遺物実測図（２）…… 224
第221図 Ｄ～ＦトレンチＮＲ5001出土遺物実測図（３）…… 225
第222図 Ｄ～ＦトレンチＮＲ5001出土遺物実測図（４）…… 226
第223図 Ｄ～ＦトレンチＮＲ5001出土遺物実測図（５）…… 227
第224図 Ｄ～ＦトレンチＮＲ5001出土遺物実測図（６）…… 228
第225図 Ｄ～ＦトレンチＮＲ5001出土遺物実測図（７）…… 229
第226図 Ｄ～ＦトレンチＮＲ5001出土遺物実測図（８）…… 230
第227図 Ｄ～ＦトレンチＮＲ5001出土遺物実測図（９）…… 231
第228図 Ｄ～ＦトレンチＮＲ5001出土遺物実測図（10）…… 232
第229図 Ｄ～ＦトレンチＮＲ5001出土遺物実測図（11）…… 233
第230図 Ｄ～ＦトレンチＮＲ5001出土遺物実測図（12）…… 234
第231図 Ｄ～ＦトレンチＮＲ5001出土遺物実測図（13）…… 235
第232図 Ｄ～ＦトレンチＮＲ5001出土遺物実測図（14）…… 236
第233図 杭列構造模式図…… 237

第234図　ＳＳ5001遺構平面図……………………………………………………………………… 238
第235図　ＳＳ5002遺構平面図・断面図……………………………………………………………… 239
第236図　ＳＳ5003遺構平面図（１）………………………………………………………………… 240
第237図　Ｈライン土層断面図－ＳＤ5001・ＮＲ5001・ＮＲ5001－……………………………… 240
第238図　ＳＳ5003遺構平面図・土層断面図 ………………………………………………… 241・242
第239図　ＳＳ5004遺構平面図……………………………………………………………………… 243
第240図　ＳＳ5005遺構平面図……………………………………………………………………… 244
第241図　ＳＳ5001出土遺物実測図（１）…………………………………………………………… 245
第242図　ＳＳ5001出土遺物実測図（２）…………………………………………………………… 246
第243図　ＳＳ5002出土遺物実測図（１）…………………………………………………………… 247
第244図　ＳＳ5002出土遺物実測図（２）…………………………………………………………… 248
第245図　ＳＳ5002出土遺物実測図（３）…………………………………………………………… 249
第246図　ＳＳ5002出土遺物実測図（４）…………………………………………………………… 250
第247図　ＳＳ5003出土遺物実測図（１）…………………………………………………………… 251
第248図　ＳＳ5003出土遺物実測図（２）…………………………………………………………… 252
第249図　Ｃ７トレンチ・Ｃ12トレンチ第５層遺物出土状況図………………………………… 253
第250図　第５層出土遺物実測図（１）……………………………………………………………… 255
第251図　第５層出土遺物実測図（２）……………………………………………………………… 256
第252図　第５層出土遺物実測図（３）……………………………………………………………… 257
第253図　第５層出土遺物実測図（４）……………………………………………………………… 258
第254図　ＳＢ6001遺構平面図・断面図……………………………………………………………… 261
第255図　ＳＢ6001平面図……………………………………………………………………………… 262
第256図　ＳＢ6002平面図・断面図…………………………………………………………………… 262
第257図　ＳＢ6003平面図・断面図…………………………………………………………………… 263
第258図　ＳＢ6004平面図・断面図…………………………………………………………………… 264
第259図　ＳＤ6001遺物出土状況図…………………………………………………………………… 264
第260図　ＳＤ6001出土遺物実測図…………………………………………………………………… 265
第261図　ＳＤ6002出土遺物実測図…………………………………………………………………… 265
第262図　Ｃ11トレンチ遺構全体図・土層断面図…………………………………………………… 266
第263図　ＳＤ6003土層断面図………………………………………………………………………… 267
第264図　ＳＤ6003出土遺物実測図（１）…………………………………………………………… 269
第265図　ＳＤ6003出土遺物実測図（２）…………………………………………………………… 270
第266図　ＳＤ6003出土遺物実測図（３）…………………………………………………………… 271
第267図　ＳＥ6001土層断面図………………………………………………………………………… 272

第268図　ＳＥ6001出土遺物実測図…… 273
第269図　ＳＥ6002土層断面図・遺物出土状況図…… 274
第270図　ＳＥ6002出土遺物実測図…… 274
第271図　ＳＥ6003遺構平面図・断面図…… 275
第272図　ＳＥ6003出土遺物実測図（１）…… 275
第273図　ＳＥ6003出土遺物実測図（２）…… 276
第274図　ＳＥ6004出土遺物実測図（１）…… 276
第275図　ＳＥ6004遺構平面図・断面図…… 277
第276図　ＳＥ6004出土遺物実測図（２）…… 277
第277図　ＳＥ6005・ＳＫ6002平面図・土層断面図…… 278
第278図　ＳＥ6005出土遺物実測図…… 278
第279図　ＳＥ6006遺構平面図・土層断面図…… 279
第280図　ＳＥ6006出土遺物実測図…… 280
第281図　ＳＫ6001遺構平面図・土層断面図…… 280
第282図　ＳＫ6001出土遺物実測図…… 281
第283図　ＳＫ6002出土遺物実測図…… 281
第284図　ＳＫ6003遺構平面図・土層断面図…… 282
第285図　ＳＫ6003出土遺物実測図…… 283
第286図　ＳＫ6005土層断面図…… 284
第287図　ＳＫ6005出土遺物実測図…… 285
第288図　畦畔復元図…… 286
第289図　遺跡周辺条理復元図…… 287
第290図　Ａ８トレンチ北壁遺構関係土層断面図…… 288
第291図　第３層出土遺物実測図（１）…… 289
第292図　第３層出土遺物実測図（２）…… 290

# 第Ⅵ章　挿図・表目次

## 第１節

第１図　久宝寺遺跡出土布留式土器器種構成…… 294
第２図　甕Ｃ類口径頻度図…… 296
第３図　甕Ｃ類口径・器高相関図…… 296
第４図　甕Ｃ類体部形態別の比率…… 297
第５図　Ｃ類甕口縁部諸形態…… 297

第６図　ＳＤ4003・4004層位別器種比率……………………………………………… 299

第１表　主要遺構・主要遺構出土器種累計表………………………………………… 295
第２表　甕Ｃ類体部形態と大きさの相関表…………………………………………… 297
第３表　高坏II類坏部・脚部相関表……………………………………………………… 297

第２節

第１図　久宝寺遺跡出土韓式系土器実測図（１）－平底鉢－………………… 311・312
第２図　久宝寺遺跡出土韓式系土器実測図（２）－鍋・甕・高坏－………… 313・314
第３図　久宝寺遺跡出土韓式系土器実測図（３）－甑－……………………… 315・316
第４図　久宝寺遺跡出土黒色研磨土器実測図……………………………………… 317
第５図　ＮＲ5001出土初期須恵器実測図（１）…………………………………… 318
第６図　ＮＲ5001出土初期須恵器実測図（２）…………………………………… 318
第７図　ＮＲ5001出土初期須恵器実測図（３）…………………………………… 320
第８図　ＮＲ5001出土初期須恵器実測図（４）…………………………………… 320
第９図　ＮＲ5001出土初期須恵器実測図（５）…………………………………… 321
第10図　ＮＲ5001出土初期須恵器実測図（６）…………………………………… 321
第11図　火焔形の透しを持つ高坏……………………………………………………… 322
第12図　ＮＲ5001出土初期須恵器実測図（７）…………………………………… 323
第13図　ＳＱ5001出土初期須恵器実測図（１）…………………………………… 324
第14図　ＳＱ5001出土初期須恵器実測図（２）…………………………………… 325
第15図　ＳＱ5001出土初期須恵器実測図（３）…………………………………… 326
第16図　ＳＱ5001出土初期須恵器実測図（４）…………………………………… 326
第17図　ＳＤ5001出土初期須恵器実測図…………………………………………… 327
第18図　ＳＥ5002・5003出土初期須恵器実測図…………………………………… 327
第19図　各地域出土韓式系土器実測図（１）－把手付鍋－……………………… 330
第20図　各地域出土韓式系土器実測図（２）－把手付鍋－……………………… 331
第21図　韓式系土器平底鉢口縁部分類図……………………………………………… 332
第22図　国内出土平底鉢実測図………………………………………………………… 334
第23図　百済地域出土平底鉢実測図…………………………………………………… 335
第24図　新羅地域出土平底鉢実測図…………………………………………………… 335
第25図　伽耶地域出土平底鉢実測図…………………………………………………… 336
第26図　朝鮮半島中・南部地域出土遺跡分布図……………………………………… 338
第27図　大阪府下韓式系土器出土遺跡分布図………………………………………… 339

第１表　国内出土平底鉢分類表……………………………………………………………………………………… 333
第２表　百済地域出土平底鉢分類表………………………………………………………………………………… 335
第３表　伽耶地域出土平底鉢分類表（１）………………………………………………………………………… 337
第４表　伽耶地域出土平底鉢分類表（２）………………………………………………………………………… 338
第５表　大阪府下韓式系土器出土遺跡地名表……………………………………………………………………… 339

第３節

第１表　類型区分表……………………………………………………………………………………………………… 345
第２表　砂礫の観察表（１）………………………………………………………………………………………… 350
第３表　砂礫の観察表（２）………………………………………………………………………………………… 352
第４表　砂礫の観察表（３）………………………………………………………………………………………… 354
第５表　砂礫の観察表（４）………………………………………………………………………………………… 356

第４節

第１図　三角ダイヤグラム・菱形ダイヤグラム位置分類図………………………………………………………… 361
第２図　Mo－Mi－Hb 三角ダイヤグラム ………………………………………………………………………… 365
第３図　Mo－Ch、Mi－Hb 菱形ダイヤグラム …………………………………………………………………… 366
第４図　Pl－K－fels 相関図………………………………………………………………………………………… 370
第５図　Qt－Pl 相関図 ……………………………………………………………………………………………… 371
第６図　Rb－Sr－Zr 三角ダイヤグラム …………………………………………………………………………… 374
第７図　Rb－Sr 相関図 ……………………………………………………………………………………………… 375
第８図　K－fels－Zr・Sr・Rb 相関図 ……………………………………………………………………………… 376
第９図　Pl－Rb・Sr・Zr 相関図…………………………………………………………………………………… 376

第１表　胎土性状表（１）…………………………………………………………………………………………… 367
第２表　胎土性状表（２）…………………………………………………………………………………………… 368
第３表　蛍光Ｘ線結果表……………………………………………………………………………………………… 373

第５節

第１表　久宝寺遺跡出土植物遺体同定結果一覧表…………………………………………………………………… 380

第６節

第１表　久宝寺遺跡出土樹種鑑定結果一覧表１……………………………………………………………………… 384

第２表　久宝寺遺跡出土樹種鑑定結果一覧表２…… 385

# 付　図　目　次

付図１　基本層序模式図１
付図２　基本層序模式図２
付図３　縄文時代晩期自然河川平面図
付図４　弥生時代中期遺構面蘚苔図－Ａ・Ｂトレンチ－
付図５　弥生時代後期遺構面全体図－Ｆトレンチ－
付図６　古墳時代前期第１遺構面全体図－Ｃトレンチ－
付図７　古墳時代前期第２遺構面全体図－Ｃトレンチ－
付図８　古墳時代前期第２遺構面全体図－Ｆトレンチ－
付図９　古墳時代前期包含層上面遺物出土状況図（１）－Ｃ10トレンチ－
付図10　古墳時代前期包含層上面遺物出土状況図（２）－Ｃ１トレンチ－
付図11　古墳時代前期包含層上面遺物出土状況図（３）－Ｃ２トレンチ－
付図12　古墳時代前期包含層上面遺物出土状況図（４）－Ｃ13トレンチ－
付図13　古墳時代前期水田面ＳＴ4001全体図－Ａトレンチ－
付図14　ＣトレンチＡ・Ｉライン土層断面図－ＮＲ4001・4002・後背湿地－
付図15　古墳時代中期遺構面全体図－Ｆトレンチ－
付図16　奈良・平安時代遺構面全体図（１）－Ｃトレンチ－
付図17　奈良・平安時代遺構面全体図（２）－Ｄ・Ｅ・Ｆトレンチ－
付図18　平安時代水田面全体図－Ａ・Ｇ・Ｈトレンチ－

# 第Ⅰ章　調査に至る経過

久宝寺遺跡は、大阪府東大阪市大蓮東５丁目から八尾市久宝寺、同神武町一帯に所在する弥生時代前期から近世、近代まで永久として人々の生活の痕跡を残す複合大集落遺跡である。

当該遺跡は、昭和10年に行われた道路工事中に、調査区東方、小字西ロ、栗林において弥生式土器、土師器、くり船の残片等が発見され埋蔵文化財包蔵地として周知されたものであった。しかし、その後、当遺跡周辺では本格的な発掘調査が実施されたことはなく、特に府道中央環状線中央分離帯内の状況は皆目不明であった。こうした中で近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内の埋蔵文化財の取扱いについては、昭和46年以来、日本道路公団大阪建設局と大阪府教育委員会を中心に協議を重ねてきたが、昭和48年、49年度の２ケ年度にわたって第１次発掘調査を実施し、遺跡の範囲、埋没深度、遺構の有無、遺物の時期や量等を把握し、調査計画や組織体制を検討することとなった。

当該遺跡部分の上記の第１次発掘調査は、昭和48年、南側に位置する亀井遺跡と北側に位置する友井東遺跡を併せて５×５ｍグリッドを設定して実施した。その結果、当該遺跡地内に設定したすべてのグリッドから遺構、遺物が検出されたが、延長約1.5kmにもおよぶ範囲の中では、遺構面の拡がりや埋没深度については場所によりかなりの差異があることも判明した。

この調査結果を踏まえて当該遺跡の発掘調査計画が検討されたが、調査対象地の延長が極めて長いこと、また調査体制等を考慮して南北に２分割し、先に北側半分を調査することとした。さらにこの北側部分の対象地を調査工程に鑑み、３つの調査区に細分し、久宝寺遺跡北地区（その１）、同（その２）、同（その３）調査区として各々に調査担当者を配し実施することとし、昭和55年12月1 日付で日本道路公団東大阪建設局、大阪府教育委員会、財団法人大阪文化財センターの３者で委託契約を締結し、現地調査に着手した。

調査は、その後当該調査対象地が八尾インターチェンジとなる事が決定され、本線部分のみの当初の調査に、新たにインターチェンジ部分の橋脚及びＵ型擁壁、Ｌ型擁壁部分の調査が追加されたこと。加えて（その１）調査区では北に所在する佐堂遺跡との間の延長約180ｍのうち、府道大阪八尾線から南約60ｍが久宝寺遺跡として認知されたため調査範囲が追加された。また、調査がすすむ過程で、当初予想もしなかった縄文時代晩期最終末の極めて良好な遺物包含層が確認されたことから、掘削深度も数倍に増加する部分もでてきた。

このように久宝寺遺跡の発掘調査は、当初（その１）調査区が昭和58年８月、（その２）調査区が昭和59年１月、（その３）調査区が昭和58年11月の終了予定であったが、数回にわたって工法変更や調査範囲の変更等の協議を繰り返し、その都度設計変更をしながら（その１）は昭和60年３月、（その２）は昭和59年８月、（その３）は昭和59年４月に完了した。

# 第Ⅱ章　周辺の遺跡

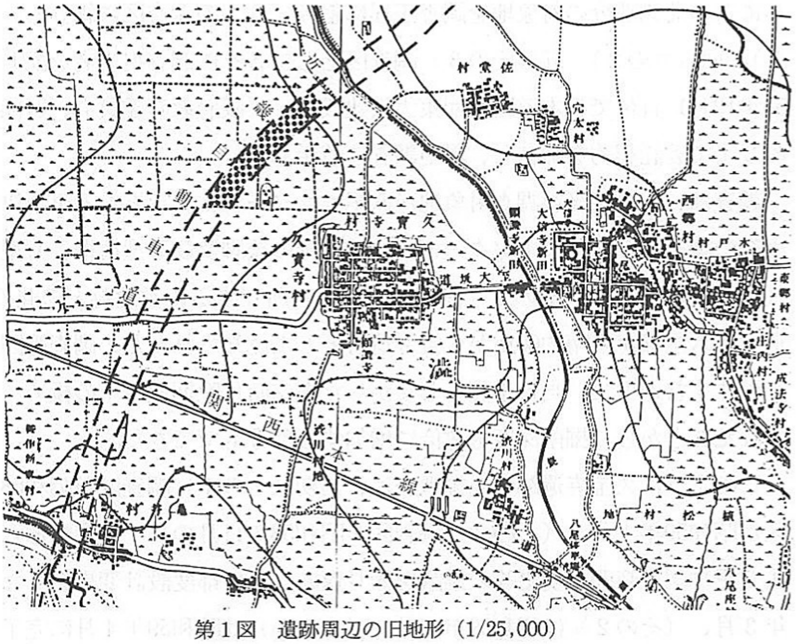
久宝寺遺跡は、東を生駒山地・西を上町台地・南を河内台地に囲まれた河内平野の南端、長瀬川と国鉄関西線にほぼ沿って観察される自然堤防列の間の扇状地性低地上に立地している。[(1)]河内平野は、淀川と大和川の二大河川とその支流を初めとする中小河川の活発な活動によって、複雑な地形変化をとげてきた地であり、その過程については、梶山彦太郎・市原実の両氏の研究によって明らかにされている。[(2)]また、近年の自然科学の成果を取り入れた遺跡調査では、細部にわたる地形変化や人間と自然との関わりの一端を示す資料も数多く提示され、より具体的な論考もなされるようになってきた。ここでは、こうした成果を踏まえた上で、本遺跡周辺の歴史的環境について、概観してみる事とする。

## （1）　旧石器時代

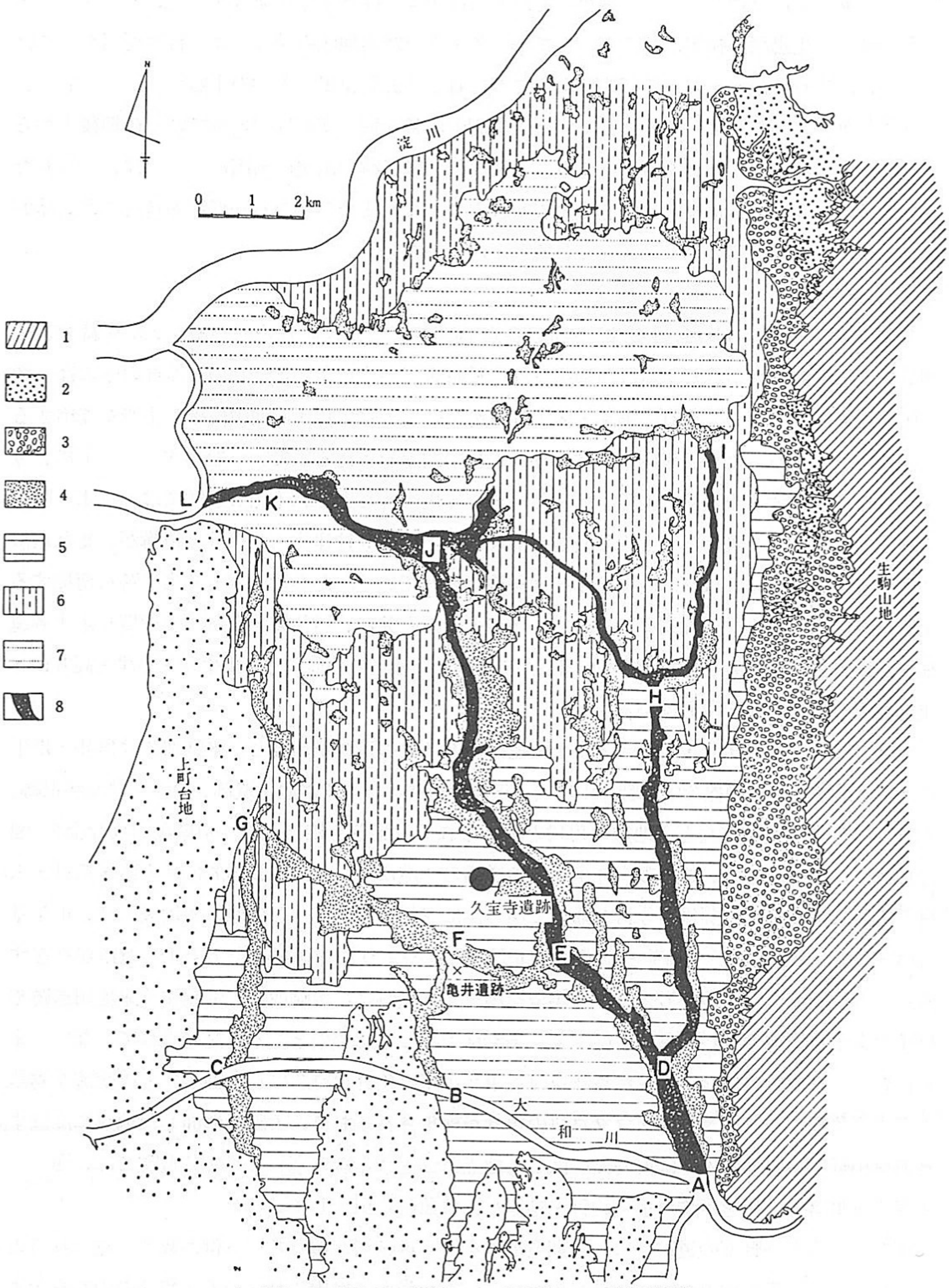
梶山・市原両氏の分類による「古大阪平野」の時代にほぼ相当する後期旧石器時代の遺跡は、これまで、藤井寺市国府遺跡に代表されるように周辺の洪積段丘や台地上で発見されており、平野部では、後世の2次堆積層から僅かに翼状剝片等の遺物が出土しているのみである。しかし当時の河内平野は、『ブナ・ナラを主とする冷温帯落葉広葉樹が繁茂し、沼沢地ではミツガシワ・ミズゴケ・ミズガシワが群生する植生景観をみせていた。』（松藤1978）[(3)]と考えられており、当時の人々がこうした地域を、狩猟の場としていた事は充分考えられる。

## （2）　縄文時代

この平野部での人々の活動の跡が確認されるのは晩期になってからと考えられ、それ以前については旧石器時代同様、後世の2次堆積層から遺物が散見されるのみである。河内湾が徐々に淡水化し、やがて河内潟が形成された時期に相当し、遺跡は、この河内潟の南に拡がる低地帯の微高



第1図　遺跡周辺の旧地形（1/25,000）




1．山地　2．段丘　3．扇状地　4．自然堤防　5．扇状地性低地
6．三角州性低地　7．潟湖性低地　8．旧河道

第2図　地形分類図（『亀井・城山』より転載、一部加筆）

地や自然堤防上に立地している。なかでも河内潟縁辺部に位置する新家遺跡では、セタシジミ・小型の巻貝の生息層が検出されている。また、久宝寺遺跡南地区の調査では、自然河川からではあるが、あまり磨滅しておらず内面に炭化物の付着した滋賀里Ⅲ～Ⅳ式の土器が出土しており、付近に集落の存在する事が考えられている。生駒山西麓地域を初め周辺地域では、後期後半から晩期にかけて遺跡数が増加する傾向にある。低地部での遺跡の出現の要因については、こうした周辺地域の動向とも密接な関連があると思われるが、これまでのところ平野部の遺跡では具体的様相を示すような遺構の調査例がなく、明らかにし得ない。

### （3） 弥生時代

久宝寺遺跡の南約3kmに位置する長原遺跡の調査では、縄文時代晩期の船橋式に後続し、晩期最終末に位置づけられる土器群が抽出され「長原式」が設定された。この土器群の中には、籾の圧痕が見られるものがあり、美園・久宝寺遺跡をはじめ弥生時代前期中段階の土器を伴出する例が知られるようになり、畿内における稲作農耕の開始を考える上で、「船橋式」とともに、今後更に検討を要する土器群である。低地部へ逸早く出現したとされる山賀遺跡では、排水・防水の機能を果たしたと考えられる大小溝群や前期新段階の掘立柱建物・井戸等の遺構が、また南接する友井東遺跡では、ほぼ同時期の水田面が検出されている。なかでも、友井東遺跡に南接する美園遺跡は前期後半～中期初頭の遺跡で、多量の土器と共に、居住域・墓域・生産域を示す各遺構群が検出され、集落の具体的様相が明らかにされている。この他には、瓜生堂・桑津・高井田・亀井などの各遺跡が出現している。

中期になると、若江北・小阪合・上小阪遺跡など多数の遺跡が出現し、平野部では亀井・瓜生堂・巨摩遺跡、生駒西麓では恩智・中垣内・鬼虎川遺跡、和泉では池上遺跡、摂津では安満遺跡、大和では唐古・鍵遺跡など各地域の母村と考えられる大集落を核とする『中期畿内大社会』[(4)]（酒井1982）が形成される。この畿内弥生社会の様相の一端については、具体的には土器・石材・木材の流通（需要供給）関係の分析を通じて明らかにされつつある。この他、各地域には、瓜生堂巨摩・亀井・瓜破（北）・加美・鬼虎川・東奈良などのように青銅製品を出土する遺跡が存在するが、青銅製品の生産地と考えられる鋳型を出土する遺跡は、生駒西麓に位置する鬼虎川遺跡や摂津の東奈良遺跡の例が知られるのみで、平野部ではこれまでのところ、発見されていない。また、豊富な動植物遺体などの自然遺物を得る事が出来た亀井遺跡では、海浜集落との交流を物語る海水産魚類のハモ属タイ科・マグロ科の魚骨が採集されており、大阪湾に面した地点に位置する遠里小野、河内湾あるいは河内湖に面した地点に位置する森の宮・桑津の各遺跡では、漁労に依存する集落の様相を示す多量の釣針・蛸壺などの魚貝が出土している。

後期になると平野部の遺跡では、中期遺構面を流水堆積層が覆っている例が数多く見られるようになる。先の瓜生堂遺跡では、溝・土坑・ピットが僅かに検出されるのみで集落の中心を示すような状況は見られなくなる。後期前半の水田面が検出された若江北遺跡でも、後期中頃には再び砂層が覆い水田を放棄している。また亀井遺跡でも、井戸・土坑の遺構は著しく減少し、砂層

を堆積物とする溝が多く掘削され、集落の中心域は他へ移動している。この亀井遺跡の調査では後期溝群の掘削とその堆積物に示される流路と水量の変化の要因について、『人類による森林破壊・水田開発という後背地の変化に起因するのではないだろうか。弥生時代後期後半頃には、人間による自然環境の改変も自然のバランスをくずすに至る程大きなものとなっていた』（寺川・尾谷・那須・樽野1980）と考えられており、[5]不安定な自然環境の出現が、人々の活動とけっして無関係でなかった事を示している。また、梶山・市原両氏は、『水深の浅い内湾・潟・湖に土砂流出量の多い川が流れこみ、州がつぎつぎ成長するような地帯では、複雑な汀線が出現するのが常である。』（梶山・市原1972）とし、この時期の河内平野が複雑な地形変化を繰り返していたものと考えられている。

### （4）　古墳時代

弥生時代後期の不安定な自然環境が一応安定するのは、早くとも後期末、もしくは古墳時代初頭になっての事であろう。この時期には新たに八尾南・中田・成法寺・東郷・萱振・小若江・若江北などの各遺跡が出現する。近年の土器の詳細な分析によって、広範囲で活発な交流の様相も示されている。遺跡の内容についても徐々に明らかになりつつあり、なかでも長原古墳群に隣接する八尾南遺跡や加美遺跡及び久宝寺遺跡などは大規模な集落であり、発掘調査もかなりの部分で実施され、集落内の具体的様相も比較的明らかにされている。

これまで、平野部でも埴輪の出土は知られていたが、古墳そのものについては、羽曳野丘陵の末端に位置する長原古墳群の他はあまり論究されることはなかった。しかし、亀井遺跡において５世紀中葉の方墳が検出されてからは、改めて平野部での古墳の存在が注目されるようになり、その後、山賀・友井東・美園・萱振・加美・瓜生堂巨摩などの各遺跡でも相次いで検出された。そのうち、美園古墳（ＣＳＸ307）は精巧な家形埴輪や壺形埴輪を、またこれより北東約１kmに近接する萱振１号墳は靫形埴輪を伴っている。また瓜生堂２号方形周溝墓を凌ぐ規模のマウンドを有する方形周溝墓（Ｙ１号墓）が検出された加美遺跡84－１地区では、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて多数の周溝墓や古墳が造営されており、銅族・鏡（小型紡製鏡・内行花文鏡)・韓式系土器など豊富な遺物を出土している。これまでに検出された古墳は大和川の各水系ごとに分布し、いずれも方墳である。このことは久宝寺遺跡南地区や加美遺跡84－１地区で検出された前方後方形の周溝墓の評価と共に、今後河内平野部での古墳の変遷を明らかにしていく上で、注目すべき事実である。当時期は河内平野にとって大きな開拓の時代である。それは大和川や淀川とその支流をはじめとする中小河川の治水事業が中心で、『書記』に見られる難波の堀江の掘削や茨田堤・依網池の築造の記事や、亀井遺跡の堤防・中田遺跡の堰によって推察することが出来る。そしてこの大事業には、先の『書記』の記事や最近出土例が増えている韓式系土器の存在によっても渡来系集団が大きな役割を果していた事が充分考えられる。

### （5）　古墳時代以降

古墳時代を経て律令国家の時代には、『凡河内』などと呼称され757年に和泉国が分立した当

地域には、若江鏡神社・石田神社・川俣神社などの式内社や加美鞍作寺・渋川寺などの寺院が建立されている。昭和42年（1967）には若江北遺跡西方約300mの地点で発掘調査が実施され若江郡衙と推定される遺構・遺物が出土している。また、条理地割は現地表面の観察によっても知る事が出来るが、施行時期については諸説がある。その中で、美園周辺では現存地割に一致する7世紀後半の溝が検出されており、美園周辺での条里がこの時期までさかのぼると考えられる。また、佐堂遺跡では、同じく現存地割に一致する9世紀代の水田が検出されており、これに続くと考えられる水田が長瀬川を挟んだ久宝寺遺跡でも今回の調査によって検出されている。

久宝寺周辺は、中世末から近世初頭にかけて一向宗西証寺（現久宝寺御坊顕証寺）を中心とする寺内町を形成し、久宝寺城主安井氏にその支配権が委ねられた。その町域は南西約500mにあり現在の町並みの中にもその名残を伺う事が出来る。また南西の現平野区周辺は環濠都市として栄える。江戸時代宝永元年（1704）の大和川の付け替え以後は急速に農地が拡大し、当遺跡周辺は河内木綿の本場として栄え、久宝寺船着場として大阪方面への水運の基地として要衝の中心として重要な役割を果した。

「引用・参考文献」


（1） 原秀禎　1980「自然地理的背景」『亀井・城山』 大阪文化財センター

（2） 梶山彦太郎・市原実　1972「大阪平野の発達史」 地質学論集第7号

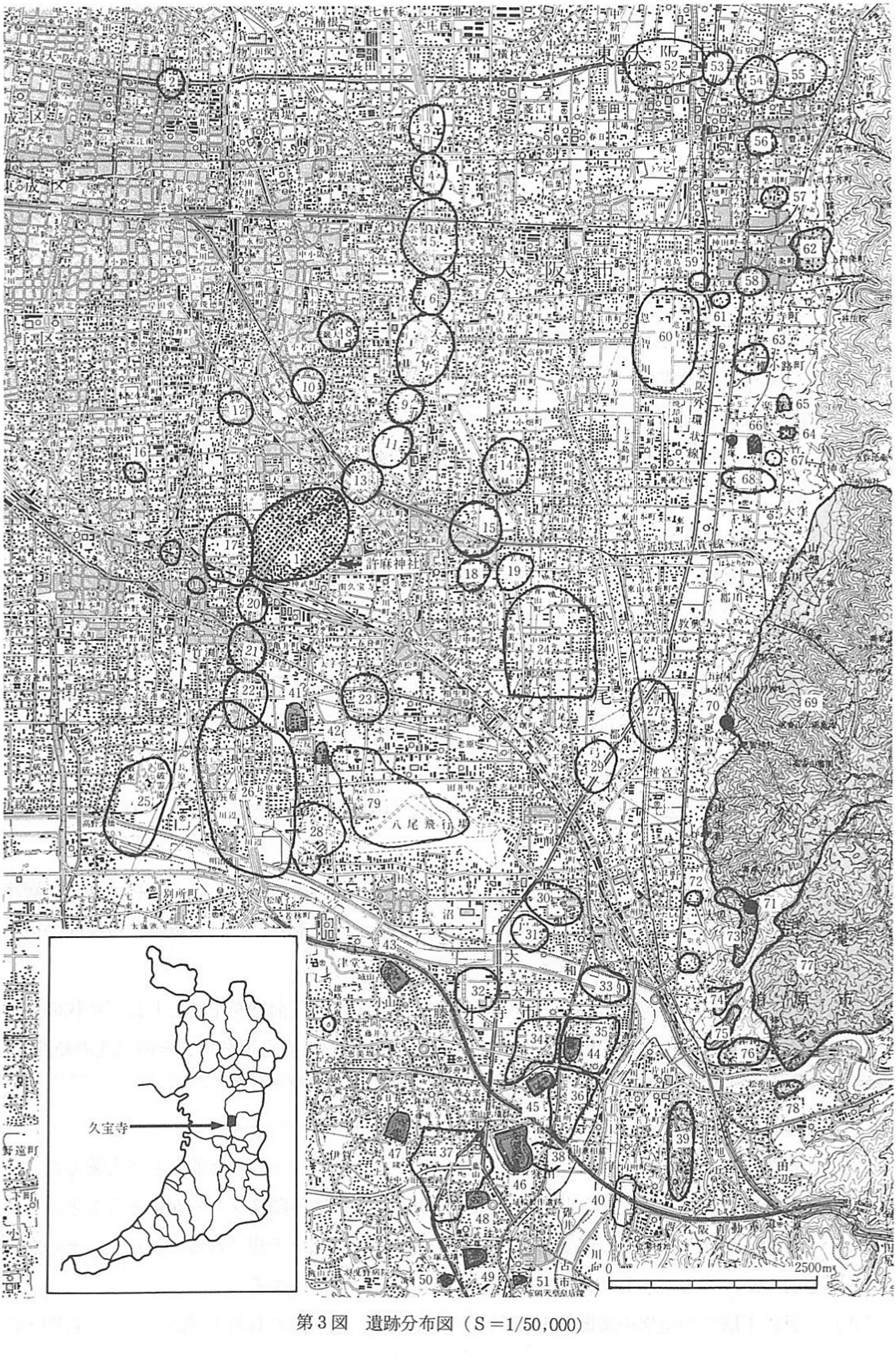
（3） 松藤和人　1978「土器以前の文化―ウルム氷期最盛期の動植物」『大阪府史』第一巻

（4） 酒井龍一　1982「畿内大社会の理論的様相」『亀井遺跡』 大阪文化財センター

（5） 寺川史郎・尾谷雅彦・那須孝悌・樽野博幸　1980「弥生時代中・後期の環境と生活」『亀井・城山』大阪文化財センター


| | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 久宝寺 | 縄文後～ | 21 | 亀井 | 弥生(前)～ | 41 | 城山古墳(?) | ? | 61 | 下六万寺 | 古墳時代 |
| 2 | 高井田 | 弥生～(中初) | 22 | 城山 | 弥生(中)～ | 42 | 六反古墳(?) | ? | 62 | 山畑古墳群 | 古墳時代後期 |
| 3 | 新家 | 縄文晩期～ | 23 | 太子堂 | 古墳～ | 43 | 津堂城山古墳 | | 63 | 馬場川 | 縄文(中)～ |
| 4 | 西岩田 | 弥生(前)～ | 24 | 中田 | 弥生～ | 44 | 市ノ山古墳 | | 64 | 花岡山古墳 | 古墳時代前期 |
| 5 | 巨摩・瓜生堂 | 弥生(前)～ | 25 | 瓜破 | 弥生(前)～ | 45 | 仲ツ山古墳 | | 65 | 西の山古墳 | 古墳時代前期 |
| 6 | 若江北 | 弥生(前)～ | 26 | 長原 | 旧石器～ | 46 | 誉田山古墳 | | 66 | 心念寺山古墳 | 古墳時代中期 |
| 7 | 山賀 | 縄文(後)～ | 27 | 恩智 | 縄文(晩)～ | 47 | 岡三サンザイ古墳 | | 67 | 大竹 | 弥生(後)～古墳 |
| 8 | 小若江 | 弥生～ | 28 | 八尾南 | 縄文～ | 48 | 墓山古墳 | | 68 | 水越 | 弥生(中)～ |
| 9 | 友井東 | 弥生(前)～ | 29 | 東弓削 | 弥生(後)～ | 49 | 前の山古墳 | | 69 | 高安古墳群 | 古墳時代後期 |
| 10 | 弥刀 | 古墳～ | 30 | 本郷 | 縄文(晩)～ | 50 | 白髪山古墳 | | 70 | 恩智銅鐸出土地 | |
| 11 | 美園 | 縄文～ | 31 | 川北 | 弥生～ | 51 | 高屋築山古墳 | | 71 | 多紐細文鏡出土地 | |
| 12 | 衣摺 | 弥生時代 | 32 | 西大井 | 旧石器～ | 52 | 水走 | 弥生～ | 72 | 大県 | 縄文～ |
| 13 | 佐堂 | 弥生(中)～ | 33 | 船橋 | 縄文晩期～ | 53 | 鬼虎川 | 縄文(晩)～ | 73 | 平野古墳群 | 古墳時代後期 |
| 14 | 萱振 | 弥生～ | 34 | 林 | | 54 | 西ノ辻 | 弥生(中)～ | 74 | 太平寺古墳群 | 古墳時代後期 |
| 15 | 東郷 | 古墳(前)～ | 35 | 国府 | 旧石器～ | 55 | 神並 | 縄文(早)～ | 75 | 安堂古墳群 | 古墳時代後期 |
| 16 | 加美北 | | 36 | 土師ノ里 | | 56 | 鬼塚 | 縄文(晩)～ | 76 | 高井田横穴群 | 古墳時代後期 |
| 17 | 加美 | 弥生(中)～古墳 | 37 | はさみ山 | | 57 | 皿池 | 弥生～奈良 | 77 | 平尾山・横尾古墳群 | 古墳時代後期 |
| 18 | 成法寺 | 弥生(後)～ | 38 | 茶山 | | 58 | 縄手 | 縄文(中)～ | 78 | 松岳山古墳群 | 古墳時代前期 |
| 19 | 小阪合 | 弥生(後)～ | 39 | 玉手山古墳群 | 古墳時代前期 | 59 | 北鳥池 | 弥生～古墳 | 79 | 木の本 | 弥生(中)～ |
| 20 | 亀井北 | 弥生(中)～ | 40 | 円明 | | 60 | 池島 | 縄文～ | 80 | | |

第1表　遺跡地名表



第3図　遺跡分布図（S＝1/50,000）

# 第Ⅲ章　調査の目的と方法

1．遺跡の位置

久宝寺遺跡は、八尾市西久宝寺を中心とする東西約1.0km・南北約1.5kmの範囲にひろがり、行政区画では、大阪市平野区加美・八尾市西久宝寺・東大阪市大蓮東の３市に所属している。遺跡の南西部は、大阪市加美遺跡と接し、北には府道大阪八尾線を挾んで佐堂遺跡が、南には国鉄関西本線を挾んで亀井北遺跡が位置している。

2．既往の調査とその成果

遺跡発見の喫機となったのは1935年に行われた道路工事の際に、許麻神社の西方で土器が出土した事によるもので、[(1)]その後は長く水田の下に眠ったままであった。初めて発掘調査の手が加えられたのは、1974年になってのことである。それは今回の調査に先立って実施された近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内における試掘調査であった。[(2)]この調査は、５×５ｍの小規模なグリッド調査ではあったが、中央環状線神武跨道橋南端から国鉄関西本線北側までの約1.5kmの間に、計７ケ所のトレンチが設定され、これによってようやく、遺構の種類・時期・層序関係・遺跡の範囲について推察されるにまでに至った。翌1975年には、大阪ガス河内ライン導管埋設予定地内でも事前調査が実施された。[(3)]これら２度の調査で得られた知見をまとめると次の通りである。

（１）　弥生時代中期から現代に至るまでの各期・多種にわたる遺物が出土したが、その中でも多数を占めたのは、弥生時代後期から古墳時代前期の土器群であった。

（２）　1974年調査No.29トレンチから石釧の未製品，1975年調査No.12トレンチから青色のガラス製小玉が出土した。

（３）　検出された遺構は、弥生時代後期から現代に至るまでの各期のものが存在するが、層序関係・遺構面のベースとなる層は各トレンチで異なっており、唯一古墳時代遺構面のベースとなる層のみが、全トレンチで確認された。

これらのことから、久宝寺遺跡は、弥生時代後期から古墳時代前期を中心とした『時代の異なる遺跡が重なり合い、複雑な様相を呈する』（中西・辻内1974）[(4)]複合遺跡で、その南北の範囲は、1974年調査No.25トレンチから関西本線付近までに及ぶものと推察された。

3．調査の目的

先の調査で得られた知見を下に、今回の調査は、まず次の点を主要な目的として実施した。

（１）　試掘調査で確認された各期の遺構面の内容と相互の層序関係を明らかにすること。

（２）　石釧・ガラス製小玉の出土によって、古墳の存在が充分予想されることから、その有無を明らかにするとともに、当該期の遺跡の内容を明らかにすること。

（３）　更に下層での遺構や試掘調査で検出されなかった遺構面の有無を確認し、その時期・内

容・層序関係を明らかにすること。

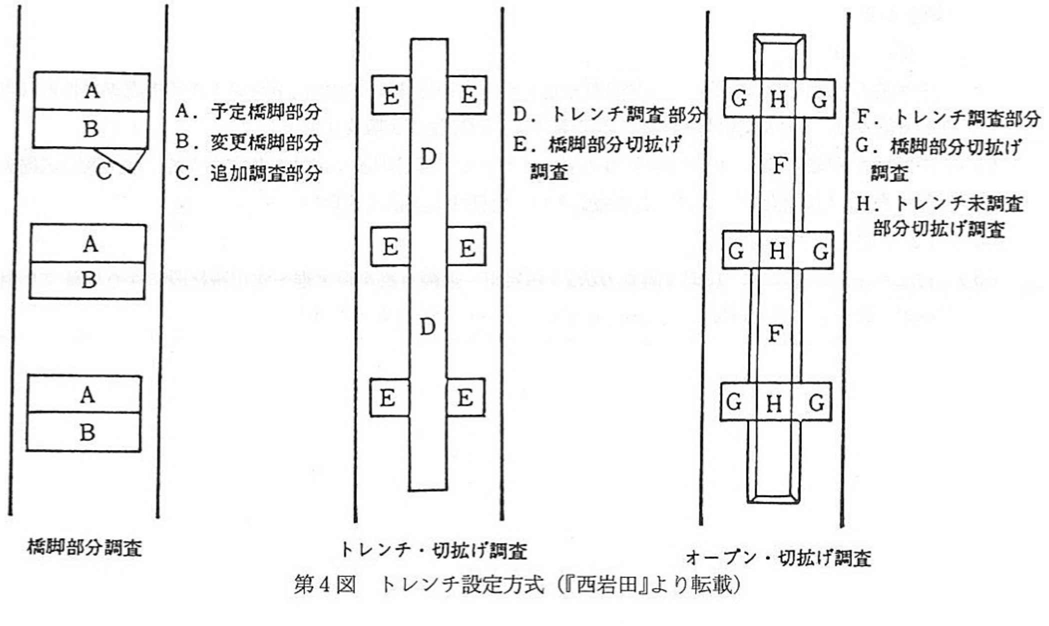
4．調査の方法

調査の対象となったのは、追加調査部分を含めて、府道大阪～八尾線から正覚寺～鞍作線までの総延長660m、12305.78m$^2$であった。調査は次の方法に基づいて実施した。

（1）　トレンチの設定

トレンチは当初北からA～Fまでの6トレンチが設定され、その方法は、試掘調査の結果を受けてAトレンチを「オープン・切拡げ方式」、B～Fトレンチを「トレンチ・切拡げ方式」によった。(5) しかし、その後BトレンチGL－4mにおいて弥生時代遺物包含層を検出、更に北側Aトレンチへも続く事が予想された為、Aトレンチでは、予定掘削深度に達した後包含層の有無を確認する事を目的として、トレンチ中央部に幅3mの試掘トレンチを設定した。その結果、包含層はトレンチ中央部分まで存在し、更に北には、縄文時代晩期包含層及び縄文時代晩期自然河川が存在する事が明らかになった。その後の調査方法等について大阪府教育委員会、日本道路公団と協議を行なった結果、（1）Aトレンチについては、新たに鋼矢板を打設して最終遺構面まで調査する事。（2）北半部の縄文時代自然河川は、切拡げ部分の調査時に、鋼矢板を連続して打設して調査を行う事が決定された。また、Dトレンチ予定位置には、農業用用水路（通称蛭田川）に伴なうコンクリート壁の集水枡や調査区を横断するガス埋設管が存在する事からこれらを避けてトレンチを設定するとともに、用水路付替部分にもトレンチを設定し、調査を実施した。

この他新たに調査対象となった八尾インターチェンジ建設予定地部分では、調査区が工業用水管（北行き車線側）と下水道管（南行き車線側）に隣接する事から、これより約50cm離してJ、K、C－10～13、ONランプ1・2トレンチを設定した。更に遺跡が広がる事が確認されたAトレンチから府道大阪～八尾線までの間60mについては、掘削深度が深くなる事から、工法上10m



第4図　トレンチ設定方式（『西岩田』より転載）

×15mの２本のトレンチG、Hを設定して調査を実施した。設定された全トレンチは、第５図に示す通りである。切拡げ部のトレンチは、西東西の順に、北から番号を付し、Ａ－１、Ａ－２、Ａ－３と呼称とした。

（２） 地区割

調査位置の絶対化を図る為、国土座標軸を援用する事とした。しかし、設定にあたっては、調査区がＳ字状にカーブしている為、実際に調査を進行していくうえで、不都合が多い不整形な地区が多数できる事から、これを解消する為に、次の処置を行った。すなわち、日本道路公団が設定した測量点（ステーション杭）STA110＋10mを通る国土座標軸（Ｘ＝－151.875, Ｙ＝－37.6425）のＹ軸を東へ60°回転させ、これを基準に５×５ｍを最小単位とする地区割を設定した。各地区は、回転させたＹ軸方向にアルファベット大文字、Ｘ軸方向にアラビア数字を付し、各地区は北西コーナーの交点で呼称した。なお便宜上切り拡げ部については、トレンチ名を地区名称とした。（第６図）

（３） 土層観察用アゼの設定

縦断方向については、共通の断面で土層の観察が行なえる様に、なるべく調査区全域を通る地区割軸上に設定した。また、横断方向は20mごとに、切り拡げ部については、北西と西及び東の矢板際に設定した。その他包含層の掘り下げについては、状況に応じて任意に設定し、包含層中の遺構面の検出に努めた。

（４） 実測用基準線の設定

実測用基準線は、地区割に一致させ、１ｍメッシュを基本とした。またＳ＝1/50、1/100では平板測量を併用した。

「参考文献」

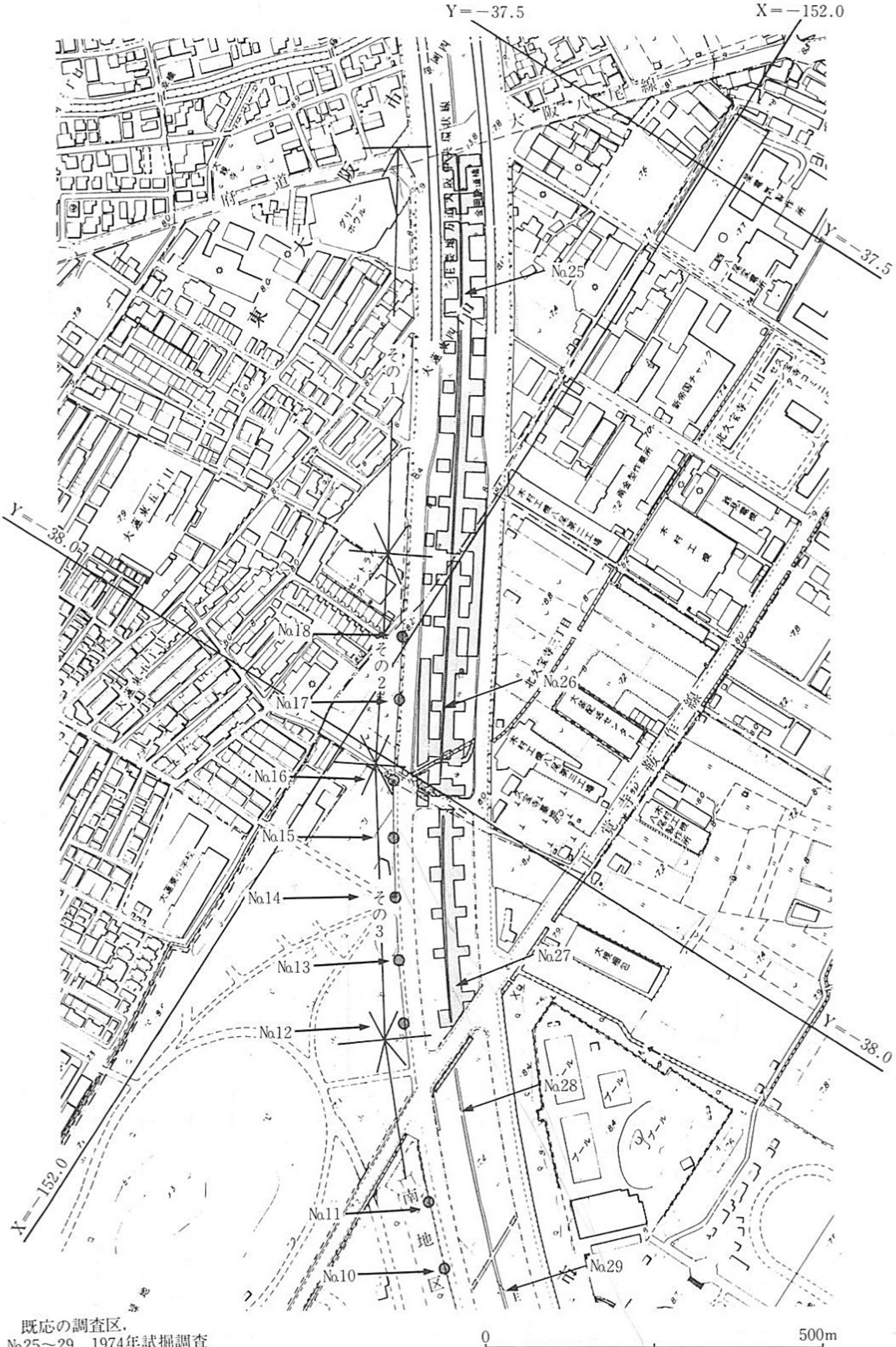
（１） 八尾市史第１巻

（２） 中西靖人・辻内義浩　1974『近畿自動車道天理～吹田線建設予定地内遺跡第１次発掘調査報告書（現地調査総括編）『大阪文化財センター調査報告Ｘ』財団法人大阪文化財センター

（３） 中西靖人・国乗和雄　1975『大阪ガス河内ラインガス導管埋設予定地内久宝寺遺跡、城山遺跡試掘調査報告書』『大阪文化財センター調査報告ＸⅢ』財団法人大阪文化財センター

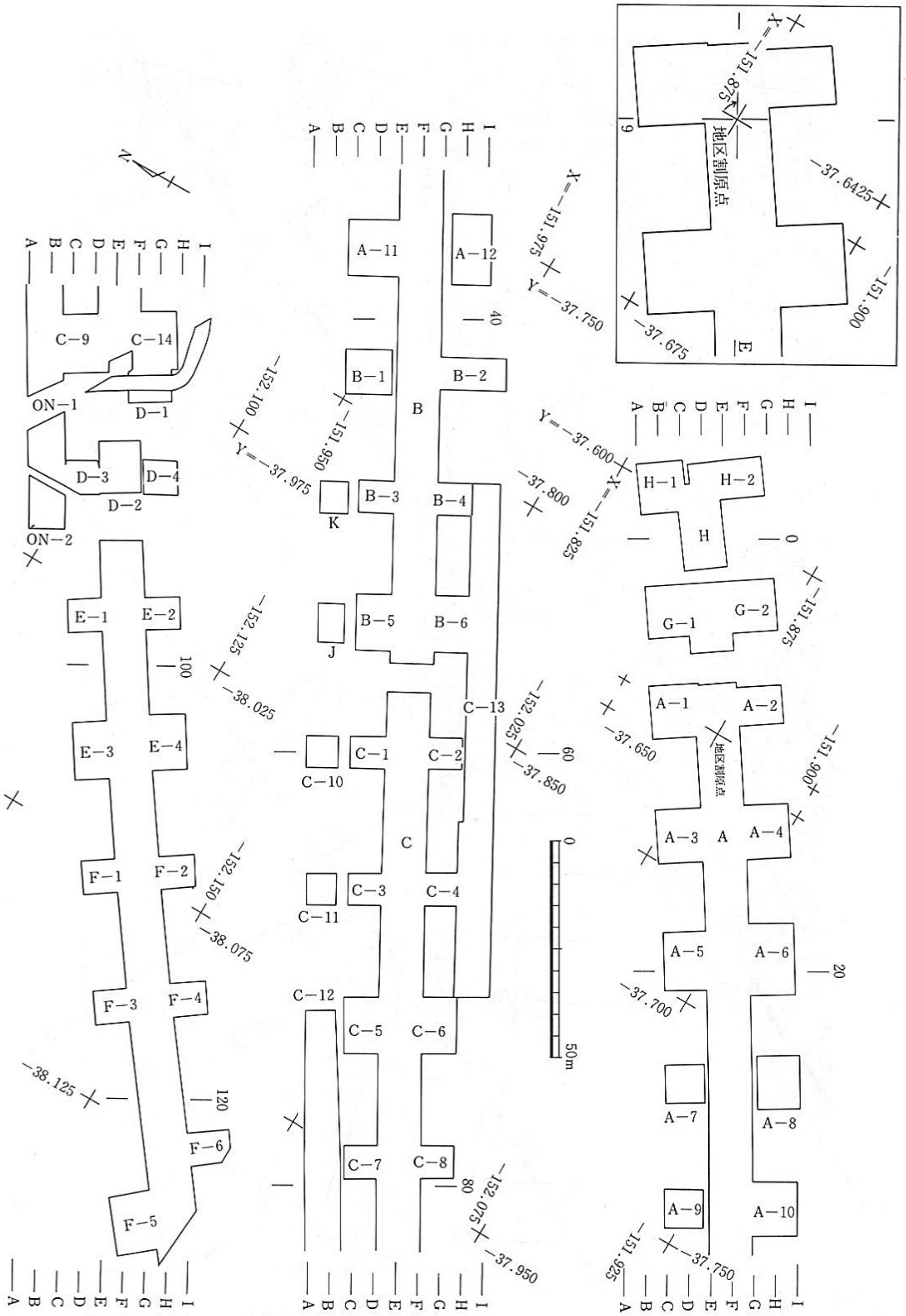
（４） （２）に同じ

（５） 村上年生　1983『調査方法』『西岩田　近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』財団法人大阪文化財センター　大阪府教育委員会




既応の調査区.
No.25～29　1974年試掘調査
No.10～18　1975年調査

第5図　トレンチ配置図（S＝1/5,000）


X=−151.875
地区割原点
−37.6425
−151.900
−37.675
Y=−37.750
X=−151.975
Y=−37.600
X=−151.825
−37.800
−152.100
−151.950
Y=−37.975
−152.125
−38.025
−152.150
−38.075
−38.125
−152.025
−37.850
−152.075
−37.950
−151.875
−37.650
−151.900
−37.700
−151.925
−37.750
A−1
A−2
A−3
A−4
A−5
A−6
A−7
A−8
A−9
A−10
A−11
A−12
B−1
B−2
B−3
B−4
B−5
B−6
C−1
C−2
C−3
C−4
C−5
C−6
C−7
C−8
C−9
C−10
C−11
C−12
C−13
C−14
D−1
D−2
D−3
D−4
E−1
E−2
E−3
E−4
F−1
F−2
F−3
F−4
F−5
F−6
G−1
G−2
H−1
H−2
ON−1
ON−2
K
J
50m

第6図　地区割図

# 第Ⅳ章　基本層序

今回の調査では、総延長約660m・深さGL－4～6mの間で縄文時代晩期から現代に至るまでの地層の変化を観察する事が出来た。その堆積状況は複雑な様相を呈しており、細部にわたる層序関係についてはなお検討を要する。現段階では、各調査区で検出された遺構面のベースとなった地層の検討を行い、基本層序の把握に努めた。整理された層は計18層で、各層の概要は次に述べるとおりである。

**第1層**　大阪中央環状線建設時の盛土と、それ以前の旧表土・耕土層である。上面はT.P.＋7.4～7.8mの間にあり、北側長瀬川左岸自然堤防に向けて高くなる。層厚は0.4～1.0m。層中には、産業廃棄物・巨礫などが多数含まれる。

**第2層**　床土層である。

**第3層**　近世以降の水田・畑の造成によって形成されたテラス状の高い部分に堆積している層である。70ライン以南では、中砂・粗砂を多く含む黄褐色シルトであるのに対して、70ライン以北では、中砂・粗砂である。

**第4層**　第4遺構面上に堆積する層である。T.P.＋5.5～6.6mの間にあり、ほぼ70ライン付近から北に向かって層厚を増す。層相は各地点によって異なり、1－細砂・中砂を含む5Y4/2灰オリーブ色粘土層。2－細砂・粗砂層。3－マンガン斑の沈澱が顕著な褐灰色シルト質粘土層の3層に大別される。70ライン付近から北に向けて徐々に粒径が小さくなり、還元の度合が進み、層相は青灰色粘土となる。層中には、菱鉄鉱・植物遺体・灰白色・黄灰色微砂の薄層が狭在する。

**第5層**　第4遺構面のベースとなる層である。上層第4層から漸移的に変化し、層理面は必ずしも明確ではない。第4層同様に北にいくにしたがって粒径が小さくなり青灰色粘土となる。70ライン以南では、マトリックスは灰褐色または黄灰色の微砂・シルトで、下部は、極細砂・微砂のラミナが発達している。85～108ラインでは、古墳時代中期自然河川NR5001の堆積物第6層の砂層を覆う。

**第6層**　古墳時代中期自然河川NR5001の堆積物である。粗砂・礫のラミナがよく発達し、豊かな水量があった事が窺え、調査区周辺の状況より当該期の長瀬川の本流と考えられる。ほぼ南北方向に北流する。河床面を上昇させながら流心は徐々に南へ移動している。T.P.＋3.4～6.2mの間にあり、最深部では、深さ約3mにも達する。

**第7層**　第5遺構面のベースとなる層である。T.P.＋6.2～5.5mの間にある。マトリックスは、灰黄褐色シルトで、119ライン以南では粗砂・極細砂を含み、下部へは漸移的に粘土層へ一変化し、70～82ラインでは、下部で黄褐色微砂・暗青灰色粘質シルトのラミナが発達している。70ライン以北からは、第4・5層と同様に粘土層へと変化し、また層相も第4・5層と酷似して

おり、明確に分層し得なかった。層中には、黒色有機物の薄層が多数狭在している。

第８層　古墳時代前期自然河川ＮＲ4001～4003内の堆積物を一括する。層相は、第６層と同様で、豊かな水量があった事が窺える。ＮＲ4002は、ＮＲ5001の前身河川と考えられる。

第９層　古墳時代前期包含層である。Ｂ～Ｉ－58～66地区では、マトリックスは粗砂で粘土・炭・灰・土器を多量に含む。Ｆ～Ｈ－115～121地区では、黒色粘土層である。

第10層　第６遺構面のベースとなる層である。58～70ライン付近にかけては、弥生時代中期以降に細砂の薄層を狭在する粘土・シルトの小規模な自然堤防を形成しながら、粗砂・中砂層が堆積する。Ｔ．Ｐ．＋3.8～5.4ｍの間にあり、最も高くなった部分に、居住域を示す遺構群が形成される。この自然堤防状の堆積は、ほぼＮ－30°－Ｅ方向にのび、東側にかけて低くなる。71～77ラインのＮＲ4001とＮＲ4002に挟まれた地域は、砂層を含む青灰色粘土層が堆積し、ここで足跡が検出されている。58ライン付近では、シルト・砂のラミナと粘土が複雑な互層となって堆積する。102～122ライン付近は弥生時代後期自然河川ＮＲ3001の流路廃絶後に形成された自然堤防と考えられる。Ｔ．Ｐ．＋4.4～5.2ｍの間にある。

第11層　弥生時代後期自然河川ＮＲ3001内の堆積物を示す。

第12層　弥生時代後期包含層である。120～122ラインの間にあり、Ｔ．Ｐ．＋4.6～4.7ｍ、層厚20～30cmの粘土混じりの粗砂層である。

第13層　第７遺構面のベースとなる層である。120～122ライン付近に堆積するシルト・砂のラミナと粘土が複雑な互層となった層である。Ｔ．Ｐ．＋4.7～4.9ｍにある。

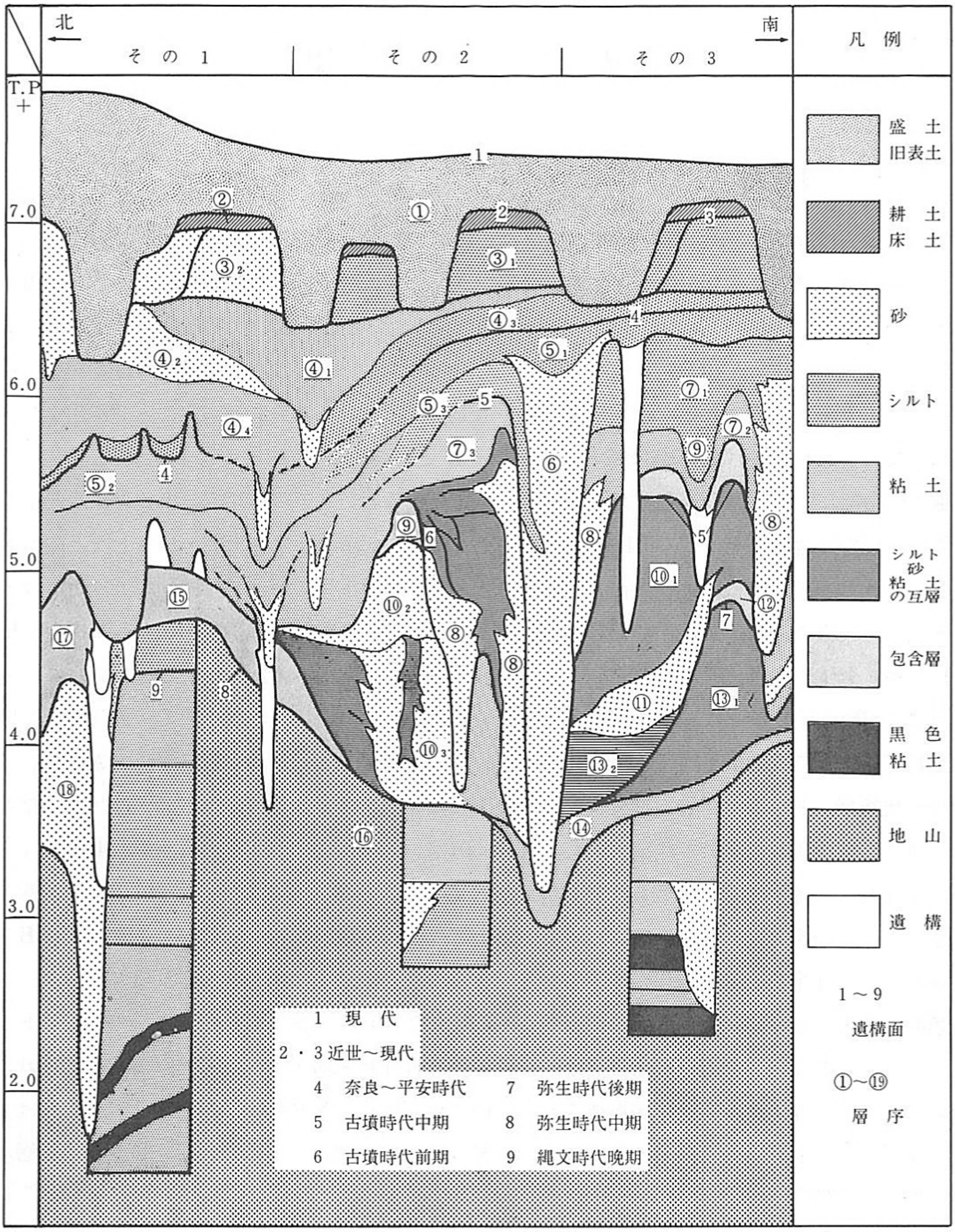
第14層　86～107ライン付近に堆積する粘土層である。粒径１～３cmの炭酸第一鉄が多数含まれる黒灰色粘土層とその上に堆積する灰白色微砂・シルトの薄層を狭在する青灰色粘土層とに分層される。Ｔ．Ｐ．＋3.0～3.8ｍの間にある。層厚は20～50cm黒灰色粘土層の拡がる範囲には、層相より沼地状の地形を示していたと考えられる。

第15層　弥生時代中期包含層である。第6遺構面と同様20ライン付近で最も高く南に向けて低くなる。Ｔ．Ｐ．＋3.8～5.0ｍ、層厚20～30cm、層相は、中砂・細砂を含む黒色粘土で、層中には炭・焼土が含まれる。

第16層　第８遺構面のベースとなる層である。ラインで最も高く、第14層の堆積する地点が最底位となり、再び南に向けて高度を増す。マトリックスは青灰色粘土

第17層　縄文時代晩期包含層である。20ライン以北に堆積し、Ｔ．Ｐ．＋4.0～4.8ｍの間にある。20ライン付近では上に菱鉄鉱を含む暗青灰色粘土層である。

第18層　縄文時代晩期自然河川ＮＲ1001内の堆積物を一括する。20ライン以北、Ｔ．Ｐ．＋1.8～4.4ｍの間にある。


北
南
その1
その2
その3
凡例
T.P +
7.0
6.0
5.0
4.0
3.0
2.0
盛土 旧表土
耕土 床土
砂
シルト
粘土
シルト 砂 粘土の互層
包含層
黒色 粘土
地山
遺構
1～9 遺構面
①～⑲ 層序
1 現代
2・3 近世～現代
4 奈良～平安時代
5 古墳時代中期
6 古墳時代前期
7 弥生時代後期
8 弥生時代中期
9 縄文時代晩期

第7図　基本層序概念図

# 第Ⅴ章　調査の成果

## 第１節　調査成果の概略

今回の調査で検出された遺構・遺物の概略は次に記すとおりである。

**縄文時代**：調査区の北側H．Aトレンチ以北で、晩期包含層とその下で晩期自然河川ＮＲ1001が検出された。包含層は、Ｔ．Ｐ．+4.5～５ｍの間にあり、平均層厚約20cmである。層中からは、多量の長原式に属する土器と、少量の弥生時代前期の土器が出土した。このなかでは、長原式深鉢に、籾の圧痕が認められるものが１点出土しており注目される。自然河川の河床面はＴ．Ｐ．＋２ｍにまで達し、川幅は概ね100ｍを測る。

**弥生時代中期**：同じく調査区北側Ａトレンチ南半部からＢトレンチにかけて、Ⅲ～Ⅳ様式を中心とする中期の包含層とその下の第16層青灰色シルト層上面で溝・井戸・土坑・ピットなどの遺構が検出された。包含層は、北側で高くＴ．Ｐ．+4.8～3.8ｍの間にある。平均層厚約25cm。灰・焼土粒・青灰色シルトのブロックを混入する黒灰色砂混り粘土層である。層中からも遺構が検出されたが、全体に遺構、遺物の出土量は少なく、集落の中心域を示すとは考えられない。この遺構面は、南に向けて徐々に下がり、Ｃ地区南端～Ｄ・Ｅ地区の沼状の低地を経て、再び高度を増す。Ｆトレンチでは簡単な杭列ＳＳ2001が、Ｃトレンチ北端では鹿・人の足跡が検出された。

**弥生時代後期**：ＦトレンチＦ・Ｈ－114～126地区の微高地上で、後期前半期の溝・土坑が、微高地北側で自然河川ＮＲ3001が検出された。ＮＲ3001は、大半が古墳時代自然河川ＮＲ4002によって削平されている。遺構・遺物の出土は少ない。Ｃトレンチ北半部では、厚さ約1.8ｍの砂層や粘土とシルトの複雑な互層が堆積し、Ｃトレンチでは古墳時代前期遺構面のベースとなる。Ｂトレンチでは、北半部で弥生時代中期包含層上面に古墳時代前期の水田が形成される。

**古墳時代前期**：Ｂ～Ｃ・Ｆトレンチに遺構面が存在する。Ｃトレンチ54～70ラインの間と、Ｆトレンチ113～121ラインの間にある微高地上には、掘立柱建物・溝・土坑などの遺構が検出され、さらにこの遺構面上には包含層が形成される。微高地間には、ＮＲ4002が存在する。微高地は、最高Ｔ．Ｐ．+5.4ｍにあり、Ｎ－30°－Ｗ方向に延び、幅40～50ｍの規模である。包含層は、層厚10～30cm。炭化物・土器を多く含み、黒灰色砂質粘土層（Ｃトレンチ）や黒灰色粘土層（Ｆトレンチ）である。層中からも、土器群が検出された。Ｃトレンチ微高地からＢトレンチ水田面までの間は、後背湿地状の地形をなし、粘土・シルト・細砂が堆積する。水田畦畔は、下端幅1.0～1.5ｍの規模のものが３本とそれからのびる４本の畦畔が検出されている。北約300ｍには、ほぼ同時期の集落である佐堂遺跡が位置している。包含層・各遺構から出土した土器は、布留式期の中相・小若江北式に併行するものが大半を占める。この中には、山陰地方の鼓形器台・東海系甕・吉備系甕など他地域からの搬入品が僅かではあるが出土している。

その他、溝・自然河川からは、杵・紡錘車・布巻具・梯子・発火具・船（？）・建築材など多くの木製品が、Ｂトレンチ畦畔斜面からは、椅子形木製品が出土した。

**古墳時代中期**：Ｆトレンチ、Ｄ～Ｈ－99地区以南の微高地上で、掘立柱建物・溝・井戸・土坑などの遺構と、Ｃトレンチ南半からＦトレンチ北半にかけて幅約120ｍの自然河川ＮＲ5001が検出された。微高地上の遺構面は、Ｔ．Ｐ．＋6.2ｍの灰褐色微砂層上にある。ＮＲ5001の右岸部ではＣ－４トレンチで木枠組みの井戸ＳＥ5001が一基検出されたのみであった。ＳＥ5002も同じく木枠組みの井戸である。この他、前期自然河川ＮＲ4003の最終堆積後の窪地から、炭・灰を伴って土器群（ＳＱ5001）が出土した。この土器群からは、製塩土器・埴輪片・韓式系土器も出土している。出土する須恵器は、概ね中村浩氏の陶邑編年のＩ型式２段階から３段階に属するものである。韓式系土器は、この他ＮＲ5001・ＮＤ5001からも多数出土している。甑・鉢類が多い。この他縄蓆文・火炎形の透し穴をもつ須恵器器台の脚部も出土している。Ｅ～Ｆトレンチの流路中より、大規模な護岸杭列ＳＳ5001～5006が検出された。ＮＲ5001からは、ローリングを受けた弥生時代前期の土器をはじめとして、多くの遺物が出土した。これらの中には、石臼・斧柄・容器などの木製品も見られる。この流路は、砂層を覆う第５層灰褐色シルト層出土遺物より、６世紀前半には、すでに他へ移動したものと考えられる。

**奈良・平安時代**：Ａトレンチ以北で８～10世紀の水田面、Ｃトレンチ南半～Ｅトレンチ北半で掘立柱建物・溝・土坑・井戸などの遺構が検出された。水田面は、東西、南北方向の畦畔に区画される規格性の強いもので、一枚の水田は方形になり約480～280㎡の規模を持つもので、北接する佐堂遺跡南半でも検出されている。掘立柱建物ＳＢ6001～6006は、一辺60～90cmの方形の掘り方を持つもので、溝ＳＤ6003は、この掘立柱建物群とほぼ同方向に直線的に走る幅3.5～4.0ｍ、深さ0.6～1.0ｍの断面台形の大溝である。出土遺物より７世紀中葉～９世紀の長期間機能したものと思われる。ＳＫ6006からは、人名『足智（たりち）』と陰刻された須恵質の磚が出土した。

# 第2節　縄文時代

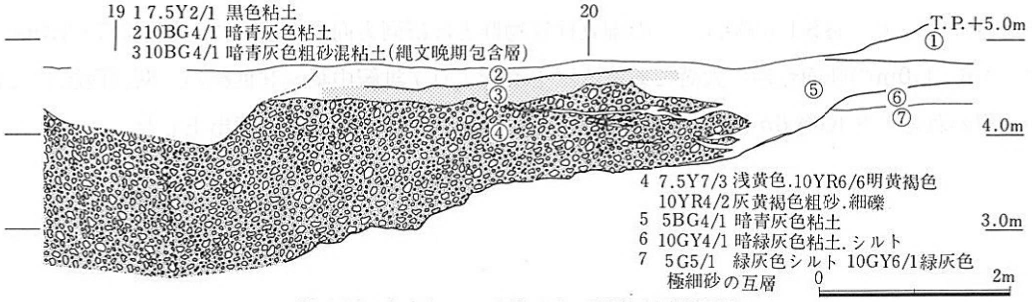
縄文時代の遺構は、晩期の自然流路ＮＲ1001が調査区北東端Ｈ，Ｈ－１、２トレンチ（－３ライン）からＡ、Ａ－５、６トレンチ（20ライン）にかけて検出された。また晩期最終末の土器と弥生時代前期の土器を少量含む遺物包含層がＨ、Ｈ－１、２トレンチ（－４ライン）からＡ、Ａ－３、４トレンチ（18ライン）間でＮＲ1001上に堆積している。

佐堂遺跡ＤトレンチＮＲ9001、Ｆ－３、４トレンチＮＲ9002はともに遺物は出土していないが上層第７層において縄文時代晩期最終末、弥生時代前期の土器が出土し、ＮＲ1001河床面下の２枚の黒色粘土も佐堂遺跡Ｆトレンチにおいて確認されている。

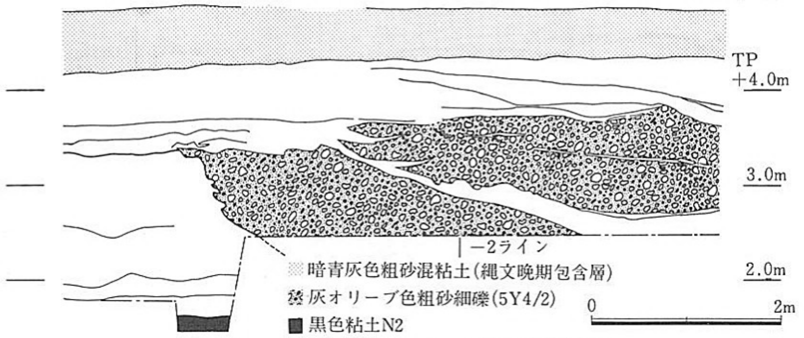
ＮＲ1001（第８・９図、図版２～４）

弥生時代遺構面のベースとなる青灰色シルト層中にその肩部が検出され、20ライン以南Ｂ、Ｊ、Ｂ－５、６、Ｃ－13トレンチ（56ライン）にかけては、その上に層厚約20cmの弥生時代遺物包含層がのる。ＮＲ1001の肩部はＡ－５、６トレンチではほぼ南北方向でＴ.Ｐ.＋4.5ｍを測り、ゆるやかな傾斜をもつ。Ｈ、Ｈ－１、２トレンチでは南東－北西方向でＴ.Ｐ.＋3.6ｍを測り垂直に近い傾斜を持つ。Ｇトレンチでは南西－北東方向に検出されＡ－５、６トレンチとＨ－１、２トレンチのそれはほぼ平行し直線距離で約100ｍを測る。またＧトレンチの肩部は方向を違えるがこれは流路が蛇行していたか、複数存在していた可能性が考えられる。Ａ－５、６トレンチの肩部からＧトレンチの肩部までは約72ｍを測る。

埋土は明黄色（2.5Ｙ6/6）粗砂、細礫、中礫などの砂が主体で、青灰色シルト、植物遺体の薄




第８図　Ａ６トレンチＧライン東壁土層断面図




第９図　Ｈ１トレンチＢライン東壁土層断面図

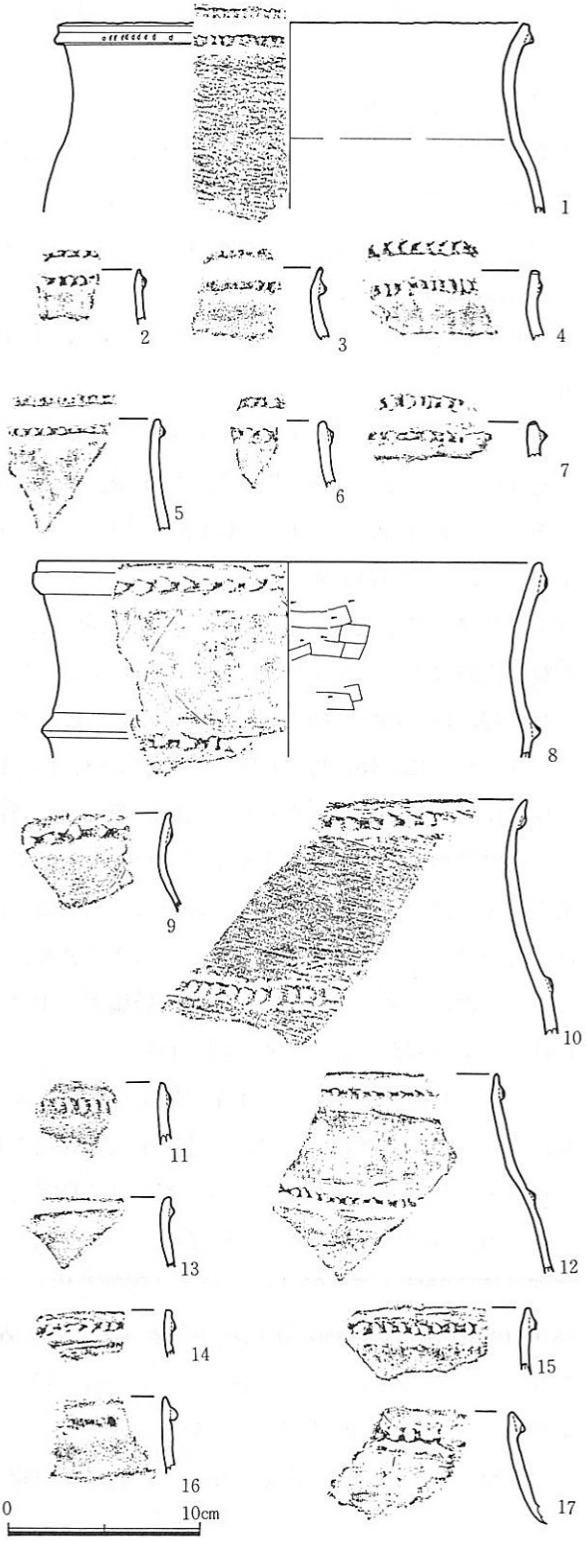
層を挟む。遺物はそのほとんどが底面近くで出土している。

河床面は安全上の理由で全面は検出していないが比較的ゆるやかな凹凸面でありT．P．＋2.2m～2.6mを測る。ベースとなるのは、植物遺体を含む青灰色粘土（10ＢＧ5/1）、オリーブ黒色、暗緑色粘土である。さらに下層は、黒色粘土（Ｎ２）、緑灰色粘土（10ＧＹ5/1）、暗青灰色（10ＢＧ3/1）、淡黄色（５Ｙ8/3）粗砂中砂、青灰色粘土（５Ｂ5/1）、黒色粘土（Ｎ２）と続く。下層で検出された上下２枚の黒色粘土（Ｎ２）に対応するとみられる層が佐堂遺跡Ｆトレンチの筋掘りにおいても確認されている。Ｆトレンチ、久宝寺遺跡Ａ－４トレンチの黒色粘土の上面は、それぞれＴ．Ｐ．＋1.8～2m、Ｔ．Ｐ．＋2.1m、下層はＴ．Ｐ．＋1.35～1.45mとＴ．Ｐ．＋1.6～1.9mを測る。

遺物は滋賀里Ⅳ～Ｖが主であり、後期に属する遺物も散見されるが前者に比べると磨滅が著しく、より遠くからはこばれてきた可能性も考えられる。

１～７は口縁部上端面に刻み目を施し、口縁端より下がったところに一条の突帯を張りつけ刻み目を施す。１は外面の突帯以下横方向のケズリ調整を施し、２、４、６はナデ調整を施す。

８～17は口縁端部より下がったところに突帯をもち、８、10、12は肩部にも突帯をもつ深鉢である。８、12は外面頸部はナデ調整、胴部は削り調整、12は胴部に煤が付着する。８は内面頸部が外反するあたりまで削り、胴部はナデ調整、12




第10図　ＮＲ1001出土遺物実測図

は頸部はナデ調整、胴部は削り調整を施す。13、16は突帯に刻み目はみられない。

包含層（第11～14図、図版５・６）

調査区北東端、Ｈ、Ｈ－１、２トレンチから、Ａ、Ａ－３、４トレンチにかけてＮＲ1001上に堆積する黒色粘土（2.5ＧＹ2/1）、暗オリーブ灰色粘土（5ＧＹ4/1）で層厚10～30cmを測る。包含層の上面は13ライン付近でＴ．Ｐ．＋5.0m、16ライン付近ではＴ．Ｐ．＋4.7mを測り18ラインから20ライン間は弥生時代のＳＤ2001にきられ、以南には続かない。

遺構は確認出来なかったが、サヌカイトの石核と剝片が11点積み重なった状態で出土し、このうちの２組は接合資料となる。これが唯一遺構の可能性を有するものであり、これについては次項で述べる。

この包含層に対応すると考えられる層が佐堂遺跡でも検出されている。Ｄ－１トレンチ第７層黒色微砂層である。縄文晩期の突帯文土器と少量の弥生時代前期の土器が出土している。Ｆトレンチの包含層上面でＴ．Ｐ．＋4.4mを測り、北に向かって低くなりC'～Ｄトレンチ北半部でＴ．Ｐ．＋3.3～3.4mを測る。

１、２は口縁上端部と肩部に突帯をもつ深鉢である。１は外面頸部以下は右から左方向の削り調整、内面はナデ調整を施す。刻み目はＤ字である。２の刻み目は小Ｏ字。深鉢Ａ２類。[(1)]

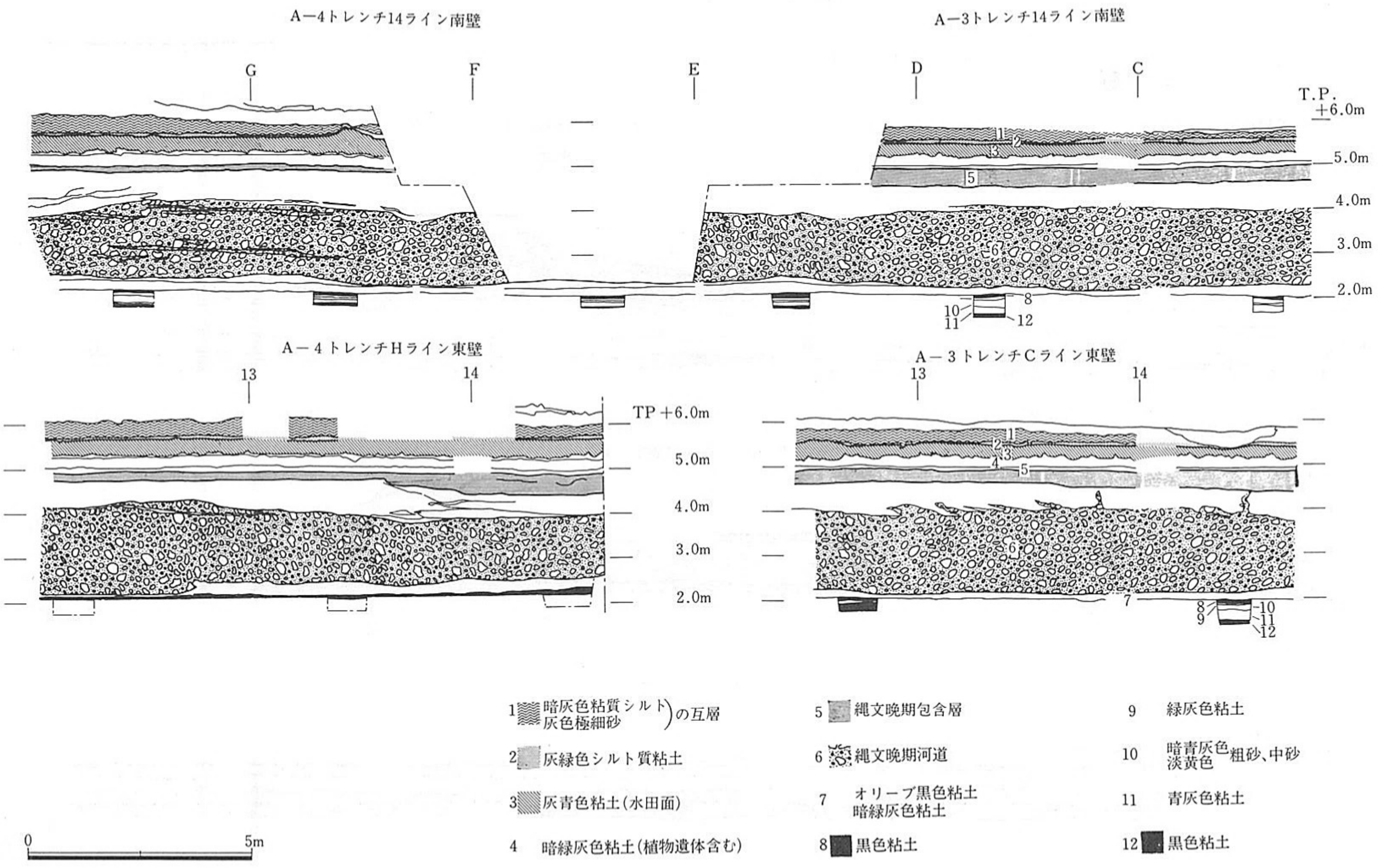
６～10、12～19は口縁上端部に突帯をもつ破片である。７、13は外面にナデ調整が残る。刻み目は６～８、12、16、17がＤ字、９、10、13、15、18はＯ字である。19には刻み目はなく突帯下に籾の圧痕がひとつ認められる。（図版68・第13図19）深鉢Ａ類。

３、21は口縁上端部よりやや下がったところに突帯をはりつけている。３は頸部が外反し、突帯の刻み目は大きなＤ字である。21は復元口径32.6cm、現存高26.2cmを測る。頸部に突帯をもたず、口縁部より胴部最大径付近まではナデ調整、以下は下からななめ上方向に削り調整をおこない、内面には粘土の接合痕が残る。船橋式。20は口縁上端部に２条の突帯を貼りつけている。口縁部には突起がひとつつく。深鉢Ｄ類。

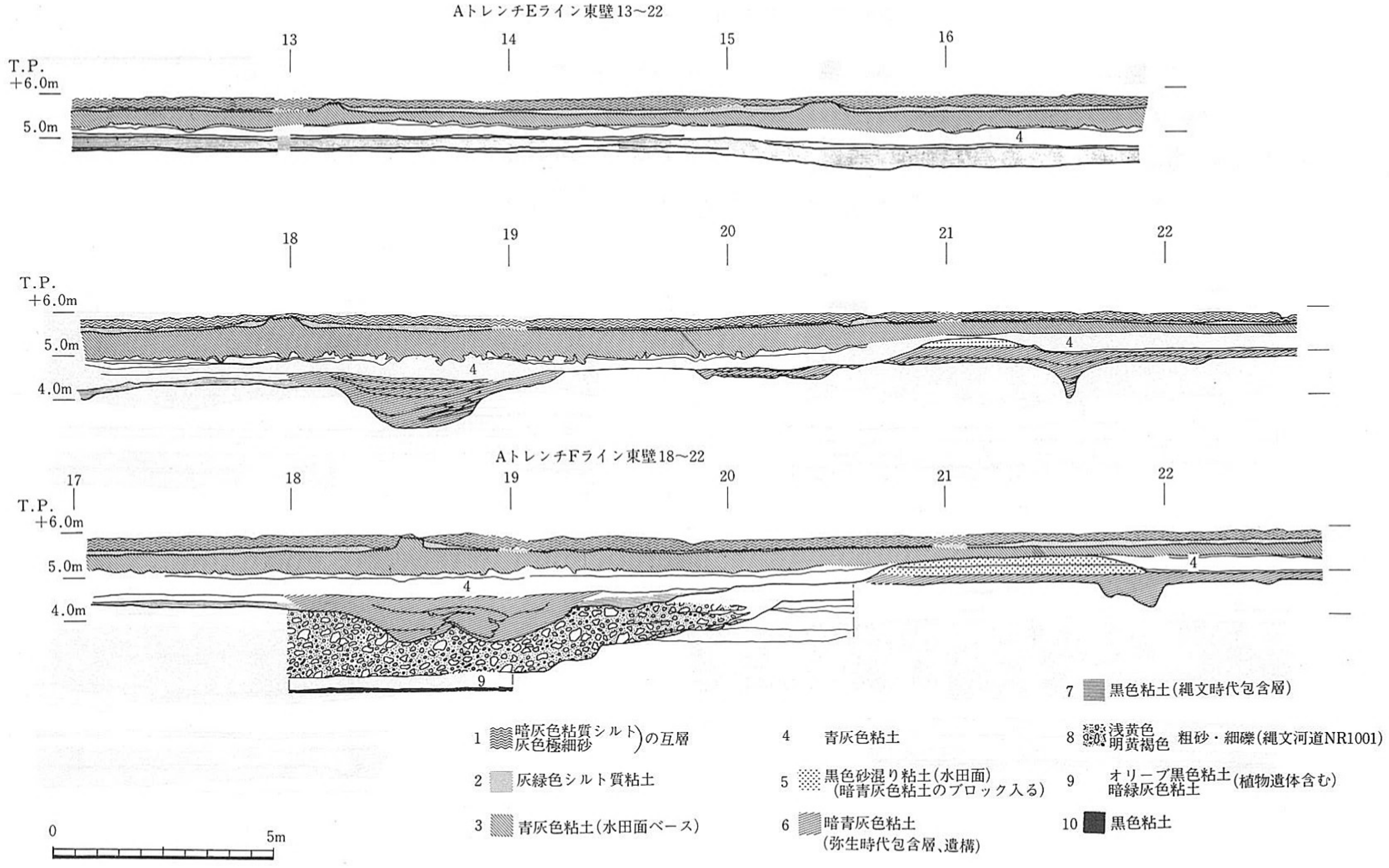
４、５、11は頸部の破片で１条の突帯をもつ。５は突帯以下に横方向の削り調整を施す。刻み目は４がＯ字、５がＤ字。11は頸部に半截竹管状工具により施文されている。上方には補修孔とみられる小孔が一つ穿たれている。刻み目はＤ字。

22～24、27は底部片である。底部Ｃ１類。外面は下から上へ削り調整、内面はナデ調整を施す。底部外面は22はナデ、23はヘラケズリ調整を施し、24は未調整である。27は底径5.85cm、現存高16.1cmを測る。内面に炭化物が付着する。25、26は壺Ｂ類である。25は口縁部から頸部で内外面ともナデ調整を施し、内面には粘土の接合痕がのこる。刻み目はＤ字である。26は底部を欠損する。口径11.3cm、現存高33.8cmを測る。頸部ナデ調整、以下は削り調整、内面は横方向のナデ調整を施す。内外面ともに粘土の接合痕が明瞭に残る。口縁部突帯に刻み目は施されていない。

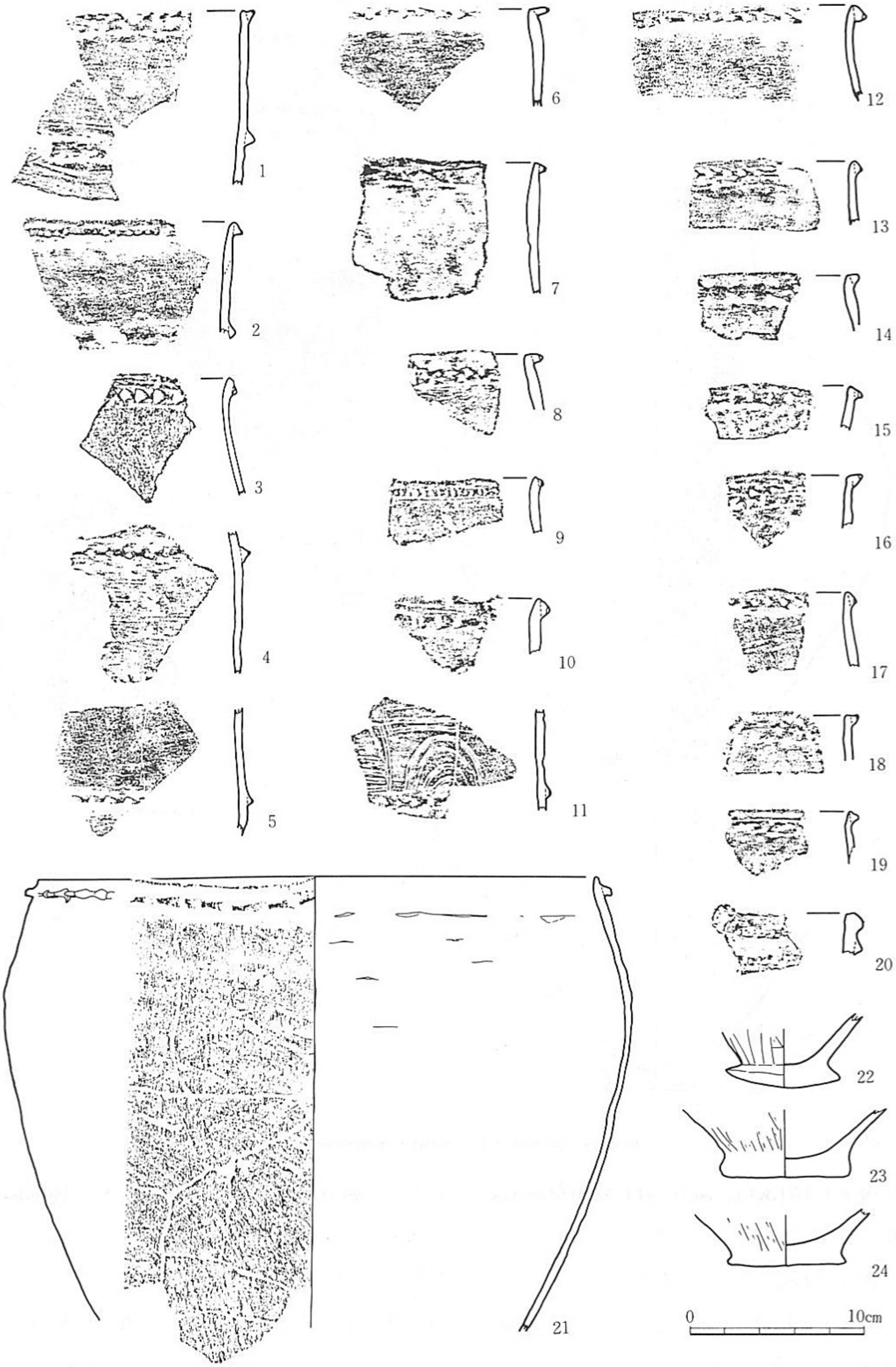
28～31は弥生時代前期の土器である。28、29は壺で、28は体部上半部、29は体部の破片である。



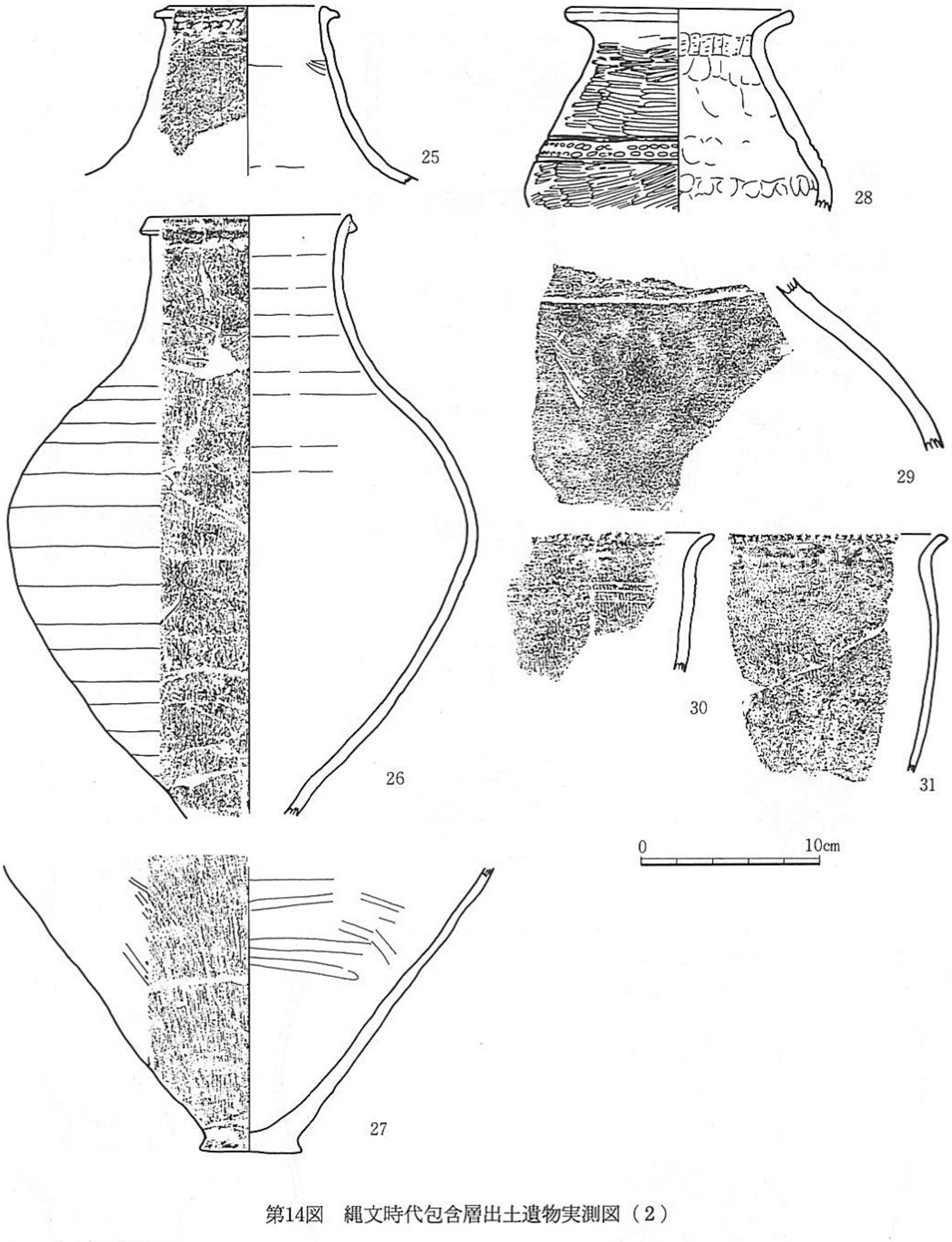

第11図　Aトレンチ14・C・Hライン壁土層断面図




第12図　Aトレンチ E・Fライン壁土層断面図




第13図　縄文時代包含層出土遺物実測図（１）




第14図　縄文時代包含層出土遺物実測図（2）

28は復元口径13cm、現存高11.2cmを測る。外面は密な横方向のヘラミガキを施し、体部には平行する2条の沈線がめぐり、その間には米粒状の刺突文を上下2段に施す。内面は頸部ヘラケズリ、体部指押さえ、口縁内外面はヨコナデ調整を施す。30、31は甕の口縁から体部にかけての破片である。30、31ともに口縁端部には刻み目、外面は縦方向の刷毛目を施し、30は口縁下に3条の沈線を横方向に施す。

「参考文献」
1　『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ．Ⅲ』財団法人大阪市文化財協会　1982・1983
2　『湖西線関係遺跡調査報告書』湖西線関係遺跡調査会　1973
3　『船橋遺跡の遺物の研究Ⅱ』

（註）

（1）長原遺跡発掘調査報告Ⅱ、Ⅲの分類による。

縄文時代の遺物については（財）大阪市文化財協会の松尾信裕氏に多くの御教示を得た、記して感謝致します。

1．石核（第16・17図、図版69・70）

1は、自然礫を複数に分割して得た盤状の剥片を石核素材としている。周囲は一部破損面を除いて全周を自然面が覆っており、原礫の大きさを伺うことができる。作業面上の先行する大剥離面は、A・B両面共ネガティブな剥離面のように観察される。A面には周囲から大小9枚の剥離痕が認められる。いずれも周囲の自然面を打面とする。B面の剥離痕は、一側方に限られるが石理の関係からか破砕されたような剥離がみられるにすぎない。この部分の自然面には、その後も熱心に打撃を加えた痕跡が残されている。

2・3は、同じような形状・大きさを呈している。いずれも一方はポジティブな先行する剥離面（腹面）を持ち、もう一方の面（背面）は全面自然面に覆われている。このことから自然礫から得られた最初の剥片を石核素材としたものと思われる。2は、素材の下端及び左方から目的剥片を得ている。3は、左右両側方から得ている。ここで2の場合、目的剥片剥離作業に先立ち自然礫面を剥がして平坦打面を作出する作業が加わっていることを注意しておきたい。この打面にはその後の加撃痕が多く残されている。他は、基本的に自然面を打面としているが、2・3合わせても数枚の剥片が得られただけで、その剥片も小片である。

4は、接合資料（1）であるが石核と剥片の関係にある。接合された場合、やや不定形ではあるが1と同様の盤状剥片であり、周囲に自然面が全周する。A面が背面、B面が腹面であるが双方の先行剥離の打撃方向は逆となっており、両設打面と言うべきか石核素材を得るに際しても一定の打面ではなかったことがわかる。背面にみられる先行剥離後の三枚の剥離痕が石核素材取得の前か後かは明らかにできないが、盤状剥片の取得以前に背面を調整する理由が特にないので目的剥片剥離痕と考えておく。そうすると腹面にある5の剥片は、作業面及び打面の転位を示しており、1とほぼ同様の石核の類型に含まれる。なお、5の剥離時か後に形成される剥離面の半分が折損してしまっている。石核素材が薄すぎたためであろう。

2．接合資料（第18・19図、図版71・72）

4と5については、石核の項で説明したとおりである。

6と7は2片が接合するだけでほぼ原礫に復元されてしまう例である。従って、言わば6が剥片で7が残核というようなありさまである。2分割しただけの資料なので、どうそれを表現するべきか迷っている。本例は、拳大の自然礫の平坦部を打撃し、半截しただけのものであるが、目的はやはり石核素材の獲得であろうか。下端が折れているほかは手を加えた跡がない。

3．剝片（第20・21図、図版73）

ここで剝片と呼ぶものは、1～3のような石核素材と基本的に変わるものではない。ただそこから目的剝片の取得が行われていないことが剝片とする理由である。

8は、剝片下端が折損している他は、周囲に自然面が残っている。背面（B面）は2枚のネガティブな剝離面で形成されている。腹面は、ポジティブな一枚の剝離面からなる。

9は、8と同様の剝片でA面（ネガティブ）とB面（ポジティブ）の剝離面が直交する打撃方向を示している。つまり打面を90°転回させている例である。剝離時に本品は半折してしまっているがもともと原礫は直方体状を呈していた可能性が高い。それならなぜ打面を変える必要があったのか疑問が残る。

10も基本的には前出と同様の剝片である。A面はネガティブな剝離面と思われるが、加撃とその力がどこからどのように働いたのか不明である。見かけは、B面と直交する方向を示してはいるが、往々にしてこのような剝離面の観察は折損同様あてにはならない。

11は、石核2・3と基本的には同じファーストフレイクである。

4．石器群の生産技術について（第15図）

石核と規定できたものは、剝片が接合する例を含めて4点認められた。本石器群は、非常に単純な剝離面で形成され、どれも似かよっているので原礫の大きさ、形状、剝離工程などが理解しやすい。11個の石塊のうちほとんどが原礫自然面の直接打撃によって得られた盤状の剝片である。ただし、その盤状剝片の取得工程については、原礫面の同一打面を順に後方へ移動するというオーソドックスな例だけでなく、同一打面であっても途中で加撃方向を逆転させる（1）、90°打面転位例（9）、180°打面転位例つまりある意味では両設打面（4）、などバラエティに富んでいる。

しかし、このようなバラエティにもかかわらず得られた剝片は、たいてい周囲に自然面をとどめたままであり、形状はどれも同様のものである。前に考えたように、これらはすべて石核として利用されるべく剝がされたものと思われるので、このうな盤状剝片の取得が石核素材取得工程の一例を示していることになる。

さて、これら石核素材の以後の役割であるが、石核（1～4）にみられたようにせいぜい数枚の3～4cm幅の横長状剝片が剝がされている。観察される取得数が極めてあっさりしているので石核として決めつけてよいものかどうかの疑問がないでもない。あるいは、目的剝片取得途中の石核であるのかも知れない。この目的剝片生産工程も極めて単純であり、石核周囲の自然面を打撃することに尽きる。場合によっては、表裏を作業面とする。また、目的剝片取得に際して平坦打面形成を行う（2）のような例もみられる。

これらの石核とよく似た例として、当遺跡の南約1kmの亀井遺跡の石核II（弥生時代中期後半～後期前半）をあげうる。この石核は、石鏃を生産するためのものと考察されている。一方、縄文時代早期と報じられている二上山・桜ガ丘遺跡Loc.1の土坑1の石核にも同様の石核素材生産と目的剝片剝離の例が存在する。もっともこの例は石鏃生産が目的ではないと考えられてい

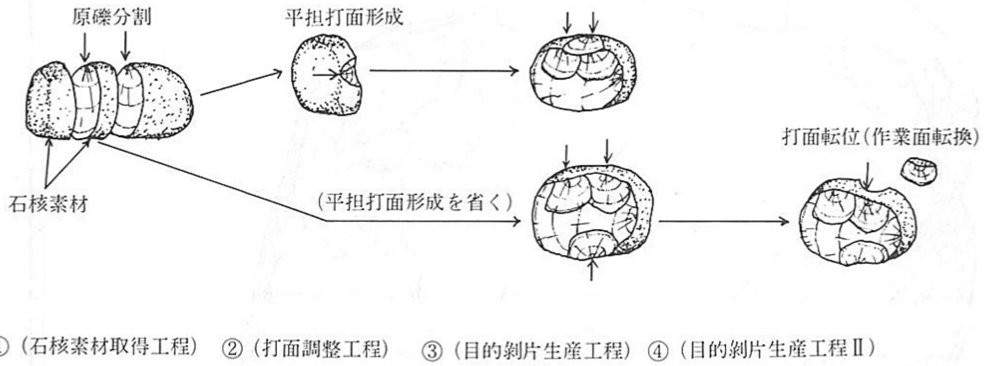
る。つまり、目的剝片から生産する石器が何であるにせよ、その剝片の取得のための最も有効な生産方法のひとつがここに報告したような例として時代を越えて普遍的に存在している可能性を指摘しておきたい。

### 5．出土状態が語るところ

サヌカイト集積遺構は、計11点のサヌカイト石塊の集中出土が特徴的である。これらの石塊がなぜこのような状態で発見されたのであろうか（逆になぜ置かれていたのであろうか）。確認はできなかったが、必ずや土坑などの施設に埋設されていたものと考えたい。廃棄されたものと考えることもできるが、石核に供するつもりならまず捨てるはずのない素材が含まれるので意図的な廃棄は否定しておきたい。加えて、接合資料が存在することから、近くで原礫の分割（石核素材の取得）及び目的剝片の生産が行われた、あるいは行われるはずであったことは疑いない。そして、それは石鏃などの小さな石器の生産を目的とするものであったと思われる。石核の利用方法によっては削器や掻器の生産も可能であるが、それを積極的に主張する根拠はない。

本遺構の場合、剝片も含まれるがほとんど石核素材である。つまり原礫からの石核素材取得後、一部については目的剝片の生産が実施されたが、それも含めて将来的な石器生産を予想しながらも一時的に石核素材を集めて保管するという行為があったことを本遺構は物語っている。ただ、なぜそのままにされたのかの理由は、現在のところ想念の世界に属する事柄である。

さて、これらの石塊が相互によく似ていながら接合せず、自然面の様子も微妙に異なる場合があるので、当時遺跡に搬入された原礫はさらに多かったにちがいない。さらに考えを進めれば、持ち運びの便を考えて、原礫は産出地で分割され、石核素材となって搬入された可能性も高いと言えよう。（岸本道昭）

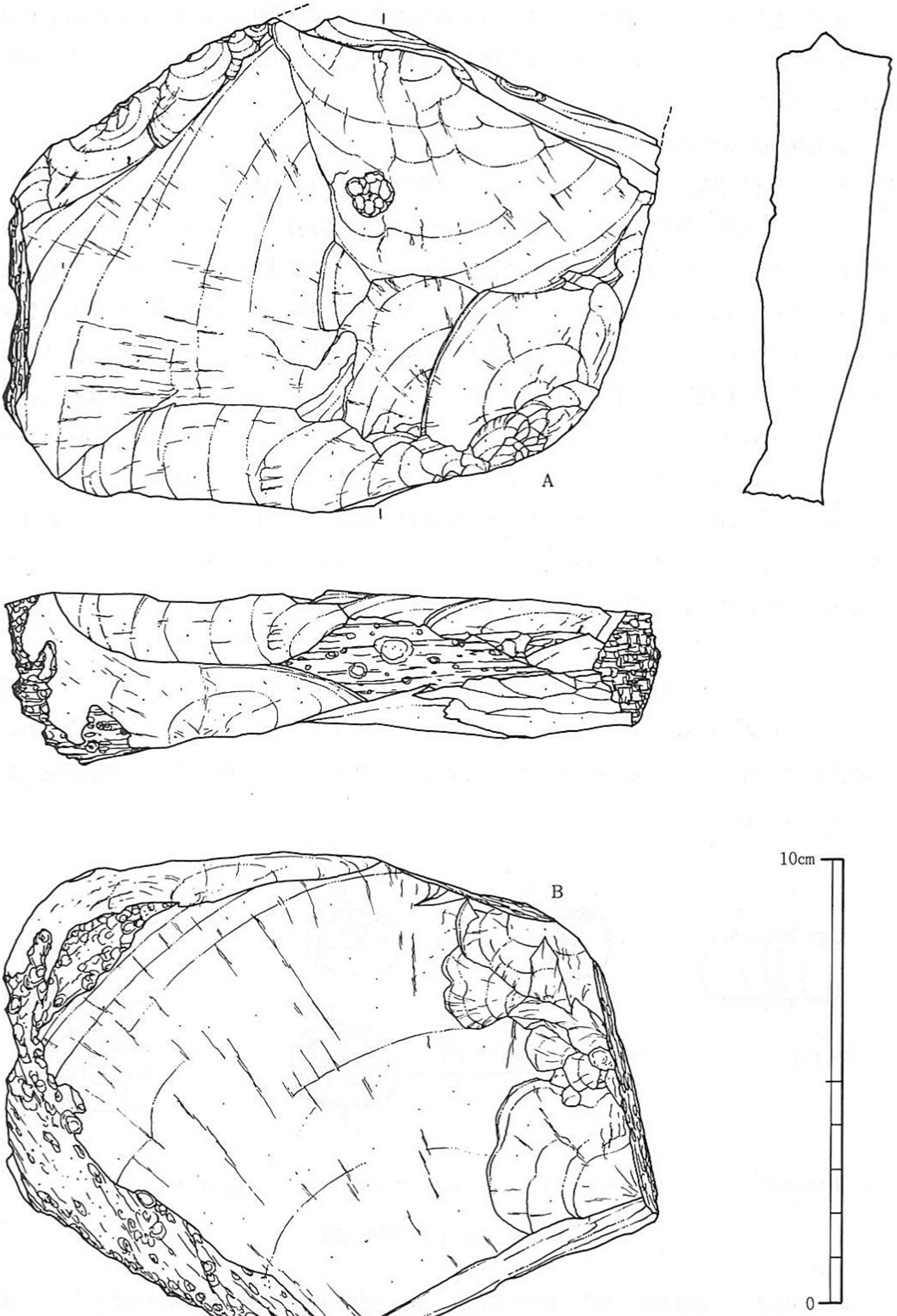



第15図　剝片生産工程模式図

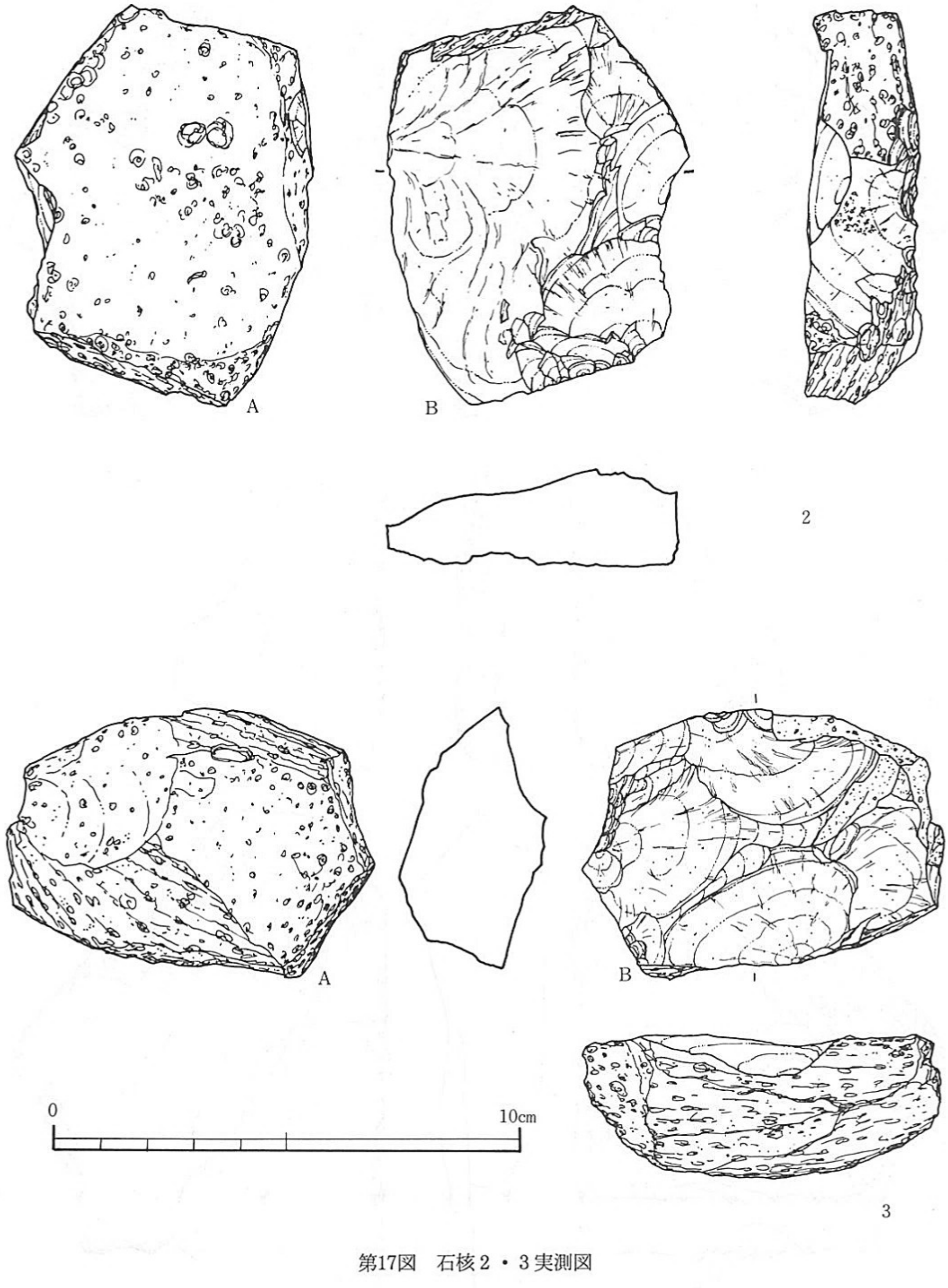
註

（1）　西村尋文「亀井遺跡における剝片生産技術」『亀井遺跡』寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　（財）大阪文化財センター　1982年

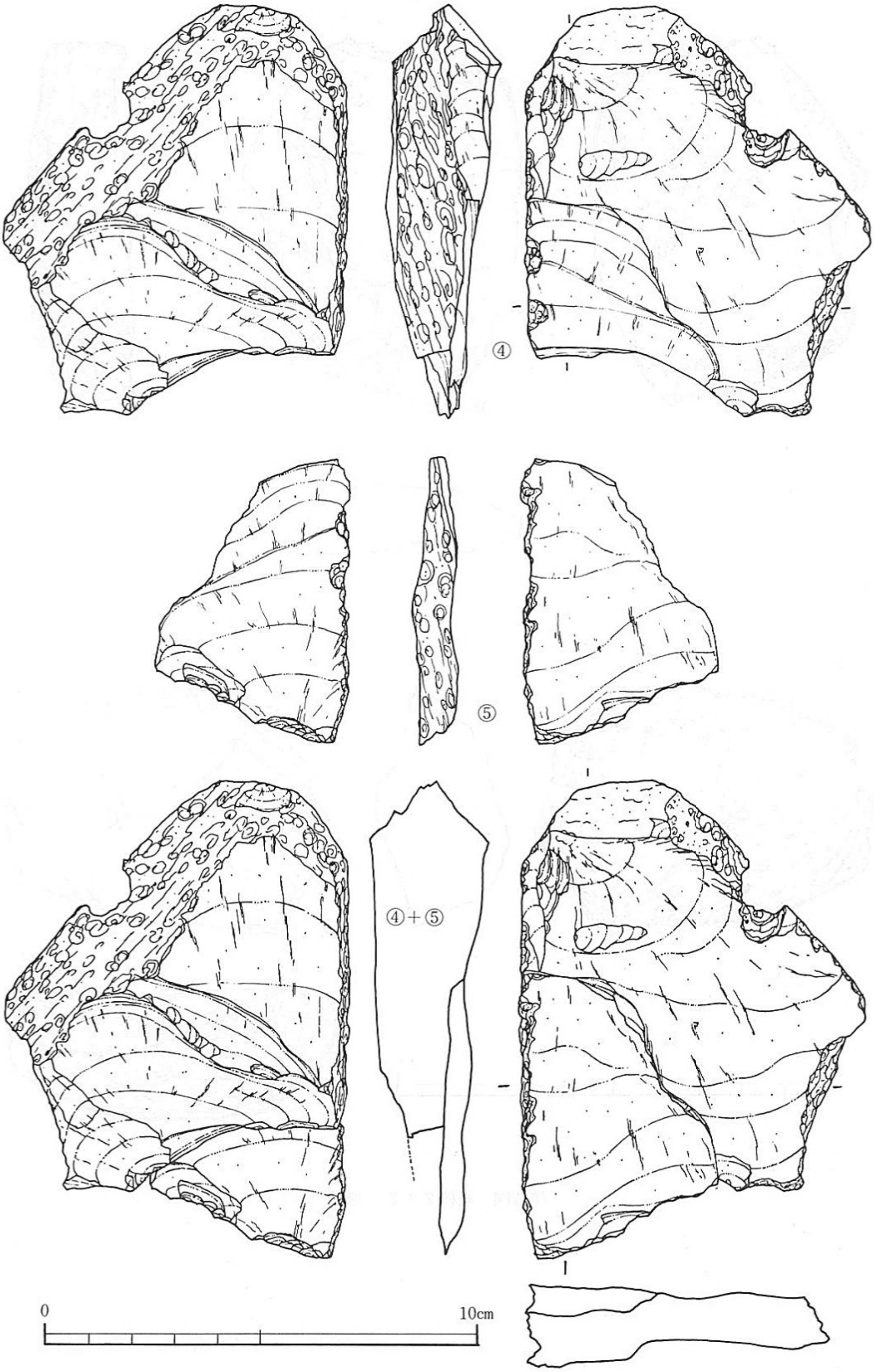
（2）　古森政次・麻柄一志「土坑1の剝片生産技術」『二上山・桜ケ丘遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第38冊　奈良県教育委員会　1979年



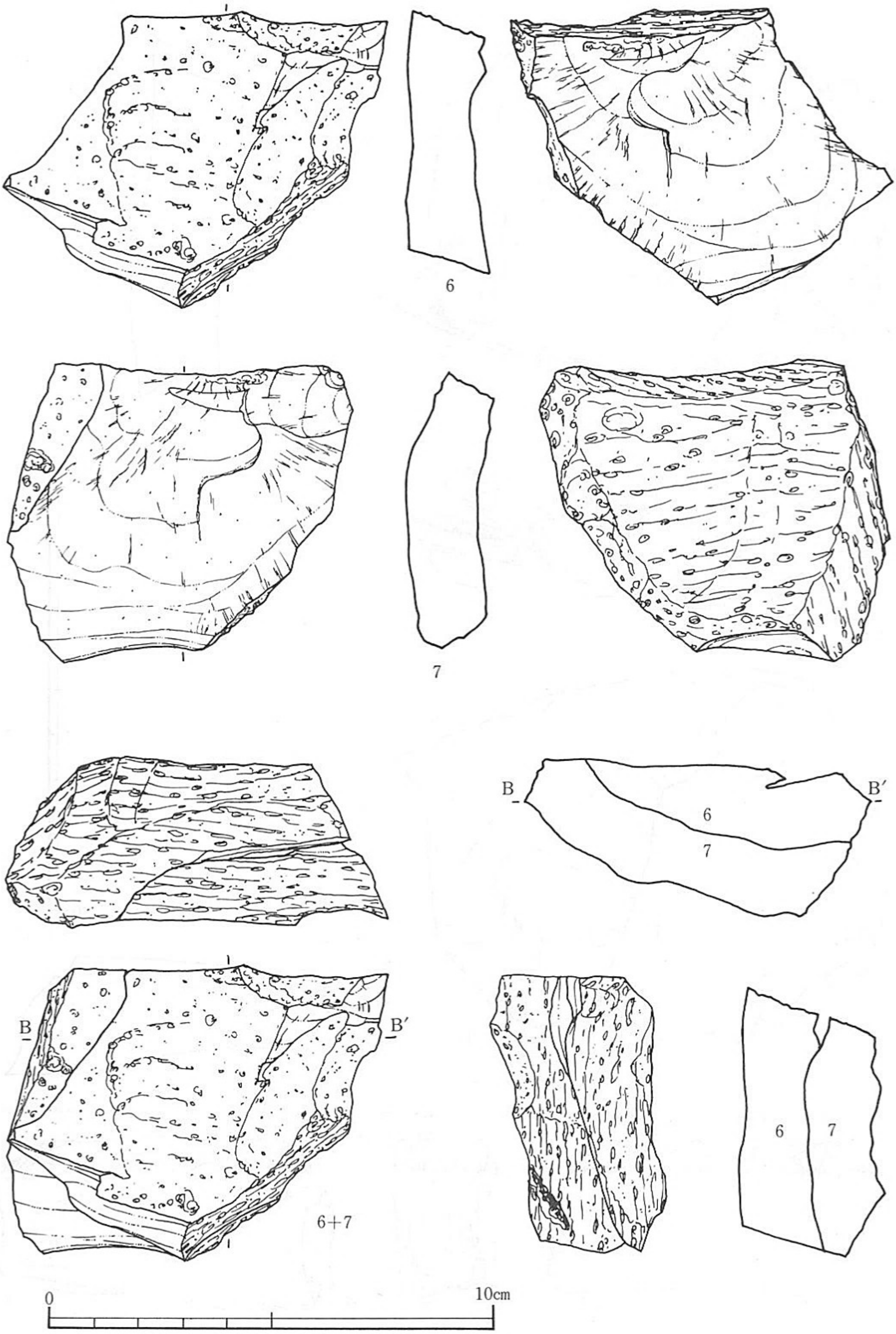

第16図　石核１実測図



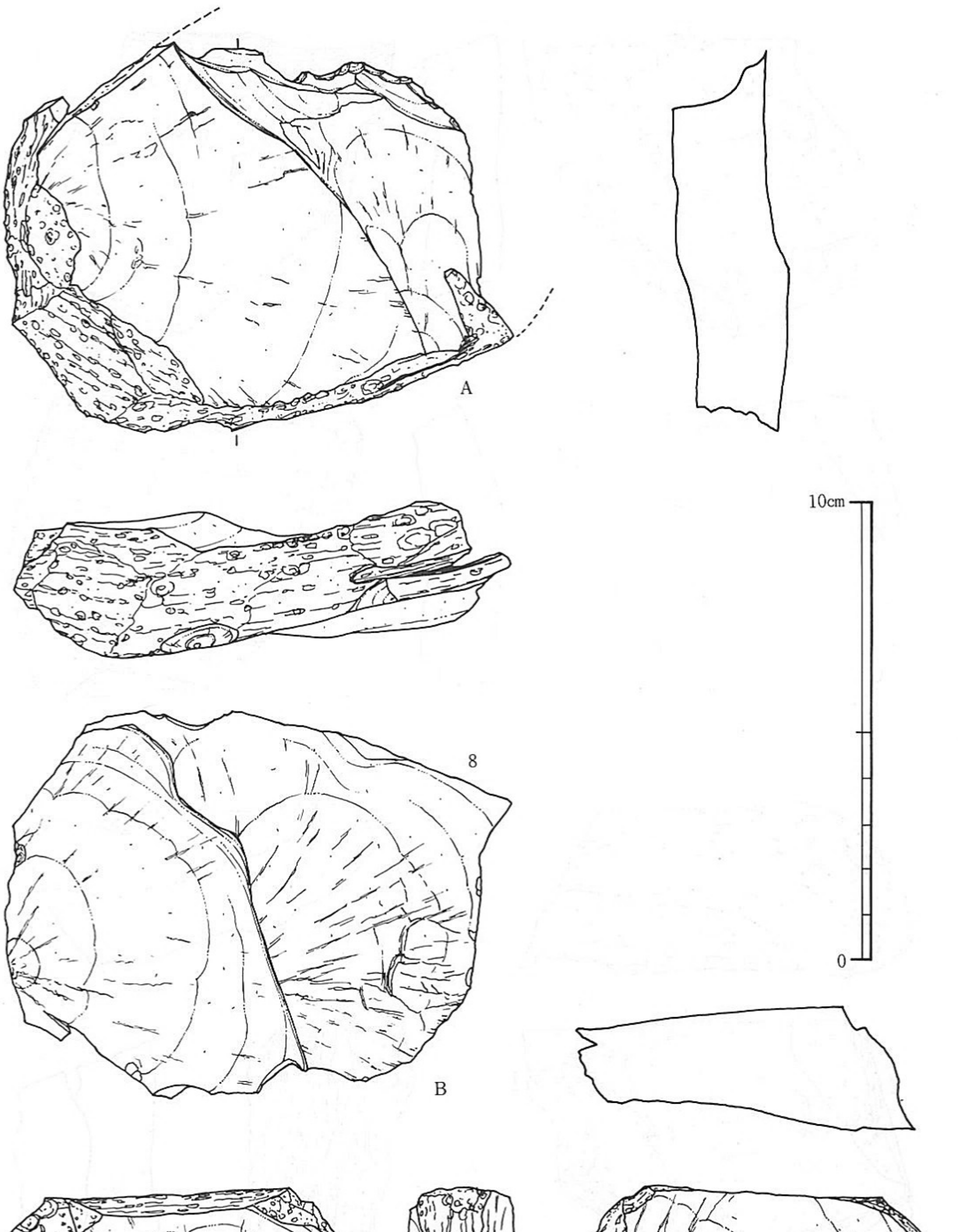

第17図　石核２・３実測図



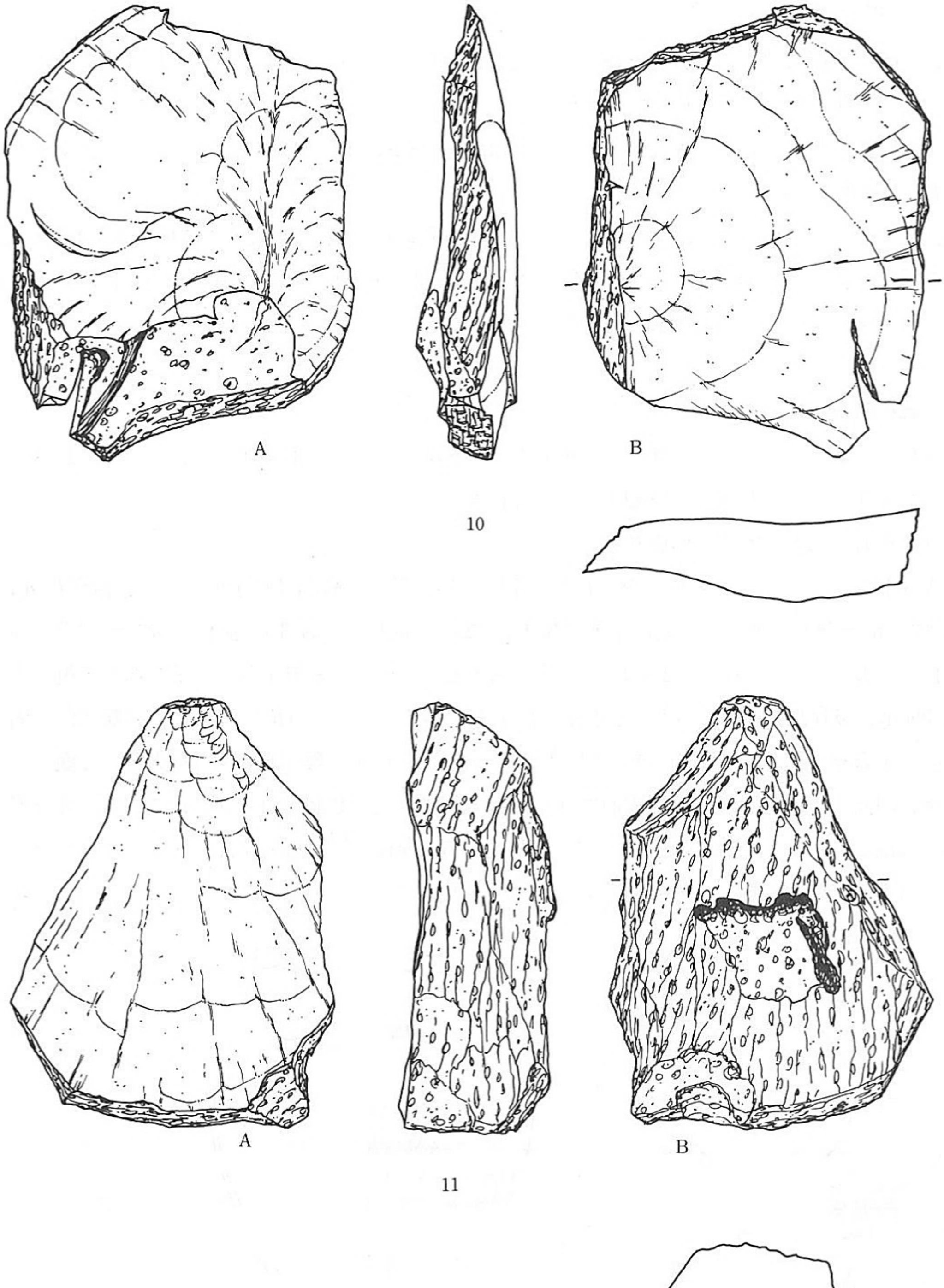

第18図　石核接合資料１（４・４＋５）実測図




第19図　石核接合資料２（６＋７）実測図




第20図　剥片８・９実測図




第21図　剥片10・11実測図

# 第3節　弥生時代

弥生時代の遺構は、Aトレンチ18ライン以南B、B－5、6トレンチ間と、Fトレンチの一部において、包含層中と青灰色シルト上面で検出された。C～Eトレンチ間には遺構、包含層はみられない。青灰色シルト上面は21ラインでT．P．+4.8m、30ラインでT．P．+4.3m、55ラインでT．P．+3.8mを測る。

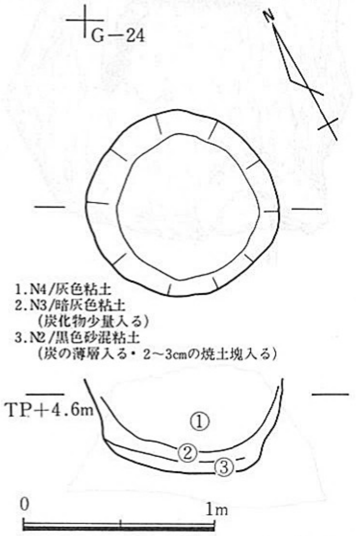
佐堂遺跡においても第7、8層上面で方形周溝墓状遺構、溝、土坑などの遺構を検出している。第7層上面はC'～Dトレンチ北半部T．P．+3.3～3.4m、Dトレンチ中央部T．P．+3.8m、Fトレンチ南端ではT．P．+4.4mを測る。

## 1．弥生時代中期

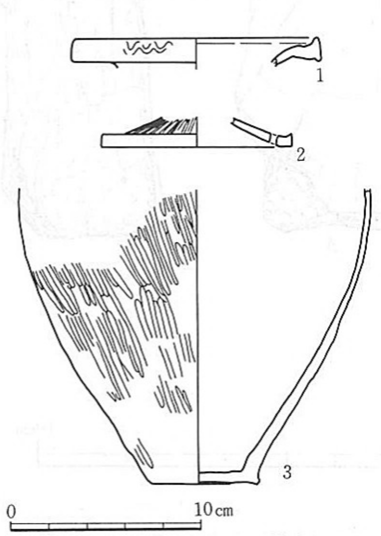
SK（土坑）はAトレンチ20ライン～Bトレンチ50ライン間で34基検出し、そのうち20基をAトレンチ36ライン～Bトレンチ42ライン、A11トレンチで検出した。

SK2001（第22・23図、図版9・74）

A8トレンチ、G－24区で検出された。平面円形を呈し、断面はU字形である。直径1.0m、深さ0.5mを測る。埋土は1灰色粘土（N4）、2暗灰色粘土（N3）（炭化物含む)、3黒色砂混り粘土（N2）（炭の薄層、2～3cmの焼土塊入る）。遺物は1壺形土器の口縁である。復元口径12.35cm、現存高1.6cmを測る。2層から出土している。口縁部外面に波状文、頸部は内外面ともにナデ調整を施す。2壺蓋で1/3が残る。復元口径10.0cm、現存高1.6cmを測る。外面ヘラミガキ、内面ナデ調整を施し、焼成前に外から内方向に4孔、2個一対で穿たれている。3甕形土器の体部から底部で2層から出土している。底径5.5cm、現存高15.6cmを測る。外面ヘラミガキ、内面ナデ調整を施し、内外面ともに煤が付着している。



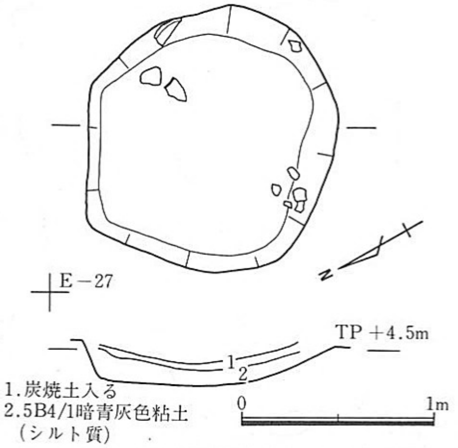

第22図　SK2001遺構平面図・土層断面図



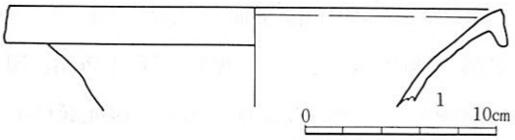

第23図　SK2001出土遺物実測図

ＳＫ2004（第24・25図）

Ａトレンチ D、Ｅ－27区で検出された。平面円形を呈し、断面は皿状である。直径1.3～1.4m、深さ0.2mを測る。埋土は１炭焼土、２暗青灰色シルト質粘土（５Ｂ4/1）である。遺物は１壺形土器の口縁である。復元口径26cm、現存高5.5cmを測る。口縁部ヨコナデ、頸部ナデ調整を施す。



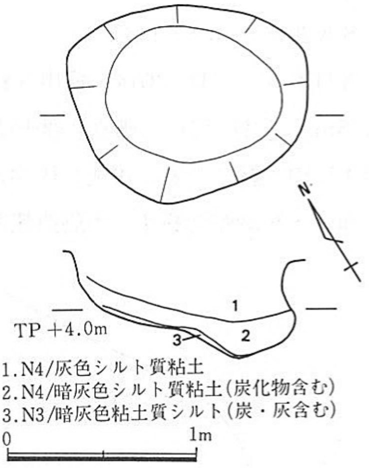
第24図　ＳＫ2004遺構平面図・土層断面図



第25図　ＳＫ2004出土遺物実測図

ＳＫ2009（第26・27図、図版９・74）

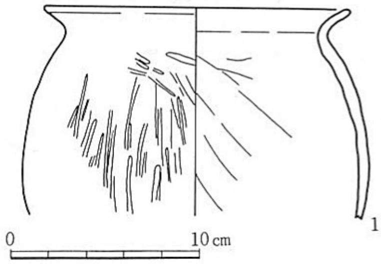
A10トレンチＧ、Ｈ－29区で検出された。平面楕円形を呈し断面は一部が深くなるＵ字形である。長径1.3m、短径1.05m、深さ0.5mを測る。埋土は１灰色シルト質粘土（Ｎ４）、２暗灰色シルト質粘土（Ｎ３）炭化物含む、３暗灰色粘土質シルト（Ｎ３）炭、灰含む。遺物は１甕形土器の口縁から体部である。復元口径15.8cm、現存高11.0cmを測る。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面指おさえの上をヘラミガキ、内面ナデ調整を施す、外面には煤が付着する。



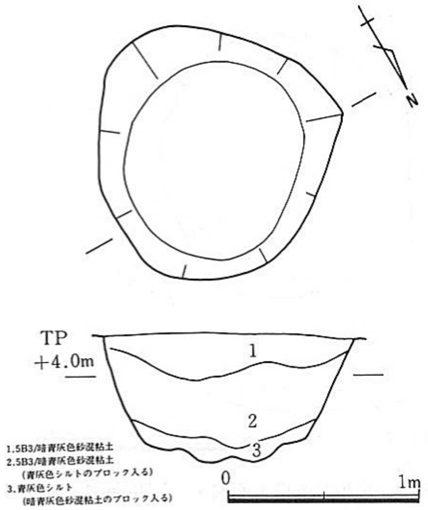
第26図　ＳＫ2009遺構平面図・土層断面図

ＳＫ2011（第28・29図、図版９）

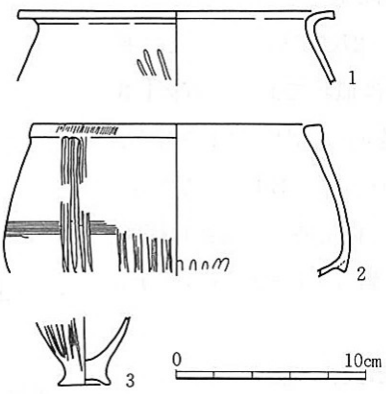
Ａトレンチ E－33区で検出された。平面楕円形を呈し、断面は逆台形である。長径1.35m、短径1.30m、深さ0.68mを測る。埋土は１暗青灰色砂混り粘土（５Ｂ３）、２暗青灰色砂混り粘土（青灰色シルトのブロック入る）、３青灰色シルト（暗青灰色砂混じり粘土のブロック入る）。遺物は１甕形土器の口縁である。復元口径16.55cm、現存高3.9cmを測る。口縁内外面ヨコナデ、体部外面ヘラミガキ、内面ナデ調整を施す。２無頸壺形土器である。復元口径15.3cm、現存高8.1cmを測る。口縁部外面に刻み目、体部は櫛描簾状文が残りその上に縦に棒状浮文を７本張りつけ刻み目を施す。内面はナデ、ヘラミガキ調整を施す。３ミニチュア土器である。底径2.3cm、現存高3.7cmを測る。口縁の一部を欠く。外面ヘラミガキ、内面指おさえ調整を施す。１～３ともに生駒西麓系の胎



第27図　ＳＫ2009出土遺物実測図




第28図　S K2011遺構平面図・土層断面図




第29図　S K2011出土遺物実測図

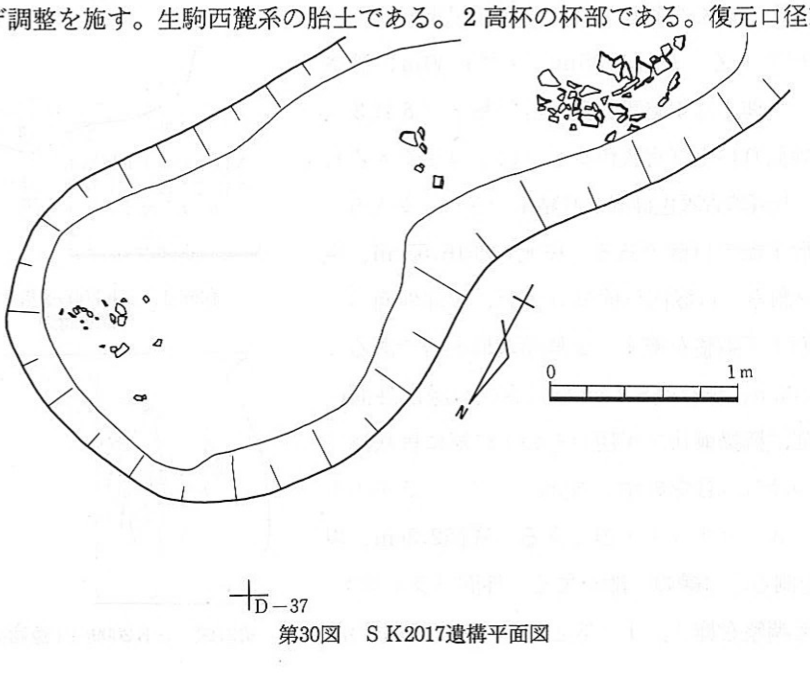
土である。

S K2017（第30・31図、図版11）

A11トレンチD－36、37区で検出された。溝状遺構とも考えられるがAトレンチに続かない為土坑とした。遺物は1甕形土器である。口径27cm、現存高26.1cmを測る。口縁下端部に刻み目を施し、体部外面はヘラミガキ、内面刷毛目調整を施す。2甕形土器の口縁である。復元口径14.2cm、現存高3.95cmを測る。口縁部内外面ヨコナデ、体部は磨滅して不明。3底部である。復元底径5.2cm、現存高3.05cmを測る。外面ヘラミガキ、底部外面ナデ調整を施し、内面は不明。外面には煤が付着する。1～3ともに生駒西麓系の胎土である。

S K2018（第32・33図）

A11トレンチD－37区で検出された。平面楕円形を呈し断面は皿状に凹む。長径0.9m、短径0.75m、深さ0.14mを測る。埋土は1青黒色砂混り粘土、2暗青灰色粘土質シルト。遺物は1甕形土器の口縁である。復元口径13.5cm、現存高5.6cmを測る。口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面はナデ調整を施す。生駒西麓系の胎土である。2高杯の杯部である。復元口径16.4cm、現

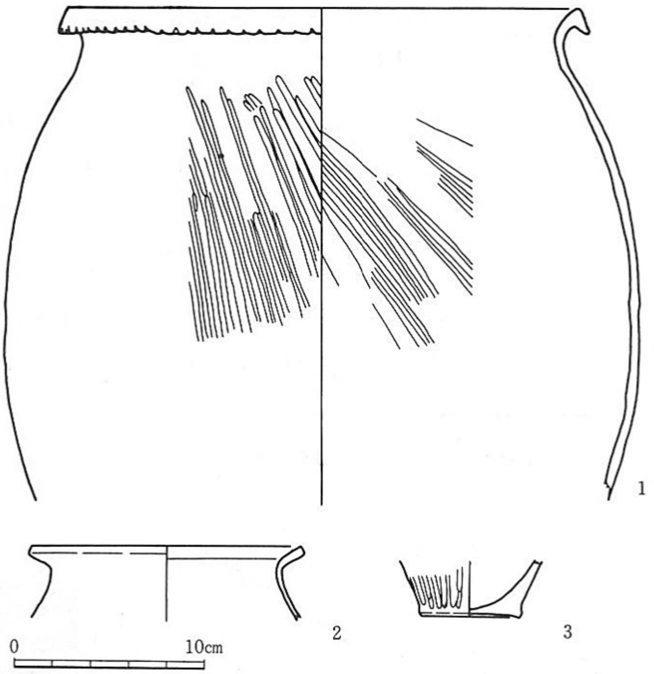



第30図　S K2017遺構平面図

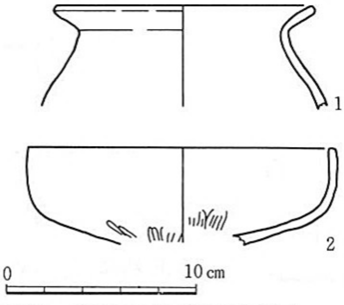
存高5.1cmを測る。外面ヘラミガキ、内面はナデ調整を施す。

ＳＫ2020（第34図、図版９・74）

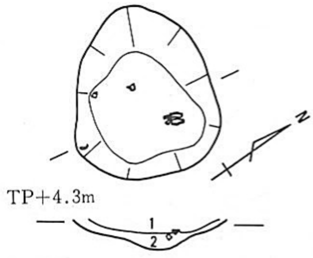
ＡトレンチＥ－37区で検出された。平面楕円形を呈する。長径1.02ｍ、短径0.63ｍ、深さ0.18ｍを測る。遺物は１鉢形土器である。復元口径19.5cm、現存高3.95cmを測る。口縁部外面刻み目、体部は、列点文、棒状浮文をつけ後者には刻み目を施す。内面は横方向のヘラミガキ調整を施す。２甕形土器の口縁である。復元口径23.8cm、現存高6.9cmを測る。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面縦方向のヘラミガキ、内面はナデ調整を施す。３蓋である。外面ヘラミガキ、内面ナデ調整を施す。２個一対の小孔が外から内へ穿たれている。４底部である。底径5.9cm、現存高4.6cmを測る。外面ヘラケズリ、内面はナデ調整を施す。底部は焼成前に内外から穿孔している。１～４ともに生駒西麓系の胎土である。




第31図　ＳＫ2017出土遺物実測図




第33図　ＳＫ2018出土遺物実測図




１．5B2/1青黒色砂混粘土

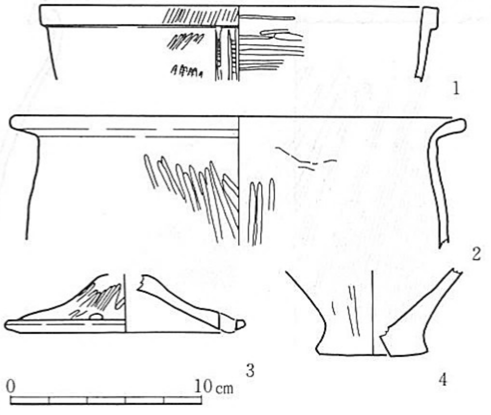
２．5B3/1暗青灰色粘土質シルト

0　1ｍ

第32図　ＳＫ2018遺構平面図・土層断面図

ＳＫ2021（第35・36図、図版９・74）

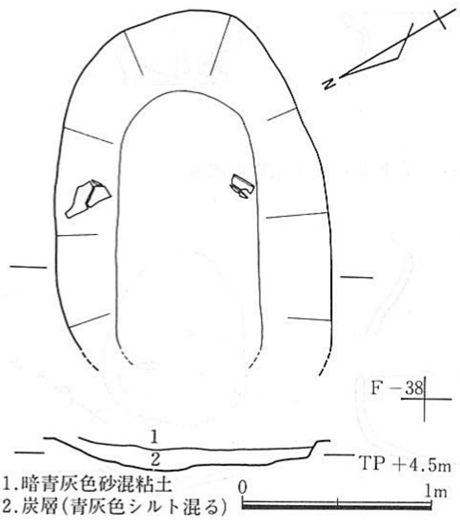
ＡトレンチＦ－37区で検出された。平面楕円形を呈し、断面は皿状である。長径2.1ｍ、短径1.45ｍ、深さ0.16ｍを測る。埋土は１暗青灰色砂混り粘土、２炭層（青灰色シルト混る）。遺物は１鉢形土器である。復元口径23.8cm、現存高9.5cmを測る。口縁部外面は列点文、体部上半部は櫛描簾状文、列点文、下半部と内面はヘラミガキ調整を施す。生駒西麓系の胎土である。２無頸壺形土器の口縁である。復元口径11.4cm、現存高4.2cmを測る。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラミガキ、内面はナデ調整を施す。



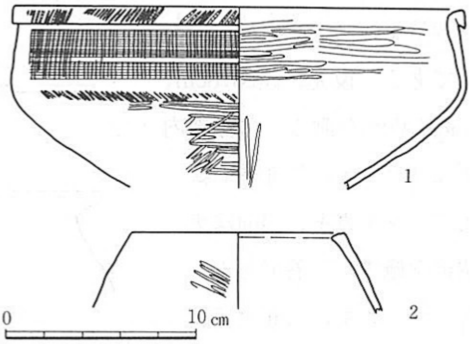

第34図　ＳＫ2020出土遺物実測図

ＳＫ2023（第37図）

Ａトレンチ D、Ｅ－38区で検出された。平面隅丸方形を呈する。長辺1.27m、短辺0.80m、深さ0.05mを測る。遺物は１水差形土器の口縁である。復元口径7.0cm、現存高3.7cmを測る。外面は列点文、内面はナデ調整を施す、２壺形土器の底部である。復元底径9.6cm、現存高8.0cmを測る。外面ヘラミガキ、内面はナデ調整を施す。内面には炭化物が付着する。１、２ともに生駒西麓系の胎土である。



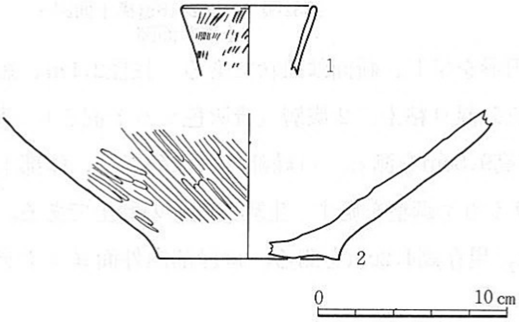

第35図　ＳＫ2021遺構平面図・土層断面図




第36図　ＳＫ2021出土遺物実測図

ＳＫ2024（第38図、図版74）

Ａトレンチ F－38区で検出された。平面長楕円形を呈する。長径1.45m、短径0.39m、深さ0.14mを測る。遺物は１無頸壺形土器の口縁から体部である。内面は刷毛目のあとナデ、口縁部はヨコナデ調整を施す。




第37図　ＳＫ2023出土遺物実測図

ＳＫ2027（第39図）

Ａトレンチ E－39区で検出された。平面隅丸方形を呈する。長辺1.42m、短辺0.55m、深さ0.1mを測る。遺物は１甕形土器の口縁から体部である。復元口径15.5cm、現存高4.4cmを測る。体部外面ヘラミガキ、

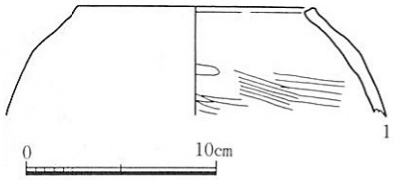
内面刷毛目、口縁部はヨコナデ調整を施す。生駒西麓系の胎土である。

ＳＫ2029（第40図、図版12・13・75）

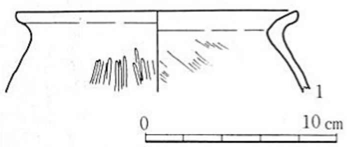
Ｂトレンチ E－41区で検出された。平面楕円形を呈する。短径1.47m、深さ0.26mを測る。遺物は１甕形土器である。復元口径17.2cm、器高17.8cmを測る。外面体部の上半部はヘラナデ、下半部から底部はヘラケズリ、内面はユビナデ調整を施す。外面の口縁付近に煤が付着している。２、３ミニチュア土器である。２復元口径4.5cm、現存高3.9cmを測る。底部近くは指押さえ調整を施す。生駒西麓系の胎土である。３復元口径3.8cm、器高3.7cmを測る。外面ナデのあとにヘラミガキを施す。４壺底部である底径6.1cm、現存高2.35cmを測る。外面ヘラミガキ、内面はヘラナデ調整を施す。ほかに砥石が一点出土している。（第68図）

ＳＫ2030（第41・42図、図版12・14・75）

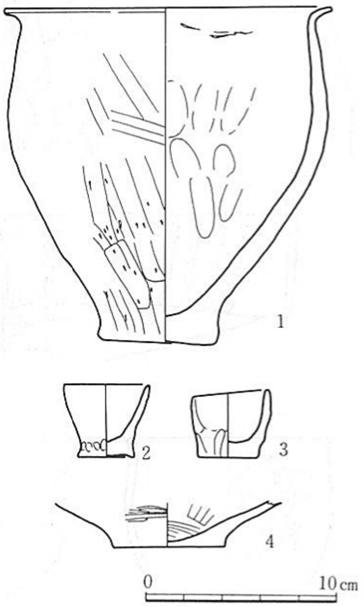
Ｂトレンチ E－41区で検出された。平面円形を呈し、断面は逆台形である。直径1.02m、深さ0.54mを測る。埋土は１灰黒色砂混り粘土、２炭灰層（焼土塊混る）、３灰。焼土（炭混る）、４青灰色細砂である。遺物は１壺形土器の頸部から体部である。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデ調整を施す。２、３、４鉢形土器である。２は復元口径31.2cm、現存高7.85cmを測る。外面は４本を単位とする棒状浮文を張りつける。下半および内面はヘラミガキ、口縁部は刷毛目調整。３は復元口径10.6cm、現存高7.9cmを測る。口縁部内外面ともにヨコナデ、体部外面ヘラミガキ、内面はナデ調整を施す。４は復元口径12.4cm、現存高5.0cmを測る。外面上半ヘラナデ、下半ヘラミガキ、内面はヘラミガキ調整を施す。５、６は高杯の杯部である。５は復元口径22.2cm、現存高2.4cmを測る。外面は上下２段に波状文、下半部および内面はヘラミガキ調整を施す。６は復元口径21.0cm、現存高4.3cmを測る。口縁部内外面ヨコナデ、杯部下半と内面はヘラミガキ調整を施す。７甕形土器の口縁から体部である。復元口径14.8cm、現存高8.1cmを測る。外面は体部ヘラミガキ、内面はヘラナデ、口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。



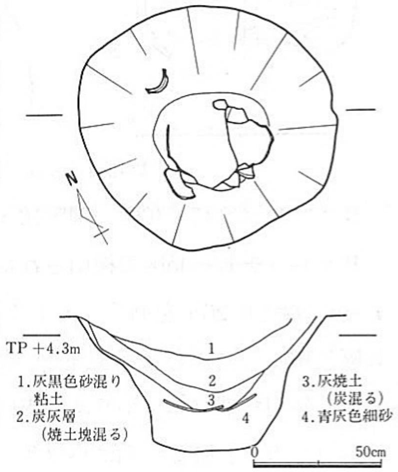

第38図　ＳＫ2024出土遺物実測図



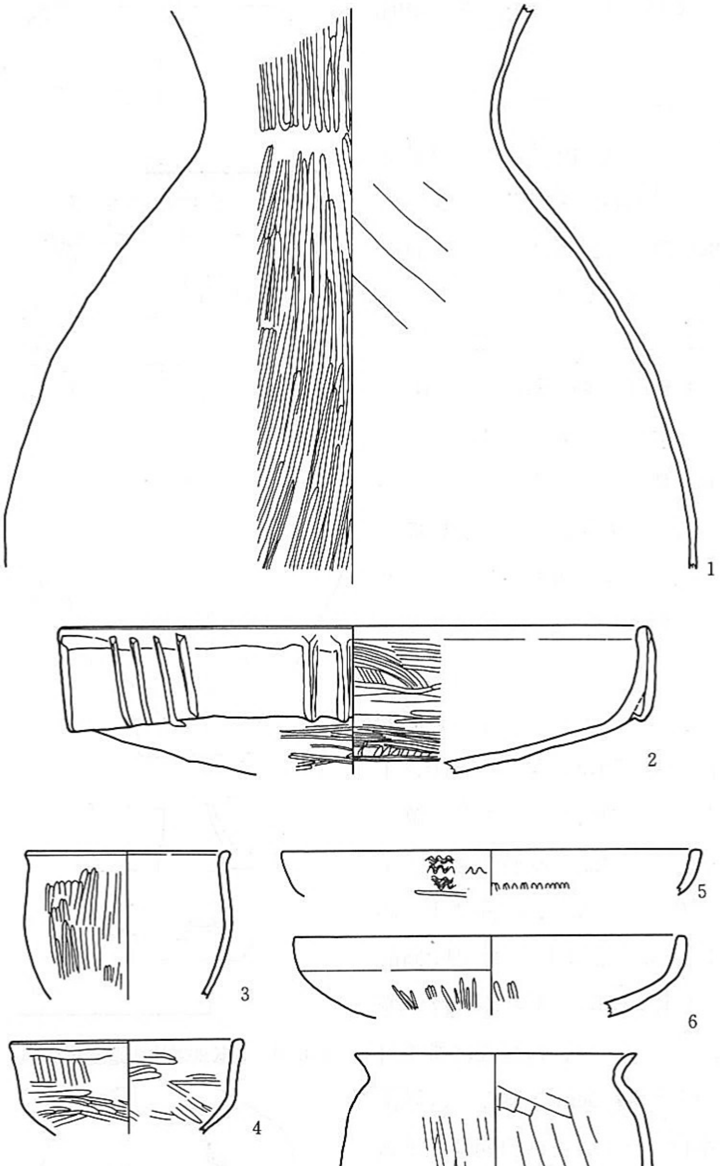

第39図　ＳＫ2027出土遺物実測図




第40図　ＳＫ2029出土遺物実測図




第41図　ＳＫ2030遺構平面図・土層断面図




第42図　ＳＫ2030出土遺物実測図

外面には煤が付着する。

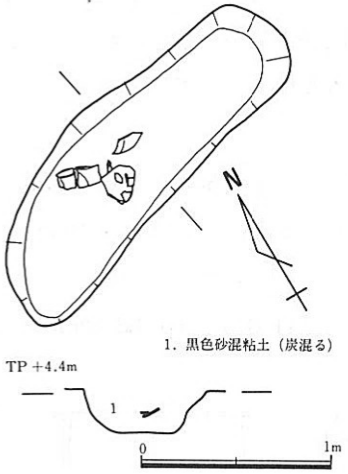
１、３～５、７は生駒西麓系の胎土である。

ＳＫ2031（第43・44図、図版12・13・75）

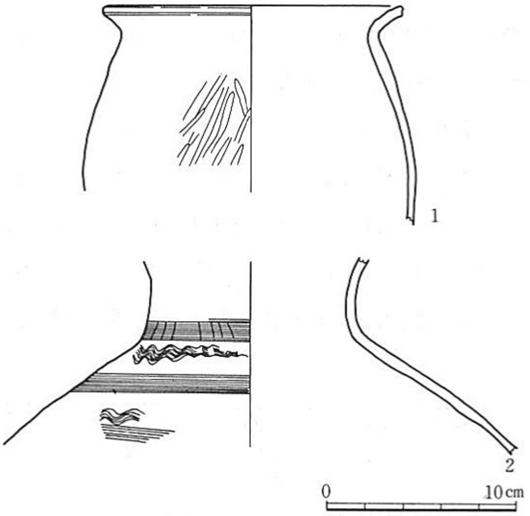
Ｂトレンチ E－41区で検出された。平面長楕円形を呈し、断面はＵ字形である。長径2.0m、短径0.65m、深さ0.23mを測る。埋土は１黒色砂混り粘土（炭混る）である。遺物は１甕形土器の口縁から体部である。口径16.0cm、現存高11.7cmを測る。外面口縁端には１条の凹線をめぐらし体部はヘラミガキ、内面ナデ調整。２壺形土器の頸部から体部である。現存高9.9cmを測る。外面頸部から櫛描簾状文、波状文、直線文、波状文、直線文と続く。内面はナデ調整を施す。１、２ともに生駒西麓系の胎土である。

ＳＫ2033（第45・46図、図版16・75）

Ｂトレンチ E－45区で検出された。平面楕円形を呈し、断面は皿状である。長径0.95m、短径0.8m、深さ0.26mを測る。埋土は１灰色シルト、灰色粘土（黄褐色中砂混る）、２植物遺体層、３灰色粘土（青灰色中砂混る）。遺物は１高杯の脚裾部を欠く。口径20.4cm、現存高13.4cmを測る。外面杯部立ち上がりは横方向のヘラミガキ、下半および脚部はヘラミガキ、内面の杯底面はヘラミガキ、脚部内面はヘラケズリ調整を施す。内外面ともに煤が付着する。生駒西麓系の胎土である。



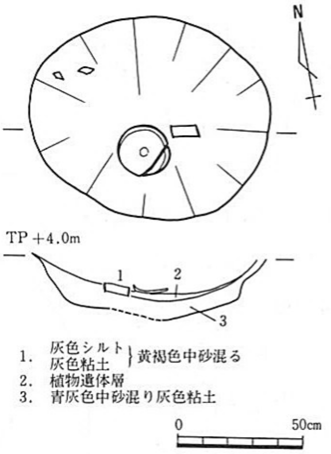

第43図　ＳＫ2031遺構平面図・
土層断面図



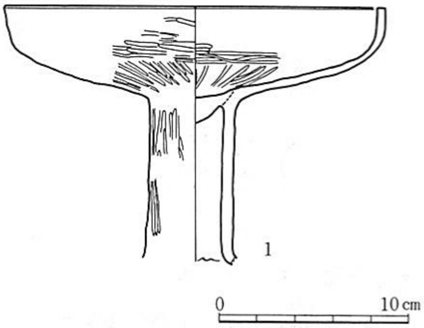

第44図　ＳＫ2031出土遺物実測図

ＳＥ2001（第47・48図）

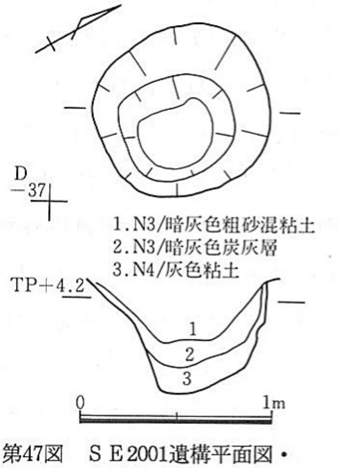
Ａ11トレンチ、Ｃ－36区で検出された。平面円形を呈し、断面はＵ字形である。直径0.95ｍ、深さ、0.6ｍを測る。埋土は１暗灰色粗砂混り粘土（Ｎ３）、２暗灰色炭灰層（Ｎ３）、３灰色粘土（Ｎ４）。遺物は１、２壺形土器の口縁である。１復元口径14.0cm、現存高4.15cmを測る。頸部外面にヘラ痕がみられ口縁端部を玉縁状に仕上げる。内面ナデ調整を施す。２復元口径16.3cm、現存高3.9cmを測る。口縁端内外面はヨコナデ、頸部ヘラミガキ、内面はナデ調整を施す。３甕形土器の口縁である。復元口径10.8cm、現存高2.95cmを測る。内面ナデ調整、内外面とも煤が付着する。４小型鉢形土器である。復元口径9.4cm、現存高5.45cmを測る。外面はヘラかハケによるナデ、内面刷毛状工具によるナデ調整。５、６、８底部である。５は底径4.7cm、現存高




第45図　ＳＫ2033遺構平面図・
土層断面図




第46図　ＳＫ2033出土遺物実測図

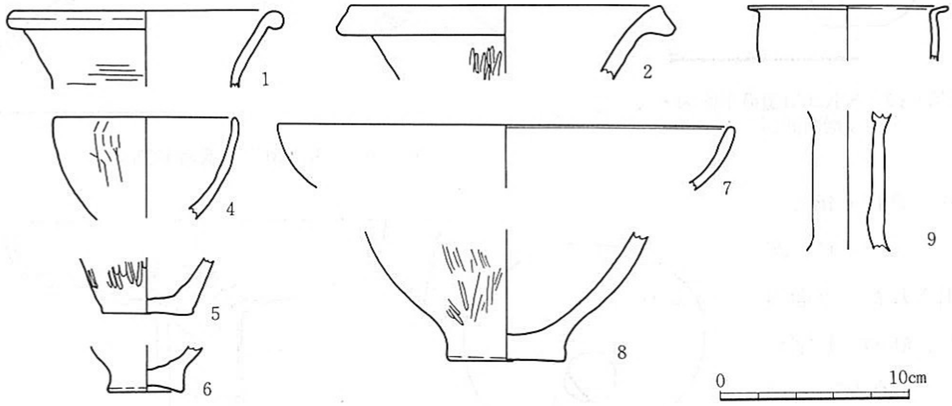



第47図　ＳＥ2001遺構平面図・
土層断面図

2.8cmを測る。外面ヘラミガキ、内面にはヘラ痕が残る。6は底径3.7cm、現存高2.5cmを測る。内外面ナデ、底部外面はヘラケズリ調整を施す。8壺形土器である。底径6.2cm、現存高6.9cmを測る。外面底部もヘラミガキ、内面はナデ調整。9高杯脚部である。内外面ともにナデ調整を施す。7高杯杯部である。外面に煤が付着する。4、5、7は生駒西麓系の胎土である。

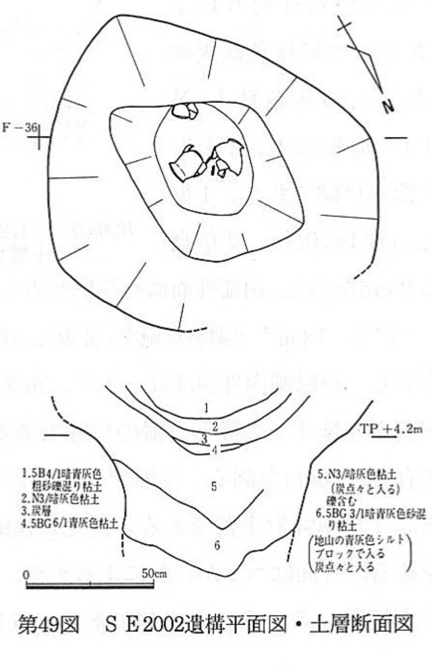
ＳＥ2002（第49・50図、図版11・76）

Ａトレンチ E－35、36区で検出された。平面隅丸方形を呈する。長辺1.35m、短辺1.15m。埋土は、1暗青灰色粘土（5B4/1）粗砂、礫混る、2暗灰色粘土（N3）、3炭層、4青灰色粘土（5BG6/1）、5暗灰色粘土（N3）炭入る、6暗青灰色粘土（青灰色シルト、ブロックで入る、炭混る）。遺物は、1・2ともほぼ完形の壺形土器である。1口径11.8cm、器高22.3cmを測る。




第48図　ＳＥ2001出土遺物実測図

体部外面上半ヘラミガキ、下半ヘラケズリ、内面ナデ、口縁内外面はヨコナデ調整を施す。外面全体に煤が厚く付着する。口縁端部が一部欠損するが、その割れ口にも煤が付着することから欠損後も使用していたことが窺える。2口径15.2cm、器高27.4cmを測る。肩部ナデ、内面ナデ、口縁内外面ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ調整を施し、外面には煤が付着する。3甕形土器である。復元口径12.7cm、現存高11.1cmを測る。体部外面刷毛目、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ調整を施す。生駒西麓系の胎土である。4高杯杯部である。復元口径24.0cm、現存高7.1cmを測る。杯部たちあがりヨコナデ、以下ヘラミガキ、内面ヘラミガキ調整を施す。

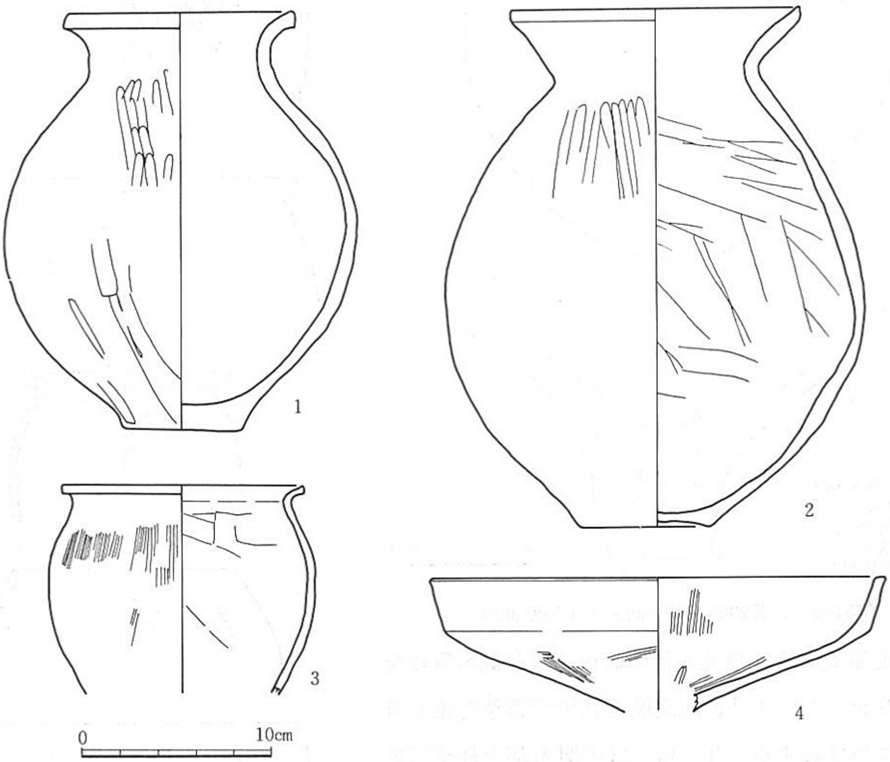



第49図　ＳＥ2002遺構平面図・土層断面図

ＳＥ2003（第51・52図、図版15・76）

Ｂトレンチ E－45区で検出された。平面円形を呈し、

断面は逆台形である。直径1.80m、深さ0.95mを測る。埋土は１黒色砂混り粘土、２炭化物層、３暗灰色中砂、細砂、４褐色粘土、５暗青灰色細砂。遺物は１～３甕形土器である。１復元口径15.25cm、現存高15.4cmを測る。体部刷毛目の上をヘラミガキ、内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ調整を施し、外面には煤が付着する。２復元口径18.3cm、現存高8.4cmを測る。外



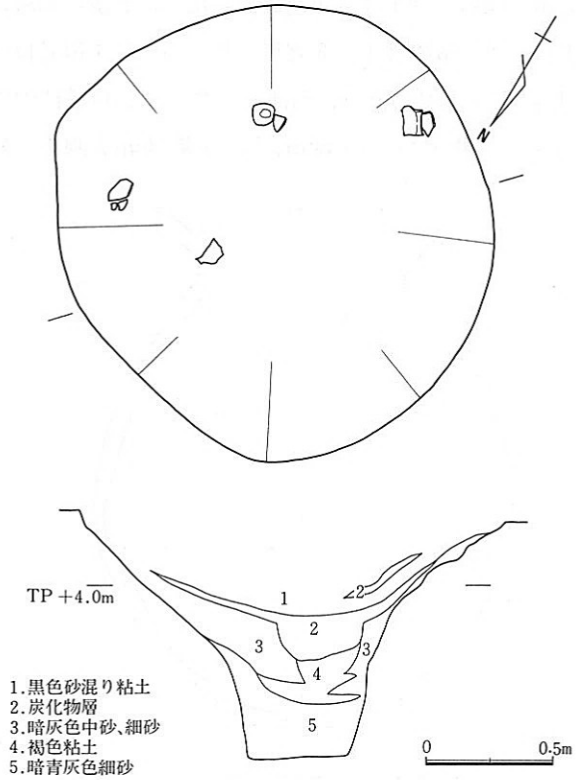

第50図　ＳＥ2002出土遺物実測図

面は剝離しており、内面刷毛目調整。口縁部外面には煤が付着する。３復元口径11.2cm、現存高8.1cmを測る。外面体部上半ヘラケズリ、下半は剝離している。内面ナデ調整を施し、外面には煤が付着する。４無頸壺形土器である。復元口径11.7cm、現存高6.0cmを測る。外面ヘラミガキ、内面はナデ調整を施す。５高杯脚裾部を欠く。復元口径18.1cm、現存高14.2cmを測る。杯下半部から脚部にヘラミガキ調整を施す。４、５は生駒西麓系の胎土である。

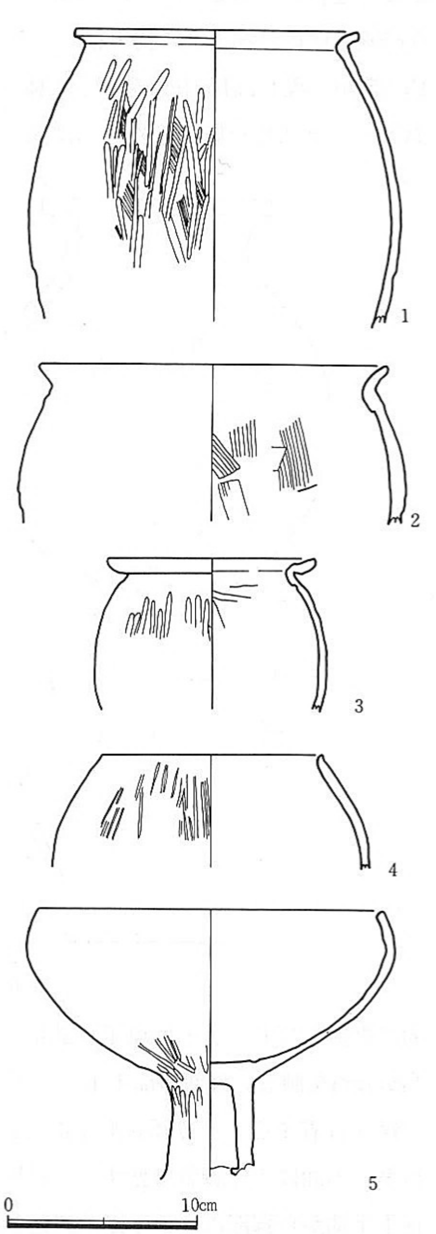
ＳＤ2001（第53・54図、図版10・77）

Ａ、Ａ５、Ａ６トレンチにおいて検出された。南東－北西方向にのび、蛇行しながら調査区外にのびる。上端幅1.5～５ｍ、下端幅0.5～1.5ｍ、深さ1.04ｍを測る。埋土は、溝埋没後の窪みに暗灰黒色粘土（下層との境、炭化物含む）暗灰色粘土、黄褐色粗砂礫、植物遺体含む極細砂、シルトの互層、粗砂、礫層となる。

遺物は１甕形土器の完形である。口径12.2cm、器高15.4cmを測る。外面肩部は剝離している。体部ヘラミガキ、底部外面ヘラミガキ、内面刷毛状ナデ調整を施す。下層から出土した。２甕形




第51図　ＳＥ2003遺構平面図・土層断面図




第52図　ＳＥ2003出土遺物実測図

土器の底部である。復元底径6.0cm、現存高5.7cmを測る。外面ヘラケズリ、内面刷毛状ナデ調整を施し外面には煤が付着する。３．台付鉢の脚台部と杯部である。脚裾径10.5cm、現存高9.75cmを測る。杯部内外面ヘラミガキ、脚台部内外面刷毛目、口縁部はヨコナデ調整を施す。生駒西麓系の胎土である。Ｗ１．又鍬である、４本歯のうち１本が欠損する。

ＳＤ2006（第55・56図）

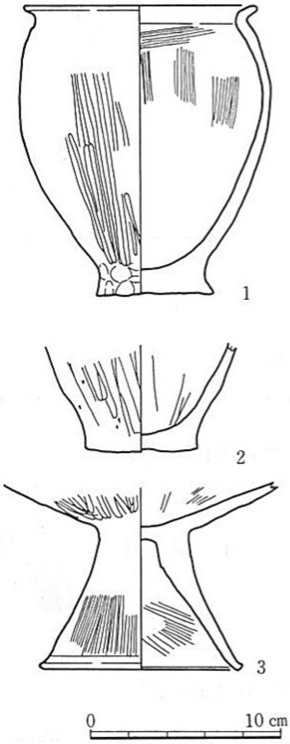
Ａトレンチ、Ｄ～Ｆ－25、26区、Ａ８トレンチＦ、Ｇ－25、26区で検出された。上幅0.3～0.4m、深さ0.14mを測る。部分的に途切れるが方形にまわる。長辺12m、短辺７mを測る。

遺物は１甕形土器の口縁である。復元口径12.7cm、現存高2.6cmを測る。内外面ナデ、内面体部から外反する部分はヘラミガキ、口縁内外面ヨコナデ調整を施す。外面には煤が付着する。２高杯脚裾部である。復元脚裾径12.5cm、現存高3.9cmを測る。外面ヘラミガキ、内面ナデ調整を施し、外面にはベンガラが残る。３壺形土器である。復元口径21.8cm、現存高6.7cmを測る。外反して立ち上がる口頸部で、端部は下に拡張する。端部外面は、簾状文、刺突文、頸部に

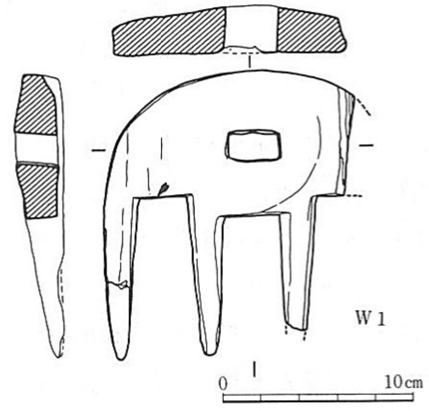
も簾状文を２帯施し内面はナデ調整を施す。４甕形土器の口縁から体部である。復元口径13.8cm、現存高6.0cmを測る。体部外面ヘラミガキ、内面刷毛目、口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。１～４は生駒西麓系の胎土である。

ＳＤ2009（第57図、図版77）

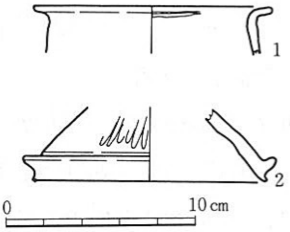
Ａトレンチ E、Ｆ－29区で検出された。上端幅0.2～0.4m、下端幅0.23m、深さ0.29m、検出全長４ｍを測る。埋土は暗青灰色砂混り粘土で炭が混る。遺物は１、２鉢形土器である。１復元口径10.9cm、器高10.3cmを測る。外面は磨滅して調整不明、内面刷毛目調整を施す。底部には焼成の前後は不明であるが穿孔されている。生駒西麓系の胎土である。２復元口径24.8cm、現存高4.5cmを測る。内外面ヘラミガキ、口縁内外面はヨコナデ調整を施し、内面には煤が付着する。



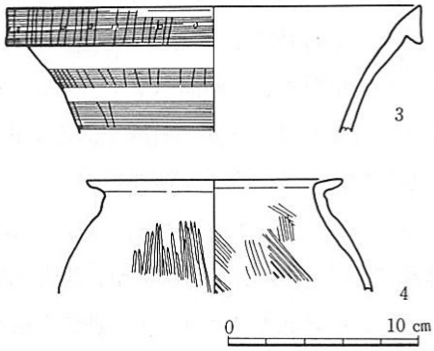

第53図　ＳＤ2001出土遺物実測図（１）




第54図　ＳＤ2001出土遺物実測図（２）




第55図　ＳＤ2006出土遺物実測図（１）




第56図　ＳＤ2006出土遺物実測図（２）

ＳＤ2010（第58図、図版77）

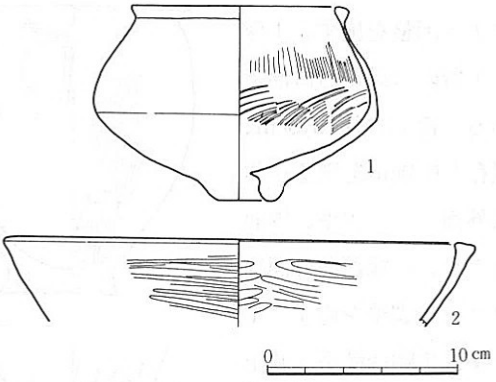
Ａトレンチ D～Ｆ－33、34区で検出された。ＳＤ2011と切りあっている。上幅２～2.5m、下幅１ｍ、深さ0.44mを測る。埋土は暗灰色粘土、シルトである。遺物は１鉢形土器である。復元口径13.2cm、現存高9.8cmを測る。外面口縁端部に刻み目、体部に簾状文を３帯、内面はナデ調整を施す。生駒西麓系の胎土である。

ＳＤ2013（第59図、図版77）

Ａ12トレンチＨ－36区で検出された。東側の一部をＳＫ2022に切られる。現存長2.7m、幅0.5ｍを測る。遺物は１鉢形土器である。復元口径16.9cm、器高7.5cmを測る。外面ヘラミガキ、底部外面はナデ調整を施す。内面は不明である。

ＳＤ2014（第60図、図版77）

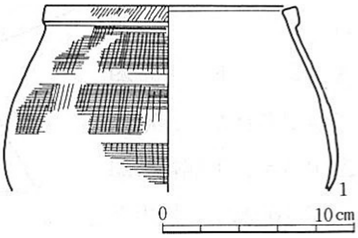
Ａトレンチ F－36区で検出された。現存長2.4m、幅0.5mを測る。遺物は１コップ形土器である。両把手の一方が欠損する。口径9.4cm、器高9.3cmを測る。外面ヘラミガキ、内面と底部外面はナデ、口縁端部はヨコナデ調整を施す。生駒西麓系の胎土である。




第57図　ＳＤ2009出土遺物実測図

ＳＤ2016（第61図）

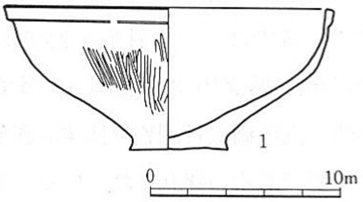
Ａトレンチ E－37、38区で検出された。遺物は１～３甕形土器である。１復元口径10.4cm、現存高4.1cm、２現存高4.1cm、３底径7.0cm、現存高12.7cmを測る。外面は１ヘラナデ、２ヘラケズリ、３ヘラミガキ、内面はいずれもナデ調整を施す。１、３は生駒西麓系の胎土である。




第58図　ＳＤ2010出土遺物実測図

ＳＤ2017（第62・63図、図版78）

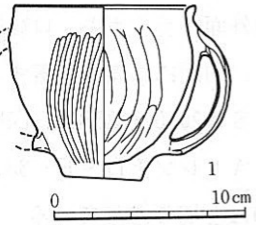
Ａトレンチ F－40区で検出された。幅0.2～0.4m、深さ0.1mを測る。遺物は１無頸壺形土器の口縁から体部である。復元口径11.3cm、現存高5.9cmを測る。内面ナデ調整、口縁下に２孔穿孔されている。生駒西麓系の胎土である。２、３は体部から底部である。２復元底径5.6cm、現存高7.7cmを測る。外面ヘラミガキ、内面ユビナデ調整を施す。Ｓ１凸基有茎式の石鏃である。Ｅ－２タイプ。




第59図　ＳＤ2013出土遺物実測図

ＳＤ2018（第64図、図版78）

Ａトレンチ F－40区で検出された。遺物は１甕形土器の口縁から体部である。復元口径16.0cm、現存高7.4cmを測る。内外面ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ調整を施す、外面には煤が付着する。２は体部から底部である。底径6.5cm、現存高8.3cmを測る。外面ヘラケズリ調整を施す。内面には煤が付着する。３高杯の杯部である。復元口径22.4cm、現存高5.7cmを測る。内面ヘラミガキ調整を施す。外面は磨滅して不明である。４脚裾部である。脚裾部径16.3cm、現存高4.25cmを測る。




第60図　ＳＤ2014出土遺物実測図

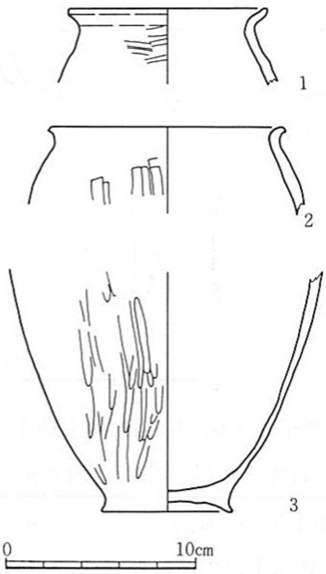
ＳＤ2020（第65図）

Ｂ１トレンチ、Ｂ～Ｄ－41、42区で検出された。幅0.2～0.5m、深さ0.19mを測る。埋土は暗青灰色砂混り粘土（炭入る）。コの字形にまわり一辺7.8m、もう一方は調査区外へのびるため明らかではないが７m以上になる。住居跡の可能性が考えられるが明らかにはできなかった。遺物

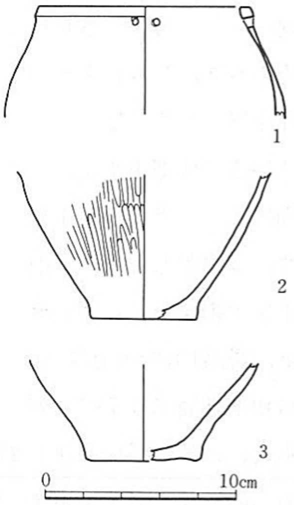
は１高杯杯部である。復元口径18.8cm、現存高5.5cmを測る。内外面ともにヘラミガキ調整を施す。２高杯脚柱部である。現存高7.1cmを測る。外面ヘラミガキ、内面はナデ調整を施す。

ＳＤ2021（第66図、図版78）

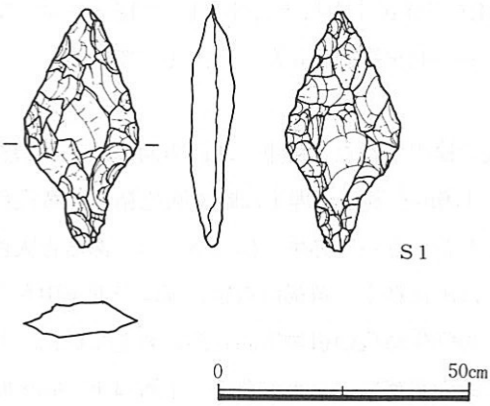
Ｂトレンチ Ｅ－44区からＢ－２トレンチにかけて検出された。幅2.2ｍ、深さ0.27ｍを測る。埋土は灰黒色粘土（粗砂含む）、暗灰色粘土（粗砂、細砂含む）、黒色砂混り粘土。遺物は１、２甕形土器である。１口径11.0cm、器高




第61図　ＳＤ2016出土遺物実測図

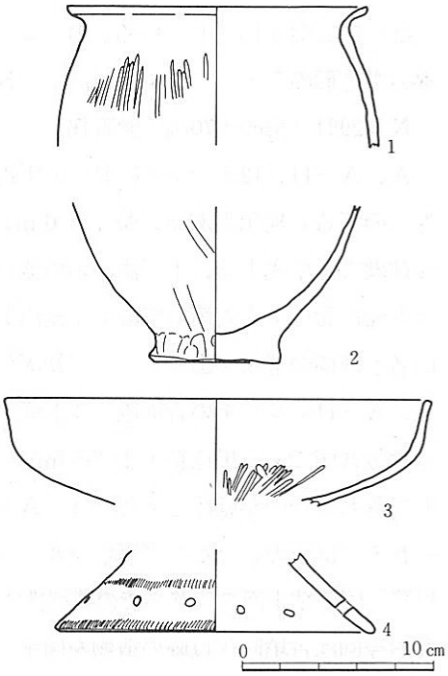



第62図　ＳＤ2017出土遺物実測図（１）




第63図　ＳＤ2017出土遺物実測図（２）

13.8cmを測る。外面ヘラミガキ、内面刷毛目調整。２底径6.2cm、現存高9.9cmを測る。外面ヘラミガキ、内面は指おさえナデ調整を施す。生駒西麓系の胎土である。



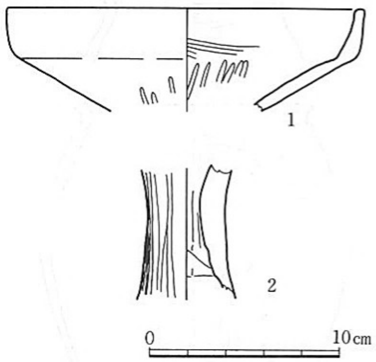

第64図　ＳＤ2018出土遺物実測図

弥生時代遺物包含層（第67・68図）

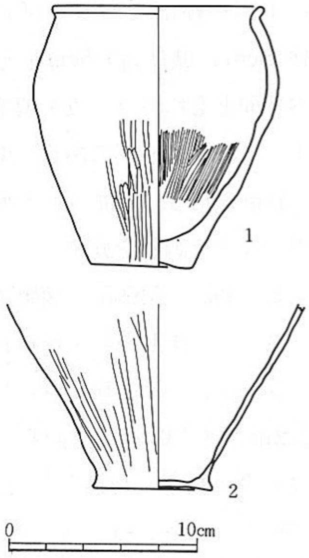
Ａトレンチ20ラインからＣトレンチの北端まで約180ｍにわたり堆積する。層厚0.2～0.3ｍを測る。包含層は均一な粘土ではなく砂混り、シルト質などで、色調も黒色、暗青灰色、暗灰色と漸移的に変わる。遺物量は多くなく、層中、層上面で出土する。

遺物は１鉢形土器である。復元口径31.8cm、現存高12.6cmを測る。外面口縁端面には刻み目、

体部は列点文の上に横方向のヘラミガキ、さらにそのうえに刻み目をもつ棒上浮文を７本はりつけている。体部下半及び内面はヘラミガキ調整を施す。２水差し形土器で把手を欠損する。口径7.8cm、器高18.0cmを測る。口頸部外面には７帯の列点文、体部は櫛描簾状文２帯、直線文１帯を施しそのうえに縦方向のヘラミガキを施す。体部下半から底部はヘラミガキ、内面は口頸部ナデ調整を施す。３甕形土器の口縁から体部である。復元口径14.8cm、現存高8.9cmを測る。体部外面には縦方向のヘラミガキ、口縁内外面ヨコナデ、内面は指押さえナデ調整を施す。外面には煤が付着する。１～３生駒西麓系の胎土を持つ。



第65図　ＳＤ2020出土遺物実測図



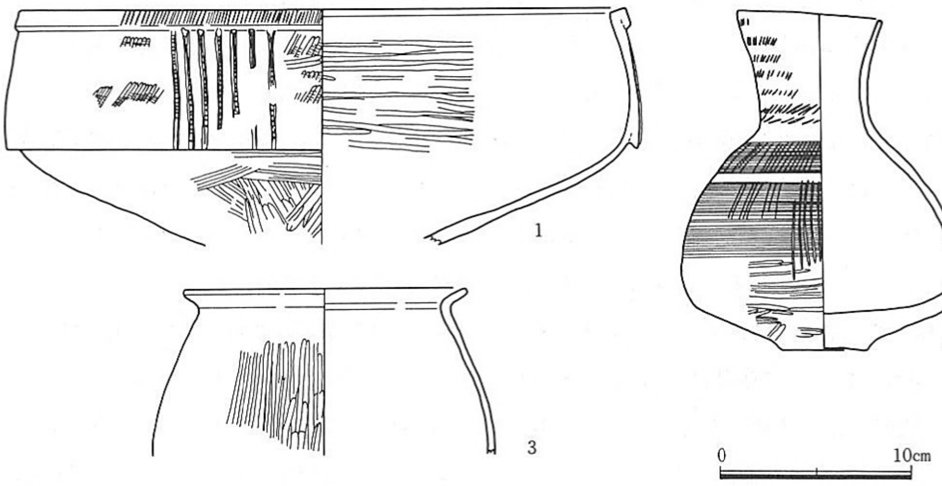
第66図　ＳＤ2021出土遺物実測図

ほかに石器が出土している。Ｂトレンチ F－41区で柱状片刃石斧（Ｓ３）、A12トレンチで直線刃半月形の石包丁（Ｓ４）である。ＳK2012からも偏平片刃石斧が一点出土している。

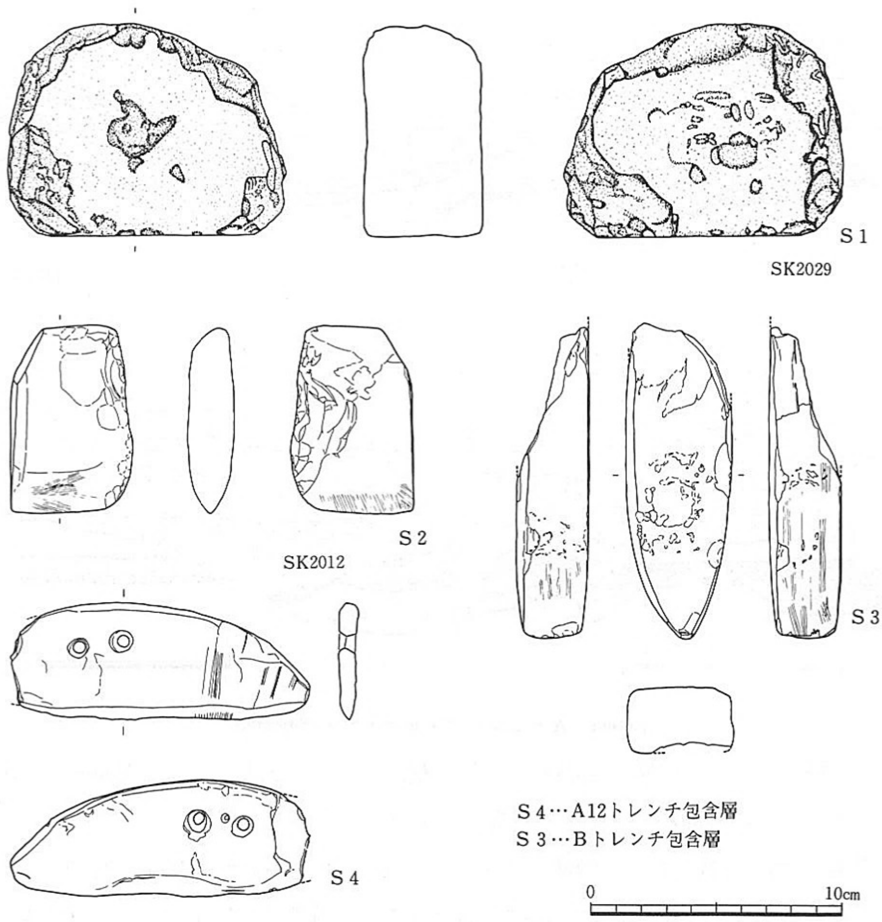
ＮＲ2001（第69・70図、図版16）

Ａ、Ａ－11、12トレンチにおいて灰色粘土上面で検出された。南東－北西方向にはしり調査区外へのびる。検出長32m、幅４～６ｍ、深さ１～1.6mを測る。埋土は暗青灰色粘土、黄褐色粗砂細礫で弥生式土器、土師器、須恵器などが出土した。さらに弥生時代のベースである青灰色シルト面においても同箇所で流路を検出した。埋土は灰色粘土、黄褐色粗砂、細礫で埋土中からは前者と同様の遺物が出土した。当初灰色粘土面での弥生時代の遺物は混入かと考えていた。しかし、Ａ－11トレンチの青灰色シルト面においての断面観察により灰色粘土の下層以下、弥生時代遺物包含層である黒色粘土まで流路の外側では水平堆積しているのが、流路部分では肩部に平行して落ち込むのが確認された。なおＡトレンチでは黒色粘土層は灰色粘土面からの流路により削られる。以上のことから青灰色シルト面において流路の機能を有していたと考えられるが、それ以降、灰色粘土面の流路までの連続性については、充分な遺物の検討をおこなった後に行いたい、なお今回は古墳時代以降の遺物を図示した。以下、代表的な遺物について簡単に記述してゆきたい。

１～４は、口径12.0～13.0cm、器高4.2～4.6cmを測る土師器杯である。偏平な底部と球体に近い体部からなり、口縁部は外反気味に外上方につまみあげるもの（１～３）と内彎気味に上方にのびるもの（４）の２種類がある。調整は、全体に外面下半を指押さえ調整とし、上半はヨコナデ調整をおこなう。内面は、磨滅が著しいため詳細は知りえないが、２では比較的密な斜放射




第67図　弥生時代包含層出土遺物実測図

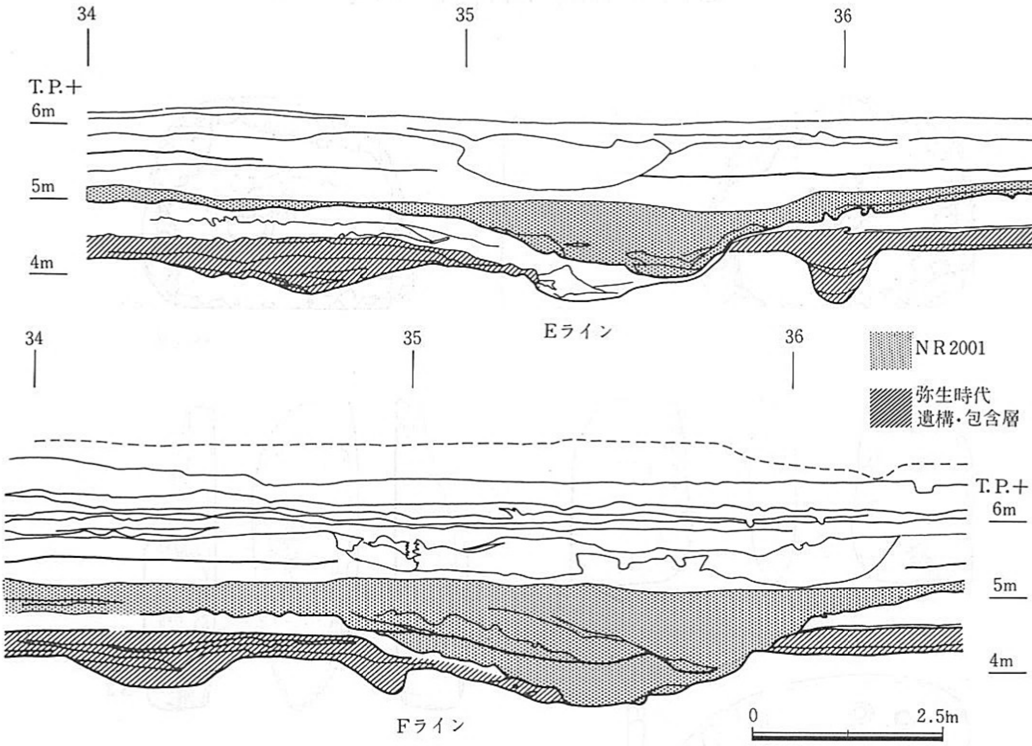



第68図　弥生時代遺構・包含層出土石器実測図

暗文が施されている。全体に焼成は良好で、色調は黄橙色を呈する。

5・6は須恵器杯蓋である。5は口径10.5cm、器高3.0cmを測る小型の杯蓋である。口縁端部を外方につまみ出し、面を成す。調整は全体にヨコナデ調整であり、天井部は回転ヘラ削りとする。胎土は、1～3mm前後の砂粒を含むが比較的緻密である。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。6は口径13.0cm、器高3.8cmを測る。球体に近い体部を有し、口縁部は尖り気味である。全体にヨコナデ調整であり、天井部上半は回転ヘラ削りとする。口縁部外面には斜め方向の刻み目をめぐらせている。焼成はやや軟質で、色調は灰色を呈する。

7～16は須恵器杯身である。7は若干古相を呈するものであり、体部下半を欠損している。復元径10.2cmを測る。口縁部は、ほぼ直立して立ち上がり端部は面を成す。全体にヨコナデ調整を施す。焼成は良好で灰色を呈する。8～16は、ほぼ同時期に属すると考えられるものであり、口径は10.5～12.6cm、器高は3.4～4.5cmを測る。全体に体部は偏平で浅く、立ち上がりは短く




第69図　AトレンチE・Fライン土層断面図

内傾する。口縁端部は尖り気味に納めている。調整はヨコナデ調整で、底部外面のみ回転ヘラ削りである。8のように外面に一文字のヘラ記号を施すものもみられる。

17は須恵器壺の口縁部であり、胴部を欠損している。口径は復元で12.0cmを測る。ほぼ直立して立ち上がる頸部に丸く肥厚させた口縁端部を有する。調整は口縁部をヨコナデ調整とし、体部には内外面に叩き調整の痕跡を残す。胎土・焼成とも良好で、色調は灰色を呈する。

18は土師器高杯であり、脚裾部径9.2cmを測る。杯部は欠損しており、現高で6.4cmを測る。調整は外面を刷毛調整、内面は指押さえ気味の強いナデ調整としている。胎土には若干砂粒を含み、色調は黄橙色を呈する。

19は須恵器直口壺であり、脚台を有するものであるが、ほとんどを欠損している。口径は11.6cmを測り、現高は18.9cmである。調整は、口縁部外面を刷毛目状の調整の後ヨコナデ調整とし、体部は上半部に細かいカキ目を施し、下半は叩き調整の後ヘラ削りを行っている。内面は全体にヨコナデ調整である。胎土・焼成とも良好であり、色調は灰色を呈する。

20は須恵器提瓶であり、体部のほとんどを欠損しており、口縁部と体部を部分的に残すのみである。口径は6.7cmを測り、体部径は18cm前後と推定される。口縁部は内彎気味に丸く納められるもので、全体にヨコナデ調整とする。体部には外面にカキ目が施され、内面はヨコナデ調整である。また、体部肩部には直径約2.5cmの形骸化した把手が貼り付けられている。胎土は若干砂粒を含み、焼成は良好である。

21は土師器甕であり、体部下半と底部を欠損している。口縁部はやや外反して斜め上方にのび、端部はさらに外方につまみ出されている。胴部は最大径が中位にあり、全体に球形に近い形態を呈する。調整は全体に表面が剝離しており不明瞭であるが、口縁部は内外面ともヨコナデ調整とし、胴部は、外面を刷毛調整および指押さえ気味のナデ調整とする。内面は板状工具を用いたナデ調整である可能性が強い。全体に１～３mm前後の砂粒を多く含み、焼成はやや軟質である。色調は全体に灰黄褐色を呈するが、部分的に黒褐色を呈している。

以上、簡単に記述してきたが、次にこれらの土器の帰属する年代について若干触れておきたい。

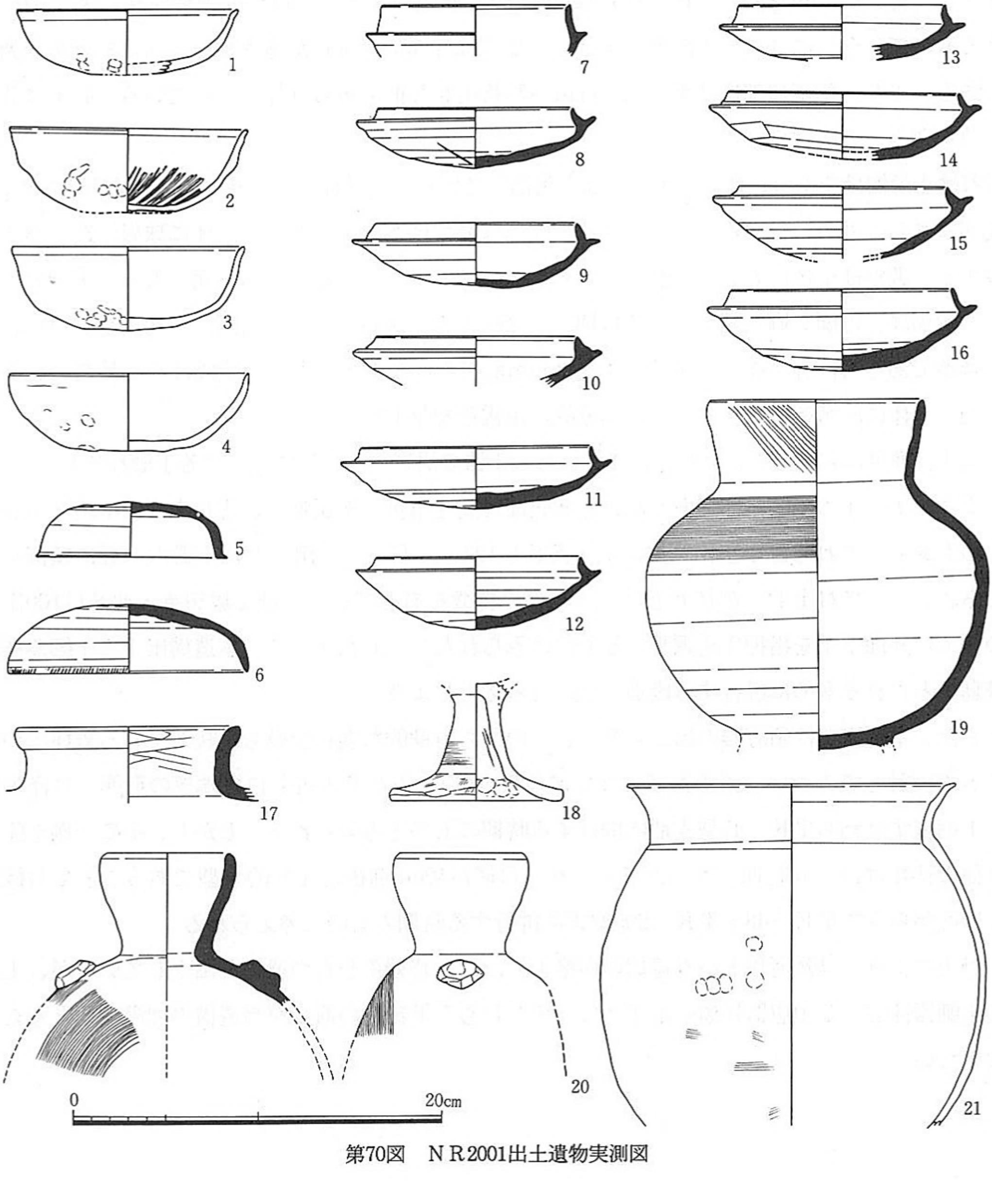
まず、１～４の土師器杯であるが、外面底部付近を指押さえ調整し、また内面には暗文を施すものもあり、これらは小墾田宮推定地・溝ＳＤ124、ＳＤ50より出土した土器の一群に類例が認められ、そこで杯ｂおよび杯ｃとされるものの特徴を有している。続く坂田寺・池ＳＧ100出土の杯では外面下半を指押さえ調整するものはみられない。したがって、本遺構出土の土師器杯は飛鳥Ⅰとされるものに併行する段階のものと考えられよう。

また、本遺構では須恵器の出土も多く、そのうち時期的な変化を最も反映している蓋杯について若干検討してみたい。須恵器杯では先述のように7のみが若干古く口縁端部の形態、口径等からⅠ期末すなわちＴＫ－47型式期に併行する時期のものと考えられる。しかし、その一例を除けば他の杯類はほぼ同時期のものと考えられ、口径が12cm前後と比較的小型であることや口縁部の形態からみてＴＫ－43～ＴＫ－209型式に併行する時期のものと考えられる。

以上のように自然河川という遺構の性格上、かなり時期差をもつ遺物が出土しているが、上記の土師器杯および須恵器杯類の示す年代、すなわち７世紀代の前半を当遺構の埋没時期と考えておきたい。

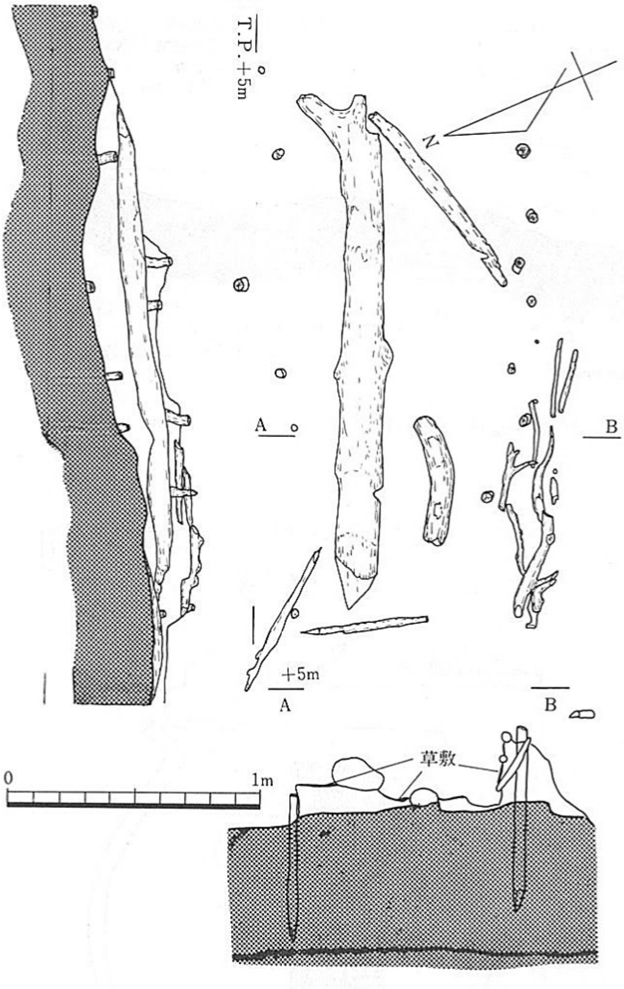
2．弥生時代後期

Ｆトレンチ Ｆ・Ｇ－114～116と120～123地区の微高地上（Ｔ．Ｐ．＋4.5ｍ前後）に遺構面があり、その上には層厚約10cmの包含層が形成されている。しかし、遺構は小規模な溝が７条と土坑１基とＳＤ3001の南側で簡単な杭列ＳＳ3001の１基が検出されたのみで、集落域とは言いがたく、微高地北東側には自然河川が流れている。各遺構からの遺物の出土は細片で、その数は少なく、中期の土器片もかなり含まれている。遺物は図化出来たものの中から任意に抽出した。抽出したものを含めて出土した土器は後期の前半に属するものである。ＳＳ3001は、ＳＤ3001（幅３ｍ、深さ0.6ｍ）とＮＲ3001が接近する幅約２ｍ、深さ0.2ｍの位置にＳＤ3001と平行して、0.9

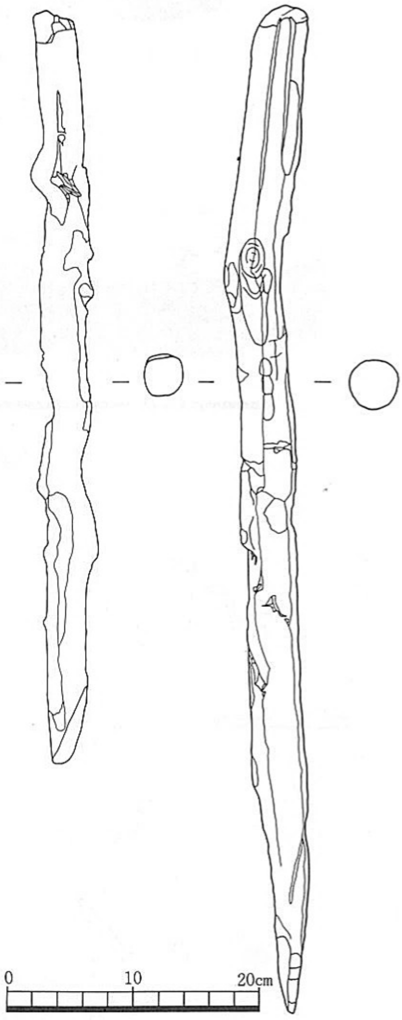



第70図　ＮＲ2001出土遺物実測図

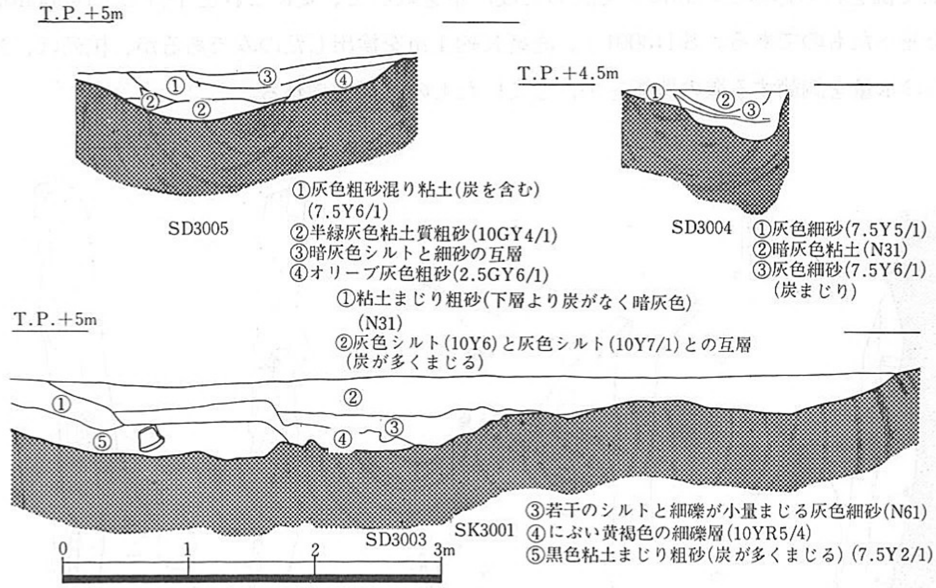
ｍの幅で杭を打ち込みその間に土を詰めた後に草を敷いて、更にこれと平行して径30cm前後の木材を並べたものである。ＳＤ3001は、総延長約４ｍを検出したのみであるが、杭列は、ＮＲ3001からの水量を調節する堰の機能を果たしていたものと考えられる。



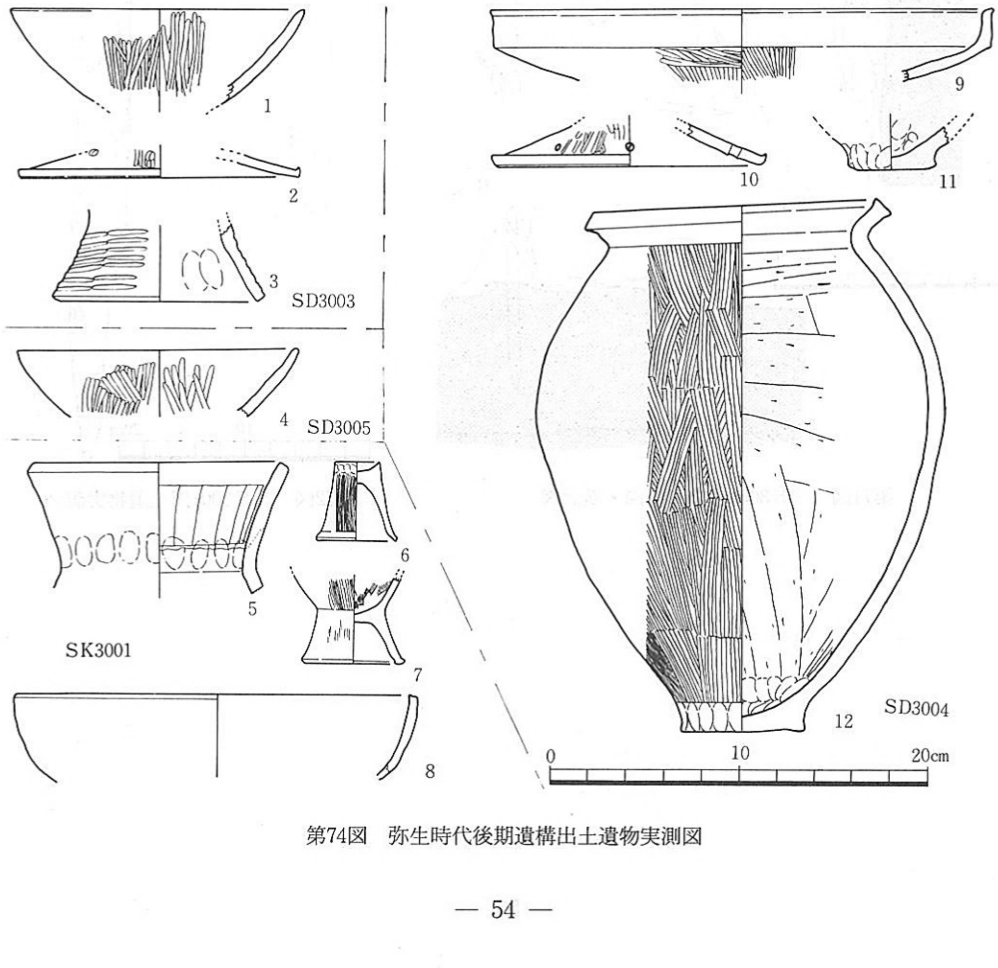

第71図　ＳＳ3001遺構平面図・断面図




第72図　ＳＳ3001出土遺物実測図




第73図　弥生時代後期遺構土層断面図




第74図　弥生時代後期遺構出土遺物実測図

# 第３節　古墳時代

## １．古墳時代前期

居住域を示すと考えられる遺構が検出されたのは、Ｃ・Ｃ－１～４・10・11トレンチとＦ・Ｆ－１～４トレンチの自然堤防上で、ＧＬ－2.0～2.4ｍ・Ｔ．Ｐ．＋5.0～5.4ｍに位置し、いずれも層厚10～30cmの包含層が形成されている。便宜上前者を第１居住域、後者を第２居住域とした。両地域の間には、自然河川ＮＲ4001と4002が存在し、約120ｍの距離がある。第１居住域では、包含層の上面においても溝、土坑等の遺構が検出されており、この面を第１遺構面とし、第１、第２居住域で包含層除去後に検出された遺構面を第２遺構面とした。また、包含層中においても土器群や焼土や炭化物の薄層が検出され、遺構面の存在が考えられたが、その範囲は局所的で、面として確認する事は出来なかった。第１居住域の北（54ライン以北）では、後背湿地状の低地（Ｔ．Ｐ．＋3.8～4.0ｍ）を隔てて、22～26ライン、Ｔ．Ｐ．＋5.0～5.5ｍ付近で水田畦畔の一部が検出された。この付近が第１居住域の生産域と考えられ、第２居住域の生産域は調査区外に存在するものと考えられる。なお、第１居住域の北約380ｍの佐堂遺跡Ｃ～Ｅトレンチではほぼ同時期の居住域、第２居住域の南西約100ｍの久宝寺遺跡南地区Ａ～Ｃトレンチでは、墓や水田などの遺構が検出されている。

### （１）　出土土器の分類

今回の調査では、包含層をはじめ各遺構から多くの土器が出土し、実測点数にして680点を数え、全実測点数の約４割に及ぶ。これは、本遺跡の中心が当該期にある事の一側面を反影しているものと考える。これら土器群は、混入品と思われる包含層出土の弥生式土器数点と自然河川出土の縄文式土器や弥生式土器を除けば、全て古式土師器として認識されるもので、なかでも布留式土器が大半を占める。また、今回調査区内では、須恵器の出土は認められなかった。

近年、この中河内地域においても、当該期の資料は増加しており、これまでにも幾つかの編年案が提示されている。ここでは、まず、今回出土土器群について、形態と調整技法によって分類を行い、編年的位置付けについては第Ⅵ章において検討する事とする。

**壺**

二重口縁壺・広口壺・直口壺・小型壺がある。この他にも山陰系・西部瀬戸内系などの搬入品と考えられるものも出土している。

**二重口縁壺**

〔Ａ〕球形の体部と、直立もしくは外傾して立ち上がる頸部から、水平方向へ延びた後内外面に明瞭な段をなして外傾して開く口縁部とからなるものである。

〔Ｂ〕球形の体部と、直立する頸部から、外傾して開く口縁部とからなるもので、内面頸部との

境に稜をなし、口縁部外面には段、もしくは突帯を貼り付ける。

〔C〕球形もしくは倒卵形の体部と、長く外傾もしくは僅かに外反して立ち上がる頸部から、内外面に明瞭な段をなして外上方へ外反して開く口縁部とからなるものである。

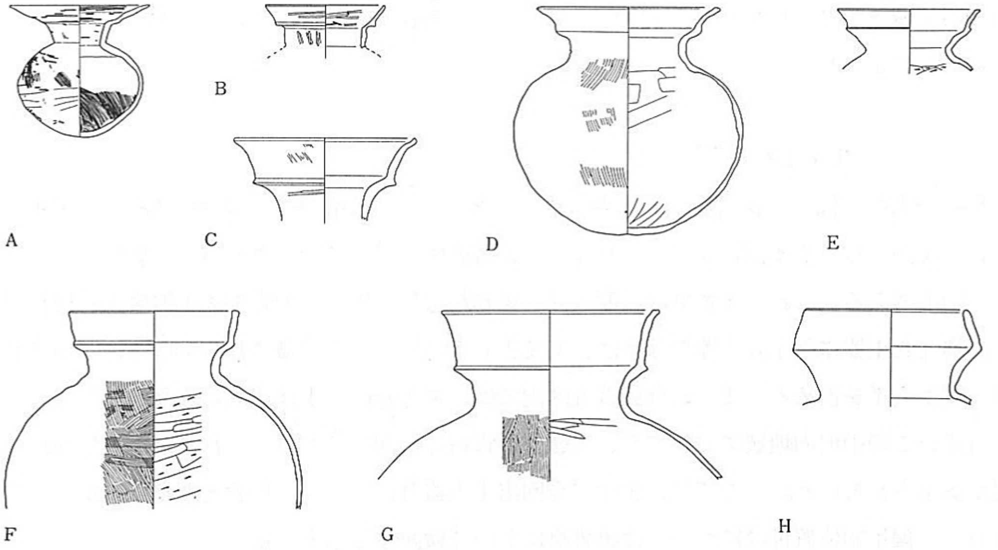
〔D〕球形もしくは卵形の体部と、短く外反気味に立ち上がる頸部から、内外面に段をなして開く口縁部とからなるもので、内外面の段には丸みを持つ。

〔E〕倒卵形もしくは球形の体部に、斜め上方へ僅かに外反した後更に、内外面に段をなして外上方へ開く口縁部が付くものである。

〔F〕長胴形もしくは倒卵形の体部と、短く直立する頸部から外反した後、内外面に段をなして上方へ立ち上がる口縁部とからなるもので、直立する口縁部は短く、内外面に丸みを持つもの。

〔G〕肩部の張る倒卵形の体部と、短く直立する頸部から、外反した後、内外面に明瞭な段をなして、長く上方へ立ち上がる口縁部とからなるもので、外面段の稜線は鋭い。

〔H〕長胴形もしくは倒卵形の体部に、斜め上方へ外反した後、更に内傾して開く口縁部がつくもので、屈曲部に突帯をなす大型品がある。




第75図　久宝寺遺跡出土布留式土器分類図（1）

広口壺

〔A〕倒卵形の体部から外上方へ大きく開く口縁部のつくものである。口縁部が外反するものA1と外傾するものA2がある。

〔B〕卵形のやや眺めの体部から、外傾もしくは外反して開く口縁部がつくものである。

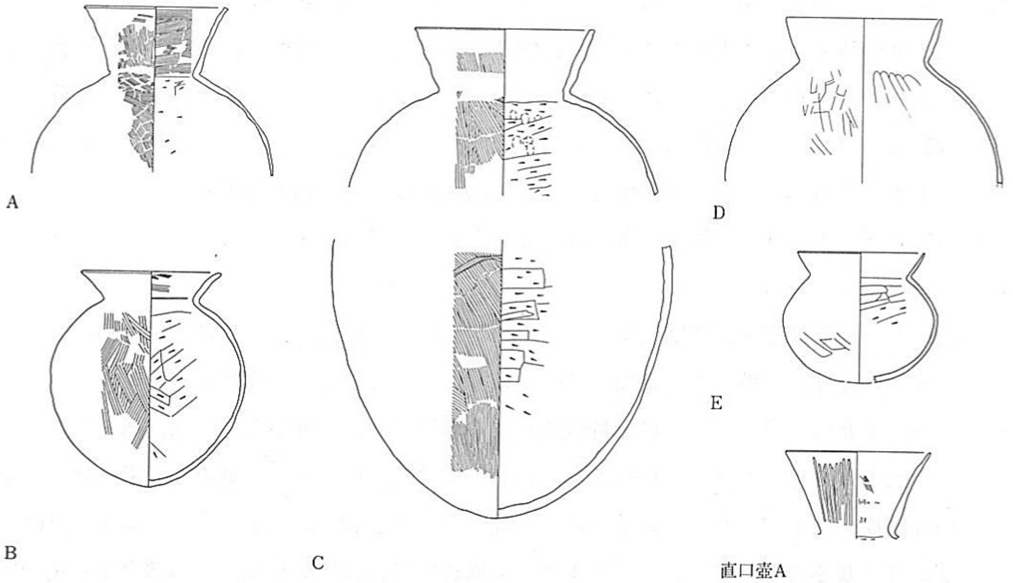
〔C〕長胴形の体部から、斜め上方へ開く口縁部のつくもので、口縁部は体部に比して著しく短い。

〔D〕長胴の体部をなすもので、ナデ調整、もしくは未調整を特徴とする。一般に胎土は粗く、調整は粗雑である。

〔E〕球形もしくは偏球形の体部に、短く開く口縁部が付くものである。

### 直口壺

〔A〕球形もしくはやや偏球形の体部と、細くしまる頸部から外傾して開く口縁部とからなるもので、胎土は精良で調整も丁寧である。




第76図　久宝寺遺跡出土布留式土器分類図（2）

### 小型壺

〔A〕口縁部が二重口縁をなすもので、口縁部の形態によって次のように細分される。

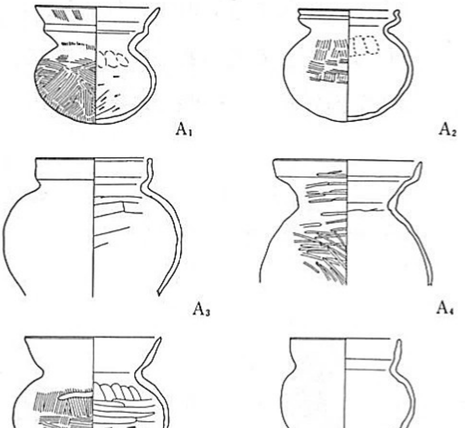
$A_1$　球形の体部から、斜上方へ延びた後、内外面に段をなして更に外反して開く口縁部の付くもの。

$A_2$　球形の体部から、「く」の字に屈曲した後内傾する口縁部の付くもの。

$A_3$　球形の体部に、短く屈曲した後、内外面に段をなして直立する口縁部の付くもの。

$A_4$　卵形の体部から、斜め上方へ外反して延びた後、更に水平方向へ平木、内外面に段をなして上方へ短く立ち上がる口縁部の付くもので、底部は平底となる。

〔B〕球形もしくは偏球形の体部に外傾もしくは外




第77図　久宝遺跡出土布留式土器分類図（3）

反する口縁部の付くもの。

〔C〕球形の体部に短く上方へ立ち上がる口縁部の付くもの。

**甕**

〔A〕庄内式甕の型式組列上に位置する甕である。体部外面には細筋のタタキメを施し、体部内面のヘラケズリは頸部に及び、頸部内面に鋭い稜をなす。体部外面のタタキメの方向にはA1…左上がりのタタキを施すものと、A2…右上がりのタタキを施すものとがある。

〔B〕口縁部は屈曲して開き、内面ヘラケズリが頸部に及び、頸部内面に鋭い稜をなすなどの庄内式甕の特徴を有するものであるが、同時に、体部外面の調整が、ハケメもしくは、ナデ調整による甕を一括する。体部と口縁部の形態と調整技法によって次のように細分する。

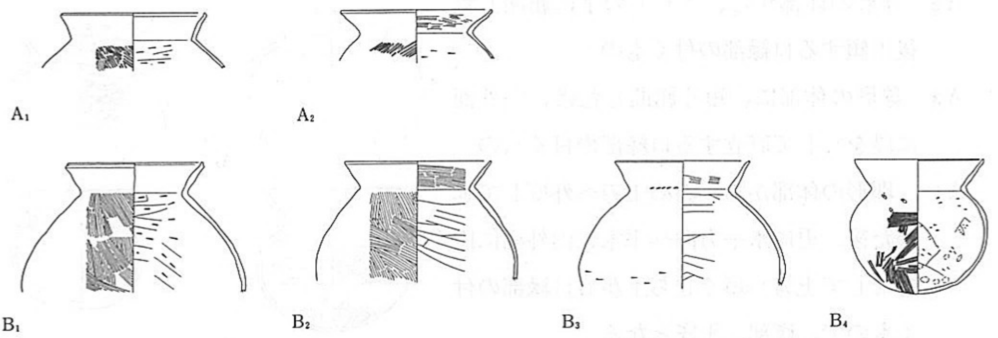
B1 最大径が体部中央か僅かに下にあって、肩部が下がり、下膨らみの球形の体部と、口縁部端を上方へ小さくひきだすもので、体部外面はハケメ調整による。

B2 B1と同様の体部と、端部を薄く舌状におさめる口縁部とからなるもので、体部外面はハケメ調整によるもの。

B3 B2と同様の体部と口縁部とからなるもので、体部外面はナデ調整によるもの。

B4 球形の体部と、外上方へ外傾して開く口縁部からなる小型の甕である。

〔C〕いわゆる布留式甕である。最も特徴的な姿は球形の体部と外傾もしくは内弯して開き、端部を内方へ丸く肥厚させる口縁部とからなるもので、体部外面は縦方向の後、体部上半と肩部に横・斜方向のハケメ調整、体部内面ヘラケズリ調整による。内面ヘラケズリは、頸部にまで及ぶことはなく、頸部直下と底部周辺には指頭圧痕を残す。頸部直下の指頭圧痕は、ヘラケズリによって消される例もある。また、口縁部と体部の接合部には、ヨコナデ調整を加え、口縁部と体部には稜をなす。このヨコナデは肩部に及ぶ例があり、ハケメが消されている。接合部内面に、狭い段をなすものや段が小さく不明瞭なもの、段をなさずゆるく屈曲するものなどがあり、接合方法の違いもしくはその後の調整の違いによって生じるものと考えられる。ここでは、口縁端部の形態、大きさ（容量)、体部の形態の各属性を細分を行い、個々の甕は細分された諸属性の総体として分類される。




第78図　久宝遺跡出土布留式土器分類図（4）

（１）大きさ（容量）

〔Ⅰ〕口径17cm前後のものである。体部の形態が〔１〕・〔２〕のものは、口縁部が長く外傾して開くものがつき、〔３〕のものには、体部に比して短く内弯する口縁部が付く傾向がある。

〔Ⅱ〕口径16cm前後のものである。

〔Ⅲ〕口径14～15cm前後のものである。最も一般的な大きさであり、出土量も多い。

〔Ⅳ〕口径12～13cm前後のものである。

（２）体部の形態

〔１〕　最大径が体部中央にあり、球形の体部をなすもの。

〔２〕　最大径は体部中央に有するが、肩部が下がってなで肩となり、体部は卵形に近い形態をなすもの。体部最大径と体部の高さはほぼ同じか、僅かに体部が長くなる。

〔３〕　肩部が丸く張るもので、最大径は肩部以下体部上半にある。

（３）口縁端部の形態

〔ａ〕口縁端部が肥厚するものを一括する。

$a_1$　内方へ肥厚するものである。上端は僅かに内傾する面をなすか丸味を持つ。

$a_2$　内外方へ肥厚するものである。上端は平坦な面をなし、平坦面が僅かに凹線状に窪むものもある。

$a_3$　長く内傾する面をなして肥厚するものである。

〔ｂ〕　口縁端部が肥厚しないものを一括する。

$b_1$　端部を丸くおさめるものである。

$b_2$　端部を舌状におさめるものである。

$b_3$　端部断面が四角形をなすもので、上端が平坦な面となるものや内傾する面をなすものなどがある。

$b_4$　端部へのヨコナデによって外方へ小さくひきだすもの。

〔D〕体部外面ナデ調整によるものを一括する。庄内式土器の特徴を有するＢ　類とは異なり、内面ヘラケズリは頸部に及ぶことはなく、頸部内面の量はナデ調整によって丸味を持つ。体部内面に指頭圧痕を認められるものもある。体部の形態によって細分する。

$D_1$　最大径が体部中央付近にあって、体部の高さより長く、偏球形の体部をなすもの。

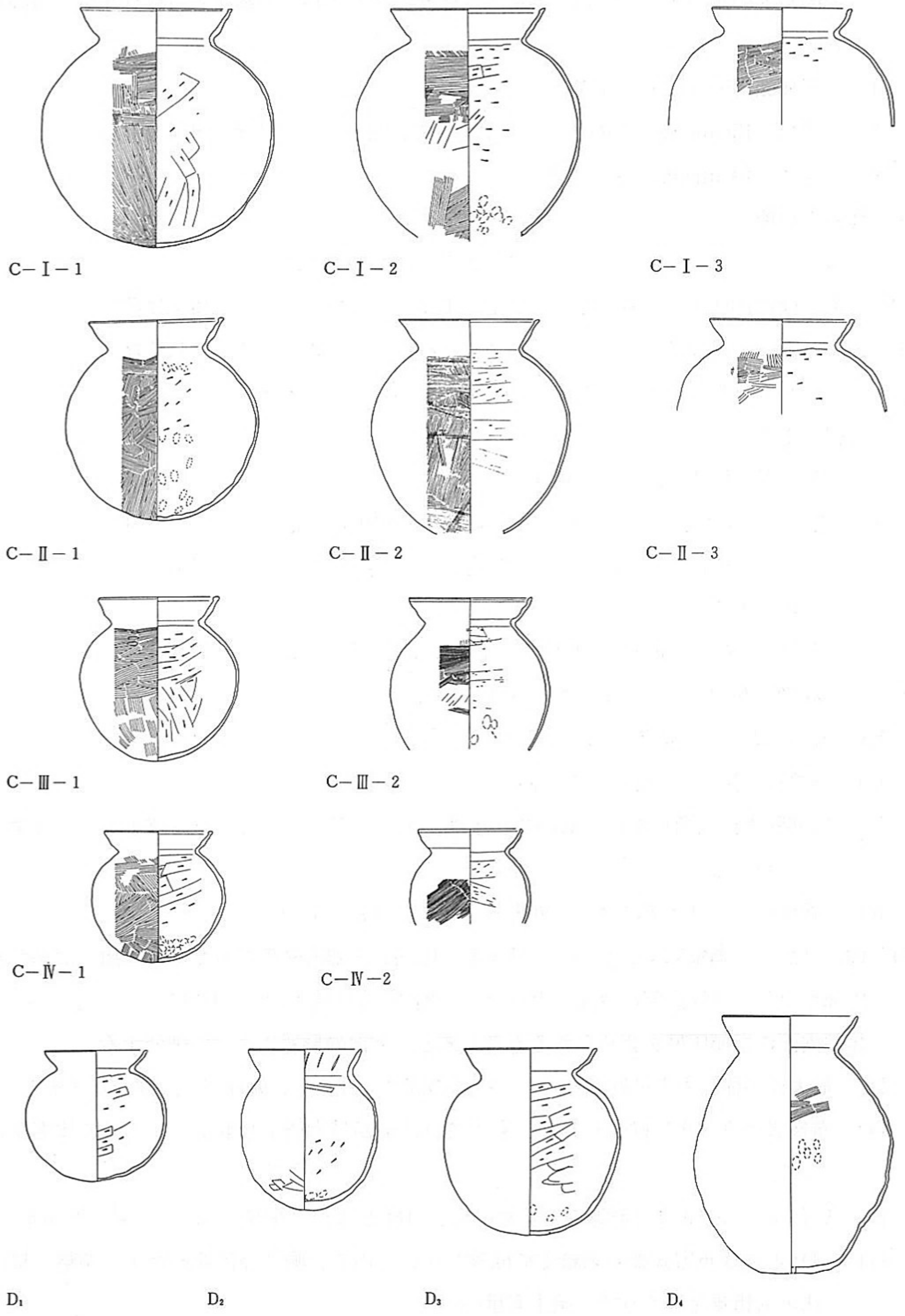
$D_2$　布留式の系譜上には見られないもので、体部が最大径よりも長く、卵形の体部をなすもの。

$D_3$　いわゆる布留式甕の形態をとるもので、口縁部はやや外方へ内弯して開く例が多い。

$D_4$　$D_2$と同様布留式甕の系譜上に位置しないもので、胴長の体部をなす。調整、整形技法とも粗雑なつくりで、胎土も粗い。

## 高坏

主に坏部の形態によって細分されるが、Ｉ…坏部ロ径20cm前後の大型のもの、II…坏部口径




第79図　久宝寺遺跡布留式土器分類図（５）

15～18cm前後の中型のもの、Ⅲ…坏部口径15cm以下の小型のものがある。

Ⅰ　大型高坏

〔A〕坏部外面に段もしくは明瞭な稜をなし、口縁部は外上方へ大きく外傾して開く。内面底部は平坦で、坏部は断面台形をなすもの。

〔B〕坏部外面に段もしくは稜はなく、口縁部は外反して開く。底部内外面には丸味を持ち、坏部は、口径に比して深いものとなる。

Ⅱ　中型高坏

〔A〕坏部は口径に比して深く、底部は口径に比して小さい。中空で長い脚部が付く。調整は丁寧で、ヘラミガキを主体とする。

Ａａ　坏部内面は平坦で、口縁部は長く外傾して開き、坏部外面には、底部と口縁部との境に明瞭な稜をなす。

Ａｂ　坏部内面にはやや丸味を持ち、口縁部は僅かに外反して開く。坏部外面の稜は、$A_1$に比べると鋭さを欠き、不明瞭となる場合もある。

〔B〕坏部の断面が逆台形をなすもの。

Ｂａ　坏部内外面は、底部と口縁部との境に明瞭な稜をなし、口縁部は外傾もしくは外反して開く。〔A〕類に比べると調整はやや粗雑となる。

Ｂｂ　坏部外面の稜は見られず、口縁部との境は内外に丸味を持つ。口縁部は端部で僅かに外反するものが多い。調整は、ハケメ調整が主体となる。

〔C〕坏部口縁が、内弯気味に外上方へ開き、底部と口縁部との境が不明瞭である。調整技法はハケメが主体である。

Ｃａ　坏部外面、底部と口縁部との境は、調整技法の差によって僅かに認識できるもので、$C_2$に比べると調整は丁寧で、ヘラミガキが粗く施されるものもある。

Ｃｂ　丸味を持った底部よりそのまま内弯して口縁端部に至るもので、調整技法は、ハケメ、あるいはナデ調整による。

Ⅲ　小型高坏

〔A〕ⅡＡ類の小型のものである。

〔B〕ⅡＢ類の小型のものである。

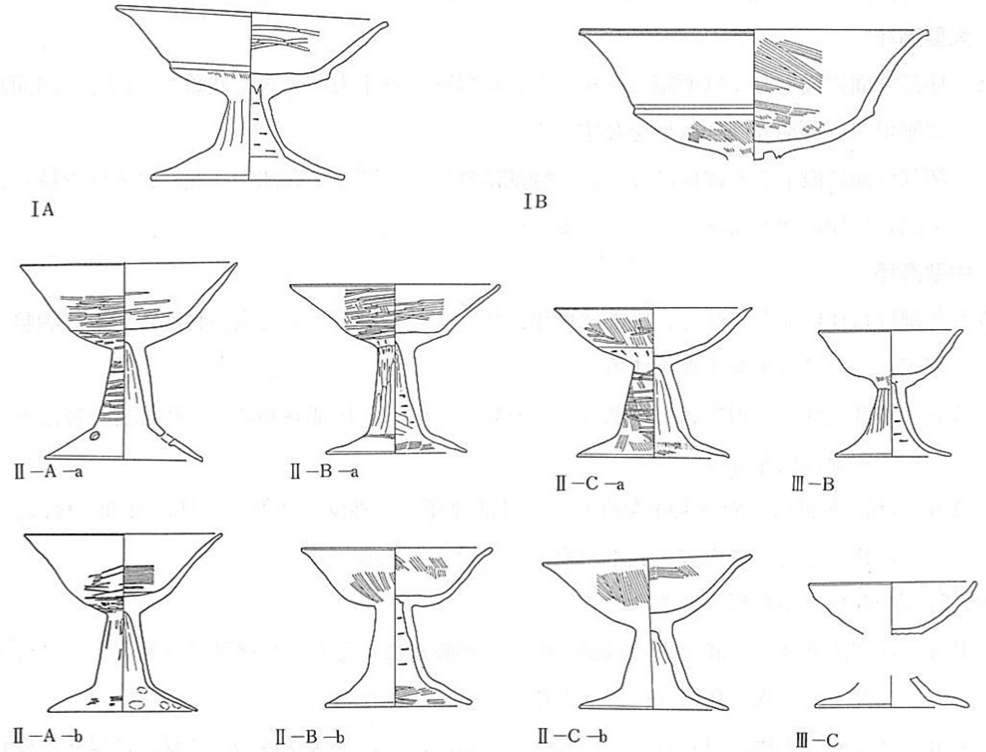
〔C〕ⅡＣ類の小型のものである。

また、脚部の破片も多数出土しており、脚部についても形態と内面調整技法によって分類を行う。

（1）形態

〔A〕柱状もしくは円錐状の筒部から屈曲して開き、裾部に至るもの。長い脚部となるものが多い。

〔B〕エンタシス状の筒部から屈曲して開き裾部に至るもの。




第80図　久宝寺遺跡出土布留式土器分類図（6）

〔C〕筒部と裾部の境が不明瞭となるもの。

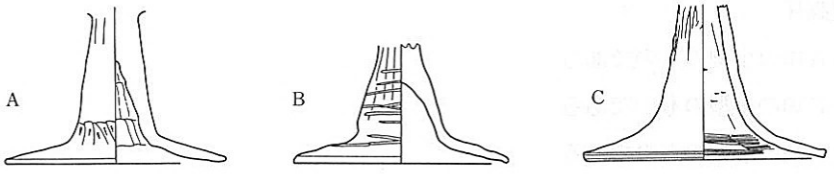
（2）内面調整技法

1　内面未調整で、しぼり目や指頭圧痕を顕著に示す。

2　筒部内面未調整で裾部内面にハケメ・ナデ調整を施す。

3　筒部内面にヘラケズリ・ナデ調整、裾部内面にハケメ・ナデ調整を施す。

この他、数点であるるが裾部内面に布目圧痕が認められるものもある。




第81図　久宝寺遺跡出土布留式土器分類図（7）

鉢

Ⅰ…口径20cm以上の鉢と、Ⅱ…口径20cm以下のものがある。口縁部と体部の形態によって分類される。

Ⅰ　大型鉢

〔A〕丸底で、内弯して立ち上がる体部と、内弯気味に開く口縁部とからなるもの。

〔B〕口縁部が2段になって開くものを一括する。

B1　底部は丸底もしくは体部との境が不明瞭な小さな平底で、2段目の口縁部は短い。

B2　底部は平底で、体部は内弯して立ち上り、2段目の口縁部は長く上外方へ開く。

Ⅱ　**小型鉢**

〔A〕口径に比して、やや浅い体部をなすものを一括する。

A1　丸底の底部から内弯して立ち上がり、そのまま口縁部に至るもの。

A2　丸底の底部から内弯して立ち上がり、口縁部は上方へ短く開く。口縁部と体部との境は丸みを持つ。

〔B〕口径に比して、やや深めの体部をなすものを一括する。

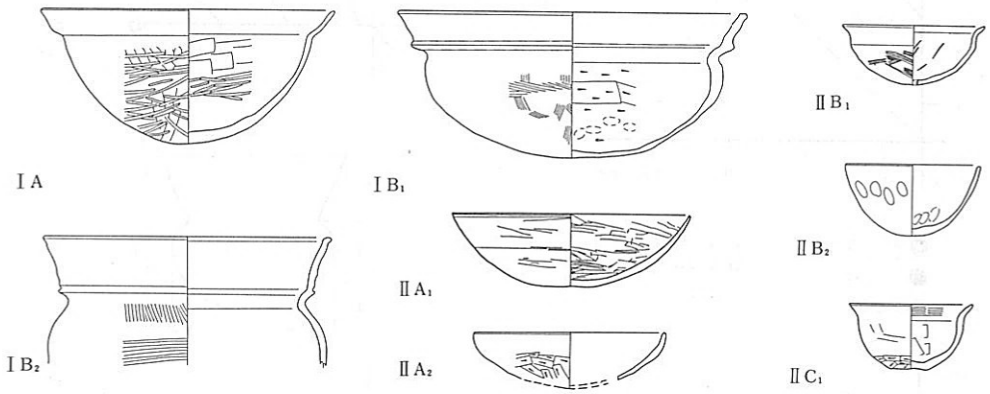
B1　丸底の底部から内弯して立ち上がり、口縁端部は外方へ小さくひきだす。

B2　丸底の底部から内弯して立ち上がり、そのまま口縁部に至り、口縁端部は舌状におさめる。

〔C〕平底のものである。

C1　体部は内弯して立ち上がり、口縁部は「く」の字に屈曲するもの。

C2　体部は内弯して立ち上がり、そのまま口縁部に至るもの。




第82図　久宝寺遺跡出土布留式土器分類図（8）

**器台**

小型器台Aの大型品と搬入品と思われる山陰系　型器台の2点のみである。

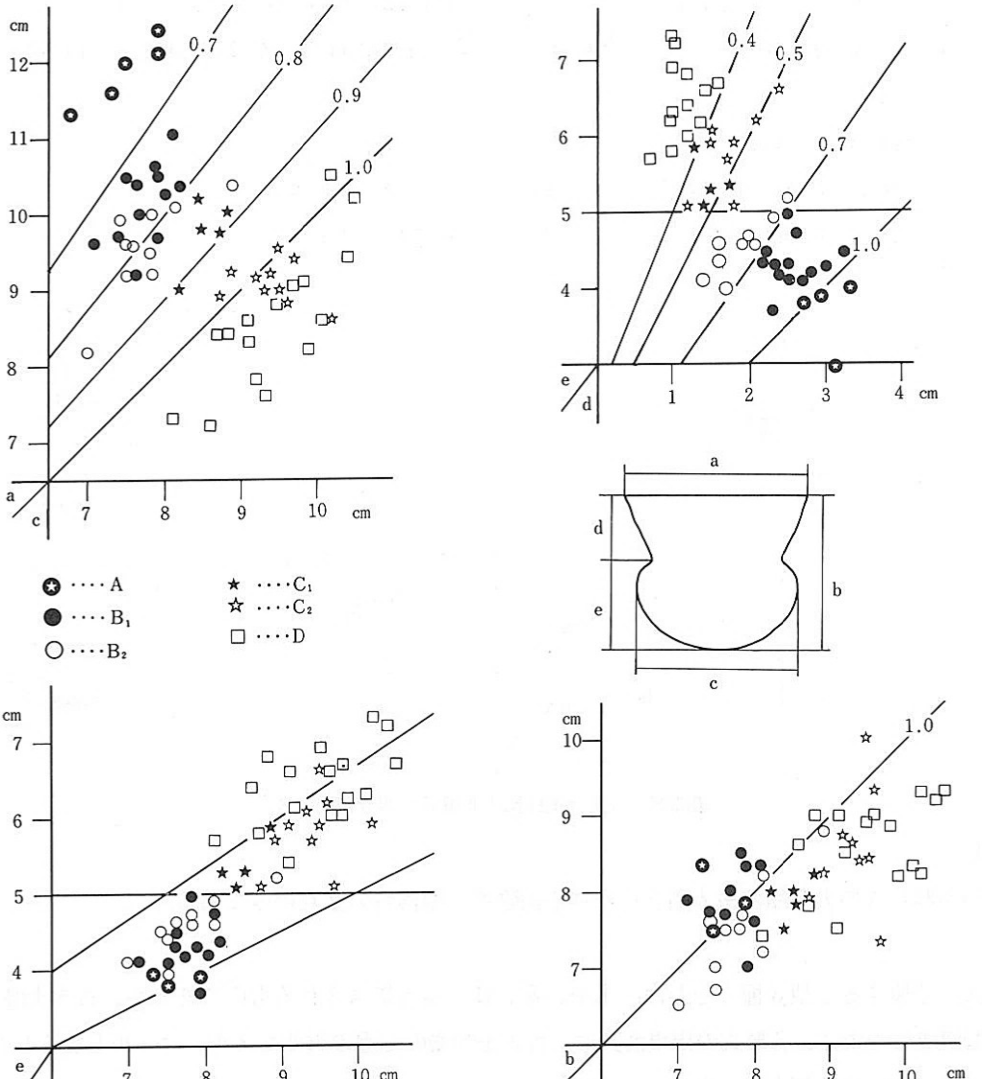
次に分類する小型3種の土器は、本来、壺、鉢、器台に含まれるものであるが、古式土師器の土器組成の中では、各形式の出現消長は、古式土師器の変遷の重要なメルクマールとなるもので、あえて、別途に分類を行った。

**小型丸底壺**

体部は、球形もしくは偏球形をなし、口縁部は外上方へ開く、体部最大径７～11cm、器高６～10cmの大きさのものである。形態と調整技法によって分類する。形態分類を行なうに際しては、各部位間の計測値による相関関係をも考慮した。（第83図）

〔A〕口縁部の高さ（ｄ）が体部の高さ（ｅ）を凌ぎ、口縁部径（ａ）と体部最大径（ｃ）の比ｃ／ａが0.7より小さいものである。外面体部下半と底部をヘラケズリ調整、外面体部上半にハケメ調整の後、外面と口縁部内面を丁寧なヘラミガキ調整を施し、胎土も精良なものが多い。

A1　体部がやや丸みを持つもの。




第83図　久宝寺遺跡出土小型丸底壺各部位相関図

A2　体部がより偏平なもの。

〔B〕口縁部の高さ（d）が体部の高さ（e）の約半分で、口縁部径（a）と体部最大径の比c/aが0.7～0.8の間にあるもの。調整技法は〔A〕類と同様であるが、内外面ヘラミガキ調整は粗雑となり、外面体部外半のヘラケズリの跡は、明瞭に残る。

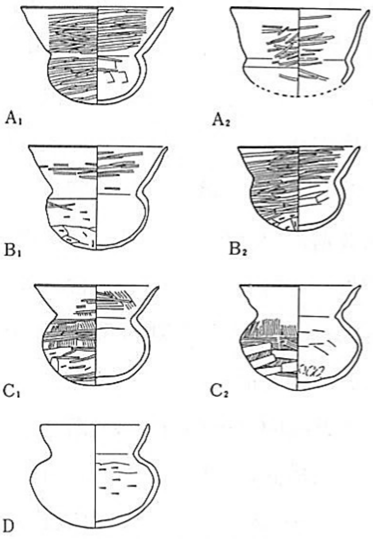
B1　口縁部の高さ（d）と体部の高さ（e）の比d／eが0.7～0.8で、器高（b）が体部最大径（c）を凌ぐもの。

B2　d／eが0.5～0.7の間にあり、体部最大径（c）が器高（b）を凌ぐもの。

〔C〕口縁部の高さ（d）と体部の高さ（e）の比d／eが0.4～0.5の間にあり、口縁部径（a）と体部最大径（c）の比c／dが0.8～1.0前後にあるもので、体部最大径8～10cm、体部の高さ5～7cmの大きさのものである。調整技法は、ハケメ調整が主体となり、ヘラミガキは更に粗く、施さないものもある。体部と口縁部の形態によって更に細分される。

C1　口縁部径（a）が体部最大径（c）よりも大きいもの。外面体部過半から底部にかけてはヘラケズリ調整、体部上半ハケメ調整の後粗いヘラミガキ調整を僅かに施し、口縁部内面はヨコナデ調整の後、外面同様のヘラミガキ調整を施すものである。

C2　口縁部径（a）が体部最大径（c）と同じか、もしくは僅かに小さいもの。調整技法は粗いハケメ調整のみとなる。



第84図　久宝遺跡出土布留式土器分類図（9）

〔D〕口縁部径（a）が体部最大径（c）よりも小さく、口縁部は縮小する。調整技法は粗いハケメ調整か粗いナデ調整のみとなる。

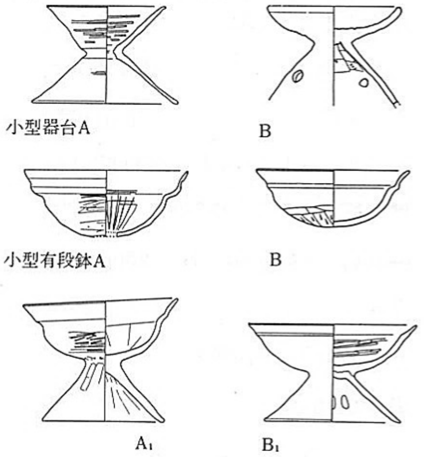
**小型器台**

〔A〕受け部が逆三角形を成し、脚部は「ハ」の字形に開くもので、受け部底面は貫通する。調整は丁寧なヘラミガキ調整により、胎土は精良である。

〔B〕受け部が浅い皿状を呈するもので、脚部はやや内弯気味に「ハ」の字に開く。

**小型有段鉢**

〔A〕口径に比して深い体部で、口縁部は内外面に



第85図　久宝寺遺跡出土布留式土器分類図（10）

明瞭な段をなして、外上方へ長くのびる。内面に丁寧なヘラミガキ調整を施し、胎土も精良である。

〔B〕A類に比して浅い体部で、口縁部の段も丸みを持ち浅い。ヘラミガキ調整もやや粗く、ハケメ調整が見られるものもある。

以上の2類には「ハ」の字に開く脚部が付くものがあり、それぞれ$A_1$、$B_1$とする。

（2） 検出された遺構と遺物

SB4001（第86図、図版26）

第2遺構面、C－4トレンチで検出した。SD4023と重複する。2間（3.7m）×1間（3.4m）の建物である。各柱間寸法は、桁行1.8m、梁行3.4mを測る。棟方向は、N－10°－Eを示す。柱穴は、径25cm、深さ20～25cmの円形を呈し、西側柱列には、径15cm、長さ20～30cmの柱根が残存していた。建物内、ほぼ中央には炭、灰、焼土の薄層を含むSK4009が検出されている。柱穴内からは、小型丸底壺の細片が1片出土したのみである。

SB4002（第87図、図版27）

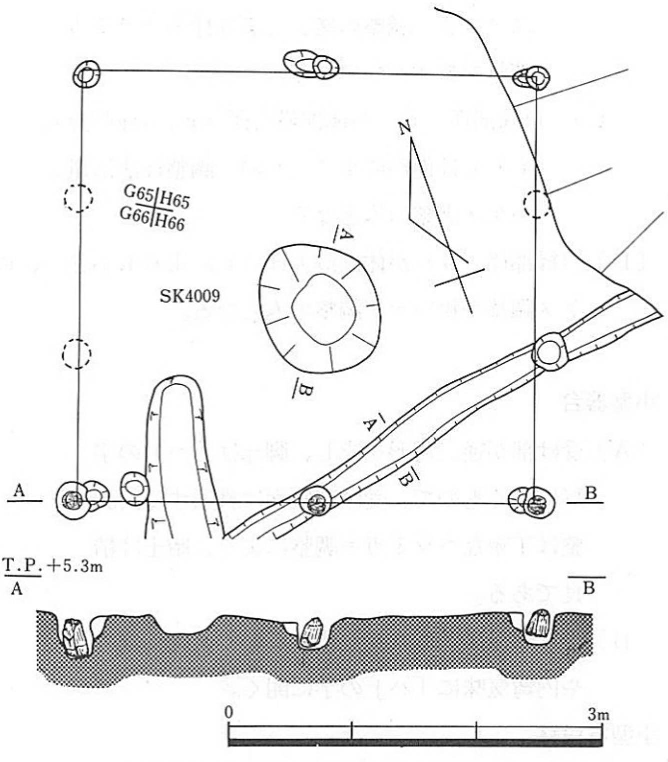
第2遺構面、Fトレンチ、F・G－116・117地区で検出された2間（2.9m）×2間（2.9m）の総柱の建物である。棟方向は、N－20°－Eを示す。各柱間寸法は、1.4m等間である。柱穴は、径25～30cm、深さ20～35cmの円形を呈する。南西コーナーには、炭、灰、焼土を埋土に含むSK4012が隣接する。

SB4003（第88図、図版27）

第2遺構面、Fトレンチ、G－118地区で検出された。SD4027、4028と重複し、これらよりも古い。2間（3.4m）、×1間（2.8m）を検出した。南側へは更に延びるものと考えられるが、NR4003によって削平されている。棟方向は、N－27°－Eを示す。各柱間寸法は、桁行1.7m、梁行2.8mを測る。柱穴は、径25cm、深さ25cmの円形を呈する。

SD4001（第89図、図版28）

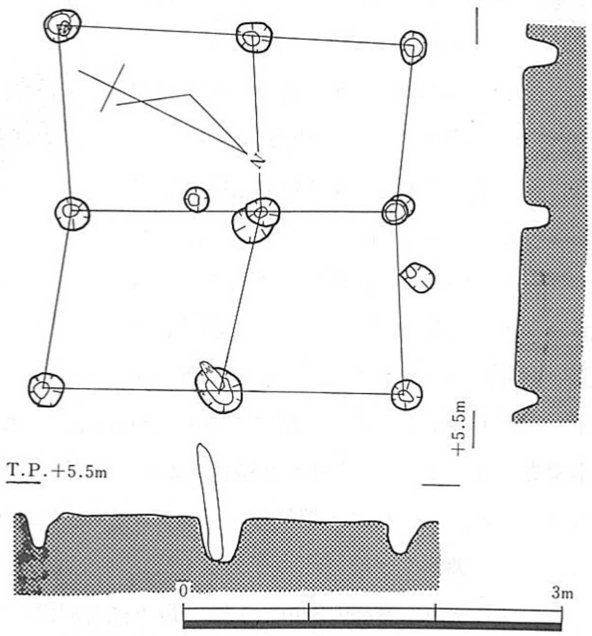
第1遺構面、C－1・2・10・13トレンチ、A～I－59地区で検出された北西⇔南東方向にほぼ直線



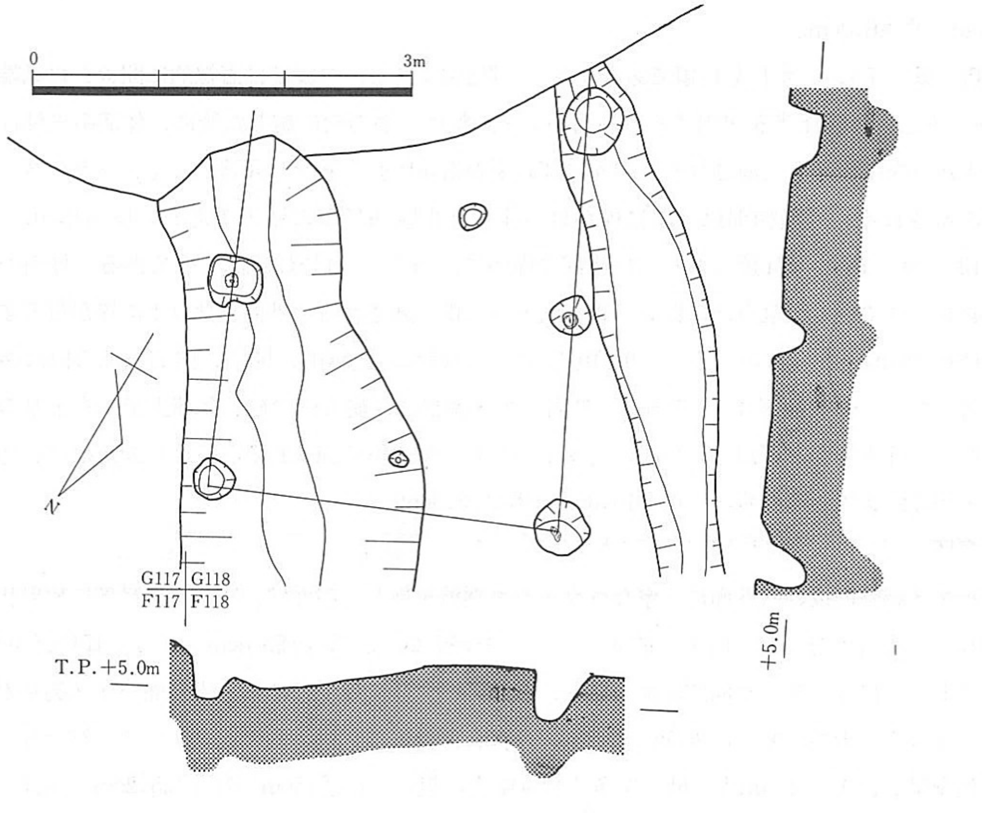

第86図 SB4001遺構平面図（1/60）

的に延びる溝で、総延長約42mを検出した。更に調査区外へ延びるものと考えられる。肩部幅1.5～2.4m、底部幅0.5～0.7m、深さ0.7mを測る。底面は、T．P．+4.7m前後にあり、ほぼ平坦な面をなす。壁は直線的に立ち上がり、断面逆台形をなす。溝内の半分近くまでは、上層の暗緑灰色粘土層が、また、肩部では包含層が垂れ込むように堆積している。埋土は、２層に大別される。C－10トレンチでは、溝底に厚さ３cm前後の植物遺体の堆積が認められた。遺物の出土量は、上層粘土層と共に流入したものを除くと僅かである。

出土遺物（第90図、図版79）



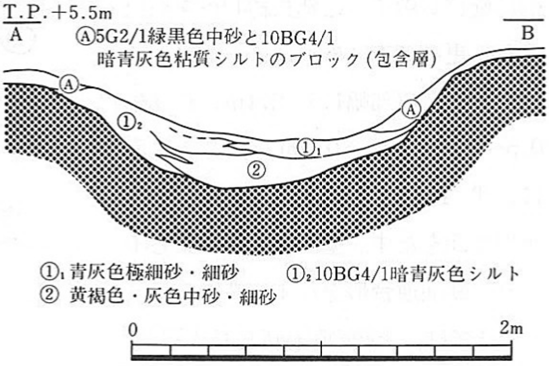

第87図　ＳＢ4002遺構平面図（1/60）




第88図　ＳＢ4003遺構平面図（1/60）

**二重口縁壺**（1）、H類の壺である。口縁部はヨコナデ調整による。暗灰色を呈し、1～5mm大の砂粒を多く含み、胎土は粗い。口径16.7cm。残存高10.2cm。

**直口壺**（2）、口縁部は外傾して開き、端部に至る。体部は欠損する。口縁部上端は、ヨコナデ調整により、僅かに外反する。外面は、丁寧な縦方向のヘラミガキ調整、内面は縦方向のハケメの後ヨコナデ調整を施す。灰褐色を呈し、胎土は精良である。口径15cm。残存高9.1cm。



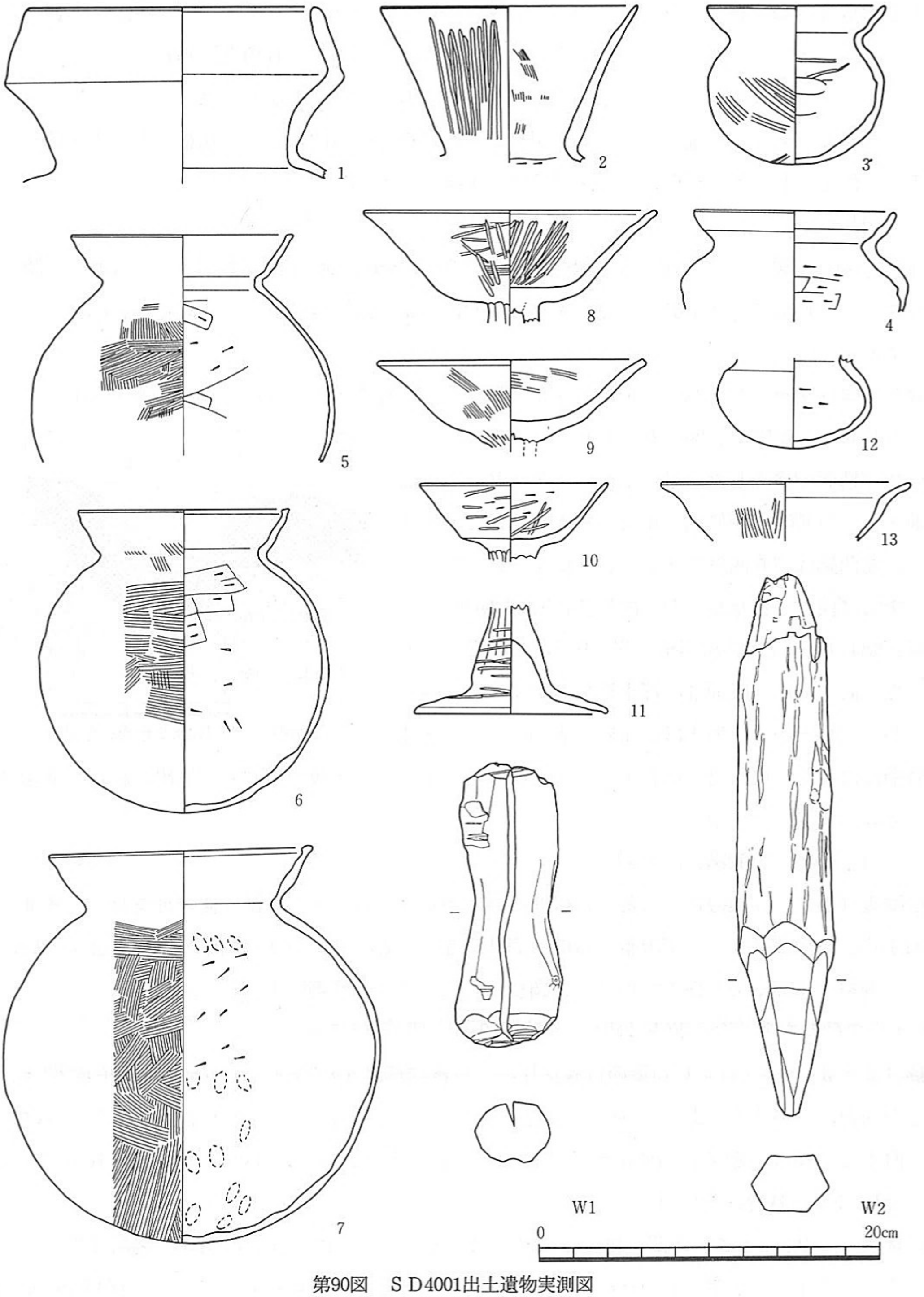
第89図　ＳＤ4001土層断面図

**小型壺**（3、4）、いずれもＢ類壺である。3は、体部最大径を肩部に有し、口縁部は僅かに内弯する。外面は、ハケメ調整の後口縁部から肩部にかけてヨコナデ調整を施し、内面は、口縁部にヨコナデ調整、体部に指ナデ調整を施す。外面には煤が付着する。灰黄褐色を呈し、胎土は粗い。口径7.8cm。器高9.3cm。4は、最大径を肩部に有し、口縁部は僅かに内弯する。肩部から口縁部にかけては器壁を増す。口縁部はヨコナデ調整、体部外面はナデ調整、内面は頸部直下をナデ調整、それ以下に、右回りのヘラケズリ調整を施す。灰褐色を呈し、胎土は粗い。口径11.8cm。器高6.0cm。

**甕**（5～7）、いずれもＣ類である。5は、Ⅳ2類である。口縁部は直線的に開き、口縁端部はａ2である。体部下半を欠損する。外面ハケメ調整は、縦方向に施した後に、体部中央付近から右上がりを主体として施される。内面頸部直下の指頭圧痕はあまり顕著でなく、ヘラケズリは丁寧に施される。外面頸部以下には煤が付着する。生駒西麓産の胎土である。口径13cm。残存高13.3cm。6は、Ⅳ1類である。口縁部は僅かに内弯する。口縁端部はａ2である。外面のハケメ調整はやや粗く、縦方向に施した後、横方向に粗く施される。外面頸部以下に煤が付着する。口径12.2cm。器高18cm。7は、Ⅲ1類である。口縁部は直線的に開き、内面頸部の段はあまり顕著でない。口縁端部はａ1である。外面ハケメ調整は、縦方向の後、体部上半を右上りの斜め方向、体部下半を右下がりの斜め方向を主体としてやや粗く施される。内面指頭圧痕は、体部下半と頸部直下に明瞭に残る。口径15.3cm。器高23.3cm。

**高坏**（8～11）、8は、ⅡＢ2類の坏部片である。口縁端部はヨコナデ調整で丸くおさめる。外面ハケメ調整の後、内外面に丁寧なヘラミガキ調整を施し、内面は、底部と口縁部に放射状に施される。浅橙色を呈し、胎土は精良である。口径17.2cm。残存高6.6cm。9は、ⅡＣ2類の坏部片である。口縁端部は断面四角形をなし、器壁は、全体に厚手である。内外面ハケメ調整の後、軽くヨコナデ調整を施し、外面底部と脚部の接合部付近は、縦方向のヘラケズリを行なう。暗灰黄色を呈し、1～2mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径15cm。残存高5.2cm。10は、ⅢＢ類の坏部片である。口縁部は外傾して開き、端部はヨコナデ調整により丸くおさめる。内外面ヘラ

ケズリの後、粗いヘラミガキ調整を施す。残存する脚部上端は、中実である。褐灰色を呈し、１～３mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径11cm。残存高4.5cm。11は、B₃類の脚部片である。脚筒部は、下方に膨らみ、裾部へは屈曲して移行し、裾部は低く「ハ」の字に開き端部は下




第90図　ＳＤ4001出土遺物実測図

方へ小さくひきだし丸くおさめる。外面屈曲部には、ヘラ状工具によって押さえつけたような整形痕が残る。外面はやや粗雑な横方向のヘラミガキ調整、内面は指ナデ調整を施す。にぶい褐色を呈し、胎土はやや粗い。裾部径11.4cm。残存高6.3cm。

**小型丸底壺**（12）体部のみで、口縁部を欠く。最大径 9cm。体部高5.2cm。外面ナデ調整、内面ヘラケズリ調整を施す。にぶい橙色を呈し、胎土はやや粗い。B類と思われる。

**鉢**（13）底部を欠損する。内弯して開き、口縁部で器壁を増し外反して開き、端部は僅かに肥厚して丸くおさめる。口縁部はヨコナデ調整、外面は粗い縦方向のハケメ調整、内面ナデ調整を施す。灰色を呈し、胎土は粗い。口径14.5cm。残存高2.5cm。

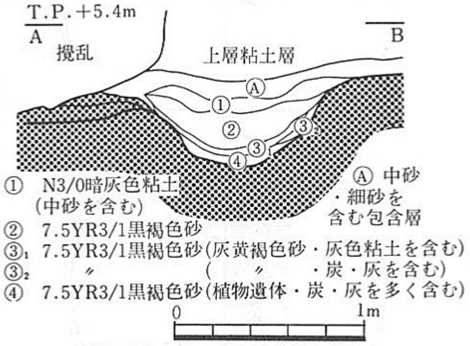
木製品

W１　編錘と思われる。現存長16.8cm。径4.35～5.6cm。丸木部には、顕著な加工痕は認められず、くびれ部にも加工痕はなく、太い。表面には粗い面取りの痕跡が認められ、樹皮を残す所もある。

W２　樹皮をそのまま残し、先端を６面に削りだした杭である。現存長32cm。径５cm。

ＳＤ4002（第91図、図版25、28）

第２遺構面で検出した。Ｃ－１トレンチ、Ｂ、Ｃ－59地区、ＳＤ4001の西側約１ｍでこれに平行して位置する。北西端は調査区外にあるが、隣接するＣ－10トレンチでは検出されなかった。総延長7.5ｍを検出した。肩部幅1.1ｍ、底部幅0.4ｍ、深さ0.5ｍの断面逆台形をなす溝である。底面はほぼ平坦で、東南端壁はゆるやかに立ち上がる。埋土は、４層に大別され、３・４層中には多くの炭化物、植物遺体が含まれ、この中からは多数の炭化米が検出された。遺物は、この３・４層中に集中する。




第91図　ＳＤ4002土層断面図

出土遺物（第92図、図版80）

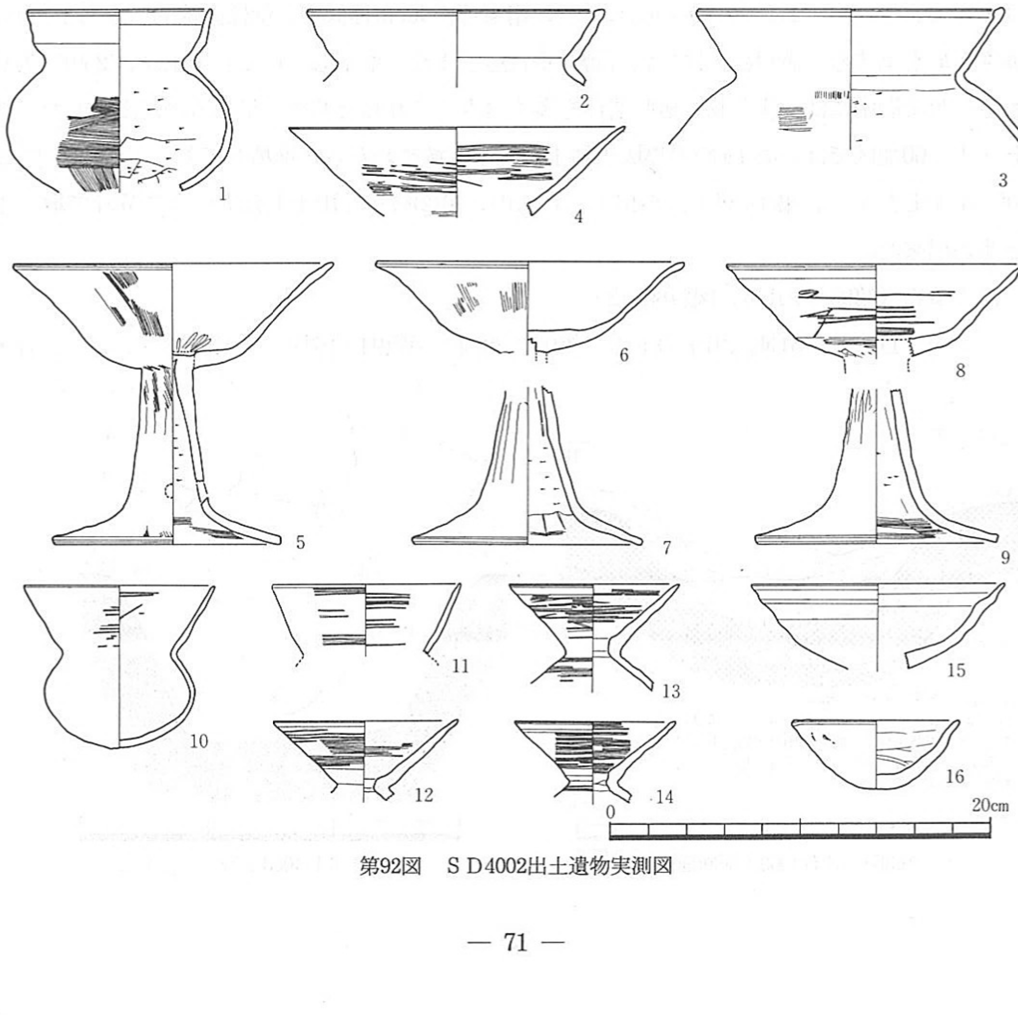
**小型壺**（１）　A$_3$類の壺である。口縁部内面は僅かに内弯する。体部は偏球形をなし、底部は欠損する。口縁部はヨコナデ調整、体部外面は底部より縦方向のハケメ調整の後、体部上半肩部をナデ調整、体部中央を横方向のハケメ調整、内面ヘラケズリ調整を施す。灰白色を呈し、１～３mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径7.8cm。残存高9.7cm。

**甕**（２・３）　いずれもＣ類甕の口縁部片で、口縁端部はa$_2$である。口縁部は直線的に開き、頸部内面の段は不明瞭である。外面口縁端部以下には煤が付着する。体部内面のヘラケズリは、頸部直下まで及び丁寧で、指頭圧痕は認められない。２は、口径15.6cm。残存高4.1cm。３は、口径16.2cm。残存高7.2cm。

**高坏**（４～９）　４は、坏部口縁のみの破片である。口縁部は直線的に開き、端部は舌状におさめる。内外面は、丁寧に横方向のヘラミガキ調整を施し、胎土は精良である。口径17.8cm。５・

6は、ⅡB2類である。口縁部は僅かに外反して開き、端部は丸くおさめる。6は、外面ハケメ調整の後、内外面に軽くヨコナデ調整を施す。にぶい橙色を呈し、胎土は精良である。口径16.2cm。残存高4.9cm。5は、A3類の脚部がつく。裾端部は断面四角形をなし、ヨコナデ調整によって丸みを持つ。外面と裾部内面は、ハケメ調整の後外面ナデ調整を施す。坏部内面は、底部に放射状のヘラミガキ調整、口縁部にヨコナデ調整、脚筒部内面にヘラケズリ調整を施す。脚筒部下端には円形の透し穴が穿孔される。にぶい橙色を呈し、1～2mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径16.8cm。器高11.6cm。8は、ⅡB1類の坏部片である。口縁部は僅かに外反して開き、端部は舌状におさめる。口縁部はヨコナデの後やや粗くヘラミガキ調整を施す。底部外面は、ヘラケズリの後、口縁部との境に横方向のヘラミガキ調整を施す。にぶい赤褐色を呈し、胎土はやや粗い。口径15.6cm。残存高5cm。7・9は、C3類の脚部である。外面ナデ調整、筒部内面はヘラケズリ、裾部内面はハケメ調整を施す。裾端部はヨコナデにより、丸みを持ち断面四角形をなす。裾部径11.9cm～12.6cm。残存高8.3cm。

**小型丸底壺**（10・11）　10は、B1類の小型丸底壺である。器壁の磨滅が著しく調整技法は不明瞭である。口縁部内外面には、一部横方向のヘラミガキ痕が認められる。口径10cm。体部最大径7.9cm。器高7.0cm。にぶい橙色を呈し、胎土は精良である。11は、口縁部のみ約3分2の破片




第92図　ＳＤ4002出土遺物実測図

で、体部を欠損する。にぶい橙色を呈し、胎土は精良である。口径9.7cm。残存高3.8cm。B$_1$類か。

**小型器台**（12～14）　全てA類の小型器台である。外面と受け部内面は丁寧なヘラミガキ調整を施す。にぶい橙色を呈し、胎土は精良である。受け部口径8.4～9.6cm。残存高4.3～5.7cm。

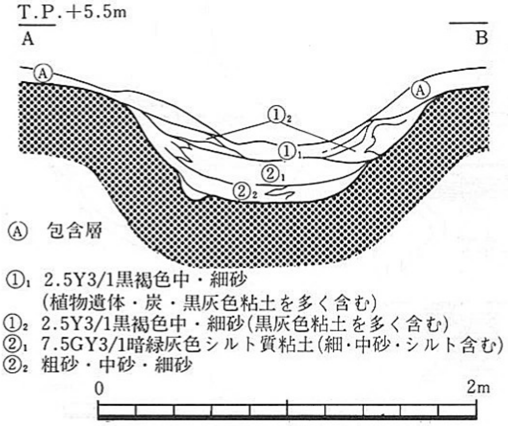
**小型鉢**（15～16）　15は、小型有段鉢B$_1$類である。底部中央を欠損する。底部から内弯して外上方に開き、段をなして口縁部に至る。口縁部の段は浅く、2段目はヨコナデ調整により、僅かに外反し、端部は舌状におさめる。外面体部上半には、指頭圧痕が認められる。内外面ナデ調整を施す。にぶい黄橙色を呈し、胎土は精良である。口径13.2cm。残存高4.5cm。16は、手捏ねによるミニチュアの鉢である。口縁部は僅かに外反し、端部は丸くおさめる。外面指押さえ、内面ナデ調整を施す。外面には煤が付着する。暗灰黄色を呈し、胎土は粗い。口径8.7cm。器高3.6cm。

ＳＤ4003（第93・94図、図版23・29）

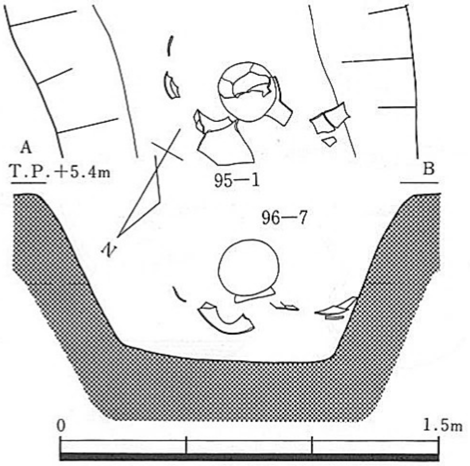
第1遺構面、Ｃ・Ｃ－13トレンチ、Ｄ～Ｉ－60・61地区で検出した。ＳＤ4001とほぼ平行して北西⇔南東方向に直線的に延びる。総延長約26mを検出した。南東端ではＳＤ4004と近接する。肩部幅1.5～2.0m、底部幅0.7～1.6m、深さ0.6mを測る。溝の幅はＨ・Ｉ－60地区で拡がる。底面は平坦で、Ｔ.Ｐ.＋4.1～4.5mの間にあり、南東部が40cm程低い。壁は直線的に立ち上がり、断面逆台形を呈する。溝肩部には、包含層が垂れ込むように堆積していた。埋土は、2層に大別される。第①層中には、炭化物、植物遺体を多く含み、これらと共に多量の遺物が出土した。特にＨ・Ｉ－60地区では、第①$_1$層の黒灰色粘土が溝中全域にわたって堆積しており、この第①$_1$層上面で出土したもの、第①$_1$層中から出土したもの、第②層から出土したものとに分けて取り上げる事が出来た。

出土遺物（第95～101図、図版80～85）

Ｃトレンチ　Ｄ・Ｅ－61地区出土のもの（第95～98図、図版94～97図）とＣ－13トレンチ、Ｈ・



第93図　ＳＤ4003土層断面図



第94図　ＳＤ4003土器出土状況図

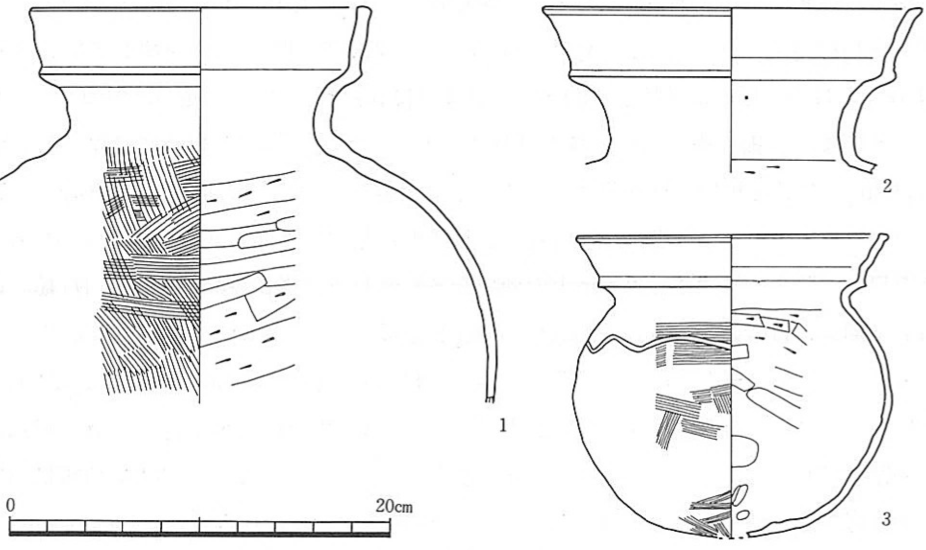
Ｉ－60地区出土のもの（第98～100図）とに分けて説明する。

－Ｃトレンチ　Ｄ・Ｅ－61地区出土遺物－

**二重口縁壺**（１・２）　1は、Ｆ類で、体部下半以下を欠損する。口縁部は断面四角形をなし、上端は平坦な面をなす。口縁部から頸部と体部の境付近まではヨコナデ調整、外面肩部は横・斜方向の粗いハケメ調整、体部上半縦方向のハケメ調整を施す。内面は、ヘラケズリ調整を施す。肩部内面には指頭圧痕が顕著に認められる。淡黄灰色を呈し、１～５mm大の砂粒を多く含み、胎土はやや粗い。口径18cm。残存高22cm。2は、Ｃ類で、口縁部の約４分の１の破片で、体部を欠損する。口縁部内外面の段は明瞭で、端部は外上方へ僅かに肥厚し、上端面は僅かに内傾する面をなす。内外面ヨコナデ調整を施す。僅かに残る体部内面ヘラケズリは頸部にまで及ぶが頸部はヨコナデ調整により丸みを持つ。淡黄褐色を呈し、胎土は精良である。口径20cm。残存高8.9cm。

**広口壺**（４）　$A_1$類で底部を欠損する。体部は、やや長めの倒卵形をなす。口縁端部は断面四角形をなし、外傾する面を持つ。口縁部はヨコナデ調整、体部外面は縦方向のハケメ調整を施す。内面は、体部下半にヘラケズリ、体部上半にナデ調整を施し、体部中央付近には指頭圧痕が顕著に認められる。灰褐色を呈し、胎土は粗い。口径17.2cm。残存高27.5cm。

**甕**（３・５～19）　3は、山陰系の小型の甕である。丸底・球形の体部と、短く外反した後内外面に明瞭な段をなして直立し、更に外傾して開く口縁部とからなる。口縁端部は内外方へ小さく肥厚し、上端面はやや丸みを持つ平坦な面をなす。口縁部と肩部上端外面はヨコナデ調整、外面体部上半は、横方向の細かなハケメが連続して施される。体部下半から底部にかけては、縦・斜方向の細かなハケメ調整、内面体部上半にヘラケズリ調整を施す。内面体部下半以下には、指頭圧痕が顕著に残る。体部上半には、波状の沈線が巡る。淡赤褐色を呈し、１mm大の砂粒を多く




第95図　ＳＤ4003出土遺物実測図（１）

含み胎土はやや粗い。口径16.5cm。体部最大径16.8cm。器高16.1cm。赤沢編年Ⅴ期に相当するものである。[1] 5～19は、C類である。5は、Ⅰ1類の甕である。口縁部は長く外傾して開き、口縁端部はa2である。頸部内面はゆるく屈曲する。体部外面のハケメ調整は、細かく縦方向に施した後体部上半に横・斜方向に施す。体部内面のヘラケズリは丁寧で、器表面を平滑に仕上げ、頸部直下にまで及んでいる。灰赤褐色を呈し、胎土中には1～2mm大の砂粒を多く含む。口径17.6cm。器高27.4cm。6はⅢ2類、7はⅢ1類の甕である。6の口縁部は外傾し、口縁端部はa2である。頸部内面の段は不明瞭である。体部外面のハケメ調整は、縦方向の後体部上半に横方向に連続し、体部中央付近に横・斜方向に施す。体部内面ヘラケズリは、体部下半を左上がり、体部上半を右上がりに丁寧に施す。灰赤褐色を呈す。口径14.3cm。残存高22.5cm。7の口縁部は内弯し、口縁端部はa2である。体部外面は、縦方向の後体部上半横方向のハケメ調整の後ナデ調整を施す。体部内面は、頸部直下と底部に指頭圧痕を顕著に残し、ヘラケズリ調整を施す。頸部直下の指頭圧痕以下は、深いヘラケズリによって段をなす。口径12.5cm。器高22.5cm。8は、Ⅲ1類の甕である。口縁部は僅かに内弯して開き、口縁端部はa1である。上端面はやや丸みをなす平坦な面となる。口縁部から肩部はヨコナデ調整を施す。体部外面ハケメ調整は、体部上半に横方向の後体部下半以下を縦方向に施す。灰赤褐色を呈す。口径14.5cm。器高20.5cm。9は、Ⅲ3類である。口縁部は外傾して開き、口縁端部はa1である。頸部は丸みを持ち、内面の段は見られない。体部外面のハケメは粗く、縦方向の後体部上半は横方向に施す。内面は、体部上半にヘラケズリ、体部下半にナデ調整を施す。灰赤褐色を呈す。口径14cm。残存高16.4cm。10はⅣ類、11～13・17はⅢ類の口縁部片である。10の肩部外面には、4個の棒状の刺突痕がある。口縁端部はa2。口径13cm。11・12の口縁部は、「く」の字に外傾して開く。11の口縁端部はa3で、口径14.6cm。12は、頸部内外面に丸みを持ち、内面の段は見られない。口縁部はヨコナデ調整で、内面にハケメ調整痕が残る。口縁端部はa2。口径13.8cm。13の口縁部は、内弯気味に開き、口縁端部はa1である。肩部外面のハケメ調整は、横方向に連続して施こされる。口径14.6cm。17の口縁部は外傾して開き、口縁端部はa2で、上端面は僅かに内傾する。肩部外面のハケメ調整は、細く横方向に連続して施こされる。外面口縁端部以下には煤が付着する。口径14.4cm。14はⅢ1類で、体部下半を欠損する。口縁部は外傾して開き、口縁端部はa1で、内方への肥厚は小さい。外面のハケメは粗く、横方向に施す。外面肩部以下には煤が付着する。灰褐色を呈し、胎土中には1～2mm大の砂粒を多く含む。口径15.2cm。15は、Ⅳ1類。口縁部は内弯して開き、口縁端部はa1で、僅かに内傾する面を持つ。外面は、口縁端部から肩部にかけてはヨコナデ調整を施し、ハケメ調整は細かく、横方向に施す。指頭圧痕は、頸部より下の肩部上半にある。外面口縁端部以下には煤が付着する。口径12.5cm。残存高11.7cm。16は、Ⅱ1類で、口縁部は外傾して開き、口縁端部はa2である。外面ハケメ調整は、縦方向の後横方向に施す。外面口縁端部以下には煤が付着する。灰茶褐色を呈す。口径16.4cm。残存高13cm。18はⅣ2類で、口縁部は「く」の字に外傾して開き、端部は内外方へ小さくひきだす。頸部には丸みを持ち、

内面には浅い段をなす。外面ハケメ調整は、体部上半と下半を縦・斜方向に、体部中央を横方向に施す。口径12cm。残存高13.7cm。19は、Ⅲ$_{1}$類で、口縁端部はｂ$_{3}$である。外面口縁部と肩部はヨコナデ調整、外面ハケメ調整は、体部上半を横方向、体部中央付近を斜方向、体部下半以下を縦方向に施す。口径14.2cm。器高20.6cm。

**高坏**（20～26）　20はⅢＢ類、21・26は、ⅡＢ$_{1}$類、22・25はⅡＢ$_{2}$類である。20は、中実の脚が付くものと思われる。口縁部は外傾して開き、端部は舌状におさめる。口縁部内外面と底部内面は、丁寧な横方向のヘラミガキ調整、底部外面はヘラナデ調整を施す。外面の稜は、ヘラミガキによって、丸みを持つ個所もある。赤褐色を呈し、胎土は精良である。口径13.3cm。残存高5.3cm。21は、口径に比してやや小さな底部である。口縁部は外傾して開き、端部は薄く舌状におさめる。口縁部上半はヨコナデ調整、下半はやや粗く、横方向にヘラミガキ調整を施す。底部は、外面ヘラケズリの後、ヘラミガキ調整、内面ヘラミガキ調整を施す。口縁部外面中位には、一部指頭圧痕が認められる。赤褐色を呈し、胎土は精良である。口径15.6cm。残存高6.2cm。26は完形品で、Ｂ$_{3}$類の脚部が付く。口縁端部と裾端部は、ヨコナデ調整により舌状におさめる。外面は、底部と脚筒部をヘラケズリの後、全体を、やや粗い横方向のヘラミガキ調整、内面は、坏部を横方向にヘラミガキ調整、脚筒部上半にしぼり目を残したまま下半と裾部にナデ調整を施す。淡灰褐色を呈し、胎土は精良である。口径14.4cm。裾部径11.7cm。器高12.2cm。22・25の坏口縁部は僅かに外反して開き、端部は丸くおさめる。坏部は、ハケメ調整の後口縁部にヨコナデ調整を施す。25の脚部は、Ａ$_{3}$類で裾部を欠損する。外面は、筒部上半ハケメ調整の後下半をナデ調整、内面は、筒部をヘラケズリ、裾部にハケメ調整を施す。22・25は、赤褐色を呈し、胎土は粗い。22は、口径16.2cm。25は、口径15.6cm。残存高14.6cm。23・24はＢ類の脚部片である。筒部内面にはしぼり目を残す。23は、筒部中位と裾部に粗いヘラミガキ調整を施し、外面裾部との境には指押さえを施す。灰褐色を呈し、胎土は粗い。裾部径11.2cm。残存高6.9cm。25は、筒部ヘラケズリの後全体にヘラミガキ調整を加える。赤褐色を呈し、胎土は精良である。裾部径11.4cm。残存高8.2cm。

**小型丸底壺**（27～30）　27・28はＢ$_{1}$類・29はＣ$_{2}$類である。27の口縁部は外傾して開き、端部は舌状におさめる。体部は、頸部直下に小さく張る肩部を持ち偏球形をなす。体部最大径は肩部にある。口縁部ヨコナデ、外面体部と底部をヘラケズリの後、口縁部外面と体部外面に条痕状の粗いヘラミガキ調整を施す。体部内面はナデ調整。灰褐色を呈し、胎土はやや粗い。口径9.7cm。体部最大径7.4cm。器高7.7cm。28の口縁部は僅かに内弯して開き、端部はヨコナデ調整によって小さく外反し丸くおさめる。口縁部はヨコナデの後、内外面にやや粗いヘラミガキ調整、体部から底部にかけては、外面ヘラケズリの後一部にヘラミガキ調整、内面にナデ調整を施す。外面口縁部と体部との境にはヨコナデ調整を加える。灰赤褐色を呈し、胎土は粗い。口径11ｃｍ。体部最大径8.1cm。器高8.25cm。29は、体部外面ハケメ調整の後ナデ調整を加え、底部内面には指頭圧痕が残る。灰褐色を呈し、胎土は粗い。口径9.5cm。体部最大径9.5cm。器高8.4cm。30

は、体部下半を欠損する。口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリの後、外面と口縁部内面に横方向の細かなヘラミガキを施す。体部内面ナデ調整。黄褐色を呈し、胎土は精良である。口径9.1cm。残存高5.0cm。B類であろうか。

**鉢**（31）　口径24.6cmのＩＢ$_2$類の大型鉢である。体部下半を欠損する。体部最大径は、ほぼ中央にあり、内弯して立ち上がる偏球形の体部と内外面に明瞭な段をなし、器壁を増して外上方へ開く口縁部とからなる。口縁端部は内方へ小さく肥厚する。口縁部はヨコナデ調整、外面は、体部上半を横方向、体部下半を斜方向のハケメ調整、内面は、ヘラケズリの後ヘラナデ調整を施す。淡黄褐色を呈し、胎土は粗い。残存高9.8cm。

　木製品（第100～101図）

Ｗ１　幅3cm、厚さ1.5cmの板材に、樹皮を巻き付けたものである。現存長28.4cm。その用途については不明である。板材は、丁寧に面取りの加工を施している。樹皮は、幅４mmの紐状のものを３本１組にして、板材の一面でこより状に撚って巻き付けている。

Ｗ２　用途不明の木製品である。現存長24cm。幅11～7cm。厚さ1.6cmを測る。長辺側には、高さ0.8cmの縁が削り出され、更にほぼ中央の位置で縁に接して、1.1×3.3cmの長方形の穴が両側に刳り貫かれている。短辺側の加工については、依存状態が悪く明らかでないが、幅の狭い方は断面が直になるのに対して、一方では斜めに削り落したように、断面台形をなしている。

Ｗ３　用途不明の木製品である。平面形態は撥状をなしている幅1.8～4.3cm。厚さ1.45cm。現存長12.3cm。撥状に開く先端部には面取りの加工痕が見られる。

Ｗ４　幅1.0cm。厚さ5.5cm、現存長108cmの梯子である。足掛け部は４段が残存している。足掛け部は、23cm等間隔で、約４cmの高さで削り出されている。依存状態が悪いのと、一部炭化しており、加工痕は不明瞭であった。

Ｗ５　斧の柄と思われる。樹枝と樹幹の枝別れの部分を利用し、樹枝を握り部、樹幹を台部としており、握り部は欠損している。基部の端から10cmの位置を2.3×3.8cmの楕円形に削りだして着装部としている。着柄角度は60度である。

Ｗ６、７　用途不明の木製品である。Ｗ６は、現存長11.9cm、1.1×1.6cm。Ｗ７は、現存長22cm、2.0×2.5cm。いずれも先端が黒く炭化している。

　－Ｃ－13トレンチ　Ｈ・Ｉ－60地区出土遺物－

（１）第①層上面出土遺物

**直口壺**（32）　頸部は細くしまり、口縁部は外上方へ開き、端部で僅かに外反し舌状におさめている。淡黄褐色を呈し、胎土はやや粗い。器壁の磨滅が著しく調整については明らかでない。口径14cm。残存高10cm。

**小型壺**（53・54）Ｂ類の小型壺である。53は、球形の体部と「く」の字に外傾する口縁部とからなる。口縁端部は舌状におさめる。体部外面と口縁部内面は粗いハケメ調整、体部内面は指ナデ調整を施す。にぶい橙色を呈し、１～４mm大の砂粒を多く含み、胎土は粗い。口径9.3cm。器

高9.2cm。53は、撫で肩で球形の体部と外傾して開く短い口縁部とからなるものである。口縁端部は内外方へ僅かにひきだされ、外傾する面をなす。体部外面は粗いハケメ調整を施す。灰黄褐色を呈し、胎土は粗い。口径9.4cm。体部最大径12.9cm。残存高9.2cm。

**甕**（33－43）　C類（33－39・41・42）とD類（40・43）がある。33はⅣ類で、口縁端部はａ$_3$である。口縁部は外傾して開く。口径13.1cm。34はⅡ$_1$類で、口縁部は外傾して開き、口縁端部はａ$_3$である。内面ヘラケズリは丁寧で、頸部直下に及び指頭圧痕を消している。外面は、口縁部から肩部までヨコナデ調整を施し、ハケメ調整は、横方向に強く施される。灰黄褐色を呈す。口径16.5cm。残存高9.2cm。35・36・38・39・41・42はⅢ類である。35は、Ⅲ$_2$類で、口縁部は頸部との接合部でくびれ、内外面に段をなして外傾して開く。口縁端部はａ$_1$で、内外方への肥厚は小さい。外面ハケメ調整は、粗雑で、縦方向の後体部上半に斜め横方向に施す。内面ヘラケズリは、頸部直下まで及ぶ。口径15.1cm。残存高14.3cm。36はⅢ$_2$類と思われる。口縁部との接合面は狭く、口縁部は「く」の字に外上方へ外傾して開く。口縁端部はａ$_2$で、内方への肥厚は小さい。淡赤褐色を呈し、胎土はやや粗い。口径14.3cm、残存高10cm。37はⅡ$_2$類と思われる。口縁部との接合面は36と同様に狭く、内面頸部との境に段をなし、外傾して開く。口縁端部はａ$_2$であるが、外方への肥厚は小さく、上端面は僅かに内傾する。内面ヘラケズリは頸部に及ぶ。頸部はナデ調整によって丸みを持つ。淡灰褐色を呈す。口径16cm。残存高8.2cm。38はⅢ$_3$類と思われる。口縁部は外傾して開き、口縁端部はａ$_2$である。口縁接合部内面には段をなさない。端部の肥厚は小さく、上端面は内傾する面をなす。口縁部はヨコナデ、肩部外面はナデ調整を施す。外面ハケメ調整は粗く。肩部との境を横方向、それ以下を縦方向に施す。内面ヘラケズリは深く施され、段をなしている。口径15.2cm。残存高9.3cm。41は、Ⅲ$_2$類と思われる。口縁部は外傾して開き、口縁端部はａ$_2$で、上端面は僅かに凹む。口縁部との接合部内面には段をなさない。口縁部はヨコナデ、肩部外面はナデ調整を施す。外面ハケメ調整は、横方向に丁寧に施す。内面ヘラケズリも丁寧で、器壁を平滑に仕上げる。ヘラケズリは頸部まで及ぶが、頸部はナデ調整によって丸みを持つ。灰黄褐色を呈す。口径15.6cm。残存高11.4cm。42の口縁部は内弯気味に開き、端部はｂ$_4$ で、上端は平坦な面をなす。口径15cm。残存高4.7cm。40の口縁部はゆるく外傾して開き、端部は外方へ僅かにひきだし外傾する面を持ち、断面四角形におさめる。体部は下膨らみの長胴形をなすものと思われる。D$_4$ 類である。口縁部はヨコナデ、体部外面はナデ、体部内面はヘラケズリ調整を施す。口縁部外面には指頭圧痕が認められる。淡赤褐色を呈し、胎土はやや粗い。口径18cm。残存高12cm。43は、やや長めの球形の体部と内弯して開く口縁部とからなるD$_3$類で、口縁端部は断面四角形をなし、僅かに外傾する面を持つ。口縁部との接合部はくびれ、内外に段をなす。外面ナデ調整、体部内面はヘラケズリの後軽くナデ調整を施す。頸部内面には指頭圧痕が認められる。外面肩部には、ヘラ状工具による刺突痕がある。暗灰黄色を呈する。口径13.7cm。残存高12.7cm。

**高坏**（44－52）　44～48はⅡＢ$_2$類、49はⅡＣ$_2$類、50はⅡＣ$_1$類、51・52はⅡＢ$_1$類の高坏である。

ⅡB$_2$類の口縁部には、僅かに外反して開き、口縁端部で更に小さく外反し、端部を丸くおさめるもの（44～46）と、外傾もしくは僅かに外反して開き、そのまま口縁部に至るもの（47、48）とがある。48は、脚部B$_2$類が付く。坏部は口径に比して浅く、口縁部は中位で僅かに外反し、端部は薄く舌状におさめる。脚部の屈曲部には丸みを持つ。坏部口縁は、内外面ナデ調整の後粗い条痕状のヘラミガキ調整を内外面に施す。外面底部との境には、指頭圧痕がかすかに認められる。底部は、内外面ナデ調整を施す。脚筒部は、外面ナデ調整の後下半に横方向の細かいヘラミガキ調整を施し、内面は上半にしぼり目、下半に指頭圧痕をそのまま残し未調整である。にぶい黄橙色を呈し、胎土はやや粗い。坏部径15.7cm。残存高10.4cm。44～47・49は、内外面ヨコナデ調整を施す。45は、底部外面と口縁部内面に、46・47は、外面口縁部と底部にハケメが認められる。51の口縁部は、底部との境に段をなして外傾して開き、端部は小さく外上方へひきだし薄く舌状におさめる。外面の段は小さく、ヘラミガキによって丸みを持つ。外面と口縁部内面は、丁寧なヘラミガキ調整、底部内面にはナデ調整を加える。にぶい黄橙色を呈し、1～2mm大の砂粒を少量含み、胎土はやや粗い。口径14.5cm。残存高5.2cm。52は、B$_2$類の脚部が付く。口縁部は、底部との境に鋭い稜をなして僅かに外反して開き、そのまま端部に至り、端部は薄く舌状におさめる。脚筒部は上端約3分の1が中実で、裾部へは鋭く屈曲して移行する。内面裾部との境には稜をなす。裾端部は外下方へ小さくひきだし、舌状におさめる。口縁部は、内外面丁寧なヘラミガキ調整、底部外面ヘラケズリ調整を施す。脚部は、筒部に縦方向のヘラナデ、裾部内面にハケメ調整の後、外面に横方向のヘラミガキ調整を施す。淡赤褐色を呈し、胎土は精良である。口径15.9cm。裾部径11.7cm。器高14cm。

**小型丸底壺**（55）　B$_2$類の小型丸底壺である。口縁部は内弯気味に開き、端部付近で僅かに外反して舌状におさめる。口縁部をヨコナデ調整、外面底部から体部をヘラケズリの後、口縁部外面と体部上半にやや粗くヘラミガキ調整を施す。体部内面はナデ調整。底部近くには、焼成後に穿孔される。灰黄色を呈し、胎土中には1～3mm大の砂粒を含む。口径9.3cm。体部最大径7.8cm。器高7.7cm。

（2）　第①層出土遺物（56～64）

**甕**（56～60）　全てC類である。56・57はⅢ類、58はⅡ$_1$類、59はⅠ$_1$類、60はⅣ$_1$類である。60の口縁端部はb$_4$で、肩部外面には、ハケメ調整の下に左上がりの細筋のタタキが認められる。内面ヘラケズリは、頸部直下付近まで及び、頸部はナデ調整によって丸みを持つ。灰黄褐色を呈し、胎土はやや粗い。口径12.9cm。残存口縁部6.3cm。56の口縁端部はa$_3$で、内方への肥厚は小さく、上端面は僅かに内傾する。口縁部と肩部外面はヨコナデ調整で、外面ハケメ調整は、縦方向の後体部上半を横方向に連続して丁寧に施している。口径15cm。残存高11.6cm。57の肩部はやや撫で肩で、口縁部接合面へのナデ調整によって生じる段は体部側には見られない。口縁部は外傾して開き、口縁端部はa$_1$である。外面肩部のハケメ調整は、縦方向である。58の口縁部は「く」の字に外傾して開き、口縁端部はa$_2$である。内傾する面は短く、やや丸みを持つ。口縁

部と肩部外面にはヨコナデ調整を施し、外面のハケメ調整は粗く、横方向に雑に施される。口径16.4cm。残存高8.5cm。59の口縁部は外傾して開き、口縁端部は $a_3$ である。内傾する面は短く、肥厚は小さい。口径17cm。残存高7.5cm。

**高坏**（61～63）　61は、Ⅱ$B_1$類である。口縁部は外傾して開き、端部は僅かに内弯して舌状におさめる。内外面に密で丁寧なヘラミガキ調整を施し、内面、横方向のヘラミガキの後更に暗文風の放射状のヘラミガキを施す。淡い赤褐色を呈し、胎土は精良である。口径15.1cm。残存高6.2cm。62は、Ⅱ$C_2$類の高坏である。口縁端部は、外方へひきだされ丸くおさめる。内外面ハケメ調整の後、丁寧なナデ調整を施す。にぶい橙色を呈し、胎土はやや粗い。口径15.7cm。残存高7.9cm。63は、$C_2$類の脚部である。裾端部は面取りし、断面四角形におさめる。外面は、細かく深いハケメ調整の後縦方向のヘラナデ調整、裾部内面ハケメ調整を施す。脚筒部内面はしぼり目をそのまま残し未調整。灰白色を呈し、1～2mm大の砂粒を多く含み、胎土は粗い。裾部径11.2cm。残存高8.4cm。

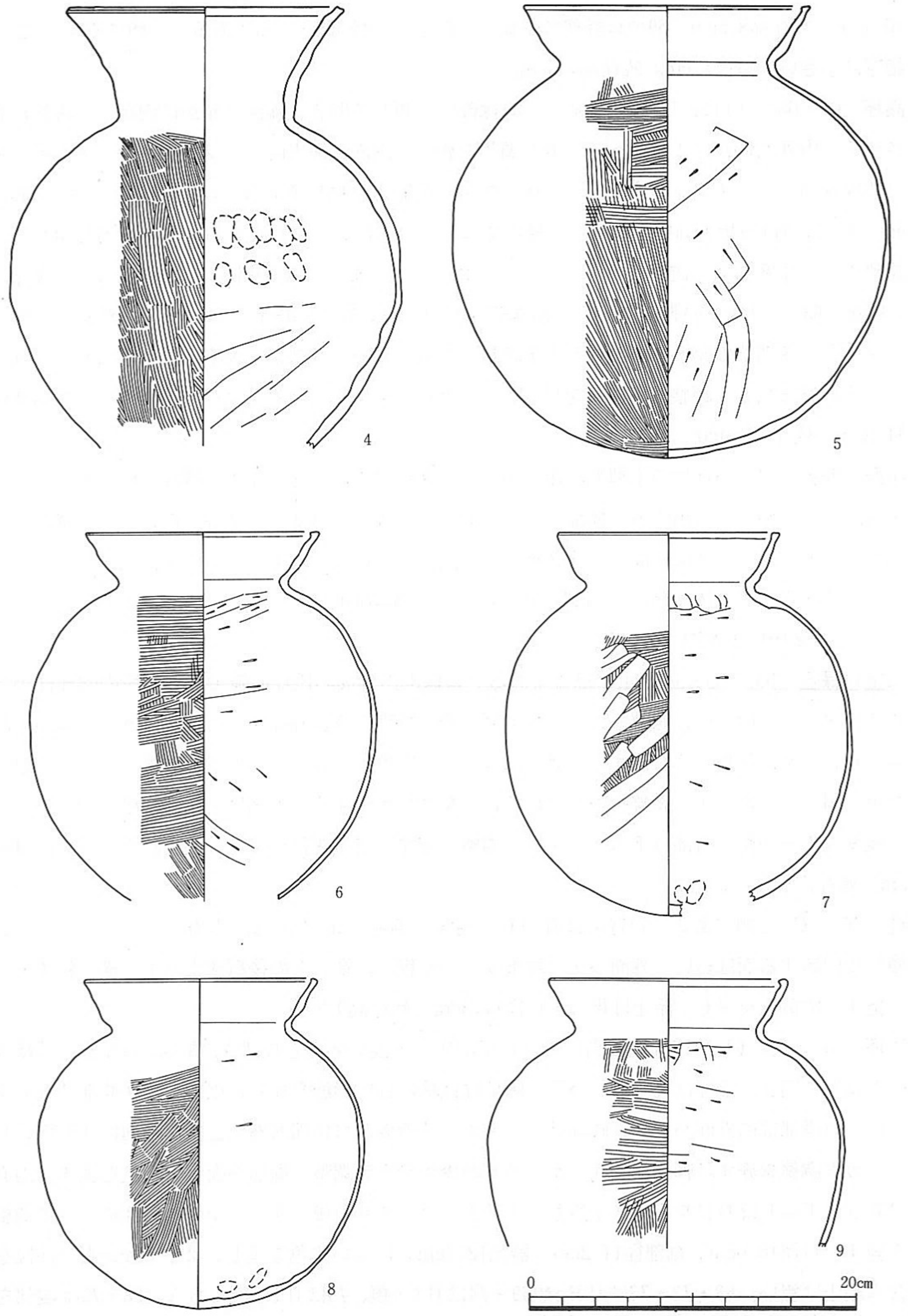
**小型丸底壺**（64）　$B_1$類の小型丸底壺である。口縁部は内弯気味に開き、端部は薄く舌状におさめる。底部は僅かに突出する。体部外面ヘラケズリの後、口縁部と体部外面に、密で丁寧なヘラミガキ調整を施す。体部内面はナデ調整。頸部内面は鋭い稜をなす。にぶい黄橙色を呈し、胎土は精良である。口径10.6cm。体部最大径7.5cm。器高7.6cm。

（3）　第②層出土遺物（65～76）

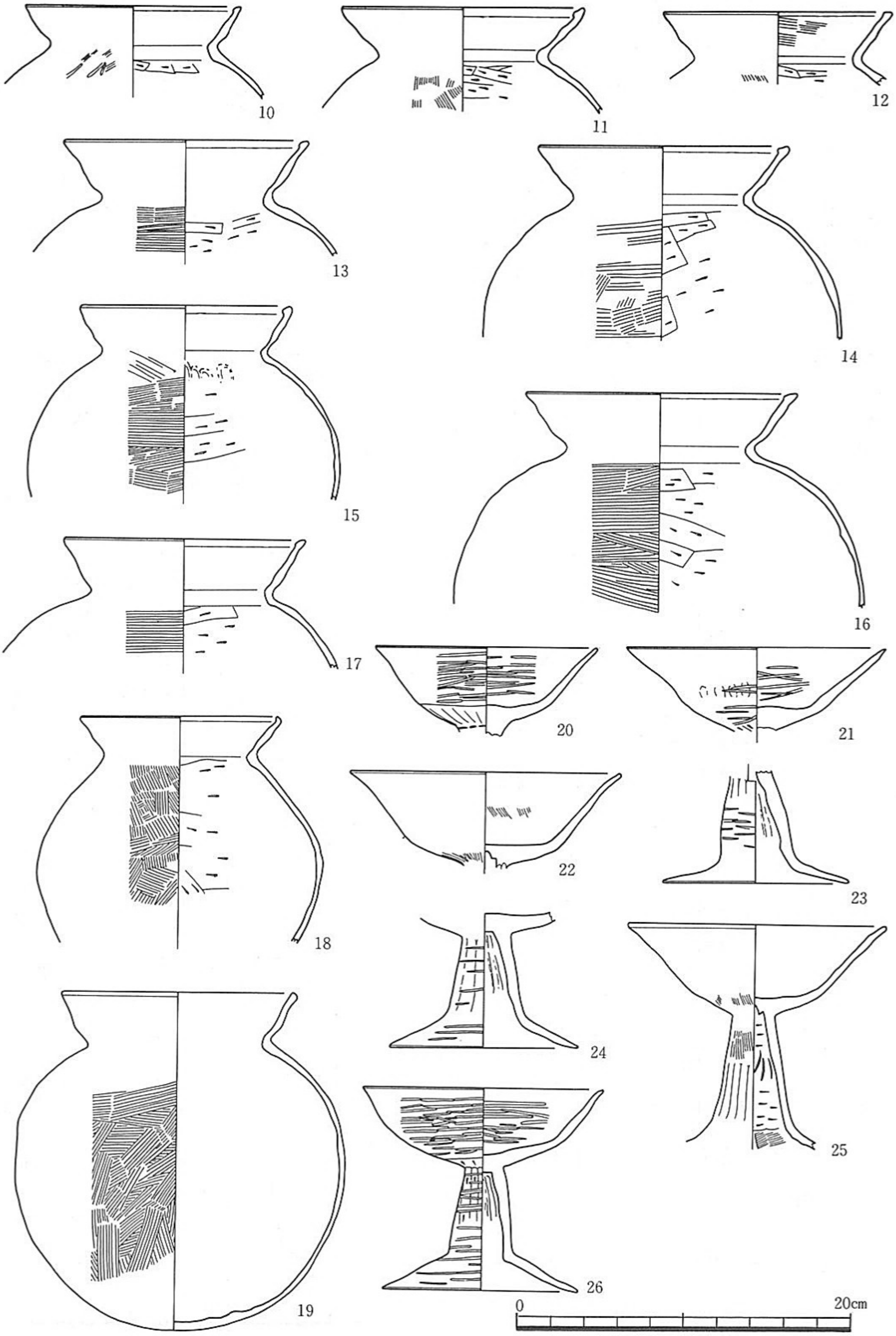
**二重口縁壺**（65）　G類の二重口縁壺である。口縁部内外面の段は明瞭で、外面段の端部は小さく突出する。2段目の口縁部は、中位で器壁を増して膨らみ、外傾する。端部は外方に僅かに肥厚させ、上端は平坦な面をなす。口縁部はヨコナデ調整。外面は、頸部以下を縦方向、肩部以下を更に斜め方向のハケメ調整を施した後、頸部をヨコナデする。内面は、頸部に横方向のハケメの後ヨコナデ調整、肩部以下にヘラケズリ調整を施す。浅黄褐色を呈し、胎土は粗い。口径21.2cm。残存高13.8cm。

**甕**（66）　CⅠ$_2$類である。口縁部は外傾して開き、端部は $a_2$ である。内方への肥厚は小さく、僅かに内傾する面は短い。外面ハケメ調整は、やや粗く、縦方向の後肩部より下を横・斜め方向に施す。灰黄色を呈し、胎土は粗い。口径17.3cm。残存高9.8cm。

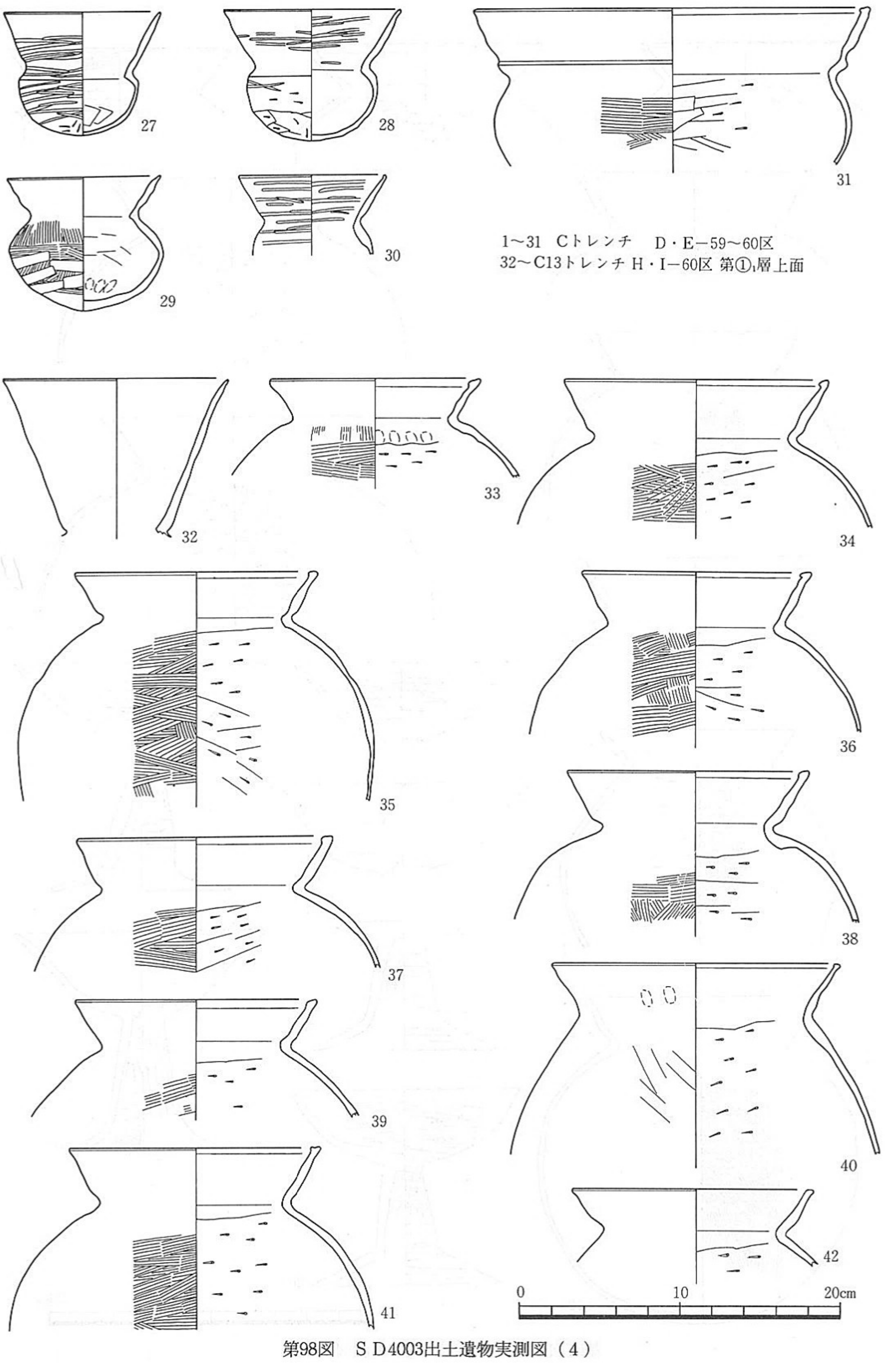
**高坏**（67～76）　67はⅡ$B_1$類の高坏で、口径に比して浅い坏部と脚部$A_3$類とからなる。口縁部は外反して開き、端部は丸くおさめる。脚部は柱状に近い形態をなし、裾部への屈曲部は丸みをもつ。口縁部は内外面ハケメ、底部外面ヘラケズリの後、口縁部内外面と底部外面にやや粗いヘラミガキ調整を施す。脚筒部外面ヘラケズリの後ヘラナデ調整、裾部外面ナデ調整を施す。内面は筒部上半にしぼり目をそのまま残し、下半をヘラケズリの後一部ナデ調整、裾部にハケメ調整を施す。口径16.6cm。裾部径11.2cm。器高13.4cm。にぶい橙色を呈し、2～5mm大の砂粒を含み胎土は粗い。68・72・73はⅡ$B_2$類69・74はⅡ$C_2$類、75はⅡ$B_1$類である。68・73は端部を舌状におさめ、72は端部を断面四角形におさめる。68は、器表面の磨滅が著しく調整は明らかで



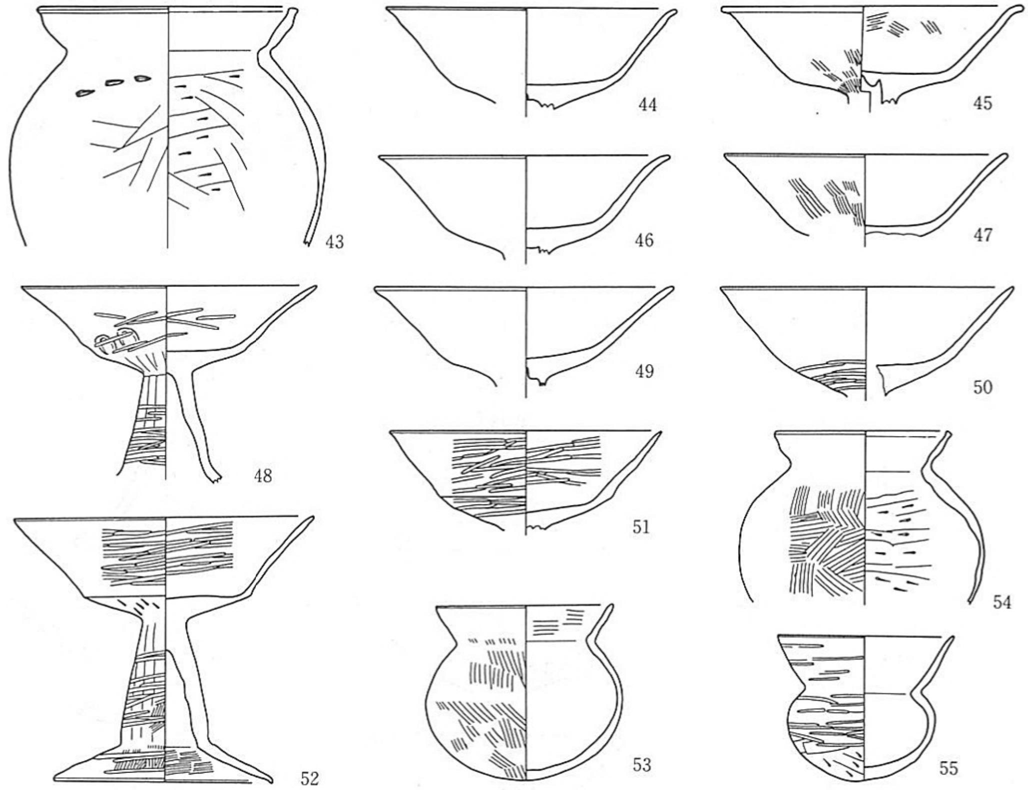

第96図　ＳＤ4003出土遺物実測図（２）



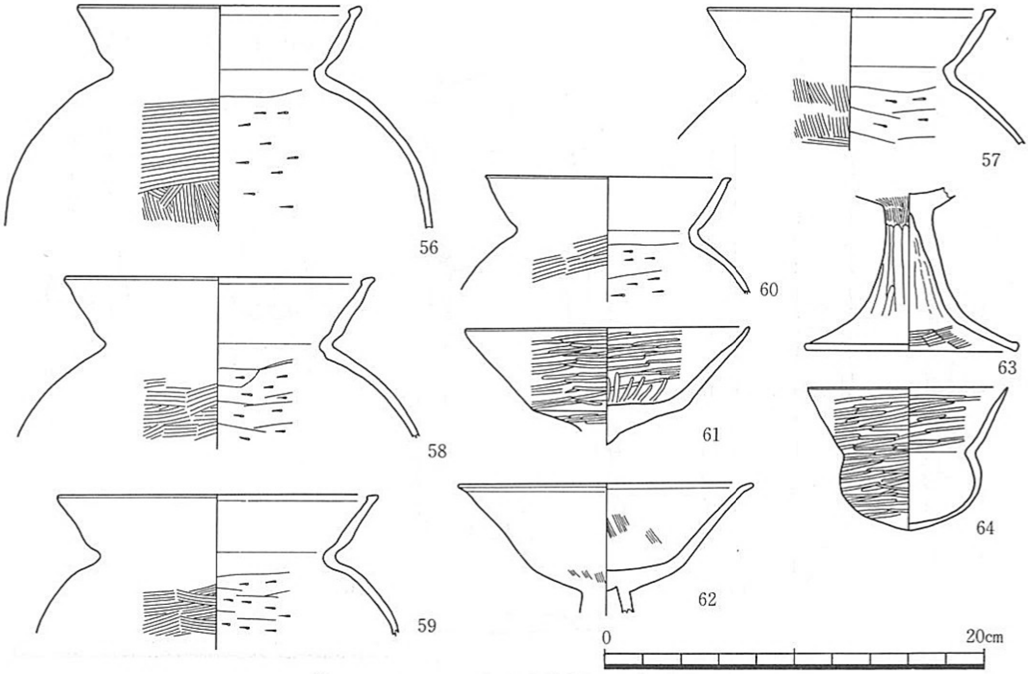

第97図　ＳＤ4003出土遺物実測図（３）



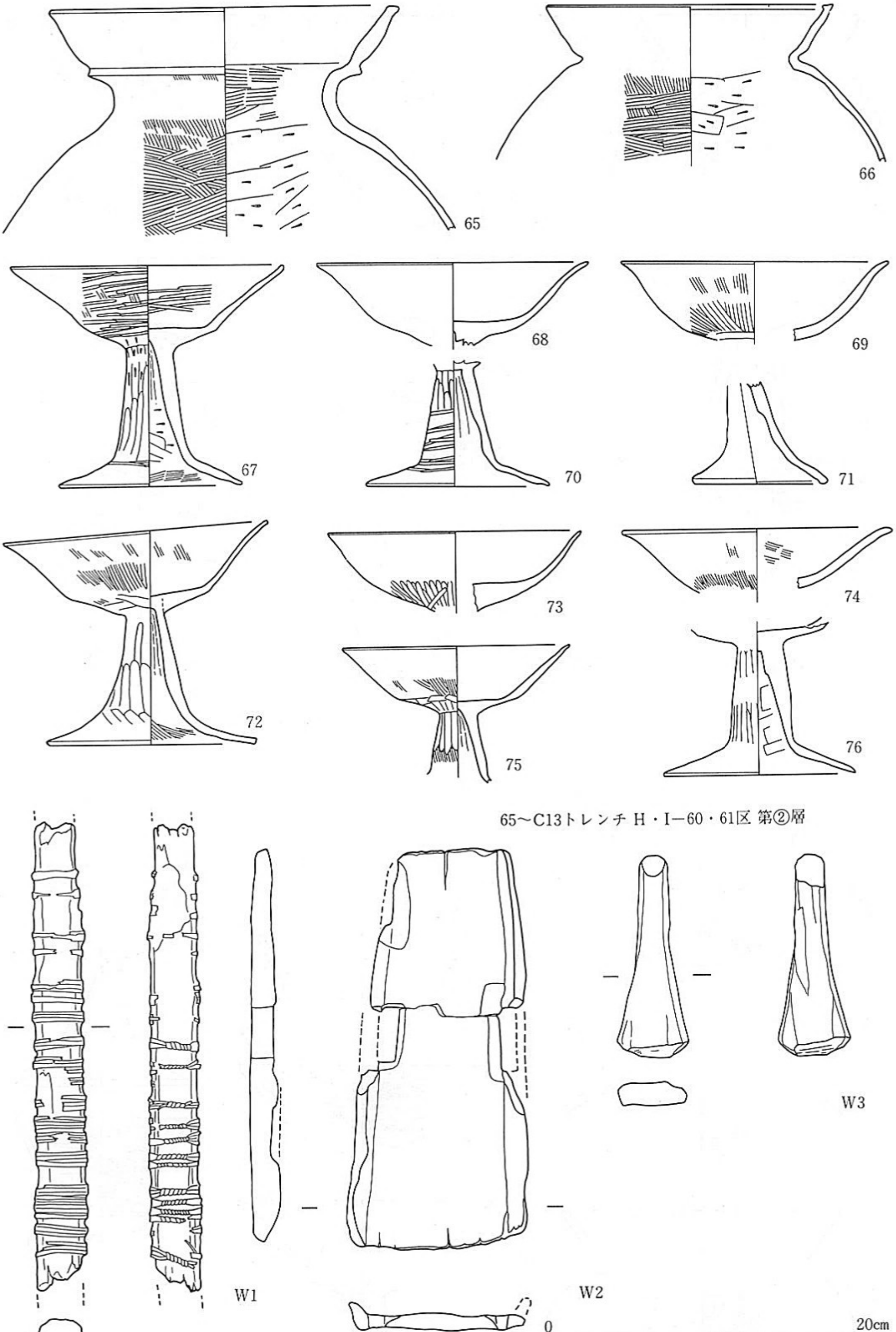

第98図　ＳＤ4003出土遺物実測図（４）



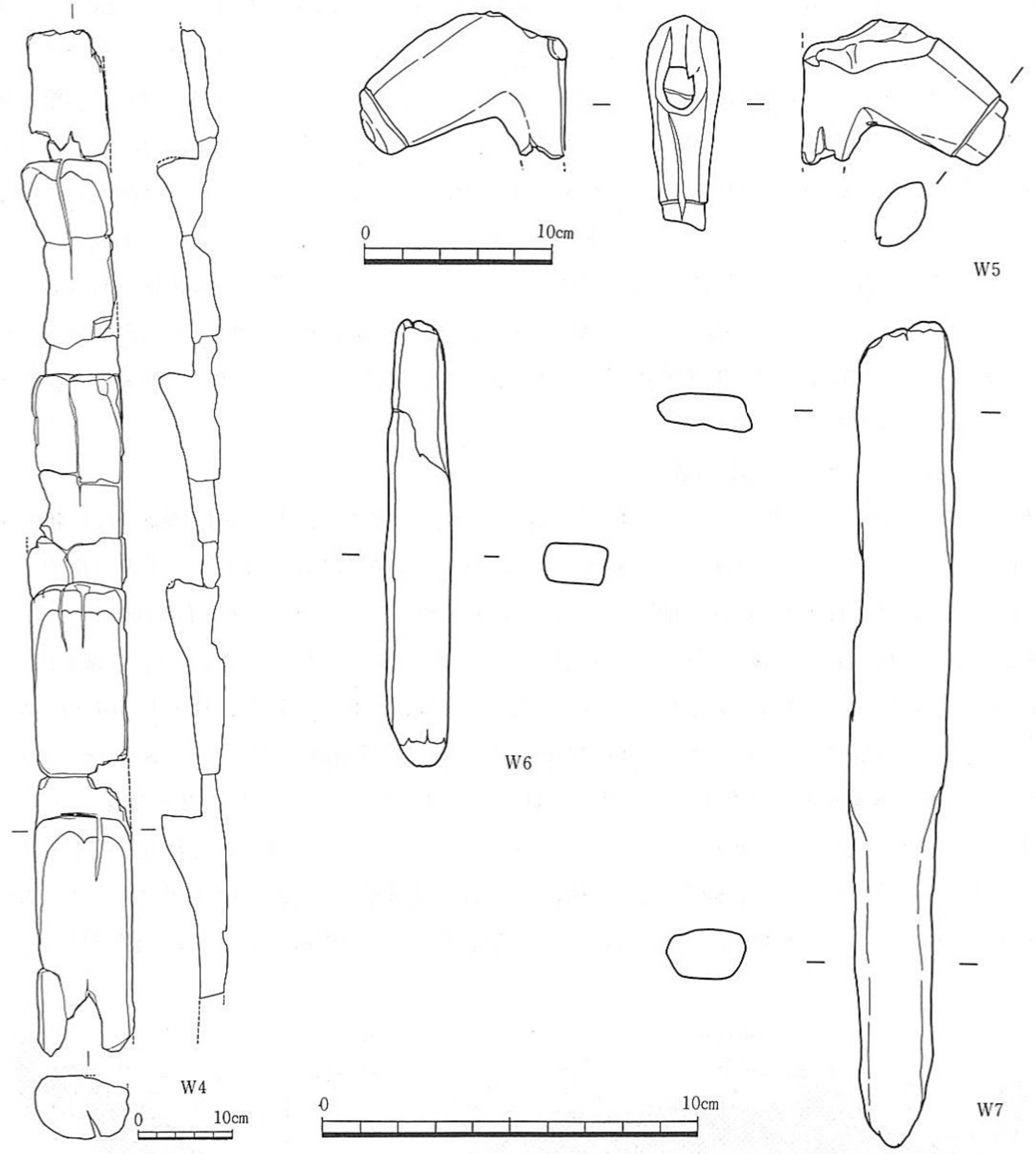

56〜C13トレンチH・I−60・61区 第①$_{1}$層




第99図　ＳＤ4003出土遺物実測図（5）




第100図　ＳＤ4003出土遺物実測図（６）



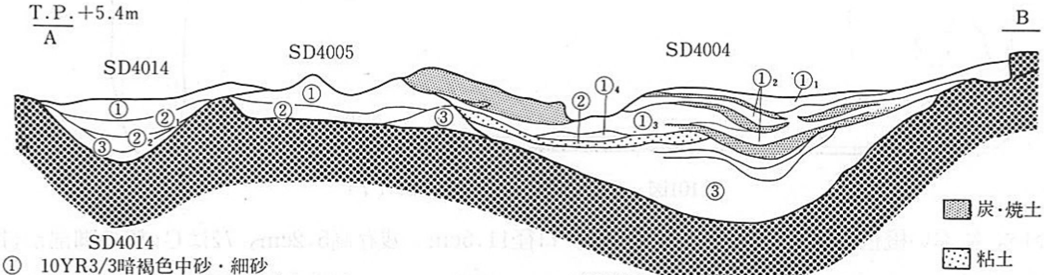

第101図　ＳＤ4003出土遺物実測図（７）

ない。にぶい橙色を呈し、胎土はやや粗い。口径11.5cm。残存高5.2cm。72は$C_2$類の脚部が付く。坏部は、内外面ヨコナデ調整の後底部外面ナデ調整を施す。脚部は、筒部外面と裾部内面ハケメ調整の後筒部外面上半と裾部外面ナデ調整を施し、筒部内面にはしぼり目を残す。灰白色を呈し、胎土はやや粗い。口径16.7cm。裾部径13.8cm。器高13.2cm。73は、口縁部ヨコナデ調整、底部外面ヘラナデ調整を施す。口径15.5cm。残存高5.2cm。69の口縁部は内弯して開き、端部で外反し、端部はヨコナデ調整を施し舌状におさめる。外面には粗いハケメを施す。口径15.6cm。残存高4.8cm。74は、口径に比して浅い坏部で、底部よりそのまま外傾して開き、端部は水平方向にひきだし舌状におさめる。内外面ハケメ調整の後口縁部ヨコナデ調整を施す。口

径16.5cm。残存高3.8cm。75は、Ｂ類のやや低い脚部が付き、裾部を欠損する。口縁部は外上方へ外傾し、端部は薄く舌状におさめる。口縁部は、外面細かなハケメ調整の後上半部を丁寧なヨコナデ調整を施す。底部外面はヘラケズリの後ヘラナデ調整。脚筒部は、外面ハケメ調整の後上半部ヘラナデ調整を施し、内面はしぼり目を残す。淡赤褐色を呈す。口径13.5cm。残存高8.3cm。70・76はＢ類、71はＣ類の脚部である。70は、裾端部を舌状におさめる。筒部外面は、上半ヘラナデ調整、下半には粗いヘラミガキ調整を施し、内面にはしぼり目を残す。裾部径6.2cm。残存高7.8cm。76の筒部は円筒状をなし、屈曲部はやや丸みを持つ。裾端部は舌状におさめる。筒部外面ヘラミガキ調整、内面ヘラナデ調整、裾部はヨコナデ調整を施す。裾部径11.8cm。残存高8.9cm。71の裾端部は、断面四角形におさめ、接地面は平坦な面をなす。内外面ナデ調整を施す。裾部径8.4cm。残存高6.6cm。

ＳＤ4004（第102図、図版23・30）

第１遺構面、Ｃ・Ｃ－13トレンチ、Ｄ～Ｉ－61～62地区で検出された。ＳＤ4005・ＳＫ4003・4004と重複し、これらよりも新しい。Ｄ・Ｅ－62地区では、ＳＤ4003と平行し、北西⇔南東方向に直線的に延び、Ｈ・Ｉ－61・62地区で東方向へゆるくカーブし、南東端でＳＤ4003に近接する。総延長26mを検出した。調査区外へ更に延びる。Ｈ・Ｉ－61・62地区では拡幅し、肩部幅2.0～4.0m、底部幅1.0～1.4m、深さ0.5～0.8mを測る。底面は全体に平坦で、Ｈ・Ｉ－61・62地区の東側壁で段を成すものの、全体では直線的に立ち上がり、断面逆台形をなす。ＳＤ4003同様、肩部には、包含層が流れ込むように堆積し、Ｈ・Ｉ－61・62地区では、厚さ２～３cmで炭層が堆積していた。埋土は、３層に大別され、埋土中には、炭、炭化物が多く含まれる。第１・２層からは多量の遺物が出土し、検出された遺構の中では一番多かった。Ｈ－61・62地区では、層厚１cm前後の粘土、炭の薄層がほぼ全域にわたって堆積し、遺物の取り上げも分層が容易であっ




SD4014
① 10YR3/3暗褐色中砂・細砂
②₁ 5GY2/1オリーブ黒細砂(粗砂を含む)
②₂ 5GY2/1オリーブ黒細砂(粘性有り)
③ 10GY3/1暗緑灰色細砂(青灰色シルトのブロック、緑灰色細砂を含む)

SD4005
① 5GY6/1オリーブ灰中砂・細砂
② N4/6灰色極細砂
③ 暗褐色細砂

SD4004
①₁ 10YR3/3暗褐色細砂(炭小片・中砂を含む)
①₂ 25Y3/1黒褐色細・中砂(炭の薄層・暗灰色土ブロック・黄褐色細・中砂を含む)
①₃ 炭と細砂・中砂が混り合った層(植物遺体多い)
①₄ 黄褐色細砂
② H4/0灰色粘土(炭・細砂含む)
③ 粗砂・中砂(5G2/1オリーブ黒シルトを含む)

第102図　ＳＤ4004・4005・4014土層断面図

た。しかし、粘土、炭の薄層の堆積が、溝全体に共通するものかどうかについては、トレンチ設定の関係で確認できなかった。したがって、遺物の記載にあたっては、ＳＤ4003と同様に分けて行なう事とする。

出土遺物（第103～107図、図版86～91）

－Ｃトレンチ、Ｄ・Ｅ－62地区出土遺物－

**二重口縁壺**（１・２）　Ｄ類である。口縁部内外面の段には、やや丸みを持ち、段からの立ち上がり部分の器壁は薄い。口縁端部は、外方へ僅かに肥厚し、断面四角形をなす。外傾する面には、細い沈線が１条巡る。口縁部はヨコナデ調整を施す。１の体部外面は、斜方向の細かなハケメ調整、内面は丁寧なヘラケズリ調整を施す。１は茶褐色を呈し、胎土はやや粗い。口径14.4cm。残存高6.3cm。２は、淡赤褐色を呈し、胎土はやや粗い。口径14.1cm。残存高4.7cm。

**広口壺**（３）　Ｃ類である。体部中央付近を欠く。口縁端部は外方へ僅かに肥厚し、断面四角形で、上端の平坦面には丸みを持つ。外面は、全体に縦・斜方向の粗いハケメ調整を密に施し、口縁部中位と下端にヨコナデ調整、底部にナデ調整を施す。体部内面は、ヘラケズリ調整を強く施し、肩部上半は指押さえ調整、底部内面はナデ調整を施す。灰白色を呈し、１～３mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径18.8cm。器高推定52cm前後。

**小型壺**（19・24）　19はＡ$_3$類、24は手捏ねのミニチュア壺である。19は、体部下半を欠損する。体部はやや偏平で、口縁部の段は小さく不明瞭で、口縁部は外上方へ外傾し、端部は舌状におさめる。口縁部はヨコナデ調整。体部は、外面横方向のハケメ調整の後体部中央にナデ調整、内面ヘラケズリ調整を施す。赤褐色を呈し、胎土は精良である。口径9.1cm。体部最大径9.3cm。残存高5.8cm。24は球形の体部と短く内弯して開く口縁部とからなる。口縁端部は薄く舌状におさめる。外面体部下半ヘラケズリ調整、内面ナデ調整を施す。口径6.7cm。器高6.2cm。

**甕**（４～６）　全てＣ類である。４・６には、ハケメ調整の後ナデ調整が施されている。４はⅠ$_1$類、５・６はⅢ$_1$類である。４の口縁部は外傾して立ち上がり、口縁端部はａ$_1$である。外面ハケメ調整は、縦方向のものが観察される。肩部外面には、くずれた波状文が施される。内面ヘラケズリは丁寧である。口径17.4cm。残存高12.2cm。５の口縁部は内弯して開き、口縁端部はｂ$_4$で、上端は平坦な面をなす。外面ハケメ調整は丁寧で、縦・斜方向の後体部上半にヨコナデ調整方向に施す。内面ヘラケズリも丁寧で、体部下半横方向、体部上半斜方向に施す。口径14.8cm。残存高20.5cm。６口縁部は僅かに内弯して開き、口縁端部はｂ$_4$で、外傾する面を持つ。口縁部から肩部外面は横を施す。外面ヘラケズリ調整は、横・斜方向に施される。口径14.5cm。残存高12.2cm。

**高坏**（７－18）　７・９・10はⅡＢ$_1$類、８・11～13はⅡＢ$_2$類、14・15はＣ$_2$類で、17はＡ類、16・18はＢ類の脚部である。７の坏部は口径に比して浅く、口縁部は外傾して開き、端部は薄く舌状におさめる。脚部はＡ$_3$類で、脚筒部は円錐形をなし、屈曲部は丸みを持つ。裾端部は下方へ小さくひきだし接地面とし、直立する面を持つ。坏部は、口縁部ハケメ調整、底部外面ナデ調整を

施した後、口縁部内外面と底部に、やや粗いヘラミガキ調整を施す。脚部は、筒部外面ヘラナデの後横方向に密なヘラミガキ調整、内面ナデ調整、裾部外面ナデ調整、内面ハケメ調整を施す。赤褐色を呈し、胎土はやや粗い。口径15.8cm。裾部径12.9cm。器高13.3cm。9の口縁部は外傾した後上半で僅かに外反し、端部は丸くおさめる。内外面丁寧なヘラミガキ調整を施す。茶褐色を呈し、胎土は精良である。口径15.4cm。残存高5.4cm。11を除くⅡ$B_2$類の口縁部は外傾して開く。口縁端部は外反し、丸くおさめる。11の口縁部は外傾し、端部を丸くおさめる。器壁はやや厚い。8・10・11はハケメ調整の後口縁部ヨコナデ調整、12・13はヨコナデ調整を施す。口径15.8～16cm。14は口縁端部で外反し、端部は丸くおさめる。外面ハケメ調整の後内外面ナデ調整を施す。口径16.7cm。16・18は、筒部外面ヘラミガキの後、中位に横方向のヘラミガキ調整、裾部ナデ調整を施す。筒部内面は、16はナデ調整、18は上半にしぼり目を残し、下半にナデ調整を施す。裾端部は舌状におさめる。裾部径10.3～10.6cm。17の筒部は柱状をなし、裾部は低く「ハ」の字に開き、端部は断面四角形におさめる。筒部との境は明瞭である。外面は、筒部ヘラナデの後筒部と裾部にヘラミガキ調整を施す。淡赤褐色を呈し、胎土は粗い。裾部径11.7cm。残存高8.0cm。

**小型丸底壺**（20～22）　20は$B_2$類、22は$B_1$類である。20の口縁部は外傾して開き、端部は薄く舌状におさめる。底部外面ヘラケズリの後、口縁部と体部外面に細かく丁寧なヘラミガキ調整を密に施す。にぶい黄橙色を呈し、胎土は精良である。口径9.6cm。体部最大径7.5cm。器高6.6cm。22の口縁部は外傾して開き、端部は薄く舌状におさめる。口縁部はヨコナデの後やや粗いヘラミガキ調整、体部外面は、肩部以下をヘラケズリの後同様のヘラミガキ調整を施す。体部内面はナデ調整。赤褐色を呈し、胎土は精良である。口径5.6cm。残存高4.4cm。

**小型器台**（23）　受け部口縁は、僅かに内彎し、端部は丸くおさめる。外面ハケメ調整の後密にヘラミガキ調整を施す。褐灰色を呈し、胎土は精良である。口径8.6cm。残存高3.9cm。

**製塩土器**（25）　「ハ」の字に開く低い脚が付く。体部上半は欠損する。内外面ナデ調整を施す。灰褐色を低裾部。脚部径2.0cm。残存高2.8cm。

木製品

W1　紡錘車である。断面逆台形をなし、側辺は僅かに外反する。木取りは柾目取りである。下辺部径6.6cm。上辺部径4.0cm。高さ1.4cm。

W2　火鑚臼である。現存長8.95cm、幅2.6cm、厚さ1.2cmの針葉樹の板材である。一端には、角を削り落した加工痕が残る。火鑚孔は、両面に計5個残在し、一面には側面よりに4個並列し、反対面の1個も側面寄りで、側面には孔に続いて切り込みがつけられている。

W3　用途不明の木製品である。現存長19cm。径4.6cm。丸材の一方を、端から約13cmの所から杭先状に削り込み、先端は、約3cmの部分に切り込みをいれて球状に削り出している。先端部は径4cm前後で、面取りの加工痕が認められる。

W4　用途不明の木製品である。長さ84.8cm、幅16cm、厚さ5.4cm。一端を長さ13cm、一辺

4.8～5.4cmの方形の突起状に切り出す。更に側辺の一辺を三角形に切り落とし、断面台形に加工する。突起基部から14cmの所には、6cm×4cmの方形の孔を約35°の角度で貫通させる。これより16cmの所には、両側面を方形に切り落とし断面凸状に造り出している。

W5　用途不明の木製品である。平面扇形の板材で、長さ12.5～19cm、幅9.5～12.2cm。厚さ3cmを図る。短辺側両端には、径1.0～1.2cmの孔が、5cm間隔で2個ずつ計4個穿孔される。各穴は反対の面まで貫通する。表面の傷みが著しく加工痕は、観察できなかった。

W6　砧もしくは槌である。柄の大半を欠損する。現存長約21cmを測る。身の部分は、計4.2cm、長さ15cmを測り、先端は面取りし、丸く仕上げるが、面取りは粗い。柄は、径2.5cmで、約5cmが残存する。

W7　用途不明の木製品である。断面形は、径13.0cmの円形をなし、長さ3.8cmが残る。球の部分は上半、中央、下半と3分割で縦方向に面取りがなされる。更に径0.5cm前後の棒状の柄が削り出されて付く。基部付近で欠損する。

W8　布巻具、（経巻具）である。長さ35cm、径2.4cmを測る。両端には円形の突起が削り出されている。突起は、先端から1.5cmを残して、2cmの所から削り込まれてつくられる。削りは、0.5cmでやや深い。突起は、径2.3cmで、先端は面取りがなされている。全体に作りは雑で、枝を切り落とし、樹皮を剥いだ程度で、その他の加工痕は認められなかった。

W9　用途不明の木製品である。現存長21.5cm、幅2.5cm、厚さ1.0cmの板材で、一端には凹形に作り出されている。先端は欠損し、約2cmが残存する。

W10　用途不明の木製品である。現存長14.2cm、幅1.9cm、厚さ1.1cmの板材で、丁寧に面取りし、一端は、針のように細く尖し、もう一方の欠損部には径2.2cmの円形に穿孔された跡が残る。

－C－13トレンチ、H・I－61・62地区出土遺物－

（1）　第1層出土遺物（26～51）

**広口壺**（26）　体部以下を欠損する。口縁部は外上方へ僅かに外反気味に開き、端部は内外方へ肥厚し、上端は平坦な面となる。内外面ヨコナデ調整を施す。1～3mm大の砂粒を多く含み、胎土は粗い。口径18.2cm。残存高8.1cm。$A_2$類である。

**小型壺**（48・49・51）　48は小型壺$A_2$類である。口縁部外面の稜は断面三角形をなし鋭い。肩部は撫で肩で、最大径は体部中央より上にある。口縁部から肩部にかけてはヨコナデ調整を施す。外面ハケメ調整は、体部下半以下は縦・斜方向、体部中央付近は横・斜方向に施す。体部内面はナデ調整。口縁部外面と外面ハケメ調整が施される部分には煤が付着する。灰黄褐色を呈し、胎土はやや粗い。口径7.3cm。体部最大径9.8cm。器高8.4cm。49は、口縁部の約4分の1の破片である。器壁は厚く、口縁部は外傾して立ち上がり、端部は丸くおさめる。暗灰色を呈し、胎土は粗い。口径10.3cm。残存高4.8cm。51は、手捏のミニチュアの壺である。口縁端部は舌状におさめる。調整は丁寧で、外面ヘラミガキ、内面ナデ調整を施す。淡赤褐色を呈し、胎土も精良

である。口径5.7cm。残存高2.8cm。

甕（27～34）　A類（31）、C類（27～30・32・33）とD4 類（34）がある。31の口縁部は内弯気味に開き、端部はb4 である。外面はナデ調整を施す。体部内面ヘラケズリは頸部に及び、頸部内面は鋭い稜をなす。口径11.2cm。残存高4.5cm。34の口縁部は「く」の字に外傾し、端部は外方へ小さくひきだし外傾する面をなす。肩部は撫で肩である。体部外面は縦方向のヘラナデ調整を施し、内面は、口縁部ハケメ調整、体部ヘラケズリ調整を施す。ヘラケズリは頸部から約2cm下がった所までで、その間には指押さえの後軽くナデている。灰黄褐色を呈し、1～3mm大の砂粒を含み、胎土はやや粗い。口径13.7cm。残存高7.8cm。27はIII1類である。口縁部は外傾して開き、端部はa1で、上端は平坦な面をなす。外面ハケメ調整は、縦方向の後横方向で、口縁部から形部にかけてはヨコナデ調整を施す。頸部内面から形部上半にかけては丁寧なナデ調整を施し、指頭圧痕は認められない。口径15.1cm。残存高7.7cm。28はIII1類で、口縁端部a1である。口径15cm。29の口縁端部はa2で、内方への肥厚は小さく、上端面は僅かに外傾する面をなす。外面ハケメ調整はやや粗い。口径15cm。残存高7.1cm。30の口縁部はやや上方に開き、端部はa2で、上端面は僅かに内傾する平坦な面をなす。口縁部と形部上半には煤が付着する。口径15cm。残存高6.2cm。32の口縁端部はa2で上端は僅かに凹む。口縁部内面はハケメ調整の後ヨコナデ調整を施す。体部内面ヘラケズリは頸部直下に及び、指頭圧痕は認められない。口径14.2cm。33の口縁端部はa2である。口径15.8cm。

高坏（35～45）　35～38はIIB1類、39～41はIIB2類、42～44は脚C類、45は脚B類である。35の口縁部は外傾して開き、端部は僅かに外方へひきだし舌状におさめる。口縁部は丁寧なヨコナデ調整のあと、口縁部と底部外面は条痕状のやや粗いヘラミガキ調整を施す。淡い赤褐色を呈し、胎土は精良である。口径14.8cm。残存高4.9cm。36～38の口縁部は外傾して開き、端部は薄く舌状におさめる。36は内外面丁寧なヘラミガキ調整を施し、胎土は精良である。口径16cm。残存高5.3cm。37の口縁部は丁寧なヨコナデ調整、底部外面ヘラナデ調整を施す。灰白色を呈し、胎土は精良である。口径16.4cm。残存高5.4cm。38の口縁部は僅かに内弯気味に開き、端部は小さく外反し、薄く舌状におさめる。口縁部は、ハケメ調整を強く施した後ヘラミガキ調整を粗く施す。底部は、外面ヘラケズリの後口縁部との境にヘラミガキ調整、内面ナデ調整を施す。口径15.3cm。残存高5.1cm。39は口縁端部を舌状におさめる。口縁部は、ヨコナデ調整の後内面ナデ調整を施す。口径16cm。残存高4.3cm。40・41の口縁部は外傾して開き、端部を断面四角形におさめる。内外面ハケメ調整の後ヨコナデ・ナデ調整を施す。40は口径15.8cm。残存高5.3cm。41は口径15.9cm。残存高4.5cm。42・43・44の裾端部は断面四角形、45は薄く舌状におさめる。42は、筒部外面ハケメの後ヘラナデ調整、内面ヘラナデ調整、裾部内面ハケメ調整を施す。裾部径11.8cm。残存高8.5cm。43は、筒部外面ヘラナデ調整、内面ヘラケズリ調整、裾部内面ハケメ調整を施す。筒部下半には円形の透し穴が3方に穿孔される。裾部径11.9cm。残存高8.4cm。44の裾部は、器壁が厚く、内面筒部との境には明瞭な稜をなす。外面ヘラナデ調整、内面

は、筒部にヘラケズリ、裾部にハケメ調整を施す。45は裾部径11.4cm。残存高８cm。45の脚部はやや低く、筒部は下方で僅かに膨らむ。外面は、筒部ヘラナデ、裾部ナデ調整の後ヘラミガキ調整をやや粗く施す。内面は、筒部上半にしぼり目を残し、以下をナデ調整。裾部径12.4cm。残存高6.8cm。

**小型丸底壺**（46•47）　いずれもＢ$_2$類である。46の口縁部は外傾して開く。端部は断面四角形をなし外傾する面を持つ。口縁部の器壁は厚い。口縁部ヨコナデ調整、体部外面ハケメの後ナデ調整を施す。口径9.7cm。体部最大径7.6cm。残存高7.4cm。47の口縁部は僅かに内弯して開き、端部は舌状におさめる。口縁部外面下方から頸部へのナデ調整によって、口縁部外面には低い稜をなす。口縁部ヨコナデ調整、体部外面は、縦方向の粗いハケメ調整の後体部下半ヘラケズリを施し、更に体部中央を横方向にナデ調整を施す。内面はナデ調整で、頸部内面には鋭い稜をなす。灰黄褐色を呈し、１～２mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径10cm。体部最大径7.6cm。器高7.7cm。

**小型器台**（50）　小皿状の受け部を持つ。器壁は厚く、端部は舌状におさめる。暗灰色を呈し、胎土はやや粗い。内外面ナデ調整。脚部との境には貫通孔を設ける。口径6.7cm。残存高2cmのミニチュア品である。

（２）第２層出土遺物（52～61）

**甕**（52～55）　52・53・55はＣ類、54はＤ$_1$類である。52はⅣ$_2$類で、口縁端部はｂ$_1$である。口縁部は外傾して開き、端部は上方へ僅かにひきだす。外面ハケメ調整は、丁寧に横方向に施す。口径12.3cm。残存高９cm。55はⅢ類で、口縁端部はａ$_1$である。内方への肥厚は小さい。外面ハケメ調整は、縦方向の後横方向に丁寧に施す。肩部外面には１条の直線の沈線が巡る。口径15.1cm。残存高8.3cm。53はⅡ類、口縁端部はａ$_1$である。口縁部は「く」の字に外傾して開く。体部内面のヘラケズリは丁寧である。口径16.3cm。残存高6.4cm。54は、卵形の体部と内弯して開く短い口縁部とからなる甕である。体部の器壁は４～５mmで厚く、口縁端部は丸くおさめる。口縁部から肩部はヨコナデ調整、肩部から以下は内外面ヘラナデ調整を施す。暗灰色を呈し、胎土は粗い。口径11.2cm。残存高10.7cm。

**高坏**（56～57）　56はＡ$_2$類の脚部である。裾部は高く「ハ」の字に開き、端部は薄く舌状におさめる。筒部外面ヘラナデ調整のあと、筒部下半と裾部にヘラミガキ調整を施す。筒部内面は、上半にしぼり目をそのまま残し、以下ナデ調整を施す。裾部径12.2cm。残存高９cm。57は、Ｃ$_2$類の脚部で、裾端部は断面四角形をなし、外方へ小さくひきだす。外面ナデ調整、内面は筒部上半にしぼり目をそのまま残し、下半にヘラケズリ調整、裾部内面ハケメ調整を施す。筒部下半には、円形の透し穴が２個穿孔される。裾部径11.6cm。残存高7.5cm。

**鉢**（59・60・61）　59は、平底の底部から内弯した後直立して立ち上がる体部と外傾する短い口縁部とからなる鉢ⅡＣ$_1$類で、口縁端部は舌状におさめる。口縁部ヨコナデ調整を施す。体部外面ナデ調整で、底部と体部下端ヘラケズリ調整、内面ヘラナデ調整を施す。淡黄褐色を呈し、胎

土は精良である。口径9.8cm。底径2.9cm。器高5.3cm。60・61はⅡA2類である。60は、体部内外面ナデ調整、底部内外面ヘラミガキ調整を施す。にぶい橙色を呈し、胎土は精良である。口径15.2cm。残存高3.6cm。61の口縁端部は舌状におさめる。口縁部ヨコナデ調整、体部外面は、粗いヘラケズリ調整を強く施す。2〜3mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径15.2cm。残存高3.8cm。

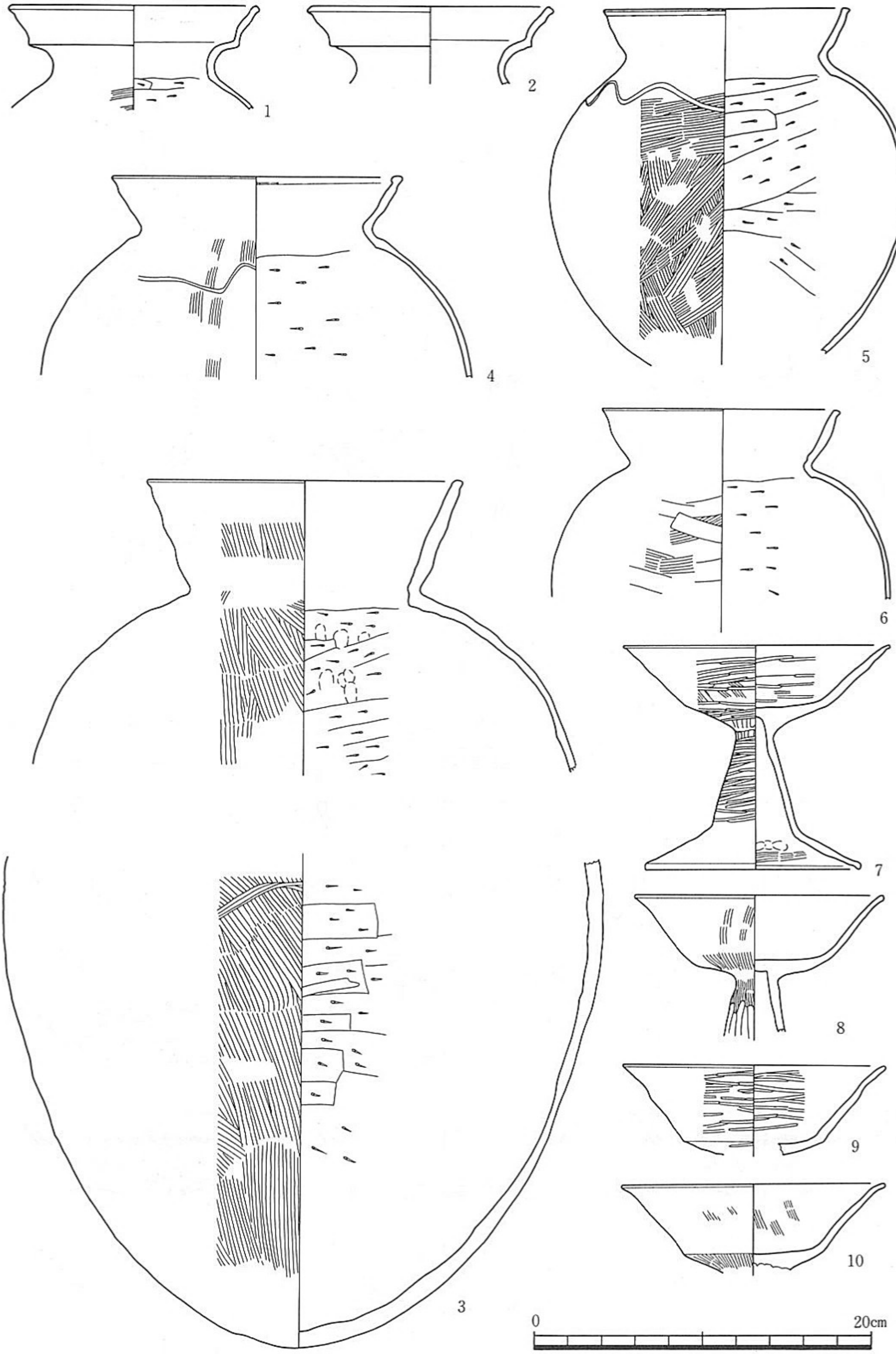
**小型丸底壺**（58）　A1類である。口縁部は外傾して開き、端部は薄く舌状におさめる。口縁部と体部外面には、細かなヘラミガキ調整を密に施す。体部内面はナデ調整。淡黄灰色を呈し、胎土は精良である。口径12.1cm。体部最大径7.9cm。器高7.8cm。

（3）第3層出土遺物（62〜88）

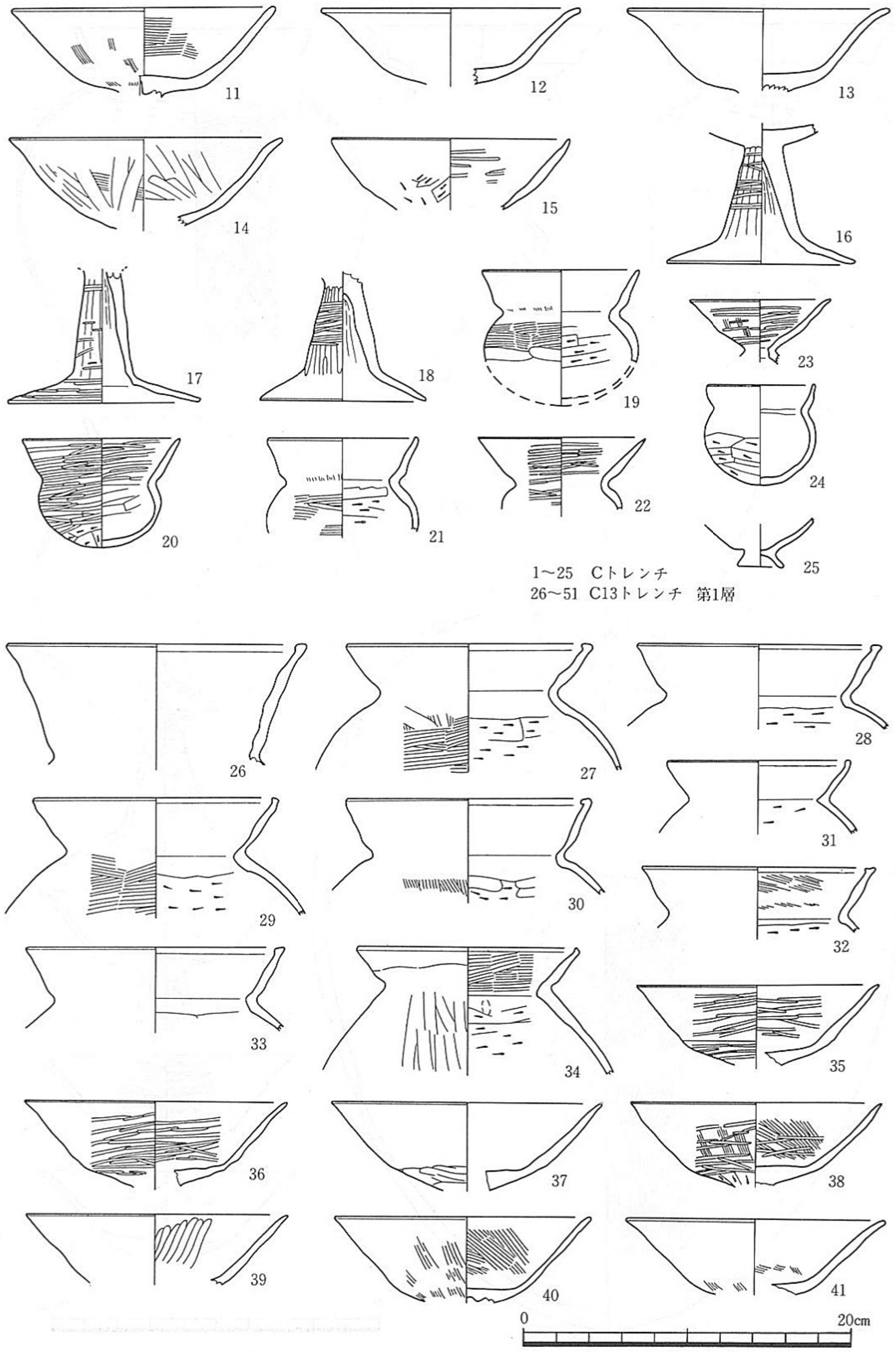
**二重口縁壺**（64•65）　64はC類、65はB類である。64は、器壁が0.8〜1.0cmで厚い。屈曲部外面には、断面三角形の突帯を貼付る。口縁端部は、上方へひきだす。口縁部は、外面ハケメ調整の後ヨコナデ調整、頸部は、ナデ調整の後外面ヘラミガキ調整を施す。1〜2mm大の砂粒を含み胎土は粗い。口径19.2cm。残存高8.7cm。65は、口径12.8cmの小型品である。口縁部外面の突帯と頸部内面の稜には、鋭さを欠く。丁寧なナデ調整の後、外面と口縁部内面には、細かなヘラミガキ調整を施す。黄灰褐色を呈し、胎土は精良である。

**広口壺**（62・63）　62は、A2類である。口縁部は外傾して開き、端部は内方へ小さく肥厚し、上端は、丸みを持つ。口縁端部直下には、竹管文を不規則に施す。浅黄色を呈す。口径17.3cm。残存高9.8cm。63は、外傾して開く短い口縁部の約4分の1の破片である。器壁はやや厚く、口縁端部は丸くおさめる。外面ヨコナデ調整、内面ハケメ調整を施す。口径14.6cm。残存高9.8cm。

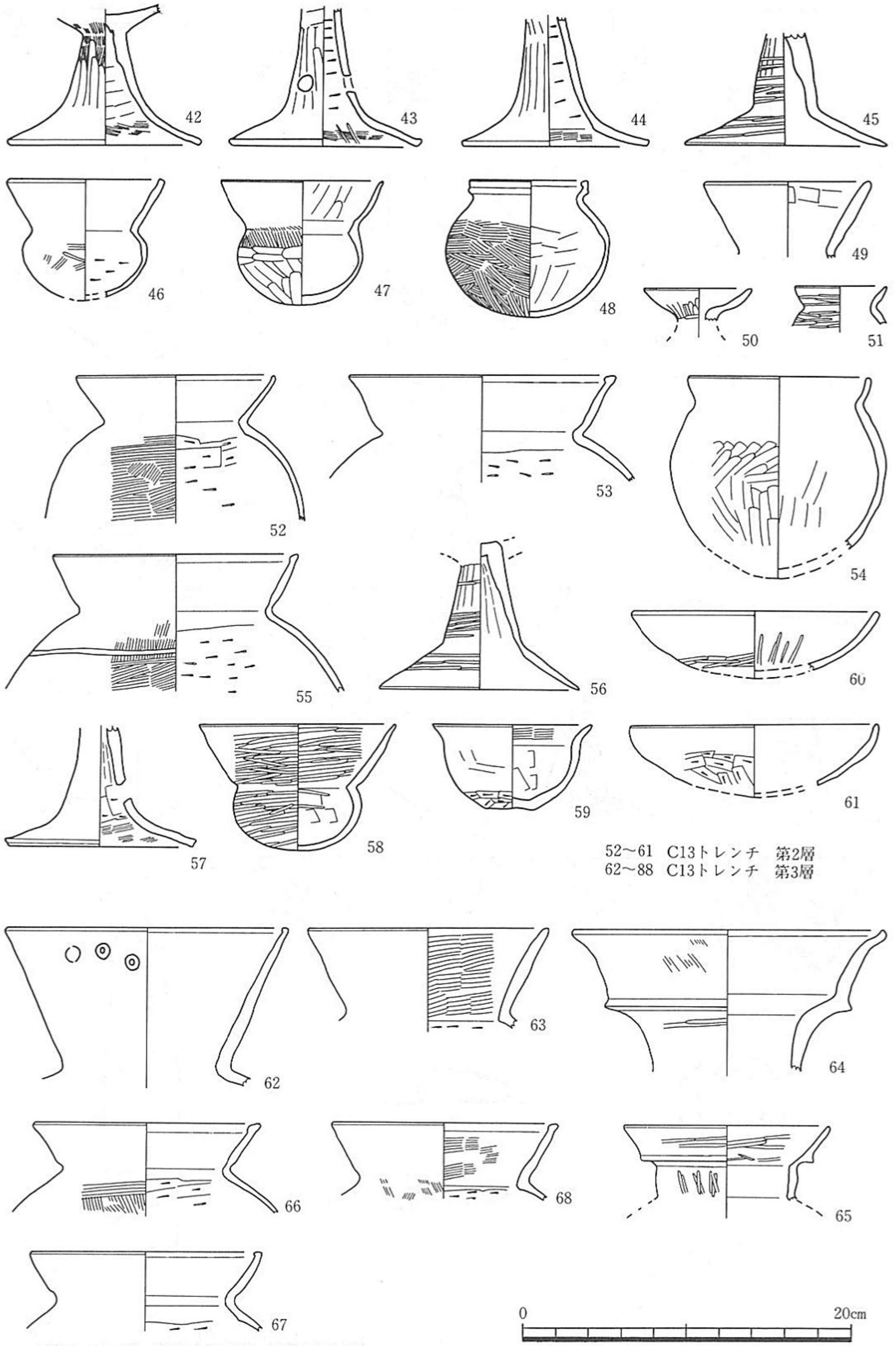
**甕**（66〜74）　66〜69はC類、71はD4 類、70はA1類、72・73は東海系の搬入品である。66・68の口縁部は外傾して開き、口縁端部はa1である。68の口縁部内面にはハケメ調整が施される。66は口径13.9cm。68は口径13.9cm。67の口縁部は僅かに内弯して開き、口縁端部はa1で、内方への肥厚は小さく、上端面へのは平坦に近い。口径14.2cm。69はⅣ1類である。口縁部は外傾して開き、口縁端部はa1で、内方の肥厚は小さく、僅かに内傾する面をなす。外面ハケメ調整は雑で、縦方向の後肩部を横方向、頸部から約4分の3までは横と斜め方向に施す。内面ヘラケズリは、底部から4分の1は左上がりに、それより上は右方向に施す。左上がりのヘラケズリの部分には指頭圧痕が顕著に残る。体部中央付近で器壁が薄くなり、この部分では、内面ヘラケズリの後ナデ調整が施される。口径13.5cm。残存高18.9cm。71は、34と同じ形態、技法のものである。口縁端部はb4 で外傾する面を持つ。口径14.9cm。70の口縁部は、やや上方へ屈曲し、頸部内面の稜も鋭さを欠く。外面はタタキの後縦方向のハケメ調整が施される。口径15.2cm。72・73は、いわゆるS字状口縁の東海系の甕である。体部外面は粗い縦方向の櫛目を施し、頸部外面にはヘラ描きの沈線を一条施す。71は、肩部内面に指頭圧痕が浅く残り、ナデ調整を施す。72は灰白色、73は浅黄色を呈し、1〜3mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。72は、口径



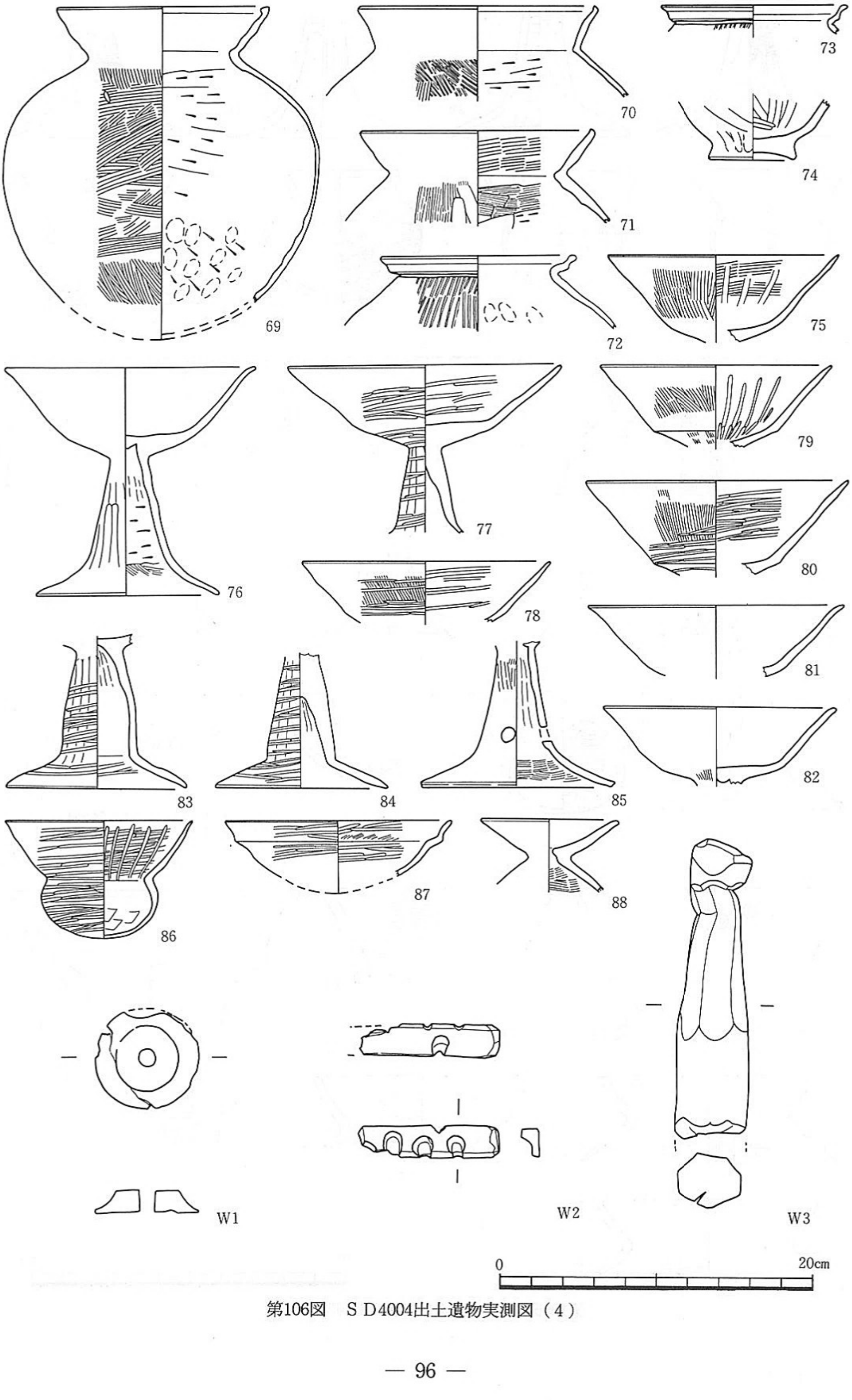

第103図　ＳＤ4004出土遺物実測図（１）




第104図　ＳＤ4004出土遺物実測図（２）

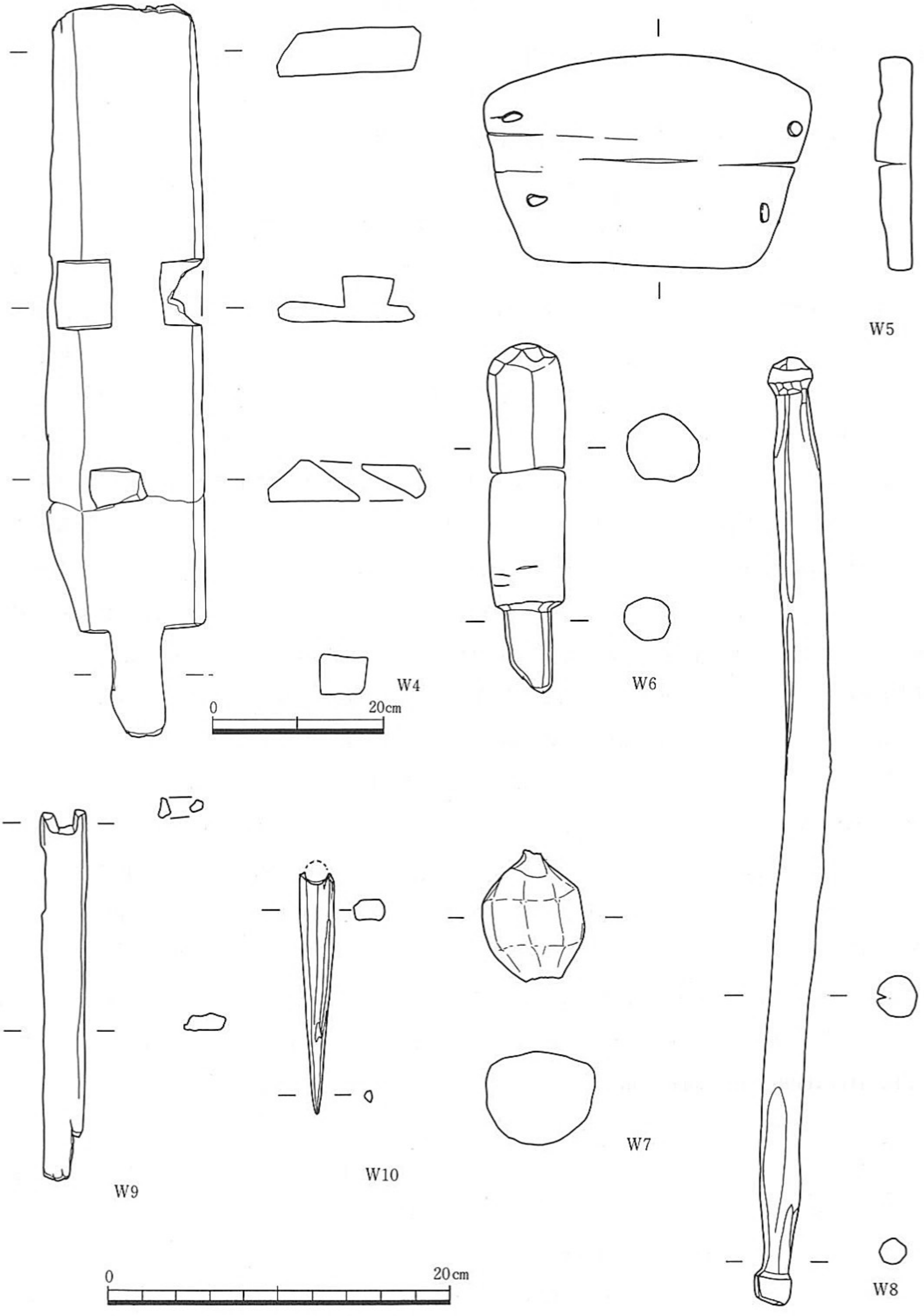



第105図　ＳＤ4004出土遺物実測図（３）




第106図　ＳＤ4004出土遺物実測図（４）

12.5cm。73は口径12cm。74は、中央が窪む突出した平底から体部にかけての破片である。内外面ナデ調整を施し、底部内外面には指頭圧痕が浅く残る。暗い黄灰色を呈し、胎土は粗い。底径5.6cm。




第107図　ＳＤ4004出土遺物実測図（５）

高坏（75～85）　79・80はⅡA₁類、75はⅡA₂類、76・81・82はⅡB₂類、83・84は脚部B類、85は脚部C類である。75・77～80の口縁部は外傾して開き、端部は薄く舌状におさめる。74は、口縁部ハケメ調整、底部外面ヘラケズリの後内面にナデ調整を施す。口径14.6cm。残存高5.6cm。79・80は調整も丁寧である。79は、外面底部ヘラケズリの後細かなハケメ調整を密に施し、内面は丁寧なヨコナデの後暗文風のヘラミガキを放射状に施す。オリーブ灰色を呈し、胎土は精良である。口径14.9cm。残存高5.3cm。80は口縁部内外面細かなハケメの後内面と外面底部との境にヘラミガキ調整を密に施し、底部外面はヘラケズリの後同様のヘラミガキを加える。赤褐色を呈し、胎土は精良である。口径16.7cm。残存高6.2cm。77～81・82の口縁部は、端部で僅かに外反し、舌状におさめる。口縁部は内外面ヨコナデ調整による。76にはC₃類の脚が付く。脚外面はヘラナデ調整、内面は筒部ヘラケズリ調整、裾部はハケメ調整で、筒部上半にはしぼり目を残す。口径16.3cm。裾部径10.7cm。器高14.6cm。77は、口径に比して浅い坏部と低い脚B類とからなるもので、裾部を欠損する。口縁端部は舌状におさめる。口縁部内外面と底部外面には、ヘラミガキ調整を粗く施す。脚部は、外面ヘラナデの後ヘラミガキ調整を粗く施す。口径17.5cm。残存高10.6cm。83・84は裾端部を舌状におさめる。84の筒部は上半が中実で、裾部へは屈曲して移行する。外面にはヘラミガキ調整を密に施す。85は、裾端部を僅かに外方へひきだし、断面四角形におさめる。外面はナデ調整、内面は筒部にしぼり目をそのまま残し、裾部内面ハケメ調整を加える。筒部下方に、3個の円形の透し穴が穿孔される。83は、裾部径11.5cm。残存高9.7cm。84は、裾部径11cm。残存高8.6cm。85は、裾部径12.4cm。残存高9.3cm。

小型丸底壺（86）　A₁類である。口縁部は内弯して開き、端部は薄く舌状におさめる。口縁部と底部外面のヘラミガキ調整は、細かく密に施され、更に口縁部内面には、放射状のヘラミガキが加えられる。胎土は精良である。口径12.1cm。体部最大径7.5cm。器高7.5cm。

小型有段鉢（86）　B類である。口径に比して浅い体部である。口縁部の屈曲も弱く、口縁部も短い。口縁端部は舌状におさめる。口縁部と体部上半はヘラミガキ調整、体部下半はナデ調整を施し、口縁部内面には、ハケメが残る。明褐色を呈し、胎土は精良である。口径14.5cm。残存高3.7cm。

小型器台（87）　A類である。器壁は厚く、胎土中には砂粒を多く含みやや粗雑なつくりである。受け部と脚部外面はナデ調整、脚部内面は、ハケメ調整を強く施す。脚部内面には煤が付着する。受け部口径8.8cm。残存高4.4cm。

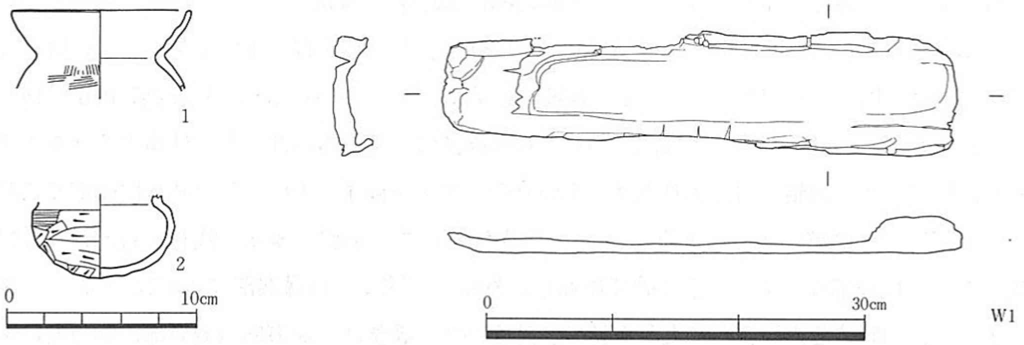
SD4005（第102図）

第1遺構面　C－13トレンチ、H－62地区で検出した。SD4004・近現代の井戸と重複し、東側肩部はSD4004によって、また南東端は近現代の井戸によって削平されている。SD4004と平行して延びる溝である。総延長5.5mを検出した。底部幅0.8m、深さ0.2mが残存する。底面は平坦で、壁はゆるく立ち上がり、底面との境は不明瞭である。埋土は3層に分層される。遺物は出土しなかった。

ＳＤ4006

第１遺構面、Ｃトレンチ、Ｅ－62～64地区で検出した。ＳＤ4007と重複し、これよりも古い。肩部幅0.8ｍ、底部幅0.3ｍ、深さ0.2ｍを測る。ＳＤ4007と接する地点から4.5ｍ西方向へ延びた後ほぼ直角に折れて南方向へ延び、調査区外へ出る。総延長6.5ｍを検出した。埋土は、青灰色シルトを含む黄褐色の粗砂である。遺物の量は僅かであった。

出土遺物（第108図、図版93）




第108図　ＳＤ4006出土遺物実測図

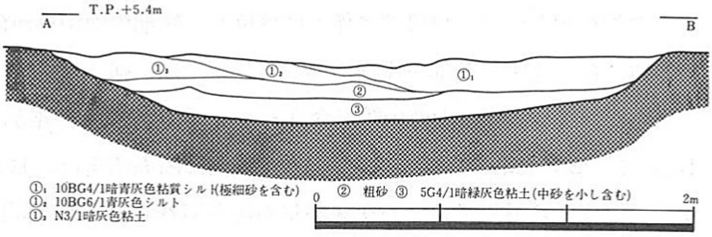
**小型丸底壺**（１・２）　１は、Ｄ類と思われるが、体部を欠損する。口縁部は内弯し、端部は丸くおさめる。肩部外面ハケメ調整を施す。淡黄褐色を呈し、胎土はやや粗い。口径9.4cm。残存高4.1cm。２は、体部のみであるが、形態、調整技法より、Ａ類と思われる。外面ヘラケズリの後部分的にヘラミガキ調整、内面ナデ調整を施す。赤褐色を呈し、胎土は精良である。体部最大径7.5cm。残存高4.1cm。

木製品

Ｗ１　長方形の容器である。全体に遺存状態が悪く、加工痕は観察できなかった。現存長40.5cm、幅9.8cm、厚さ2.9cm。内寸法は、31.2cm×6.5cm、深さ1.9cmを測る。外面底部は僅かに丸くそる。

ＳＤ4007（第109図、図版31）

第１遺構面、Ｃトレンチ、Ｄ・Ｅ－64地区で検出した。ＳＤ4006と重複する。西側約1.6ｍにはＳＤ4008がほぼ平行して位置し、更にＣ－13トレンチ、Ｈ・Ｉ－65地区には、ＳＤ4007の延長上にＳＤ4011が位置する。ＳＤ4011が砂を埋土とするのに対し、ＳＤ4007が粘土、シルトを主たる埋土とする点や、未調査区約８ｍを隔てている点から別の遺構と判断した。総延長10ｍを検出した。両端は更に調査区外へ延びる。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がり、底面との境




第109図　ＳＤ4007土層断面図

はやや不明瞭である。肩部幅3.2～3.7m、底部幅2.3～2.6m、深さ0.4mを測る。ＳＤ4003・4004のような包含層の肩部への垂れ込みは見られなかった。埋土は、３層に大別される。中間に第２層の砂が堆積するが、溝全体に及ぶものではなく、遺物は分層して取り上げる事は出来なかった。

出土遺物（第110•111図、図版92～94）

**広口壺**（１）　Ａ類と思われる。口縁端部は断面四角形で、外傾する面を持ち、端部は外下方へ僅かに肥厚する。外面には縦方向の丁寧なヘラミガキを施し、内面は上半に横方向のヘラミガキを粗く施す。内外面に煤が付着する。口径25.7cm。残存高4.6cm。

**甕**（13～17）　全てＣ類である。16はⅡ類、14はＶ$_2$類、13・15・17はⅢ類である。16の口縁部は長く内弯して開く。口縁端部はａ$_2$で、端部の肥厚は小さい。口径16cm。残存高7.0cm。14は、体部に比して長めの内弯する口縁部がつく。口縁端部は、外上方へひきだし外傾する面をなす。外面は肩部をナデ調整、肩部より下は右上がりのハケメを施す。内面ヘラケズリは頸部まで及ぶが、頸部はナデ調整によって丸みを持つ。淡褐色を呈す。口径11.8cm。残存高11cm。15はⅢ$_1$類である。口縁部は「く」の字に強く屈曲し、外傾して開く。口縁端部はａ$_3$で、内方への肥厚は小さく、内傾する面は僅かに丸みを持つ。外面ハケメ調整は、縦方向の後肩部に横方向に強く施す。体部下半はナデ調整と思われるが、全体に厚く付着する煤の為はっきりしない。内面ヘラケズリは、体部中央を左横方向、上半を斜・横方向に丁寧に施され、ヘラケズリは頸部に及ぶ。頸部内面はナデ調整が加えられる。底部から体部下半内面には指頭圧痕が顕著に残る。口径14.6cm。器高20.9cm。13の口縁部は外傾して開き、端部はａ$_2$である。Ⅲ$_1$類か。口径14cm。残存高8.1cm。17の口縁部は「く」の字に外傾して開き、端部はａ$_2$である。口縁部の器壁は薄く、口縁接合部には、ナデ調整が加えられ、丸みを持つ。頸部内面は丸みのある稜をなし、頸部以下２cmにナデ調整が施される。口径14.6cm。残存高7.2cm。

**高坏**（３～12）　３・６・８はⅡＢ$_1$類、４・５・９はⅡＣ$_2$類である。３の口縁部は外傾して開き、端部付近で僅かに外反し端部は外上方へ小さくひきだす。内外面は丁寧なヨコナデの後細かく丁寧なヘラミガキ調整を施す。茶褐色を呈し、胎土は精良である。口径15.7cm。残存高5.2cm。６は器壁の磨滅が著しく調整は明らかでない。僅かに口縁部内外面にヘラミガキ痕が認められる。赤褐色を呈し、胎土は精良である。口径16.4cm。残存高5.4cm。７は６と同様の胎土、色調で、６の脚部と思われる。中実の脚部で小さく開く裾部がつく。裾端は６と同様に丸くおさめる。筒部外面ヘラミガキ、裾部ヨコナデ調整を施す。裾部径10.1cm。残存高4.0cm。８は、中実の脚Ｃ類がつく。口縁部は僅かに外反し、底部内面中央が窪む。口縁部内外面のヘラミガキは、雑で粗く施す。筒部下半内面のヘラケズリは、強く施される。淡赤褐色を呈し、胎土は緻密であるが、１～５mm大の砂粒が含まれる。口径14.4cm。裾部径11.6cm。器高12.8cm。10はⅡＢ$_2$類で、脚Ｃ$_3$類がつく。口縁端部と裾端部は断面四角形におさめられ、口縁端部はヨコナデ調整により僅かに外反する。ハケメ調整の後底部外面と脚部外面にナデ調整を施し、筒部内面にヘラケズリ調整を施す。淡灰黄褐色を呈し、３～４mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径

14.3cm。裾部径12cm。器高13.3cm。4にはＢ3類の脚がつく。口縁部外面には低い稜をなす。口縁部は外傾し、端部は舌状におさめる。口縁部と裾部にヨコナデ、底部外面と筒部内面にヘラケズリ、筒部外面にヘラナデ調整を施す。赤褐色を呈し、胎土はやや粗い。口径13.5cm。裾部径12.5cm。器高15.6cm。5には、脚Ａ2類がつく。口縁部は中位で外傾して開き、端部は舌状におさめる。坏部は器表面の磨滅が著しく調整については明らかでないが、内面と底部外面にヘラミガキ痕がかすかに認められる。筒部外面は幅2～3mmの太いヘラミガキ、内面は上半にしぼり目を残し、下半にナデ調整を施す。赤褐色を呈し、胎土は粗い。口径15cm。裾部径10.4cm。器高12.3cm。9はＣ1類の脚部がつく。口縁部は磨滅が著しく調整については明らかでないが、体部外面にはヘラケズリが施されている。筒部内面には、粘土紐の継目としぼり目が顕著に残る。淡赤褐色を呈す。口径15.8cm。裾部径9.8cm。器高12.9cm。11の坏部は、脚部から直線的に開き、口縁端部は上方へ小さくひきだし、丸くおさめる。坏部内面は平坦な底部を持つ。坏部との接合部は器壁が厚い。口縁部ヨコナデ、底部外面ヘラケズリの後、ヘラミガキを粗く施す。脚筒部外面ヘラケズリの後坏部と同様のヘラミガキを施し、内面はナデ調整を施す。灰茶褐色を呈し、胎土は粗い。口径13.3cm。残存高11.7cm。12は坏部口縁の約8分の1の破片である。外面には低い段をなし、口縁部は外反して開き、端部は水平方向へひきだし、小さく肥厚する。黄褐色を呈し、胎土は精良で、口縁部内外面にはやや太い暗文風のヘラミガキを施す。口径19.5cm。残存高5.0cm。

**鉢**（18・19）　18は、手捏ねによるミニチュアの鉢である。体部は浅い椀状を呈し、口縁部との境には浅い段をなす。口縁端部は丸くおさめる。茶褐色を呈し、胎土は精良で、内外面の一部には赤色顔料の付着が認められる。内外面には、ヘラミガキを粗く施す。口径10cm。器高3.2cm。19は、ⅡＢ1類の鉢である。口縁部は外上方へ小さくひきだし、舌状におさめる。口縁部はヨコナデ調整、体部外面は細かなハケメ、内面ナデ調整を施す。口径11.2cm。器高4.7cm。

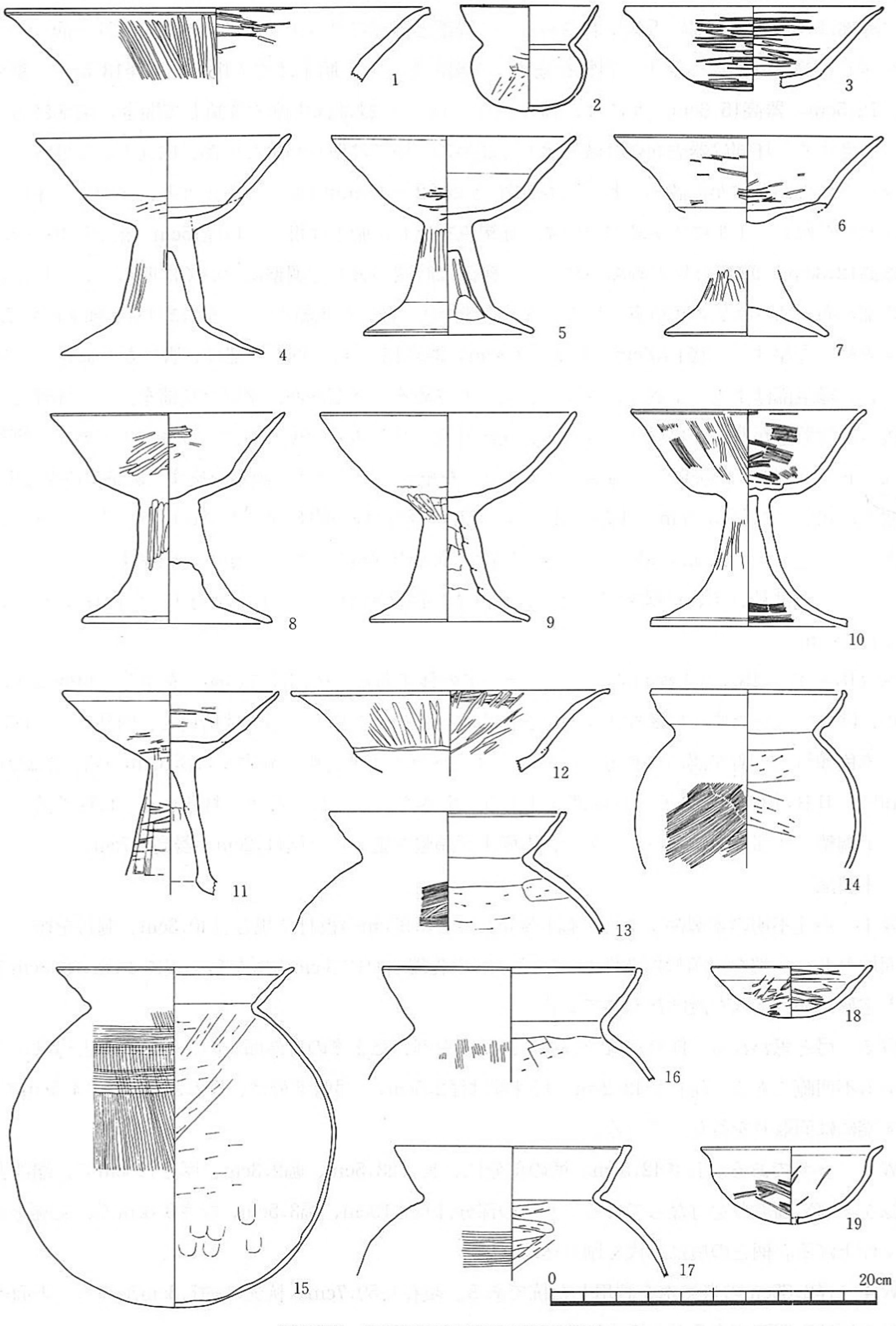
　木製品

Ｗ1　用途不明の木製品である。幅4.3cm、厚さ0.95cmの板材で現存長40.3cm。側辺を削って面取りし、一端を三角形に造作している。この先端より約3cmの所から一辺に1cm×8.8cmでコ字形に切り込みを設けたものである。

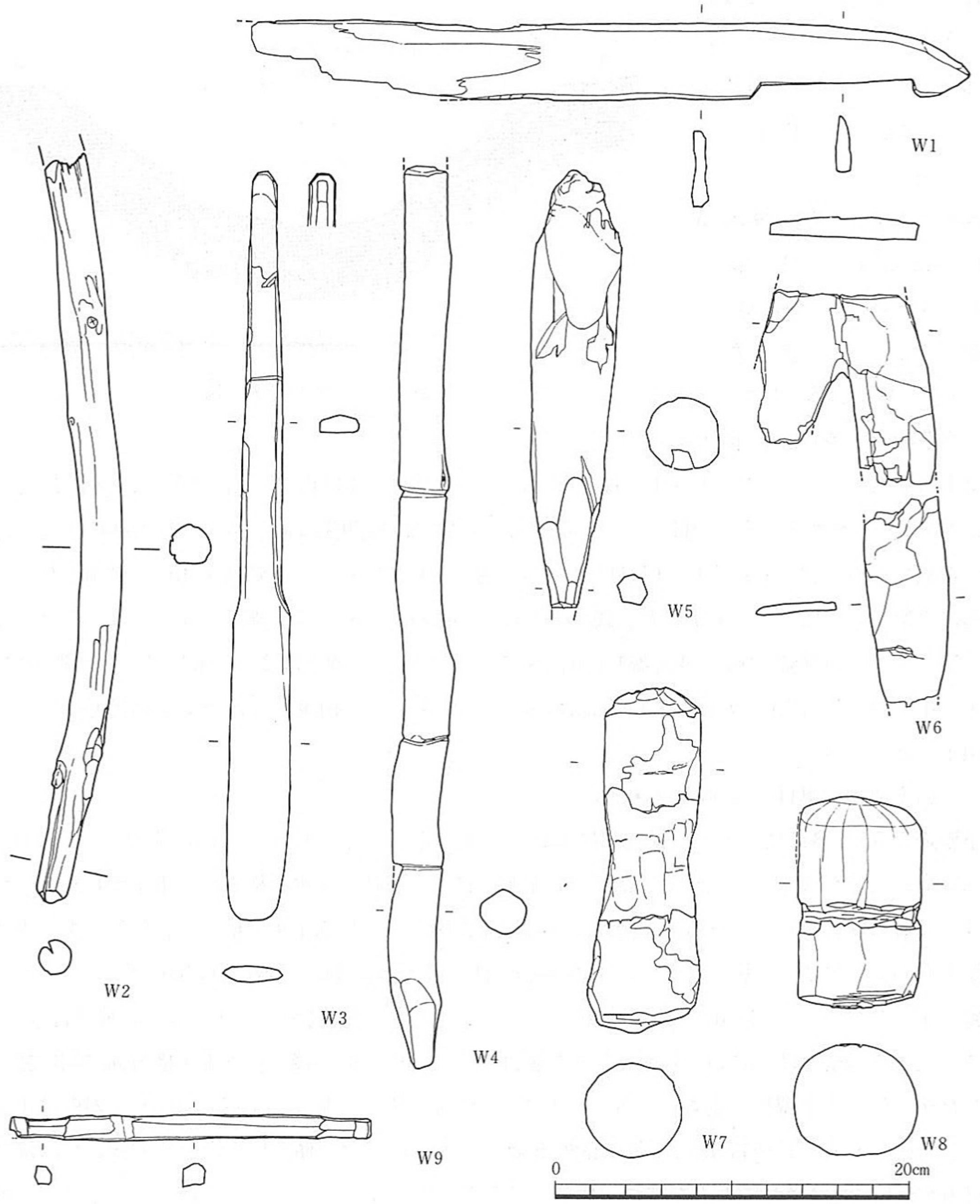
Ｗ2　弓と思われる。作りは雑で一部には樹皮を剝いだままの自然面をのこし、弓弭と弓身との境も不明瞭である。現存長42.2cm。弓身部は径2.5cm.。弓弭部分は、径2.2cm、長さ4.5cmで、先端には面取りを行なっている。

Ｗ3　ヘラである。長さ42.5cm。柄の部分は、長さ23.5cm、幅2.3cm、厚さ1.0cmで、端部と縁を丁寧に面取りを行なっている。ヘラの部分は長さ19cm、幅3.5cm、厚さ0.6cmで、先端を丸く仕上げる。柄との境は、浅く削り込んでいる。

Ｗ4　径2.65cmの自然木を利用した杭である。現存長50.7cm。杭先は約7.3cmが残る。表面の加工痕は不明瞭であるが、樹皮は残存していない。




第110図　ＳＤ4007出土遺物実測図（１）



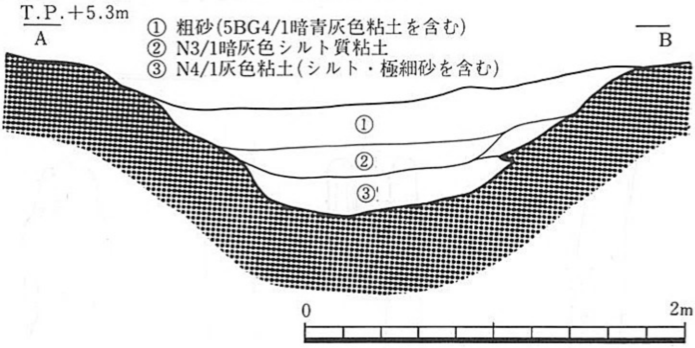

第111図　ＳＤ4007出土遺物実測図（２）

Ｗ５　径4.2cmの自然木を利用した杭で、表面に樹皮をそのまま残す。現存長24.6cm。杭先7.4cmが残る。一端は焼けて炭化している。

Ｗ６　二叉の鋤である。大半を欠損し、鋤先11.7cmと鋤先基部10.7cmが残存するのである。鋤先は、幅4.8cm、厚さ0.8cm。鋤先基部は、幅8.9cm、厚さ1.4cmである。一部焼けて炭化している。

Ｗ７　編錘である。径5.5cm、長さ19.5cm。中央を径約4.3cmに削り込んでくびれ部とする。丸太部には樹皮をそのまま残す。

Ｗ８　編錘である。径6.9cm、長さ11.9cm。中央を幅1.2cm、深さ0.5cm程に溝状に削り込んでくびれ部とする。丸太部は樹皮を落としている。




第112図　ＳＤ4008土層断面図

ＳＤ4008（第112図、図版31）

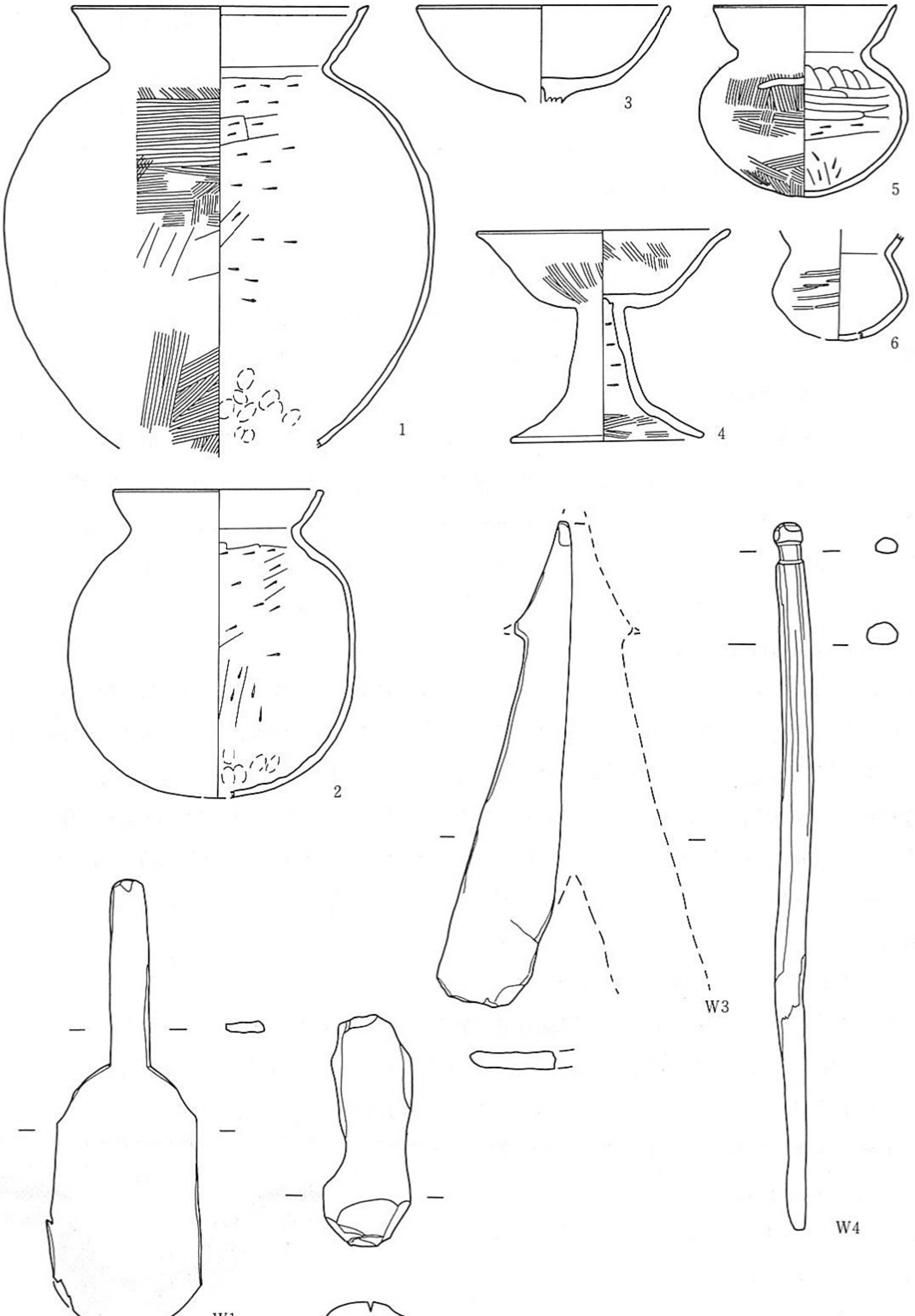
第１遺構面、Ｃトレンチ、Ｄ・Ｅ－65・66地区で検出した。ＳＤ4007とほぼ平行し、南東端では、約0.5ｍで近接する。ＳＤ4011とは、ＳＤ4007と同様の位置関係にあるが、埋土の堆積状況などから別の遺構と判断した。Ｄ－65地区で僅かに西に折れて終わる。総延長10.6ｍを検出した。底面は平坦で、壁は緩く立ち上がり、底面との境は不明瞭である。南東端は、徐々に浅くなり、幅も狭くなる。肩部幅2.9ｍ、底部幅1.0ｍ、深さ0.5ｍを測る。埋土は２層に分層される。遺物は、主に第$2_1$層より出土したが、その量は僅かである。甕２は、南東端で、横倒しの状態で単独で出土した。

出土遺物（第113図、図版95・96）

**小型壺**（５）　Ｂ類である。口縁端部は舌状におさめる。口縁部と頸部はナデ調整で、形部内面には指頭圧痕が残る。外面ハケメ調整は、上半は横方向、体部中央は横方向、下半から底部にかけては縦方向に粗く施される。内面は、体部上半に指ナデ、体部中央は横方向、体部下半以下は縦方向のヘラケズリが施される。口径10.7cm。体部最大径12.3cm。器高11.4cm。

**甕**（１・２）　１はＣ$Ⅰ_1$類、２は$D_3$類である。３の口縁部は長く外傾して開き、口縁端部は$a_3$で、内方への肥厚は小さい。外面ハケメ調整は丁寧で、縦方向の後、体部上半横方向に密に施された後、軽くナデ調整を施す。内面ヘラケズリも頸部直下まで及び、丁寧に施され、器壁は平滑に仕上げられる。口径17.8cm。残存高26.5cm。２の口縁部は、僅かに内弯して開き、口縁端部は$b_3$で上端面は僅かに丸みを持つ。体部にはかなりのひずみがあり、正確な形態は不明であるが、やや下膨らみの球形をなすものと推察される。黄茶褐色を呈し、胎土は粗い。口径11.6cm。器高18.2cm。

**高坏**（３・４）　３はⅡ$C_2$類の坏部片である。口縁端部は丸くおさめられる。内外面は器壁の磨滅が著しく調整は明らかでない。浅黄橙色を呈し、胎土は精良である。口径15.2cm。残存高5.6cm。４は$B_3$類の脚部がつく。口縁部は、上半ヨコナデによって更に外反して開き、端部は四角形におさめる。坏部と裾部内面はハケメの後、坏部と脚部外面ナデ調整を施す。筒部内面に




第113図　ＳＤ4008出土遺物実測図

はしぼり目をそのまま残す。灰茶褐色を呈し、胎土は粗い。口径15cm。裾部径11.5cm。器高12.7cm。

**小型丸底壺**（6）　$B_2$類と思われるが、口縁部を欠く。体部最大径は、体部中央より下にある。外面ヘラミガキは、器壁の磨滅のため、充分に観察できない。灰褐色を呈し、胎土は精良である。体部最大径8.0cm。残存高6.4cm。

木製品

W1　杓文字、杓子である。長さ26.9cm。柄の部分は、長さ11cmが残存する。幅2.3cm。厚さ0.8cm。身の部分は、長さ15.9cm、幅9.0cm、厚さ0.3〜0.5cmを測る。

W2　編錘と思われる。径4.5〜5.1cm、長さ12.5cm。中央部が細くくびれるが、全体に腐朽が進み、加工痕は明瞭ではない。

W3　なすび形の鋤と思われる。柄と身の約4分の3を欠損する。現存長29cm。耳も先端が欠けている。厚さ1.0cm。側辺に面取りの跡が認められるが、磨滅が著しく加工痕は不明瞭である。

W4　糸巻具、経巻具である。現存長42.2cm。径1.8cm。約2分の1は焼けて炭化している。端から1.2cmを残し、幅1.2cm、深さ0.3cmの溝状に切り込んで、突起部を作り出している。突起部は径1.2cmで、面取りを行なう。全体に丁寧な加工痕が残る。

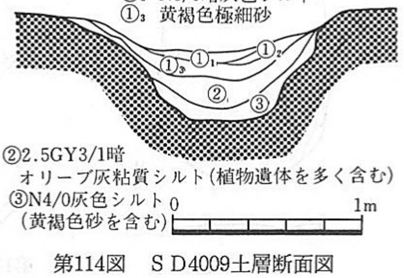
SD4009（第114図、図版23・31）

第1遺構面、C・C－4・13トレンチ、D〜H－65〜67地区で検出した。D・E－65〜67地区で約17m東西方向にほぼ直線的に延びた後、C－4トレンチ、G－65地区で南に折れて、再び直線的に延びH－65地区に至る。南端はNR4001によって削平されている。西端は調査区外へ延びる。総延長23mを検出した。底面はほぼ平坦で、溝底は西側でT.P.＋4.8m、南側H－65地区でT.P.＋4.6mにある。壁は直線的に立ち上がり、断面台形をなす。肩部幅1.5m、底部幅0.5m、深さ0.55mを測る。埋土は、3層に大別され、全域でほぼ一定している。3層中、溝底近くには、植物遺体が多く含まれ、遺物は特にこの層に集中していた。

出土遺物（第115・116図、図版96〜98）

**二重口縁壺**（1）　G類である。口縁部外面の断面三角形の突帯は稜が鋭い。内面の段は浅く、やや不明瞭である。口縁端部は外反し、端部は外方へ肥厚し、上端は平坦な面をなす。頸部と口縁部は丁寧なヨコナデ調整を施す。外面ハケメは、縦方向に丁寧に施す。淡黄色を呈し、胎土はやや粗い。口径23.2cm。残存高17.8cm。

**甕**（2〜5）　4はCⅠ類、2・3・5はCⅢ類である。口縁端部は、2が$a_3$、3・4が$a_1$、5は$b_3$で、2〜4の端部の肥厚は小さい。2の肩部外面には、波状文が施される。淡赤褐色を呈し、胎土はやや粗い。2は、口径14.9cm。3は、口径14.4cm。4は、口径17.8cm。5は、口径



第114図　SD4009土層断面図

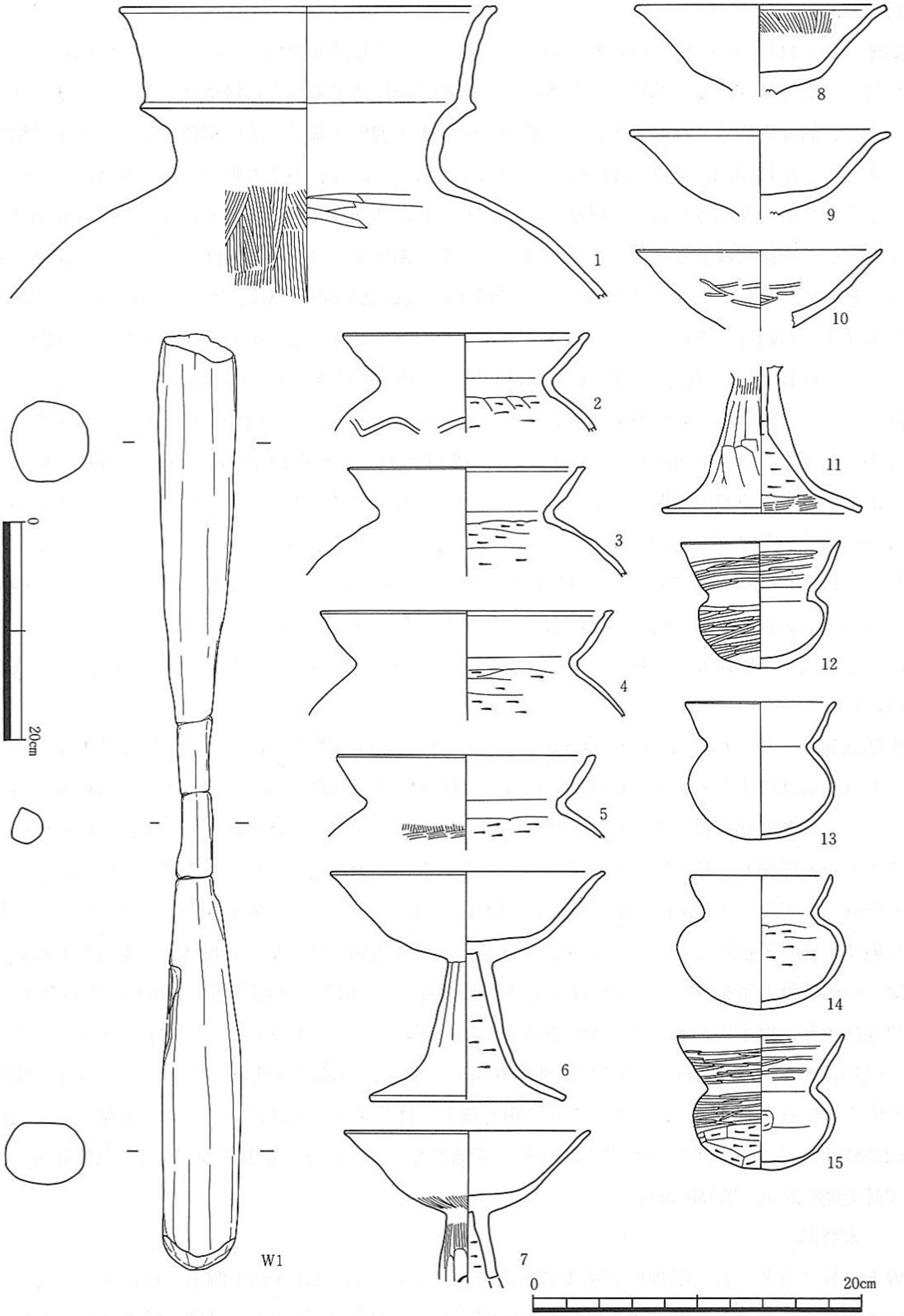
15.6cm。

**高坏**（6～11）　6～9はIIB$_2$類、10はIIC類で、11はC$_3$類の脚部である。6にはA$_3$類の脚部が付く。裾部端部は断面四角形におさめる。調整は全体に丁寧で、口縁部ヨコナデ、筒部外面ヘラナデ、筒部内面ヘラケズリで、その他の部位はナデ調整を施す。淡赤褐色を呈し、胎土は精良である。口径16.8cm。裾部径11.8cm。器高14.2cm。7には、中空の脚が付く。脚部には円形の透し穴が3方に穿孔される。口縁部は僅かに外反し、端部は丸くおさめる。坏部と脚部外面は丁寧なハケメの後口縁部と坏部内面を丁寧にヨコナデ調整を施す。筒部内面はヘラケズリ調整を施す。赤褐色を呈し、胎土はやや粗い。口径15cm。残存高8.9cm。8は、ハケメの後ヨコナデ調整を施すが、口縁部上半にハケメが残る。濃茶褐色を呈し、1～2mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径15.2cm。残存高5.5cm。9は口縁端部を外方へひきだし、端部を丸くおさめる。口縁部ヨコナデ、底部ナデ調整を施すが、底部外面ハケメ、内面中央に指頭圧痕がかすかに残る。淡赤褐色を呈し、1～2mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径15.8cm。残存高5.3cm。10の口縁部は、外方へ直線的に開き、端部は舌状におさめる。内外面にはヘラミガキが認められるが、貴壁の磨滅が著しく、詳細は不明である。黄褐色を呈し、1～3mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径15cm。残存高4.8cm。11は筒部ハケメの後外面ハケメ、筒部内面ヘラケズリ、裾部内面ハケメ調整を施す。筒部内面は、中位で稜をなし、上半は円筒形、下半は三角形をなす。筒部中央で最も器壁が厚く、1.3m前後を測る。黄褐色を呈し、胎土は粗い。裾部径12.1cm。残存高9.1cm。

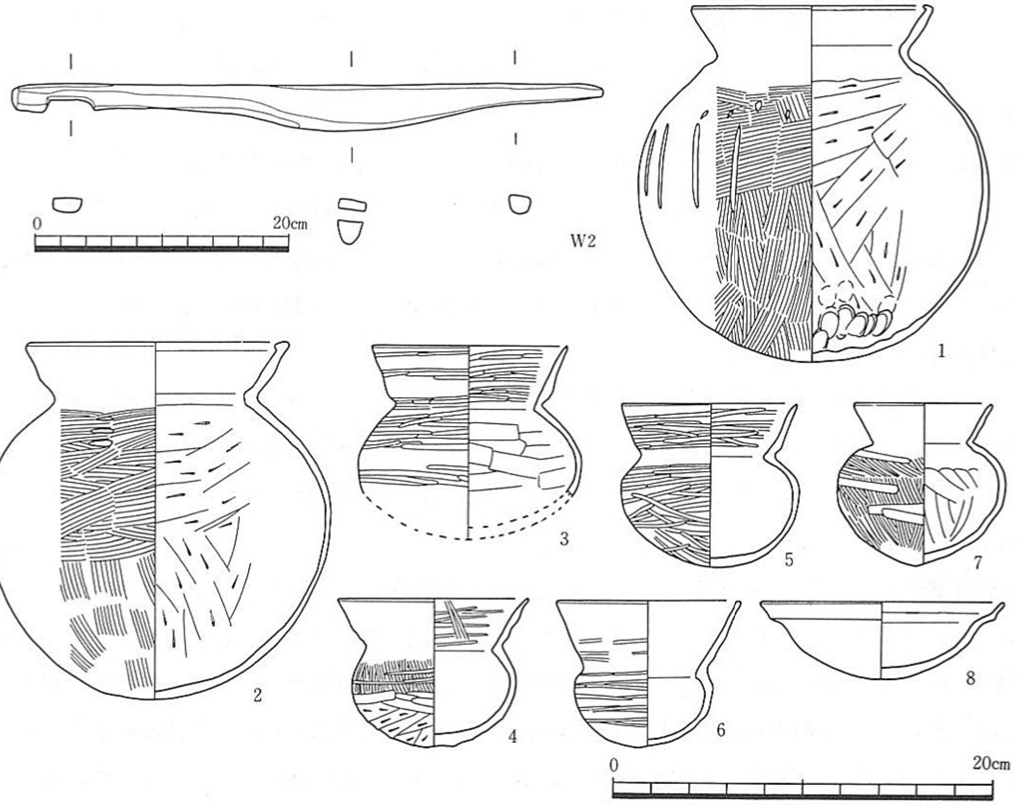
**小型丸底壺**（12～15）　12・15はB$_1$類、14はE類、13はC$_2$類である。12は、体部最大径が肩部にあり、肩部は小さく張る。口縁部は内弯して開き、端部は薄く舌状におさめる。口縁部のヘラミガキは、条痕状に粗く施される。体部外面はヘラケズリの後、肩部以下を口縁部と同様のヘラミガキを密に施し、底部はヘラケズリのままである。淡赤褐色を呈し、胎土は精良である。口径9.7cm。体部最大径7.9cm。器高7.8cm。13は、口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメの後ナデ調整を施す。底部外面にはハケメがかすかに残る。口径9.3cm。体部最大径8.9cm。器高8.4cm。14は、肩部に最大径を有し、口縁部は短く外上方へ開く。口縁部と体部外面ナデ調整、体部内面は、肩部にナデ、以下にヘラケズリ調整を施す。淡灰褐色を呈し、胎土は粗い。口径8.6cm。体部最大径10.3cm。器高8.2cm。15の口縁部は外傾して開き、端部は舌状におさめる。口縁部と体部外面上半には、細かなヘラミガキをやや粗く施し、体部下半と底部はヘラケズリ調整を施す。口縁部外面には、指頭圧痕がかすかに残る。茶褐色を呈し、胎土は精良である。口径10.1cm。体部最大径8.7cm。器高8.3cm。

木製品

W1　杵である。H－65地区、第1層上面で出土した。長さ85.9cmを測る。搗部と握部との境は不明瞭で、搗部から握部にかけて徐々に細くなる。搗部は径3.5cm。握部は径1.3cm。全体に腐朽が著しく、加工痕は観察されなかった。




第115図　ＳＤ4009出土遺物実測図

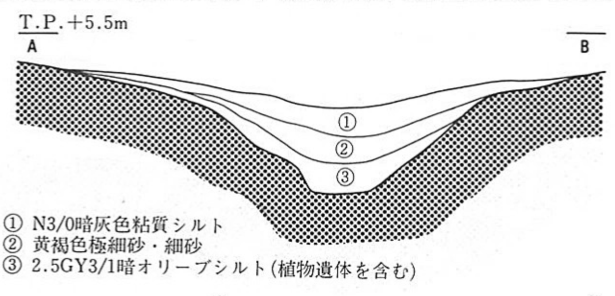



第116図　ＳＤ4009・4010出土遺物実測図

Ｗ２鳥形木製品と思われる。Ｈ－65地区、ＮＲ4001と接する付近で、尾の部分を上にして出土した。現存長48cm。厚さ2.5cmの偏平な作りである。腹部で幅3.6cm、尾部で1.5cmを測る。腹部側は丸く仕上る。腹部に一辺0.8cmの方形の貫通孔、頭部に４×10cmの方形の切り込みがなされる。

ＳＤ4010（第117図、図版23）

第１遺構面、Ｃトレンチ、Ｄ・Ｅ－67地区で検出された。ＳＤ4016と重複する。これよりも新しい。南東⇔北西方向へ直線的に延び、調査区外へ出る。総延長10.3ｍを検出した。底面は、平坦で、壁はゆるく直線的に立ち上がり、肩部と遺構面との境が不明瞭となる部分がある。肩部幅1.3～1.6ｍ、底部幅0.5ｍ、深さ0.5ｍを測る。埋土は、３層に分層される。遺物は、３層上面と３層中から出土した。




第117図　ＳＤ4010土層断面図

出土遺物（第116図、図版98・99）

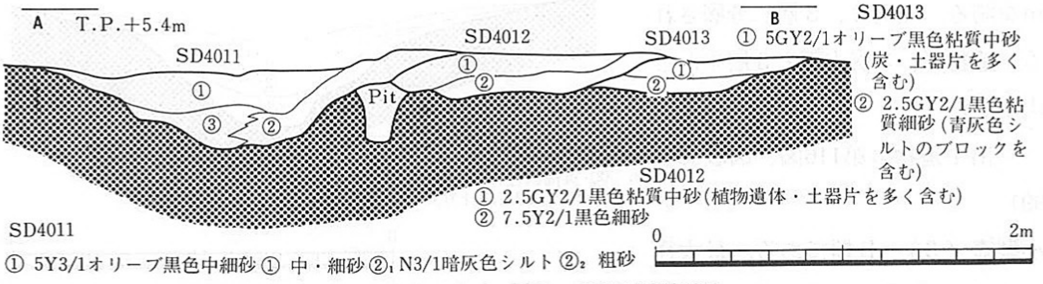
**小型壺（３）**　Ｂ類である。最大径を体部中央に持ち、偏球形のやや大

きな体部と外傾して開き、端部を薄く舌状におさめる口縁部とからなる。口縁部と体部外面はヘラミガキ調整を施す。体部上半にハケメ、体部下半にヘラケズリの跡が残る。口径10.2cm。体部最大径11.7cm。7.9cm。

**甕**（1・2） 2はCⅢ1類、1はCⅣ1類である。1の口縁端部はa1である。内方への肥厚は小さく、上端面は平坦に近い。外面のハケメは、細かく丁寧で、縦方向の後体部上半を横方向に施す。内面底部と頸部には指頭圧痕が顕著に残る。外面には、体部中央に縦方向の線刻が4本と、肩部に4個の爪状の刺突痕が認められる。淡灰褐色を呈す。口径12.8cm。器高18.7cm。2の口縁部は僅かに内弯し、口縁端部はa1である。内方の肥厚は小さい。外面のハケメは細かく、縦方向の後体部上半に横・斜方向に密に施す。内面ヘラケズリは丁寧で、器面を平滑にする。肩部外面には、ヘラ状工具による刺突痕が、縦方向に3個並ぶ。外面体部下半以下の器表面には、二次的な加熱によって器壁がはぜた個所が多く見られる。色調、胎土ともに1と酷似する。口径13.8cm。器高18.7cm。

**小型丸底壺**（4～7） 6はB1類、4はC1類、5はC2類、7はD類である。4・5は、口縁端部を舌状におさめる。4は、体部上半にハケメ、下半以下にヘラケズリ調整を施す。更に口縁部内面と体部上半外面に細かなヘラミガキを粗く施し、体部中央にナデを施す。赤褐色を呈し、胎土はやや粗い。口径10cm。体部最大径8.5cm。器高7.8cm。5は、口縁部と体部外面に丁寧なヘラミガキ調整を密に施す。赤褐色を呈し、胎土は粗い。口径9.2cm。体部最大径9.2cm。器高8.7cm。6の口縁部は、長く外上方へ開き、端部は丸くおさめる。口縁部は丁寧なヨコナデ、体部外面ヘラケズリの後細かなヘラミガキをやや粗く施す。内面はナデ調整。赤褐色を呈し、胎土は精良である。口径9.5cm。体部最大径7.1cm。器高7.8cm。7は、最大径が肩部にあり、底部が突出する球形の体部と外傾する口縁部とからなる。口縁端部は丸くおさめ、頸部内面は鋭い稜をなす。口縁部と肩部外部はヨコナデ調整、体部外面は、上半に粗い斜方向のハケメと下半以下に細かな縦方向のハケメを施した後軽くヘラナデ調整を施す。体部内面は、肩部以下にナデ調整を施す。茶褐色を呈し、胎土はやや粗い。口径7.2cm。体部最大径8.6cm。器高8.6cm。

**小型有段鉢**（8） B類である。口径に比して浅く、口縁部は短い。内外面の段も浅く丸味を持つ。口縁端部は丸くおさめる。口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリの後ナデ調整を施す。淡赤褐色を呈し、胎土は精良である。口径12.7cm。器高4.1cm。

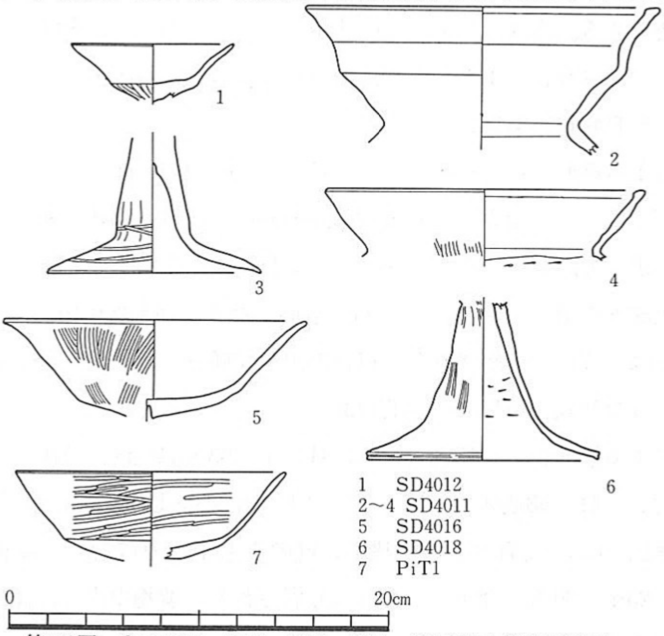


第118図 ＳＤ4010・4012・4013土層断面図

ＳＤ4011（第118図）

第１遺構面、Ｈ・Ｉ－65地区で検出された。ＳＤ4012と重複し、これよりも新しい。西側にはＳＫ4006が隣接する。南東⇔北西方向に直線的に延びる。総延長８ｍを検出した。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がり、肩部で大きく開き、遺構面との境は不明瞭となる。肩部幅2.3ｍ、底部幅0.5ｍ。深さ0.4ｍを測る。埋土は、砂とシルトで３層に大別され、遺物は、第３層中から多く出土したが、細片が多く、図化できたのは僅かであった。

出土遺物（第119図、図版99）



第119図　ＳＤ4011・4012・4016・4018・Pit１出土遺物実測図

**二重口縁壺**（２）　Ｅ類である。口縁部は内外面に段をなして直立した後外反して開く。口縁端部は、内外方に肥厚し上端は平坦な面となる。内外面ヨコナデ調整を施す。灰オリーブ色を呈し、胎土は粗い。口径18.7cm。残存高7.8cm。

**甕**（４）　ＣⅠ類である。口縁端部は$a_1$である。口縁部は、長く外傾して開く。口径17.2cm。残存高3.8cm。

**高坏**（３）　Ｂ類の脚部である。裾部との境には丸みを持ち、裾端部は舌状におさめる。筒部はナデ調整、裾部はナデ調整の後条痕状のヘラミガキを粗く施す。淡赤褐色を呈し、胎土はやや粗い。裾部径11.3cm。残存高7.3cm。

ＳＤ4012（第118図）

第１遺構面、Ｃ－13トレンチ、Ｈ－65地区で検出した。ＳＤ4011の東南側でこれと平行して位置する。ＳＤ4011と重複し、これよりも古い。底部幅0.6ｍ、深さ0.1ｍが残存する。総延長５ｍを検出した。埋土は、２層に大別され、第１層中からは、多くの土器細片が出土した。

出土遺物（第119図、図版99）

**高坏**（１）　坏部口径8.6cm、残存高3.1cmのミニチュアの高坏で、脚部を欠損する。外面底部との境には稜をなし、口縁部は外反して開き、端部は舌状におさめる。外面稜には丸みを持つ。口縁部と底部内面はヨコナデ、底部外面ヘラケズリの後ナデ調整を施す。灰褐色を呈し、胎土はやや粗い。

SD4013（第118図）

第1遺構面、C－13トレンチ、H・I－65地区で検出した。SD4012の南東側に位置し、これと重複する。SD4012よりも古い。総延長8mを検出した。底部幅0.08m、深さ0.04mを測る浅い溝である。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上り、底面との境は不明瞭である。埋土は、2層に分層され、第1層中からは、多くの土器細片が出土したが、図示できるものはなかった。

SD4014（第102図）

第1遺構面、C－13トレンチ、H・I－65地区で検出した。SD4005の西側に位置し、これとほぼ平行して、南東⇔北西方向に直線的に延びる。総延長約7mを検出した。南東側を近現代井戸によって削平される。調査区外へは更に延びる。底面は狭く平坦で、壁の立ち上がりは急である。底部との境は不明瞭で、断面U字形をなす。肩部幅0.9m、底部幅0.4m、深さ0.4mを測る。埋土は、3層に分層される。遺物の出土は僅かで、図示できるものもなかった。

SD4015（第120図、図版32）

第1遺構面、C－13トレンチ、H・I－63・64地区で検出した。SK4005と重複し、これよりも古い。H－63地区でゆるくカーブして南東⇔北西方向へ延びる。直線距離にして総延長9.5mを検出した。底面は平坦で狭く、壁の立ち上がりは急で、断面台形を呈す。肩部幅0.3m、深さ0.25mを測る。埋土は、2層に分層される。遺物の出土は僅かで、図示できるものはなかった。

SD4016（第120図）

第1遺構面、C・C－4トレンチ、E～G－66・67地区で検出した。SD4010・4023と重複し、SD4010よりも古く、SD4023よりも新しい。総延長11m。西側は調査区外にある。西北と南東側の壁は舟底状にゆるく、東側壁は2段になって立ち上がる。肩部3.2m、底部幅1.9m、深さ0.58mを検出した。埋土は、3層に大別される。遺物の出土は僅かで、図示できたのは1点のみであった。

出土遺物（第119図）

**高坏（5）** II$B_2$類である。口縁部は僅かに外反して開き、端部は丸くおさめる。外面は、底部から縦方向のハケメ調整を粗く施し、内面は、ヨコナデ調整を施す。にぶい黄灰色を呈し、胎土はやや粗い口径15.8cm。残存高5.2cm。

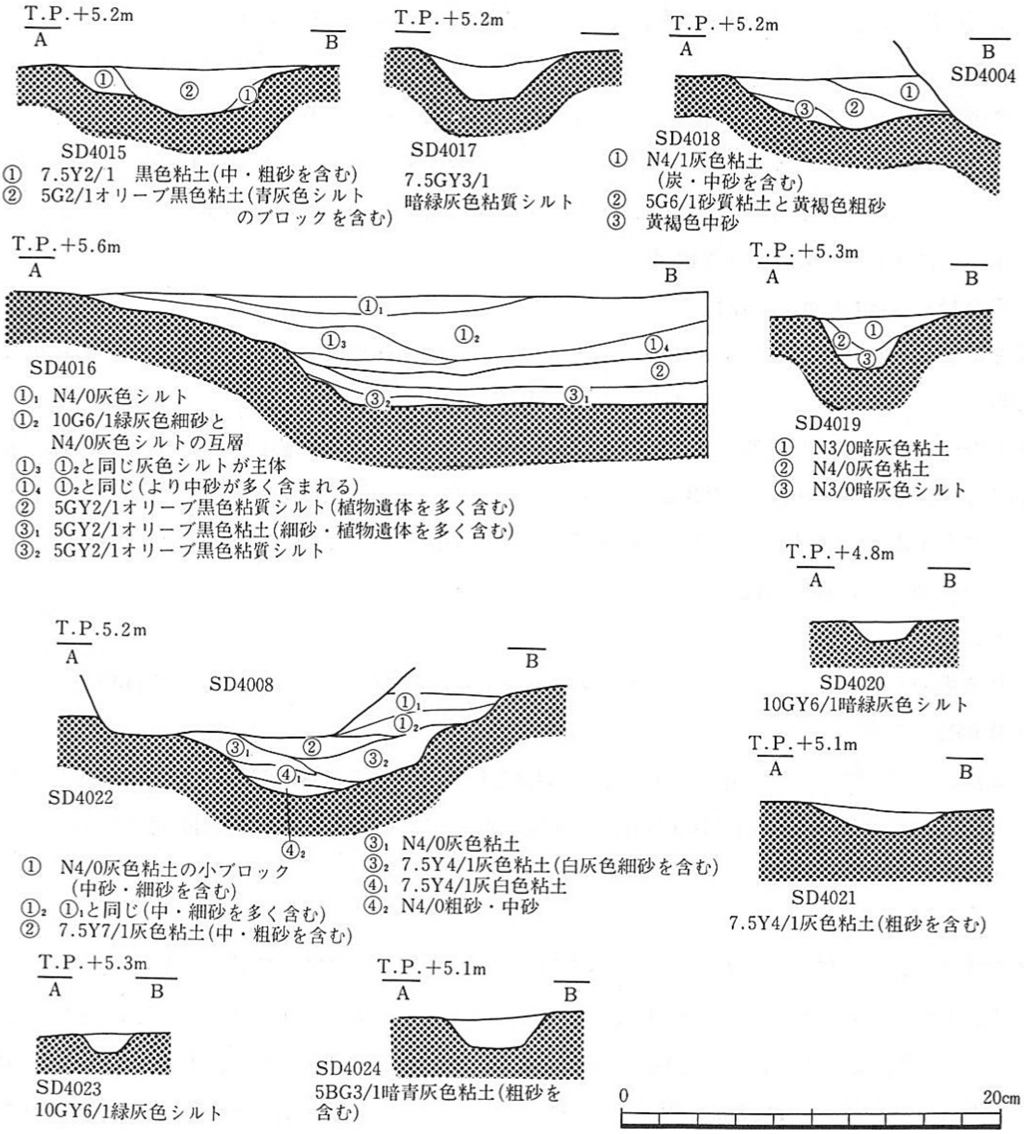
SD4017（第120図）

第2遺構面、C・C－2、C－13トレンチ、D～I－59～60地区で検出した。SK4007・4008と重複し、これよりも古い。南東⇔北西方向に直線的に延びる溝である。北西端の延長上にあるC－1トレンチでは、これの続きを確認する事はできなかった。総延長25mを検出し、南東端は更に調査区外に延びる。底面は狭く、平坦である。肩部幅0.5～0.7m底部幅0.3m、深さ0.2mを測る。C－2トレンチ、F・G－59地区では、底面と壁の境は不明瞭となる。埋土は、粗砂を多く含む粘質シルトの1層である。遺物の出土は、H・I－59地区で土器の細片が少量出土したのみで、図示できるものはなかった。

ＳＤ4018（第120図）

第２遺構面、Ｃトレンチ、Ｄ・Ｅ－63地区で検出した。ＳＤ4004によって東側を削平される。ＳＤ4004とほぼ平行する。総延長10.3ｍを検出した。底面は舟底状をなし、壁との境は不明瞭である。肩部幅1.0ｍ、底部幅0.5～0.7ｍが残存し、深さ0.25ｍを測る。埋土は、３層に分層される。遺物の出土は僅かであった。

高坏（６）　脚部$C_3$類である。裾端部は断面四角形におさめる。脚柱部外面をハケメ調整の後全体にナデ調整を施す。裾部径12.6cm。残存高8.4cm。




第120図　ＳＤ4015～4024土層断面図

ＳＤ4019（第120図、図版32）

第２遺構面、Ｃトレンチ、Ｄ・Ｅ－63地区で検出した。ＳＤ4014のほぼ延長上に位置するが、埋土が全く異なる。総延長10ｍを検出した。底面は平坦で、断面逆台形をなす。肩部幅0.7ｍ、底部幅0.2ｍ、深さ0.3ｍを測る小溝である。埋土は暗灰色粘土で、3層に細分される。遺物は出土しなかった。

ＳＤ4020（第120図）

Ｃトレンチ、Ｄ・Ｅ－64地区、ＳＤ4007の底面で検出された。ＳＤ4007と平行して、直線的に延びる。北西方向へは更に調査区外へ延びるが、南東端は、ＳＤ4007によって削平されてなくなる。肩部幅0.5～0.7ｍ、底部幅0.2～0.4ｍ、深さ0.1ｍを測る。遺物は出土しなかった。

ＳＤ4021（第120図）

第２遺構面、Ｃ・Ｃ－３・11トレンチ、Ａ～Ｄ－65地区で検出された。南東端でＳＤ4022と重複し、ＳＤ4022によって削平される。北西端は更に調査区外へ延びる。総延長19.5ｍを検出した。肩部幅0.6～0.7ｍ、肩部幅0.2～0.4ｍ、深さ0.1～0.2ｍの断面逆台形の小溝である。埋土は、粗砂を僅かに含む灰色粘土の１層である。遺物は出土しなかった。

ＳＤ4022（第120図、図版32）

第２遺構面、Ｃ・Ｃ－３・４・13トレンチ、Ｃ～Ｈ－65・66地区である。検出した。ＳＢ4001と重複し、これよりも古い。Ｃ－４トレンチ南東部から北北西へ延びた後ＣトレンチＤ－65地区で向きを西方向に変え直線的に延び、調査区外へ出る。総延長は累計約18ｍを検出した。肩部幅1.8ｍ、底部幅0.4～0.6ｍ、深さ0.5～0.3ｍを測り、Ｃ－４トレンチ南東部で最も深い。埋土は、砂を主とするが、各地点で異なり、Ｄ・Ｅ－65・66地区では、４層に大別された。遺物の出土は僅かで、図示できるものはなかった。

ＳＤ4023（第120図）

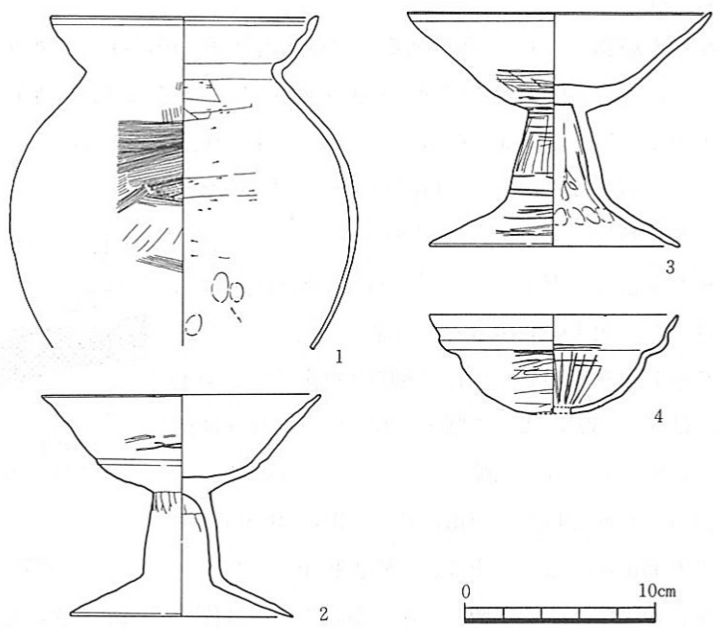
第２遺構面、Ｃ・Ｃ－４トレンチ、Ｅ～Ｇ－65・66地区で検出した。南東端でＳＤ4022に続く。ＳＢ4001と重複し、これよりも古い。南東よりゆるくカーブしながら北北西方向へ延びる。北北西端は、ＳＤ4009によって削平され、ＳＤ4009より北側Ｄ－66地区では検出されなかった。総延長約13.5ｍを検出した。肩部幅0.3ｍ、底部幅0.2ｍ、深さ0.1ｍの小溝で、断面逆台形をなす。埋土は、中砂を含む緑灰色シルトの１層である。遺物は出土しなかった。

ＳＤ4024（第120図）

第２遺構面、Ｃ－13トレンチ、Ｈ・Ｉ－65地区で検出した。上半はＳＫ6006によって削平される。南東⇔北西に直線的に延びる。南東端は近現代井戸によって削平され、北西端は調査区外へ延びる。総延長5ｍを検出した。肩部幅0.5ｍ、底部幅0.2～0.3ｍの断面台形をなす小溝で、深さ0.2ｍを測る。埋土は、ＳＤ4023と同様、中・細砂を多く含む緑灰色粘土の１層のみである。遺物は、土器の細片が少量出土したのみである。

ＳＤ4025

第２遺構面、Ｃ－４・13トレンチ、Ｇ・Ｈ－65・66地区で検出した。東北東⇔西北西方向へ延びる溝で、西側はＮＲ4001によって削平され、東側はＳＤ4022へ続く。総延長約5.0ｍを検出した。底部幅0.2～0.4ｍ、肩部幅0.7～0.9ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土は、中・細砂の１層のみで、溝埋土の直上には暗灰色粘土が堆積し、暗灰色粘土中より、ＳＱ4002とその上から田舟と思われる木製品が出土した。溝中からの遺物の出土はない。



第121図　ＳＤ4026出土遺物実測図

ＳＤ4026（図版27）

第２遺構面、Ｆトレンチ、Ｆ　　15地区で検出した。南東⇔北西に直線的に延びる溝で、総延長6.1ｍを検出した。南東部にはＳＫ4011が近接する。肩部幅0.4ｍ、底部幅0.2ｍ、深さ0.2ｍを測る。埋土は、黒色粘土に細砂・炭が多く含まれる１層である。層中位から土器群が出土している。その他には、焼骨の小片なども出土している。

出土遺物（第121図、図版100）

**甕**（１）　CⅢ2類である。口縁部は内弯して開き、口縁端部はａ1である。外面は、縦方向の粗いハケメの後横・斜方向に細かなハケメが施される。体部下半内面には指頭圧痕が残る。にぶい橙色を呈し、胎土はやや粗い。口径14.2cm。残存高17.3cm。

**高坏**（２・３）　２は、ⅡＢ1類で、Ｂ2類の脚部が付く。坏部外面には浅い段を持つ。口縁部は僅かに外反して開き、端部は薄く舌状におさめる。坏部内面、口縁部と底部の境は不明瞭である。脚部は、坏部に比してやや低い。裾端部は、口縁端部と同様に薄く舌状におさめる。内外面は丁寧なナデ調整で、口縁部外面にはヘラミガキが粗く施される。筒部内面にはしぼり目が残る。にぶい橙色を呈し、２mm大の砂粒を含み胎土は粗い。口径11.7cm。裾部径11.6cm。器高11.7cm。

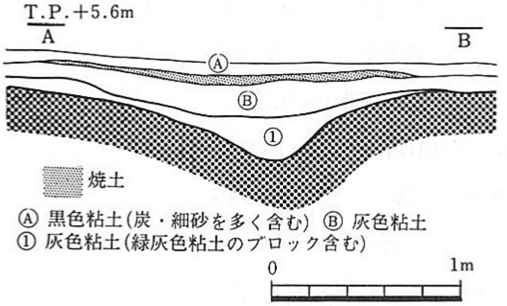
３はⅡＡ2類で、Ｂ1類の脚部が付く。口縁部と裾部の端部は舌状におさめる。坏部は、ヘラナデの後底部内外面に細かなヘラミガキをやや粗く施す。脚部は、筒部外面上半ヘラナデ、裾部ヨコナデの後外面に坏部と同様のヘラナデ調整を施す。筒部内面にはしぼり目、内面裾部との境には指頭圧痕を残す。にぶい橙色を呈し、２と同様の胎土で粗い。口径13.1cm。裾部径13cm。器高

12.3cm。

**小型有段鉢**（４）　A類である。口縁部内外面の段は深く、丸みを持つ。口縁部外面は強いヨコナデによって凹線状に窪む。体部外面ヘラケズリの後体部上半口縁部直下に横方向の細かなヘラミガキを施す。内面は横方向のヘラミガキの後暗文風の細いヘラミガキを放射状に施す。橙色を呈し、胎土はやや粗い。口径12.8cm。器高5.25cm。

ＳＤ4027（第122図、図版27）

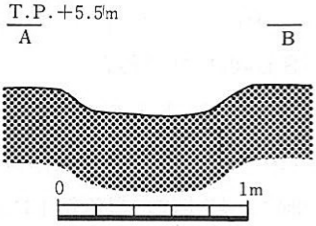
第２遺構面、ＦトレンチＦ・Ｇ－118地区で検出された。南東⇔北西方向に直線的に延びる。総延長を45mを検出した。ＳＢ4003と重複する。南東端はＮＲ4003によって削平されている。底面は狭く、壁との境は不明瞭で、壁はなだらかに立ち上がる。肩部幅1.2～1.8m、底部幅0.3～0.5m、深さ0.35mを測る。埋土は、緑灰色粘土のブロックを含む灰色粘土の１層である。遺物の出土は僅かで図示できるものはなかった。



第122図　ＳＤ4027土層断面図

ＳＤ4028（第122図、図版27）

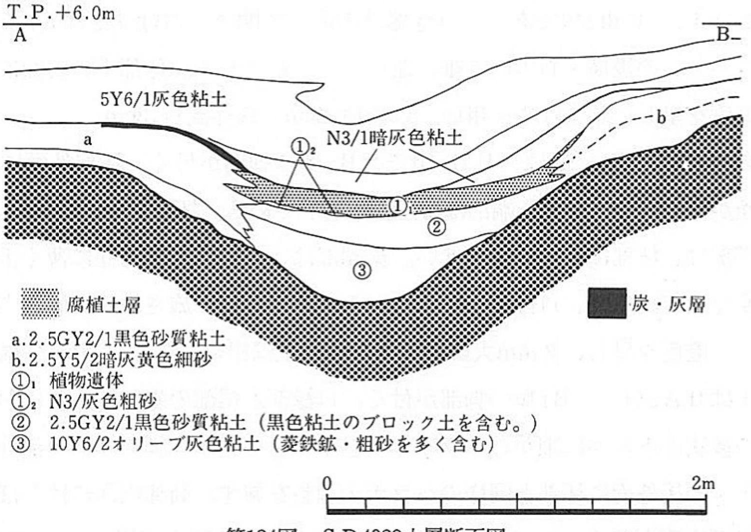
第２遺構面、Ｆトレンチ、Ｆ・Ｇ－118地区で検出された。ＳＢ4003と重複し、これよりも新しい。ＳＤ4027の西側1.8～2.0mに位置し、ＳＤ4027と平行して南東⇔北西方向に延びる。南東端はＮＲ4003によって削平される。総延長4.0mを検出した。肩部幅0.6～0.9m、底部幅0.3～0.6m、深さ0.15mを測る。埋土は、灰色粘土の１層である。遺物の出土は僅かである。



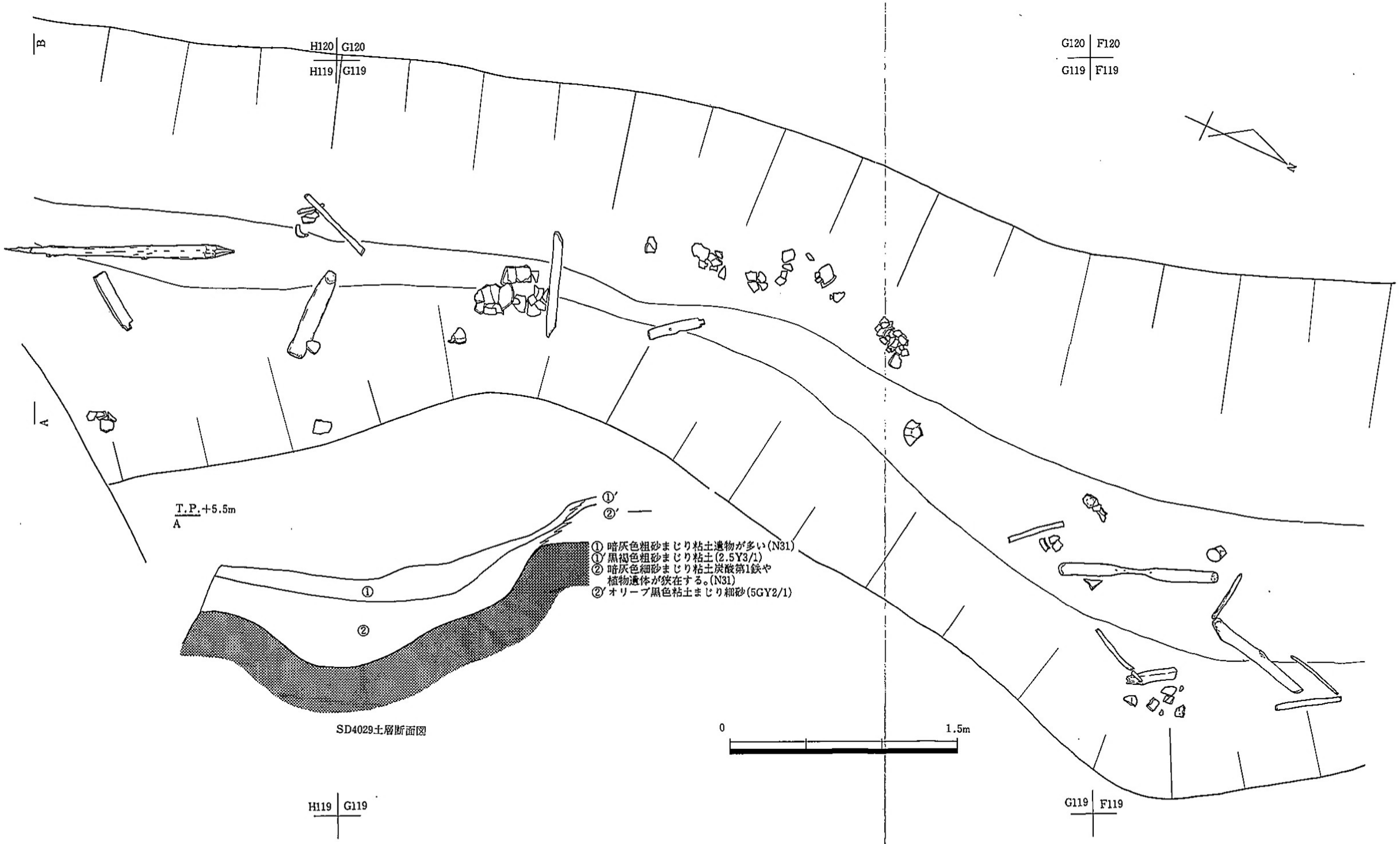
第123図　ＳＤ4028土層断面図

ＳＤ4029（第124・125図、図版33・34）

第２遺構面、Ｆトレンチ、Ｆ～Ｈ－119地区で検出した。南⇔北方向に僅かに蛇行しながら延び、調査区外へ出る。総延長約11mを検出した。溝底は狭く平坦で、壁との境は不明瞭で、壁はゆるやかに立ち上がる。肩部幅2.1～2.6m、底部幅0.5～1.0m、深さ0.8mを測る。肩部には、炭の薄層



第124図　ＳＤ4029土層断面図




第125図　ＳＤ4029遺物出土状況

が垂れ込むように堆積している個所もあった。埋土は、３層に大別され、最上層には、腐植土層が堆積する。各層より多くの遺物が出土した。

出土遺物（第126～128図、図版100・101）

**二重口縁壺**（21）　E類と思われる。内外面の段、突帯は明瞭で、口縁部は外反して開き、端部は舌状におさめる。にぶい黄橙色を呈し、胎土はやや粗い。口径19cm。残存高5.35cm。

**広口壺**（22・23）　$D_4$ 類である。胎土も粗く、調整も粗雑である。22は、体部外面ヘラナデ、内面肩部に指ナデ調整を施す。暗灰黄色を呈す。口径16cm。残存高17.3cm。23は、口縁部が上方へ真っすぐ立ち上がり、肩部は撫で肩をなす。口縁端部は舌状に薄くおさめる。外面と肩部内面には、幅２～３mmの粗いハケメ調整を施す。淡赤橙色を呈す。口径11.8cm。残存高11.6cm。

**甕**（１～３・５～16）　１～３・５～８はB類、９～16はC類である。３は、撫で肩をなす小型の甕で口径13.3cm。残存高7.2cmを測る。体部外面は斜め方向のハケメ調整で、内面ヘラケズリは頸部直下にとどまる。$B_2$類である。５は$B_1$類である。口縁部内面と体部外面には細かなハケメ調整を施し、体部内面ヘラケズリは頸部に及び、稜をなす。肩部は、撫で肩となる。黄灰色を呈す。口径13cm。残存高10.4cm。７は$B_1$類である。口縁部内面と体部外面にはやや粗いハケメ調整を施し、体部内面ヘラケズリは頸部に及ぶ。外面には煤が厚く付着する。にぶい黄橙色を呈す。口径16.3cm。残存高17cm。１は、$B_4$ 類で、口縁部は長く外傾して開き、端部は$b_1$である。外面体部上半に横方向、下半に縦・斜方向の細かなハケメを施す。口縁部から肩部はヨコナデ調整で、肩部外面には、３個の刺突痕が認められる。灰黄褐色を呈し、胎土は粗い。口径13.4cm。器高14.1cm。９はCⅣ$_2$類、12はCⅣ類、15はCⅣ$_2$類である。９の口縁端部は$a_2$で、上端面は僅かに窪む。外面ハケメ調整は粗く、斜方向に施される。体部内面上半には指頭圧痕顕著に認められる。口径12.8cm。残存高12.7cm。12の口縁部は短く、端部は$b_1$である。口径13.7cm。15の肩部外面には、沈線が１条巡る。口縁端部は$a_1$で、上端面は丸みを持つ。体部外面のハケメはやや粗く、縦方向の後体部上半に横方向に施す。にぶい黄橙色を呈す。口径12.8cm。残存高15.5cm。11・13・14はCⅢ類である。11は口縁端部$b_4$ で、口径15.3cm。13は口縁端部$a_1$で、口径14.4cm。14は口縁端部$a_1$で、口径15.6cm。10はCⅡ$_1$類である。口縁部は短く内弯して開き、口縁端部は$a_1$類で内方への肥厚は小さい。体部外面のハケメは粗く、縦方向の後肩部を横方向に施す。暗灰黄色を呈し、１～２mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径16.2cm。残存高10.6cm。16はCⅡ$_2$類である。口縁部は長く外傾して開き、口縁端部は$a_3$である。体部外面のハケメ調整は細かく丁寧で、底部を横方向の後体部中央を縦方向、体部上半を横方向に施す。内面ヘラケズリは丁寧で、器壁を平滑にする。口径16.3cm。残存高24.7cm。

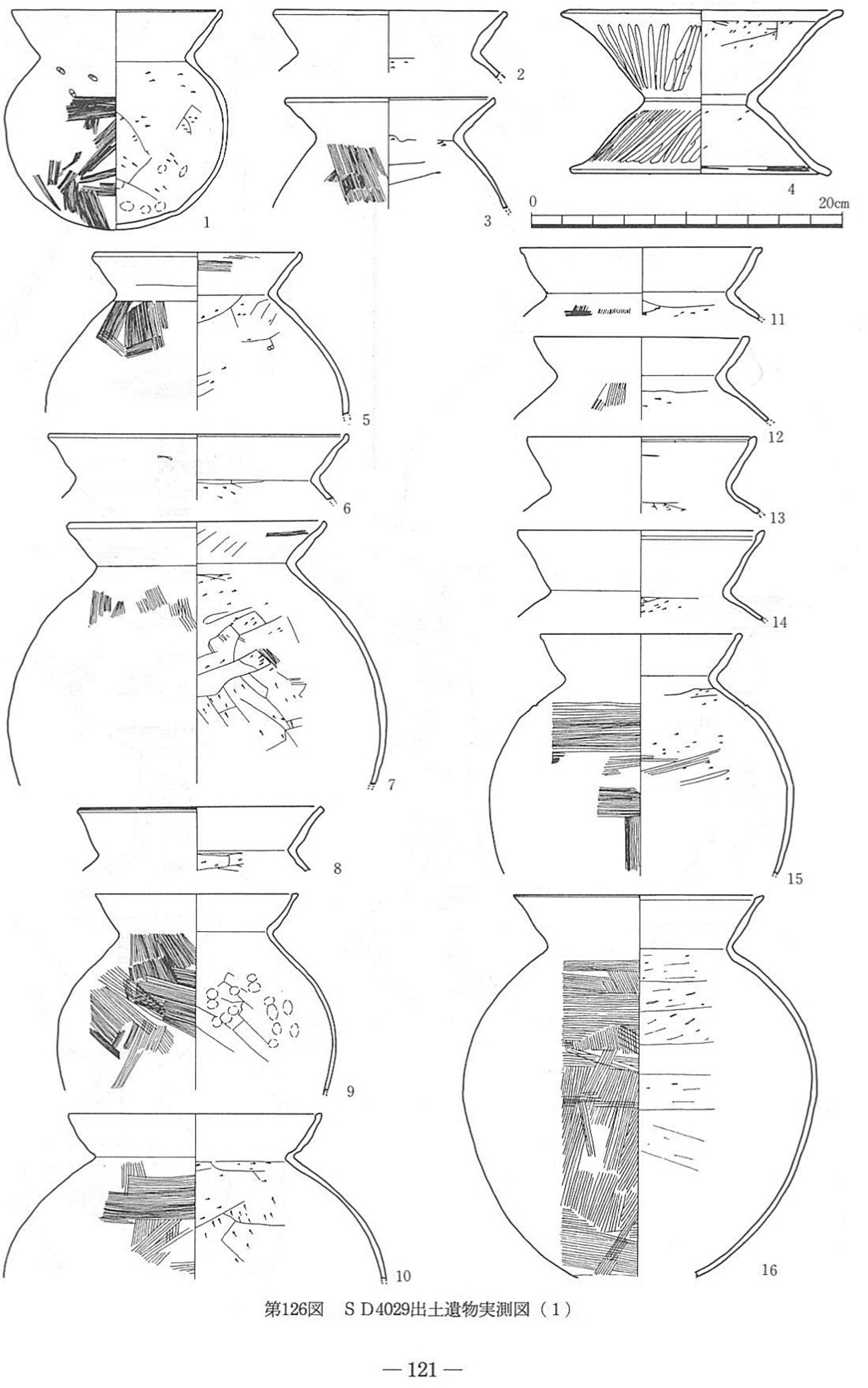
**高坏**（24～31）　25・26はⅡ$B_1$類、27・28はⅡ$A_2$類、31はⅡ$A_1$類、29はA類の脚部、30は$B_2$類の脚部である。25・26は坏部外面に稜を持つが、稜は不明瞭となる。25の口縁端部は薄く舌状におさめる。口縁部丁寧なヨコナデ、底部外面ヘラケズリの後内外面に細かなヘラミガキをやや粗く施す。にぶい黄橙色を呈し、胎土は精良である。口径17.2cm。残存高5.3cm。26には、$A_3$

類の脚部が付く。坏部内面の口縁部と底部の境は不明瞭となる。口縁部ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ、口縁部ヘラミガキを施す。筒部内面上半にはしぼり目を残す。にぶい赤褐色を呈し、胎土は粗い。口径16.4cm。残存高9.0cm。27・28の口縁部は、外上方へ僅かに外反して長く開き、深い坏部をなす。口縁端部は薄い舌状をなす。27は$A_2$類の脚部が付く。ヨコナデの後細かなヘラミガキをやや粗く施す。筒部内面には、しぼり目と指頭圧痕を残す。赤褐色を呈す。口径17cm。残存高12.2cm。28も27と同様のヘラミガキを施す。口縁部内面にハケメ、底部外面ヘラケズリの跡が認められる。灰黄褐色を呈し、細砂を多く含む。口径16.6cm。残存高5.8cm。31には$A_2$類の脚部が付く。口縁部ヨコナデ、底部外面ヘラケズリの後細かなヘラミガキを密に施す。脚部は、筒部外面ヘラケズリの後ヘラミガキを粗く施す。筒部内面にはしぼり目をそのまま残し、裾部内面はナデ調整を施す。裾部には、円形の透し孔を３方に穿孔する。灰黄褐色を呈し、１～２mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径16.8cm。裾部径12.5cm。器高15.5cm。29の裾部は高く、「ハ」の字に開き端部は薄く舌状におさめる。裾部には円形の透し孔が穿孔される。裾部径12.1cm。残存高9.2cm。30は筒部上半が中実で、下半にはしぼり目が残る。裾部は屈曲して開き、端部は薄く舌状におさめる。裾部内面には布目の圧痕が見られる。裾部径12.6cm。残存高9.2cm。

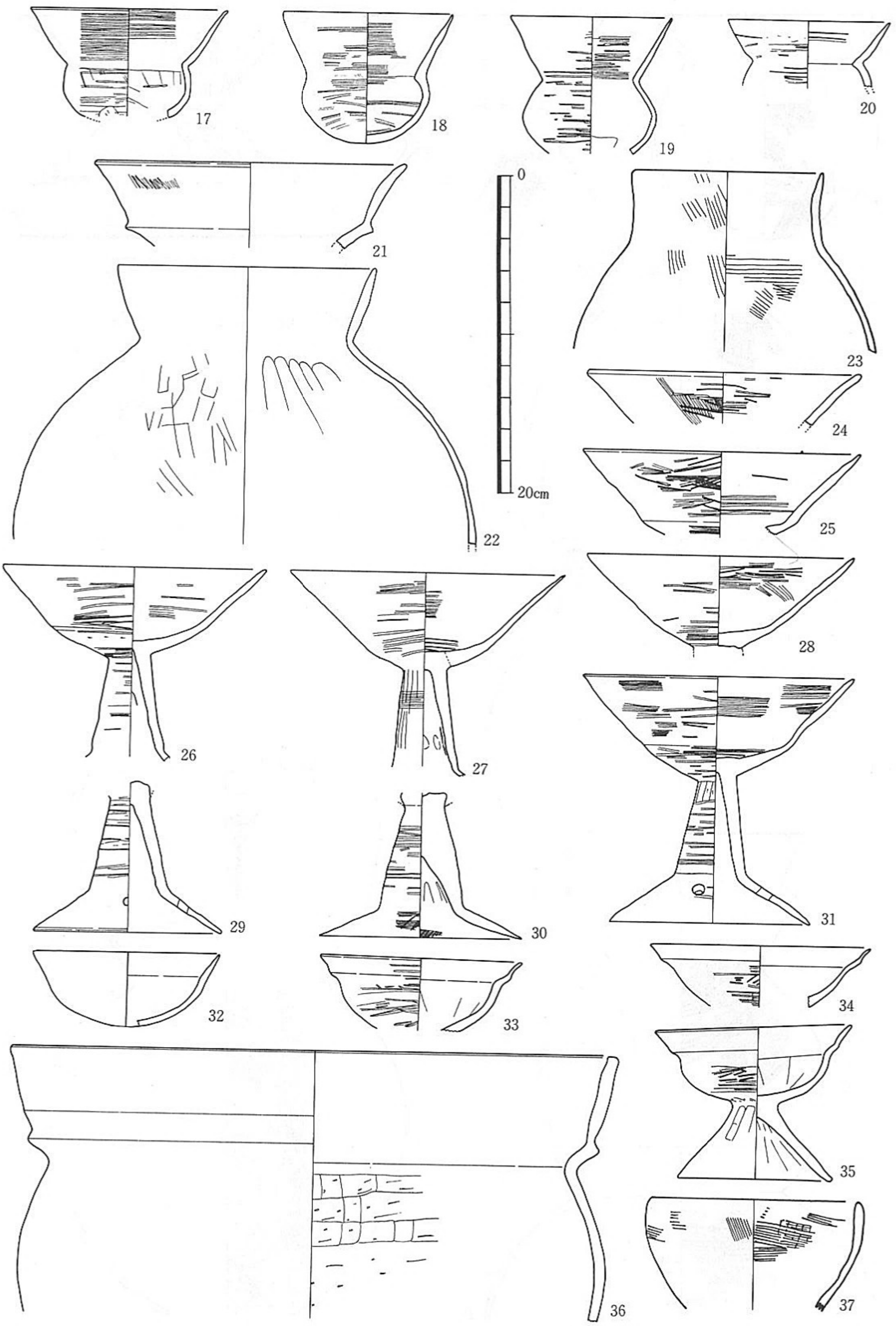
**鉢**（32・36・37）　32はII$B_1$類である。口縁部はヨコナデによって、薄く舌状をなし、内面体部との境には稜をなす。器壁の磨滅が著しく、調整については明らかでない。にぶい黄橙色を呈し、胎土は精良である。口径11.6cm。残存高4.6cm。36は、大型の鉢ＩＢ類である。口縁部内外面の段は明瞭で、口縁部は、接合部でくびれ、上方へ立ち上がる。口縁端部は、内方へ僅かに肥厚し、上端は平坦な面をなす。にぶい黄橙色を呈し、胎土は粗い。口径37.5cm。残存高15.8cm。37は、胎土、調整ともに粗雑なつくりである。僅かに内弯して外上方へ立ち上がる体部から、口縁部は器壁を増して上方へ開き、端部は舌状におさめる。灰黄色を呈す。口径12.8cm。残存高6.9cm。

**器台**（４）　いわゆる山陰系の鼓形器台である。受け部と脚部の境にある外面タガが消失したもので、青木編年の第Ⅶ期に相当するものと考える。[2]

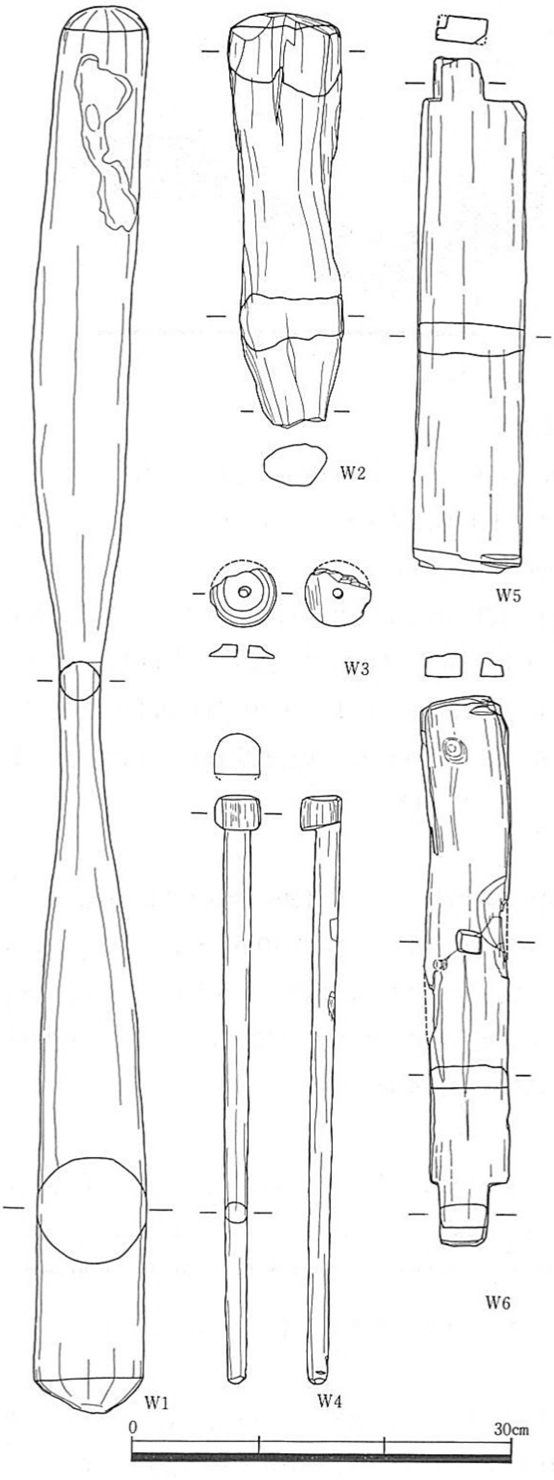
**小型丸底壺**（17～20）　17は$A_2$類、18・19は$B_1$類である。17の口縁部は、内弯気味に上方へ大きく開き、端部は小さく外反して舌状におさめる。口縁部のヘラミガキは、細かく丁寧で密に施す。体部外面は、ヘラケズリの後細かなヘラミガキをやや粗く施し、底部にヘラケズリ痕を残す。体部外面上半にはかすかにハケメの跡が認められる。にぶい黄橙色を呈し、胎土は精良である。口径12.4cm。体部最大径7.9cm。残存高6.9cm。18は体部外面ヘラケズリの後全体に細かなヘラミガキを粗く施す。頸部外面には、細かなハケメが残る。灰黄褐色を呈し、胎土は精良である。口径10.6cm。体部最大径7.9cm。器高8.2cm。19の口縁部は外傾して開き、体部は、撫で肩で最大径が体部中央より下にあり、下膨れの偏球形となる。口縁部と体部外面のヘラミガキは細かく丁寧である。灰白色を呈し、胎土は精良である。口径10.1cm。体部最大径8.3cm。残存高8.6cm。




第126図　ＳＤ4029出土遺物実測図（１）




第127図　ＳＤ4029出土遺物実測図（２）




第128図　ＳＤ4029出土遺物実測図（３）

20は、口縁部の約３分の１の破片で体部下半を欠損する。口縁部は短く外傾して開き、薄く舌状におさめる。B2類と思われる。口径10cm。残存高4.15cm。

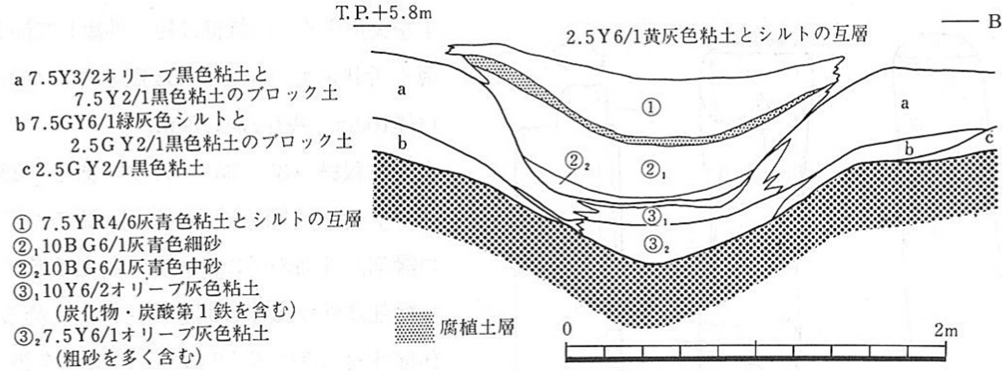
**小型有段鉢**（33～35）　Ａ類である。35は「ハ」の字に開く脚が付くA1類である。口縁部内外面の段には丸味を持ち明瞭で、口縁部は外反気味に開き舌状におさめる。体部外面ヘラケズリの後ヘラミガキを施す。その他はヘラナデ調整を施す。淡赤橙色を呈す。口径12.25cm。脚部径9.8cm。器高9.9cm。33・34は、体部内外面に細かく丁寧なヘラミガキを施し、胎土も精良である。口縁部内外面の段は明瞭で、口縁部は外反して薄く舌状におさめる。33は灰白色を呈す。口径12.7cm。残存高3.5cm。34は、灰白色を呈す。口径13.8cm。残存高3.8cm。

木製品

Ｗ１　杵である。現存長111.7cm。搗部と握部の境は不明瞭で、搗部から握部にかけて徐々に細くなる。握部で径3.0cm、搗部は、一方が径6.7cm、一方が8.5cmを測る。全体に調整は雑で、握部の一部には、樹皮が残る。

Ｗ２　用途不明の木製品である。腐朽が著しく加工痕は不明瞭である。現存長32.8cm。幅8.1cm。厚さ3.5～5.5cmを測る。一端で徐々に細くなり、５×３cmの楕円形を呈す。一方は、先端がやや丸味をもつ。杵の搗部とも考えられる。

Ｗ３　紡錘車である。断面台形をなす。上端は径3.2cm。下端は径5.2cm。厚さ0.9cmを測る。側辺は僅かに外反して開き、端部で0.3cmの縁をなす。貫通孔は、上端で




第129図　SD4030土層断面図

1.0cm、下端で0.7cmを測り、やや斜めにあけられる。

W4　杓子の未製品である。現存長46.5cm。柄と身は一木で、柄は身に対して垂直に付く。柄は長く、48cmを測る。径1.8cm。柄の先端には加工痕が認められる。身の部分は、裏面を平坦に削り、表面は、楕円形に作る。身は深さ3.0cmで、底は平坦となる。

W5　用途不明の木製品である。現存長40.8cm、幅8.5cm、厚さ2.5cmの板材で、一端を、幅4cm、厚さ2cmの方形の突起をつくりだす。現存長3.4cm。突起は、中央より約15cmずれている。

W6　用途不明の木製品である。現存長43.5cm、幅6.4cm、厚さ1.7cmの板材を加工したものである。一端には、幅3.8cm、厚さ1.8cmの突起がつくりだされる。現存長5.0cm。更に、突起基部より18cmの所には、一辺1.5cmの方形の穴が貫通して設けられる。

SD4030（第129図、図版33・34）

第2遺構面、Fトレンチ、F～G－120・121地区で検出した。SD4029の西約3.3mに位置する。南南東⇔北北西方向へ、ほぼ直線的に延び、調査区外へ出る。総延長10mを検出した。肩部幅2.1～2.5m、底部幅0.4～0.6m、深さ0.6～0.9mを測る。埋土は、3層に大別され、最上層には、植物遺体の薄層が堆積する。埋土の状況から、第2層－砂の堆積する時期と第3層－粘土の堆積する時期の2時期があったと考えられる。遺物の出土量は少ない。

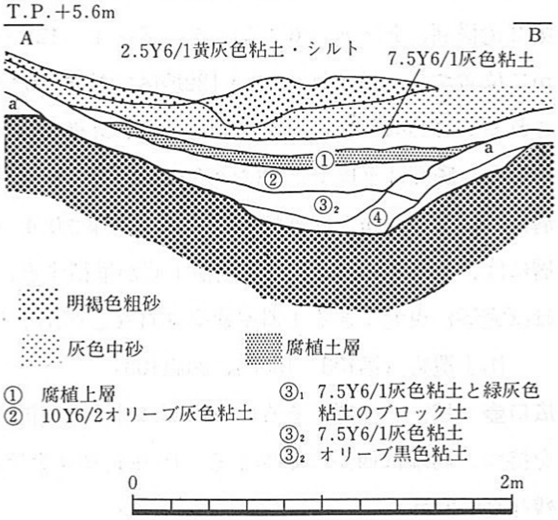
出土土器（第133図、図版132）

**広口壺**（1・2）　A$_1$類である。1の口縁部は僅かに外反して外上方へ大きく開き、口縁端部は断面四角形におさめる。口縁部と体部外面のハケメは、粗く施される。口径19.8cm。残存高22.5cm。2の口縁部は、外反して開き、口縁端部は四角形をなし端部は上方へ小さく肥厚する。外傾する面は、凹線状に窪む。淡橙色を呈し、1～3mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径18.9cm。残存高7.5cm。

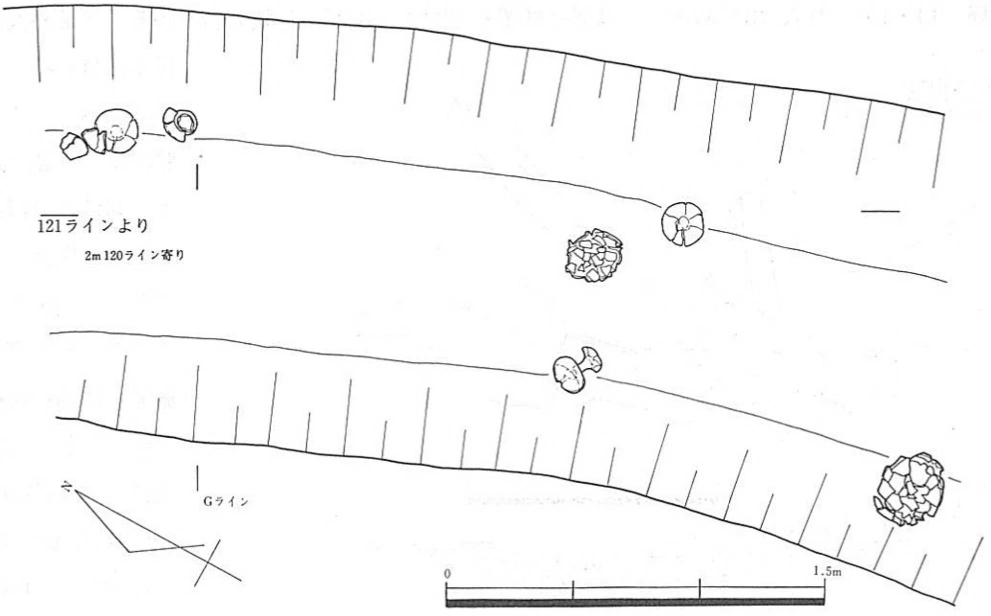
**甕**（3～7）　3・7はC類、4～6はB類である。3はCⅣ$_1$類である。口縁部は、内彎して開き、端部は$a_1$である。内方の肥厚は小さい。体部外面のハケメは、細かく縦方向の後横方向に施し、その後軽くナデ調整を施す。内面ヘラケズリは丁寧で、器壁は平滑となる。灰白色を呈し、

胎土はやや粗い。口径13.5cm。残存高11.6cm。7は、CⅢ$_1$類である。口縁部は外傾して開き、口縁端部は$a_2$で、上端は僅かに内傾し、丸味を持つ。体部外面のハケメは、丁寧に縦方向の後体部上半に横方向に施す。体部内面のヘラケズリも丁寧で、器壁は平滑となる。口径15.4cm。器高22cm。4の肩部外面には、縦方向のハケメが施される。頸部内面の稜は鋭い。口径14.5cm。残存高4.3cm。5は、口径13.2cm。6は、口径13.8cm。

高坏（8・9）　ⅡA$_1$類である。9は、坏部外面に浅い段をなし、口縁部は外傾して長く開き深い坏部をなす。口縁端部は薄く舌状におさめる。A$_2$類の脚部が付く。内外面には、細かなヘラミガキを密に丁寧に施す。筒部内面はしぼり目をそのまま残し、裾部内面はナデ調整を施す。裾部外面には、円形の透し穴が3方に穿孔される。淡橙色を呈し、胎土中には1～2mm大の砂粒を多く含み、やや粗い。口径17.1cm。裾部径12.4cm。器高15.6cm。8の坏部外面の稜は鋭く、口縁部は外上方へ外反気味に開き、端部は舌状におさめる。器表面の磨滅が著しく、内外面のヘラミガキの詳細は明らかでない。観察されるヘラミガキは細かく丁寧である。灰黄褐色を呈し、胎土はやや粗い。口径16.9cm。残存高6.1cm。




第130図　SD4031土層断面図




第131図　SD4031遺物出土状況図（1）

**小型丸底壺**（10・11）　$B_1$類である。10は、肩部は小さく張る算盤玉状をなす。口縁部は、外傾して開き、端部は舌状におさめる。口縁部と肩部外面ヨコナデ、外面肩部以下に、細いヘラミガキをやや粗く施す。淡橙色を呈し、胎土は粗い。口径10.3cm。体部最大径９cm。器高7.6cm。11は、口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラナデ、体部内面指ナデ調整を施す。にぶい橙色を呈し、胎土は粗い。口径9.4cm。体部最大径8.4cm。器高7.7cm。

ＳＤ4031（第130～132図、図版33・34）

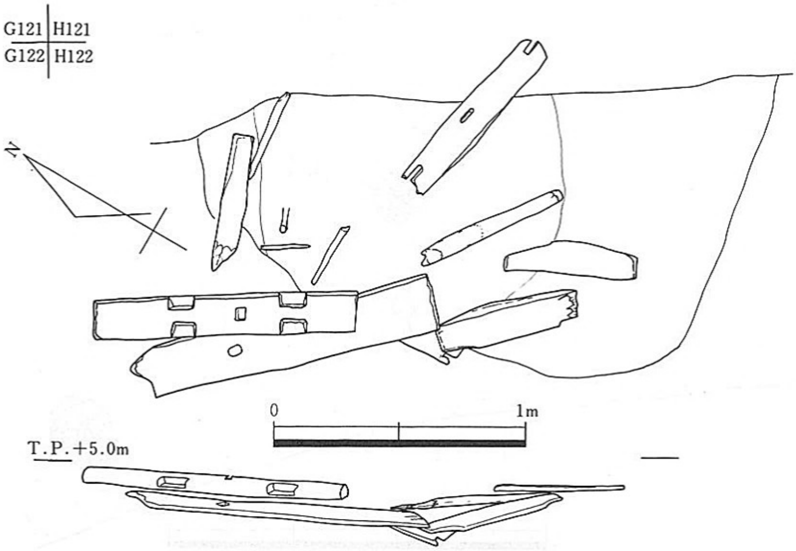
第２遺構面、Ｆ・Ｆ－６トレンチ、Ｆ～Ｉ－121・122地区で検出した。ＳＤ4030の西側1.0～2.0ｍに位置する。Ｇ・Ｈ－121・122地区でＮＲ4003と重複し、西側と南東端はＮＲ4003によて削平される。ＳＤ4030とほぼ平行して延び、北西方向へは、更に調査区外へ出る。総延長13.5ｍを検出した。底面は平坦で、壁はゆるく立ち上がり、遺構面と肩部との境は不明瞭となる個所もある。肩部幅2.6～3.1ｍ、底部幅0.4～0.6ｍ、深さ0.4～0.5ｍを測る。埋土は、３層に大別され、最上層には、ＳＤ4030と同様に、腐植土層が堆積する。遺物の出土は、僅かであった。２層中からは、ほぼ完形に復元できる土器や建築部材などが出土している。

出土遺物（第133～135図、図版103）

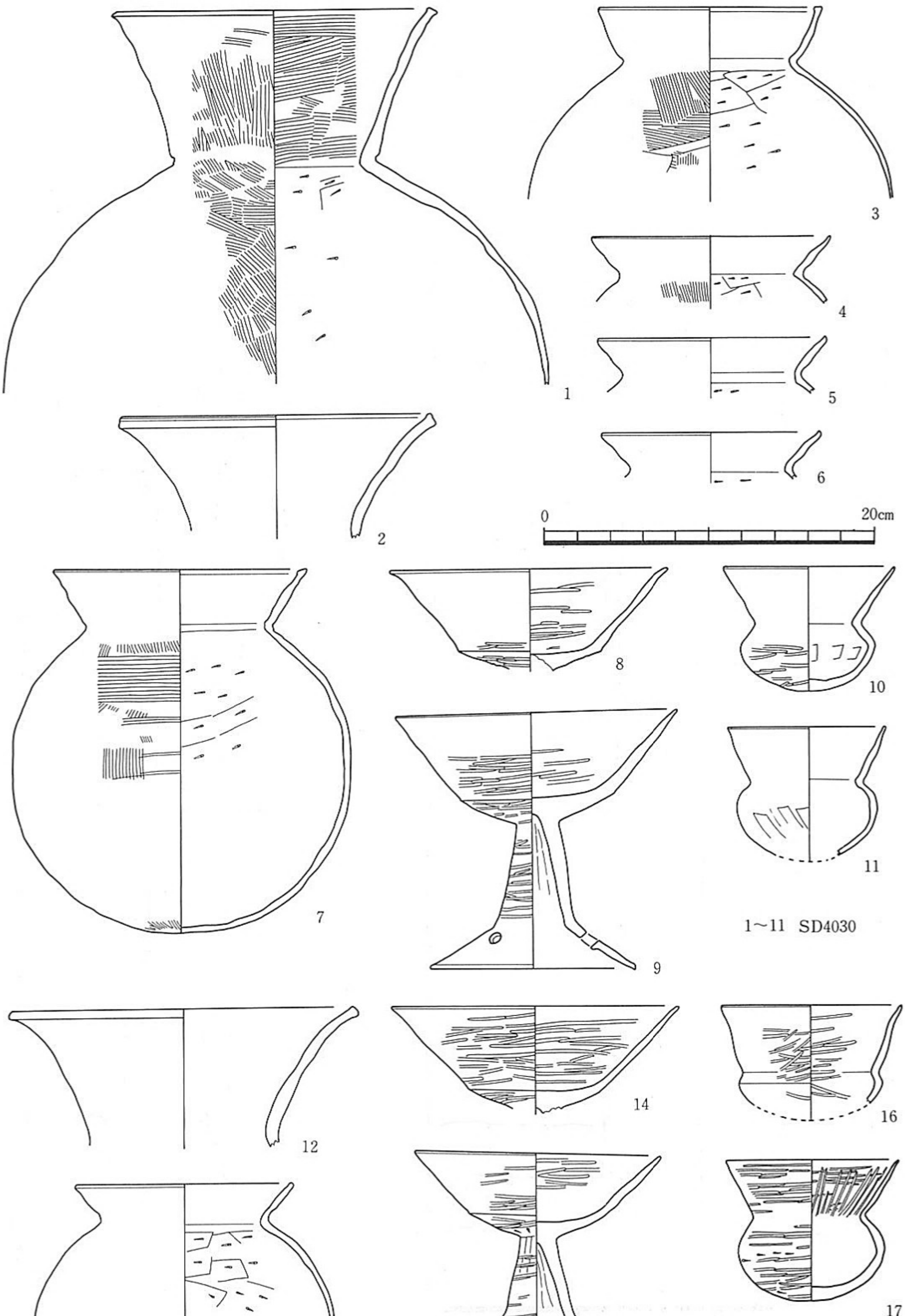
**広口壺**（12）　$A_1$類である。口縁部は外反して開く。口縁端部は断面四角形におさめ外傾する面を持つ。両端は僅かに肥厚する。内外面ヨコナデ調整を施す。灰黄褐色を呈す。口径20.6cm。残存高8.2cm。

**甕**（13）　球形の体部と外傾して開く口縁部とからなる。口縁端部は丸くおさめ、上方へ僅かに肥厚する。体部内面ヘラケズリは、頸部直下に及び、頸部内面は丸味を持つ。体部外面には煤が厚く付着し、調整については明らかでない。C類もしくはD類である。

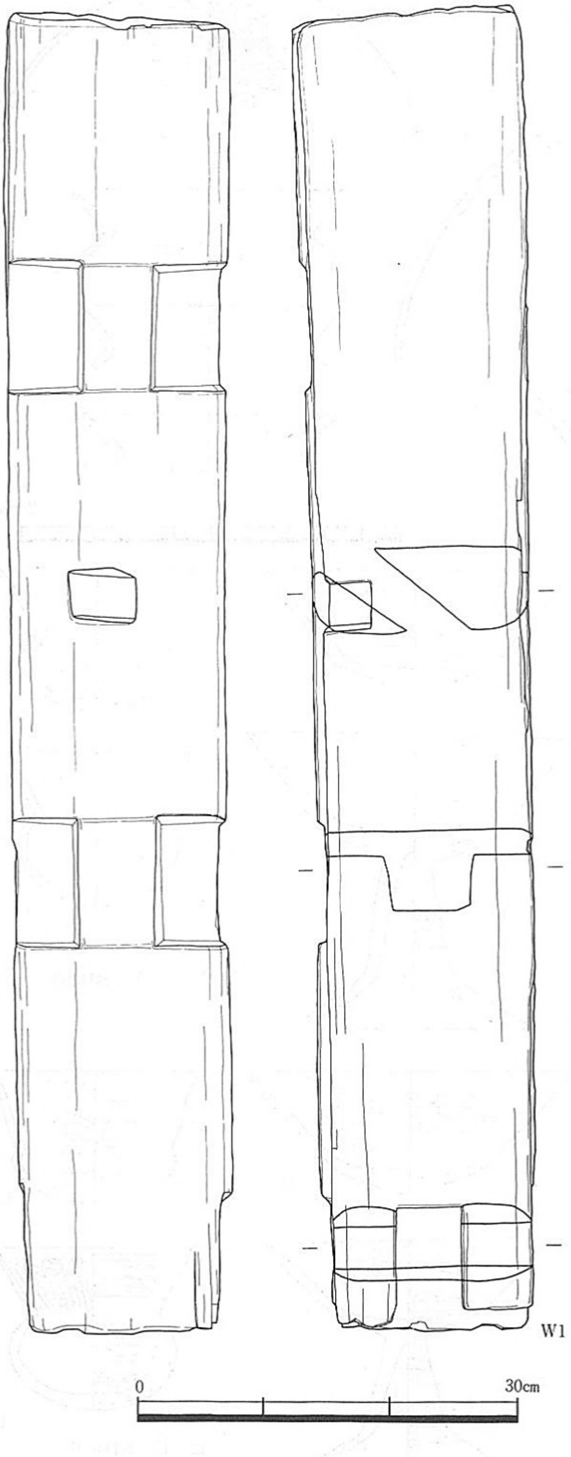
**高坏**（14・15）　Ⅱ$A_1$類である。口縁部は外傾して開き、端部は舌状におさめる。坏部外面には僅かに稜を持つが、稜は、ヘラミガキ調整によって鋭さを欠く。14は、口縁部ヨコナデ、底部外面ヘラケズリの後やや粗くヘラミガキ調整を施す。にぶい黄橙色を呈し、胎土は精良である。口径17.2cm。残存高6.3cm。15には、$B_2$類の脚が付く。裾端部は薄

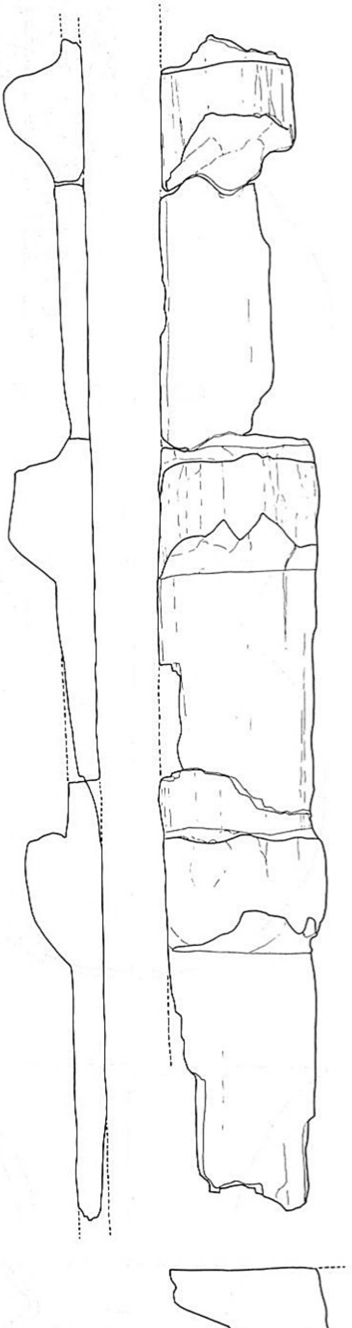



第132図　ＳＤ4031遺物出土状況図（２）

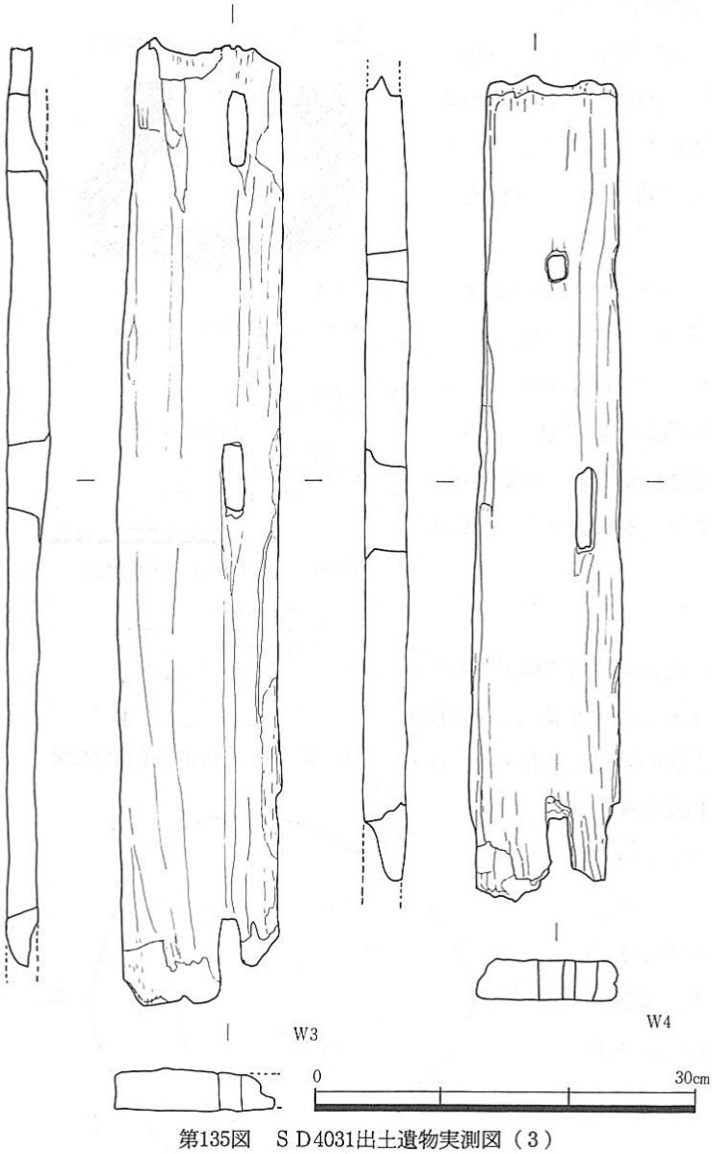



第133図　ＳＤ4030・4031出土遺物実測図（１）




第134図　ＳＤ4031出土遺物実測図（２）



第135図　ＳＤ4031出土遺物実測図（３）

く舌状におさめる。裾部外面には、円形の透し穴が３方に先行される。坏部は、口縁部ヨコナデ、底部外面ヘラケズリの後ヘラミガキ調整を施す。脚部は、筒部外面上半をヘラケズリ、裾部ヨコナデの後、筒部と裾部上半外面にヘラミガキを施し、筒部内面にはしぼり目をそのまま残す。口径14.9cm。裾部径10.4cm。器高12.3cm。

**小型丸底壺**（16・17）　17はＣ1類、16はＡ2類である。17の体部の器壁は５～８mmと厚く、口縁部は薄く、内弯して開き、端部は舌状におさめる。口縁部は、ヨコナデの後ヘラミガキ、体部外面は、ヘラケズリの後ヘラミガキを粗く施す。口縁部内面には更に、暗文風の細かなヘラミガキを放射状に施す。体部内面は指ナデ調整。灰黄褐色を呈し、胎土はやや粗い。口径10.4cm。体部最大径8.9cm。器高8.6cm。16は、口縁部の６分の１の破片である。体部は、小さく張る肩部に体部最大径を持ち偏平な丸底をなし、口縁部は上外方へ外傾して開き、端部は薄く舌状におさめる。口縁部と体部内外面には、細かなヘラミガキを加える。灰黄褐色を呈し、１～２mm大の砂粒を多く含み胎土はやや粗い。口径10.8cm。体部最大径8.6cm。残存高6.2cm。

木製品

Ｗ１　用途不明の木製品である。長さ104cm、幅17cm、厚さ6.8cmで、板材を加工したものである。端より19.5cmと30.5cmの所には、両端を6.0×10.0×4.5cmの方形に切り落とし凸状につくりだしている。更に、これより14cmと15cmのほぼ中央に、一辺５cmの方形の穴が40度の角度で反対面に貫通して設けられる。反対面の一端には、端より10cmの所から6.0cm切り落とし厚さ

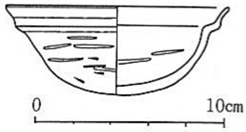
1.0cmとした後、幅５cmの溝状に造作している。

Ｗ２　梯子である。現存長93cm、幅12.8cm、厚さ６cmを測る。足かけ部は４段が残存する。足かけ部は、30cm等間でやや広い。約３cmの高さで削り出されている。足かけ上端面はほぼ平坦となる。仕上げは雑で、足かけ部外面には樹皮が残る。

Ｗ３　用途不明の木製品である。現存長73cm、幅13cm、厚さ3.4cmで、板材を加工したものである。側辺より2.8cmの所で、32cm、22cmの間隔で、5.5×1.6cmの長方形の穴が貫通して設けられる。貫通孔は、計３個が残る。

Ｗ４　用途不明の木製品である。現存長32.6cm、幅5.7cm、厚さ1.6cmの板材を加工する。1.2cm、幅1.6cmと一辺1.0cmの穴が貫通して設けられる。

第136図　ＳＥ4001土層断面図



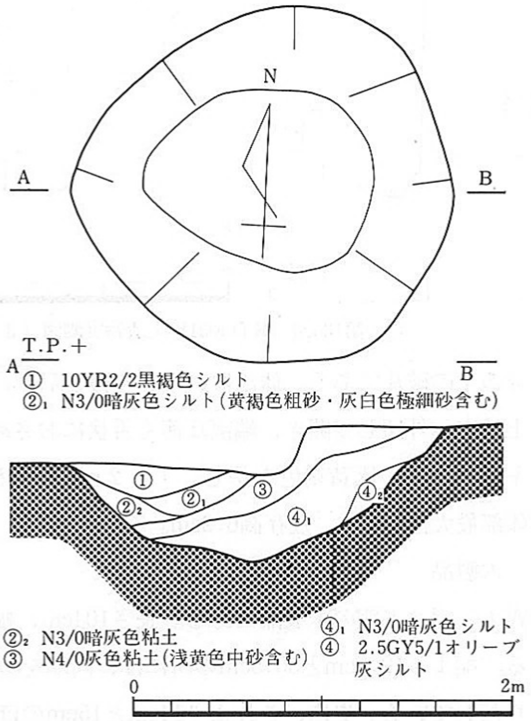

第137図　ＳＫ4001出土遺物実測図

ＣＮ－13トレンチ小溝群

Ｃ－13トレンチ、Ｈ－63～64地区、第２遺構面で検出された。幅約15cm、深さ約10cmの断面Ｕ字形をなす小溝で、ほぼ30cm等間隔でＮ－50°－Ｅ方向に計７条が延びる。埋土は、中・細砂を多く含む暗緑灰色シルトの１層である。遺物は、細片が少量出土するのみで、図示できるものはなかった。その性格については、生産にかかわるもの、或いは水利にかかわるものなどが考えられるが、検出された範囲が狭く、また限定される事から現段階では明らかでない。

ＳＥ4001（第136図）

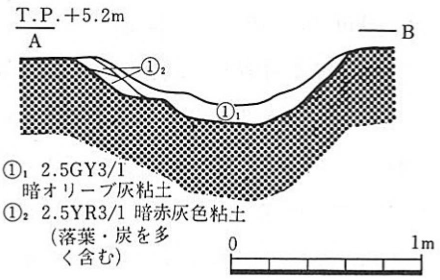
第２遺構面、ＣトレンチＥ－63地区で検出された。西側にＳＤ4007、北側にＳＤ4006が位置する。径1.0m、深さ0.8mを測り、底面は湧水層に達しており、井戸と判断した。断面形は、第３層以下（検出面から約40cm）が袋状に広がり、特に東南側は著しく浸食されている。埋土は、５層に大別され、第２層中には植物遺体が多く含まれる。遺物の出土は無かった。




第138図　ＳＫ4001遺構平面図・土層断面図

ＳＫ4001（第138図、図版23）

第１遺構面、Ｃトレンチ、Ｄ－67地区で検出された。西側では、ＳＤ4009と接する。径2.4×1.85m、深さ0.7mの不整円形を呈する。底面と壁との境は不明瞭で、断面すり鉢状を呈す。埋土は、４層に大別され、第３層中からは、甕Ｃ類と小型有段鉢が出土した。第１層中には、植物遺体が多く含まれる。この他にも、少量の遺物が出土したが、細片が多く、図示できたのは１点のみであった。



第139図　ＳＫ4002土層断面図

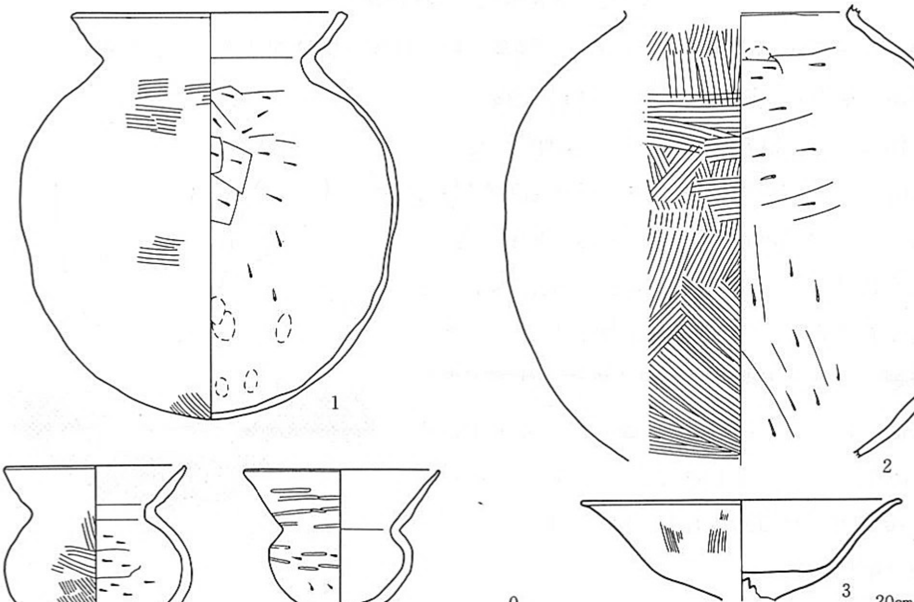
出土遺物（第137図、図版104）

**小型有段鉢**　Ｂ類である。口縁部の段は小さく丸味を持つ。口縁部は僅かに外反し、端部は丸くおさめる。体部外面ヘラケズリの後内外面に粗くヘラミガキを施す。淡赤褐色を呈し、胎土は精良である。体部外面の一部には、炭化物の付着が認められる。口径11.8cm。器高4.7cm。

ＳＫ4002（第139図、図版25・35）

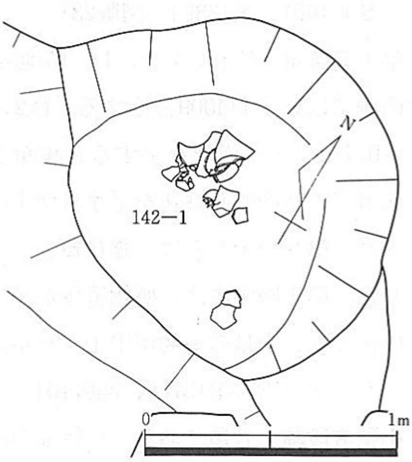
第１遺構面、Ｃ－10トレンチ、Ｃ－59・60地区で検出された。径1.4～1.6m、深さ0.5mの不整円形の土坑である。底面は狭く平坦で、壁との境は不明瞭で、壁はゆるく立ち上がる。埋土は、１層で、土坑の底面近くまで、包含層の直上に堆積する第７層暗緑灰色粘土層が堆積していた。埋土中には、炭、植物遺体、炭化材などが含まれ、第１層上面及び層中からは、若干の土器が出土した。

**甕**（１・２）　Ｃ類である。１の口縁部は内彎して開き、口縁端部は$b_3$で、僅かに外傾する面を



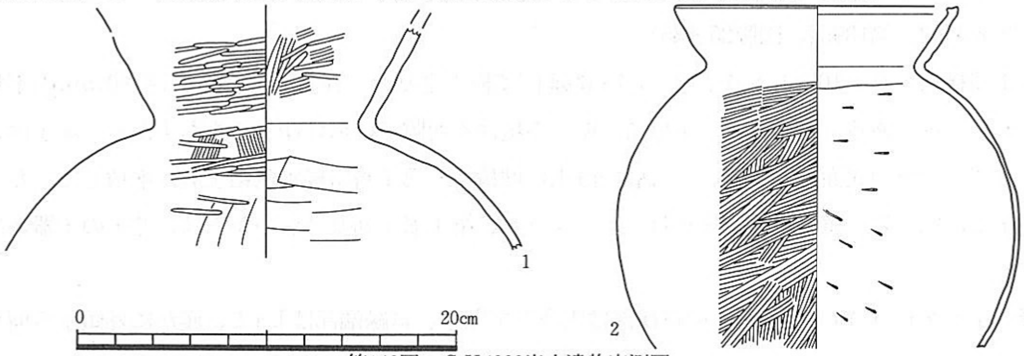
第140図　ＳＫ4002出土遺物実測図

持つ。CⅢ$_1$類であるが、体部はやや胴長となる。体部外面には煤が厚く付着し、調整技法は充分観察出来ないが、底部に縦方向、体部中央と肩部に横方向の粗いハケメが認められる。内面ヘラケズリは、頸部より下がった所まで粗く施される。底部から体部下半には指頭圧痕が残る。頸部直下で器壁が厚く、0.9cmを測る。茶褐色を呈し、胎土はやや粗い。口径14.5cm。器高21.4cm。2は、体部のみが完存するもので、口縁部と底部を欠く。体部は、やや胴長となる。外面ハケメは粗く施される。



第141図　ＳＫ4003遺物出土状況図

**高坏**（３）　ⅡB$_2$類である。口縁部は外反して開き、端部は丸くおさめる。ハケメの後ナデ調整を施す。にぶい黄橙色を呈し、１～２mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径17cm。残存高5.3cm。

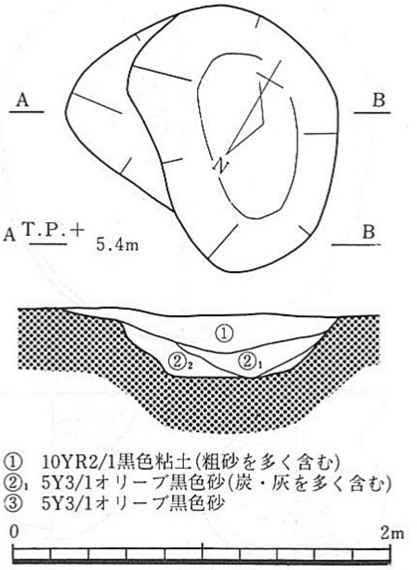


第142図　ＳＫ4003出土遺物実測図

**小型丸底壺**（４・５）　４はC$_2$類である。口縁部は短く外傾し、端部は舌状におさめる。体部外面は、底部から縦方向に細かなハケメを施した後、肩部に縦方向、体部に横・斜方向の粗いハケメ調整を施す。体部内面は粗いヘラケズリ調整を施す。淡黄褐色を呈し、胎土は粗い。口径9.6cm。体部最大径9.8cm。器高9.1cm。５はB$_1$類である。口縁端部は、上方へ小さくひきだし丸くおさめる。口縁部と肩部外面は、丁寧なヨコナデの後細いヘラミガキをやや粗く施す。体部下半から底部の外面は、ヘラケズリの後一部にヘラミガキ、体部内面ナデ調整を施す。淡赤褐色を呈し、胎土は精良である。口径10.4cm。体部最大径7.5cm。器高7.7cm。

ＳＫ4003（第141図）

第２遺構面、C－13トレンチ、Ｉ－61地区で検出した。ＳＤ4004の東側壁にあり、ＳＤ4004によって、上半を削



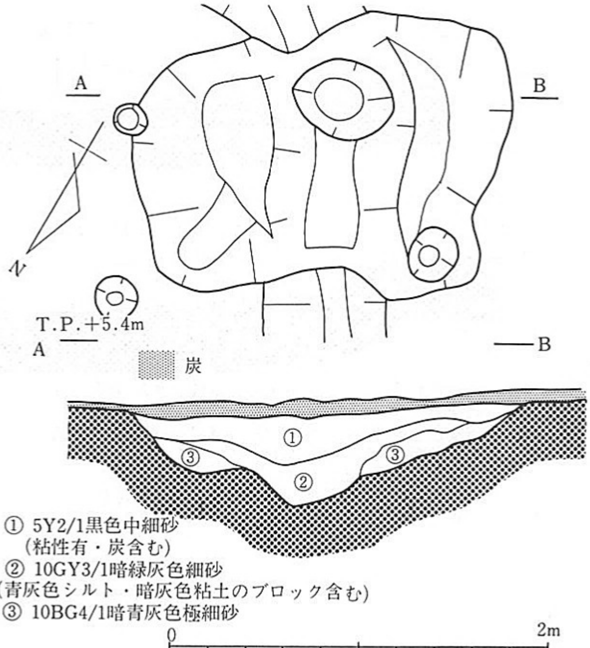
第143図　ＳＫ4004遺構平面図・土層断面図

平される。径1.5m、深さ0.5mが残存する。埋土は、暗青灰色粘土の１層であった。

出土遺物（第142図、図版104）

**広口壺**（１）　$A_2$類である。器壁は、0.6～0.8cmと厚い。口縁部と肩部外面のヘラミガキは粗く、強く施されて、条痕状をなす。口縁内面と肩部外面にはハケメが残る。体部外面肩部以下と内面はヘラナデ調整で、内面肩部には指頭圧痕が施される。淡赤褐色を呈し、胎土中には１～３mm大の砂粒が多く含まれる。残存高11.8cm。

**甕**（２）　CⅢ2類である。口縁部は外傾し、端部は$a_2$で、上端は僅かに窪む。体部外面ハケメ調整は、縦方向の後肩部から体部下半にかけて斜方向に施される。口径15cm。残存高14.7cm。




第144図　ＳＫ4005遺構平面図・土層断面図

ＳＫ4004（第143図）

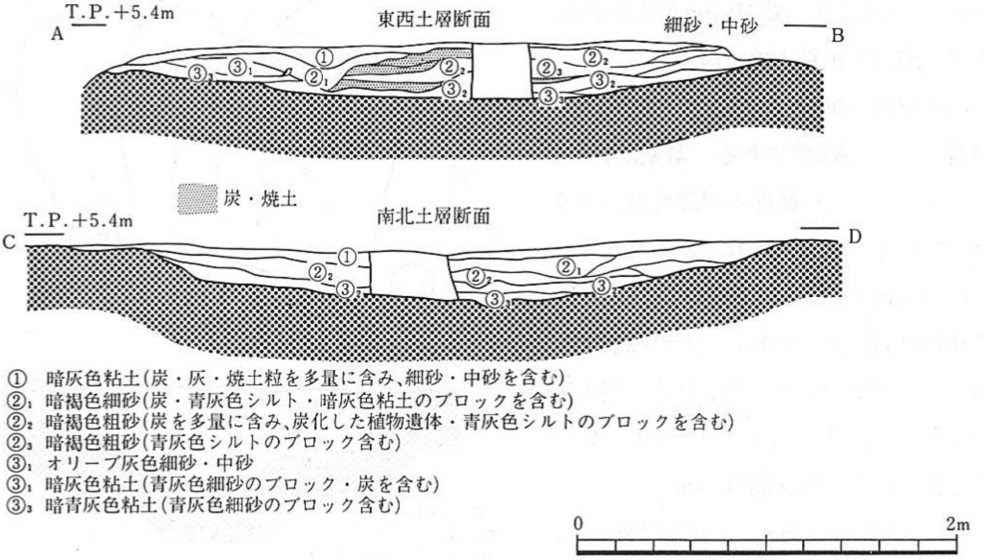
第１遺構面、Ｃ－13トレンチ、Ｈ－61地区で検出した。ＳＤ4004の東約1.0m、ＳＫ4003の北約0.8mに位置する。平面1.0×1.4m、深さ0.4m前後の楕円形を呈する土坑である。底面は平坦で、壁は直に立ち上がる。埋土は、２層に大別され、$2_1$層中には炭を多く含み、植物遺体の薄層を挟在する。遺物は各層から出土するが、小量で細片が多く、図示できるものはなかった。

ＳＫ4005（第144図、図版35）

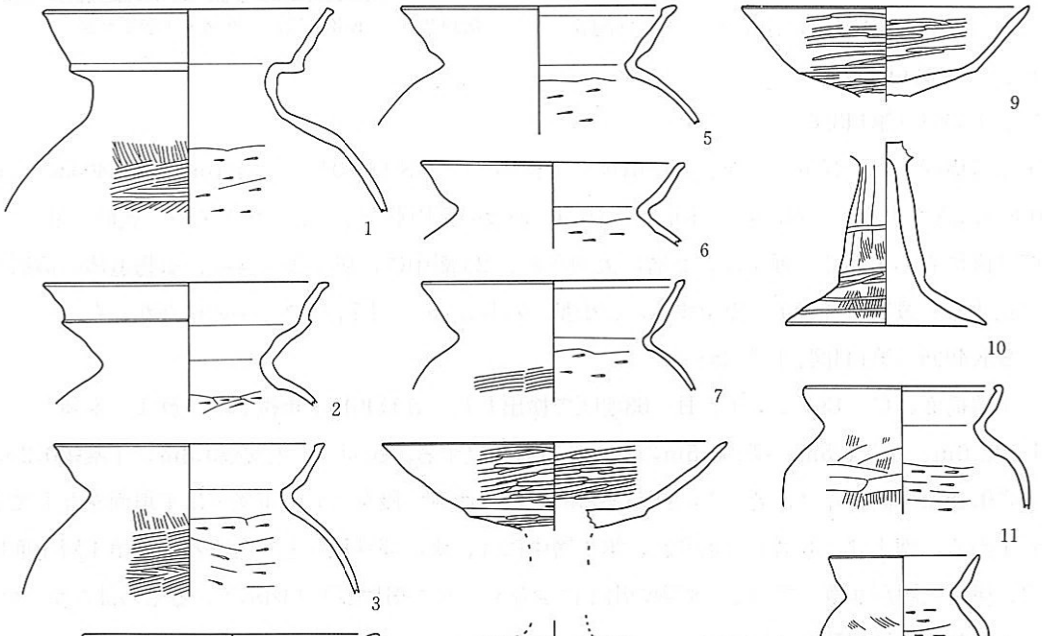
第１遺構面、Ｃ－13トレンチ、Ｈ－63地区で検出した。ＳＤ4015と重複し、これよりも新しい。長辺2.0m、短辺1.5m、深さ0.5mの隅丸長方形を呈する。底面は、上端幅0.8m、下端幅0.2m、深さ0.18mの溝となり、若干の凹凸がある。壁は、西側で段をなし、東側では平坦面をなして立ち上がる。埋土は、３層に大別され、第１層中には、炭、菱鉄鉱などが含まれる。第１層上面には、炭、灰層が堆積している。遺物の出土は少なく、また細片のみで図示できるものはなかった。

ＳＫ4006（第145図、図版36）

第１遺構面　Ｃ－13トレンチ、Ｈ－65地区で検出された。東側にＳＤ4011、西側にＳＤ4010が臨接し、南側に約1.0mにはＮＲ4001がある。径3.2～3.5mのほぼ円形を呈し、深さ0.3mを測る。底面は浅い椀状をなし、壁との境は不明瞭である。埋土は、３層に大別される。各層中には、炭・焼土・植物遺体の簿層が複雑に狭在していた。第３層上面では、炭・焼土と伴に土器片が散乱した状態で出土した。完掘後の形態・埋土の状況などから、この土坑は、第２遺構面上の浅い窪み状の地形を利用して、炭・灰・焼土を残すような行為をくり返すことによって形成されたものと




第145図　ＳＫ4006土層断面図




第146図　ＳＫ4006出土遺物実測図

考えられる。

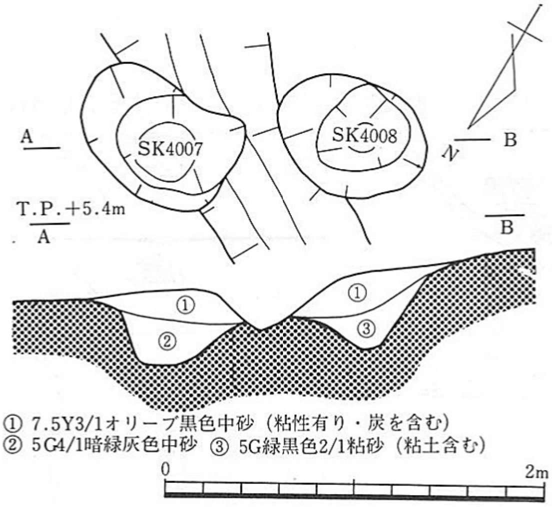
　出土遺物（第146図、図版105）

**二重口縁壺**（1・2）　1は、G類である。口縁部は、上方へ立ち上る頸部から水平方向へ開いた後内外面に明瞭な段をなし、更に外傾して開く。口縁端部は、内外方へ小さく肥厚し、外傾する面を持つ。内面の段は平坦な面をなし、外面の段の稜線は鋭い。口縁部と肩部外面はヨコナデ、体部外面は、縦方向の後、横・斜方向の粗いハケメ調整を施す。内面ヘラケズリは、肩部直下でとまる。口径15.3cm。残存高10.8cm。第3層上面からの出土である。2はE類である。口縁部外面の段は外方へ小さく突出し、鋭い。口縁端部は、上端に平坦な面を持ち、外方へ小さくひきだす。暗黄灰色を呈し、胎土はやや粗い。口径14.8cm。残存高6.7cm。

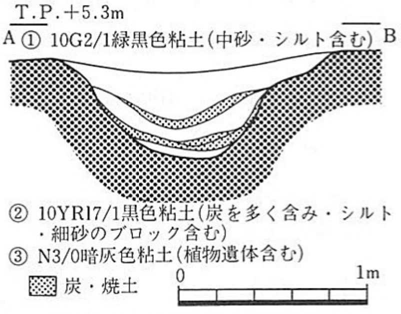
**小型壺**（11）　B類である。撫で肩で丸味を持って張る肩部に最大径を有する偏球形の体部と、短く内弯して開く口縁部とからなる。口縁端部は、内方へ肥厚し上端は平坦面をなす。体部外面は、粗いハケメを縦方向に施した後、軽くナデ調整を施す。内面ヘラケズリは粗く、肩部直下まで行なう。暗灰色を呈し、胎土は粗い。口径10.5cm。体部最大径12.8cm。残存高6.6cm。

**甕**（3～7）　全てCⅢ類である。4はCⅢ$_3$類で、口縁部は外傾して開き、口縁端部は$a_2$である。内方への肥厚は小さく、内傾する面も狭い。外面のハケメは細かく、横・斜方向に丁寧に施す。頸部内面直下には、指頭圧痕が顕著に残る。床面から出土した。口径15.6cm。残存高13.5cm。3の口縁部は内弯して開き、口縁端部は$b_3$である。第3層上面からの出土である。口径14.3cm。残存高8.2cm。5・7は、第3層上面からの出土である。5の口縁端部は$a_3$で、内方の肥厚は小さく、内傾する面は丸味を持ち、狭い。口径14.4cm。7も口縁端部$a_3$で、肥厚は小さい。口径13.8cm。6は、口縁端部$b_4$で、上端は平坦な面をなす。内面ヘラケズリは、頸部直下までおよぶ。口径13.9cm。

**高坏**（8～10）　8は、外面に段をなして浅い椀状を呈する坏部と内弯気味に「ハ」の字に開く低い脚裾部とからなる高坏で、脚筒部を欠損する。口縁部は僅かに内弯して外方へ開き、端部はヨコナデにより舌状におさめる。裾端部は、断面四角形におさめ外傾する面

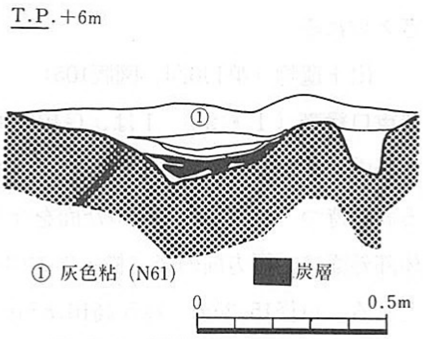


第147図　ＳＫ4007・4008遺構平面図・土層断面図



第148図　ＳＫ4009土層断面図

を持ち、上端は小さくひきだす。内面筒部との境は、ヘラナデを加えて整え、内傾する面をなす。坏部と裾部外面には、細かなヘラミガキを強く、密に施す。暗赤灰色を呈し、1～3mm大の砂粒を多く含む。坏部は、口径18.2cm。残存高4.6cm。裾部は、裾部径12.5cm、残存高1.8cm。9はⅡ$B_1$類である。口径に比して浅い。外面の稜は鋭く、口縁部は外傾し、端部は薄く舌状におさめる。内外面に細かなヘラミガキを密に施す。口径15.1cm。残存高4.8cm。10はB類の脚部である。裾部との境には、ナデ調整によって段をなす。裾端部は舌状におさめる。外面は、筒部にヘラナデの後裾部と筒部下半にハケメ調整を施し、更に裾部との境を中心としてヘラミガキを施す。裾部径10.6cm。残存高9.7cm。8・9は第3層上面からの出土である。



第149図　S K4010土層断面図

**小型丸底壺**（12）　D類である。体部外面は斜方のハケメの後ナデ調整、内面ヘラケズリを施す。口径7.9cm。体部最大径8.8cm。残存高6.5cm。第3層上面の出土である。

S K4007・4008（第147図、図版25）

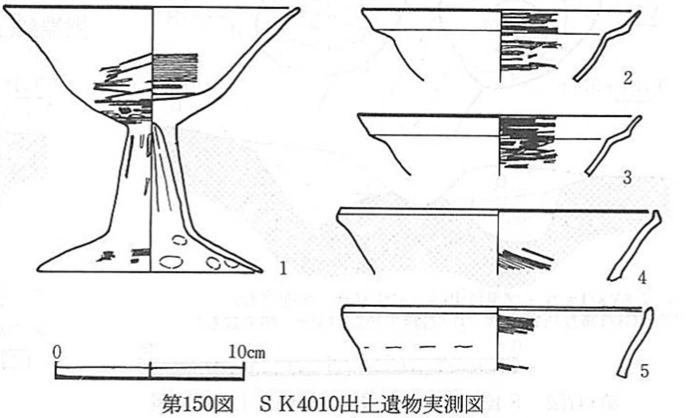
第2遺構面、C－2トレンチ、F－59地区で検出した。S D4017と重複し、両土坑ともS D4007によって上半を削平されている。S K4007は、0.9×0.55m、深さ0.4m、S K4009は、0.85×0.68m、深さ0.4mが残存する。遺物は出土しなかった。

S K4009（第148図、図版26）

第2遺構面、C－4トレンチ、H－66地区で検出した。S B4001の建物プラン内にある。平面0.9～1.1m、深さ0.46mの円形の土坑である。底面は、平坦で狭く、壁の立ち上がりはきつい。埋土は、赤土を含む炭の薄層によって3層に大別される。最下層には、植物遺体を多く含む。遺物は、土器の細片が数点出土したのみであった。

S K4010（第149図、図版27）

第2遺構面、Fトレンチ、F－115地区で検出した。S D4026の北西約0.8mに位置する。東側はS D5001によって削平されている。東西0.6m、南北1.1m、深さ0.2mが残存する。底面および壁面からは、径7～10cm、深さ5～10cmのピットが検出された。埋土は、灰色粘土の1層で、底面付近には、赤土粒を含む炭層が堆積している。灰色粘土層中より、この炭層をベー



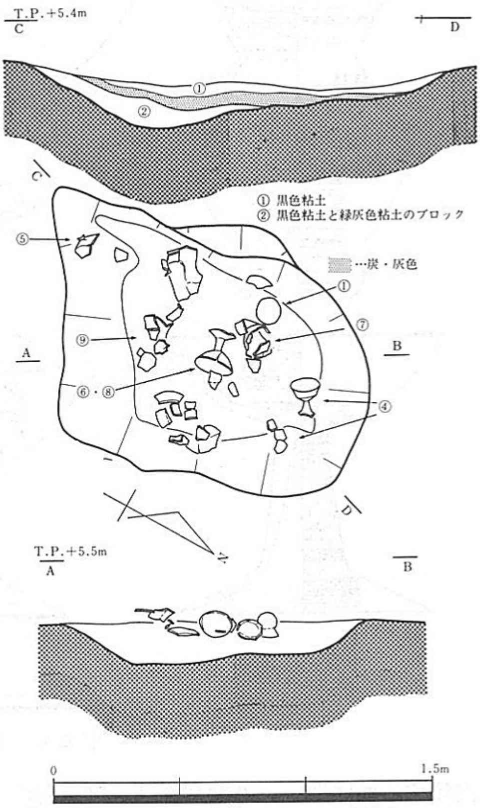
第150図　S K4010出土遺物実測図

スとして、土器が集中して出土した。

出土遺物（第150図、図版106）

**甕**（4・5）　口縁部のみの破片である。4は、口縁端部を上方へつまみ出し、頸部内面までヘラケズリが及び、鋭い稜をなす。口縁部内面にはハケメが残る。A類もしくは$B_1$類である。口径16.8cm。5の口縁部上半で上方へ内弯して開き、端部は丸くおさめる。頸部内面にはヘラケズリが及び、鋭い稜をなす。灰白色を呈し、胎土は粗い。口径16.4cm。この他にも、甕C類の細片も出土している。

**高坏**（1）　Ⅱ$A_2$類で、$A_1$類の脚部が付く。口縁部は、外上方へ外反して開き、端部は薄く舌状におさめる。内外面には、細かなヘラミガキをやや粗く施す。底部外面には細かなハケメ痕が僅かに認められる。脚部は、筒部内面にしぼり目、裾部内面に指頭圧痕を残し、筒部外面上半に、縦方向のヘラミガキを加え、筒部下半と裾部にヨコナデ調整を施す。灰白色を呈し、胎土は精良である。口径15.6cm。裾部径12cm。器高14cm。



第151図　ＳＫ4011遺構平面図・土層断面図・遺物出土状況図

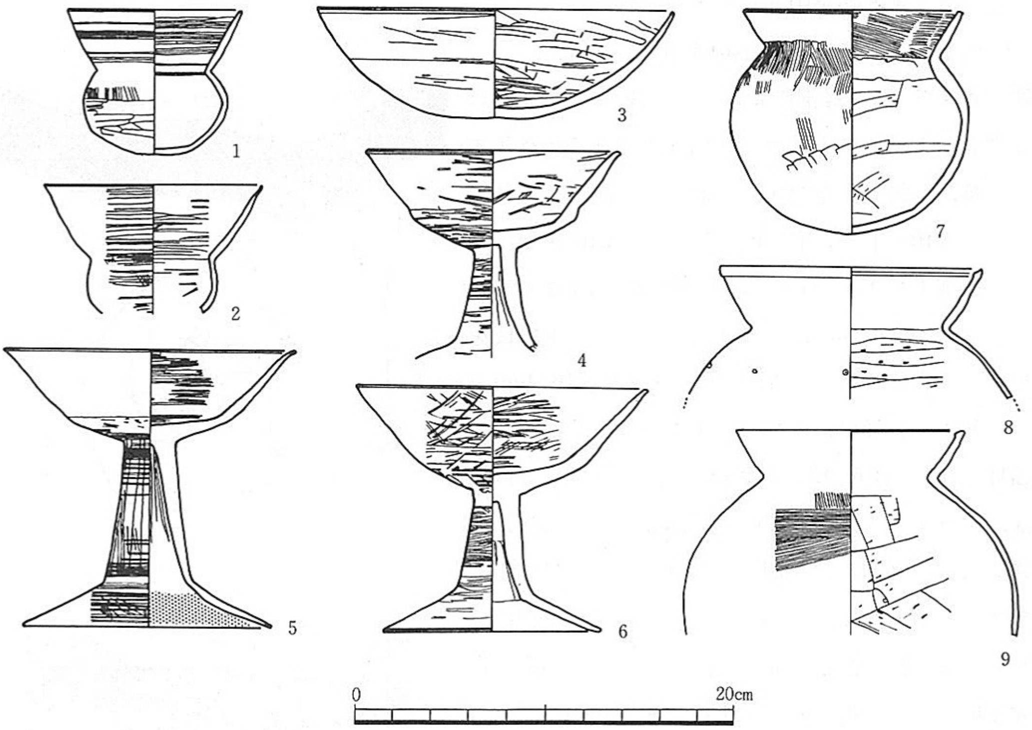
**小型有段鉢**（2・3）　A類である。口縁部内外面の段は明瞭で、口縁端部は薄く舌状におさめる。外面ナデ調整、内面には細かなヘラミガキを丁寧に施す。灰白色を呈し、胎土は精良である口径14.8～15cm。残存高3.2～3.8cm。

ＳＫ4011（第151図、図版27・37）

第2遺構面、Ｆトレンチ、Ｇ－115地区で検出した。ＳＤ4026の南東端に隣接して位置する。長軸1.6m、短軸1.1mの不整形な土坑で、深さ5～15cmを測る。底面は若干の凹凸があるものの、全体としては平坦で、壁はゆるやかに立ち上がり、底面との境は不明瞭となる。埋土は、焼土粒を含む厚さ5cmの炭層を挟んで2層に大別される。この炭層をベースとして、数個体の土器がまとまって出土した。

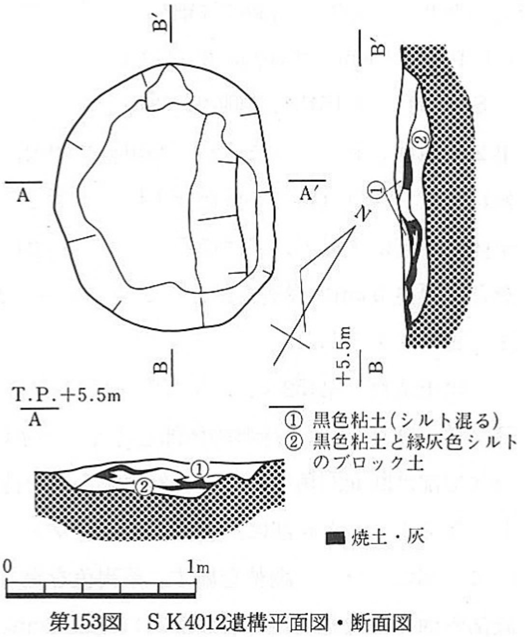
出土遺物（第152図、図版106）

**甕**（7～9）　7は、球形の体部と「く」の字に外傾する短い口縁部とからなる小型の甕である。口縁端部は断面四角形をなし、外傾する面を持つ。口縁部内面と外面頸部以下に粗いハケメを施し、体部下半から底部にかけては更にヘラケズリを加える。体部内面は、肩部以下をヘラケズリの後一部にヘラナデ調整を施す。茶褐色を呈し、1～2mm大の砂粒を多く含む。外面には煤、底部内面には炭化物が付着する。口径11.2cm。器高11.9cm。8はCⅢ類で、口縁端部は$a_3$で、



第152図　ＳＫ4011出土遺物実測図

内傾する面は狭い。外面肩部は、縦方向のハケメの後ナデ調整が施される。肩部には、棒状のものによる、刺突痕が認められる。灰褐色を呈す。口径13.8cm。残存高6.9cm。９はＣⅣ1類である。口縁部は内弯し、端部はａ3である。上端面は、平坦で僅かに内傾する。外面ハケメは細かく丁寧で、縦方向の後横方向に施す。黄褐色を呈す。口径11.95cm。残存高10.8cm。




第153図　ＳＫ4012遺構平面図・断面図

高坏（４～６）　５はⅡＢ1類で、Ａ2類の脚部が付く。口縁端部は小さく外方へひきだし、薄く舌状におさめる。脚筒は、柱状をなして長く、器壁は下方に向けて徐々に薄くなり裾部との境では2.5mmと最も薄い。裾部は低く「ハ」の字に開き、短部は舌状におさめる。口縁部ヨコナデ、底部外面ヘラケズリの後、内面と底部外面に細かなヘラミガキを丁寧に施す。筒部外面ヘラナデの後坏部と同様のヘラミガキを施す。筒部内面はしぼり目をそのまま残す。裾部外面にはハケメ、内面には布目の圧痕が認められる。淡茶褐色を呈し、胎

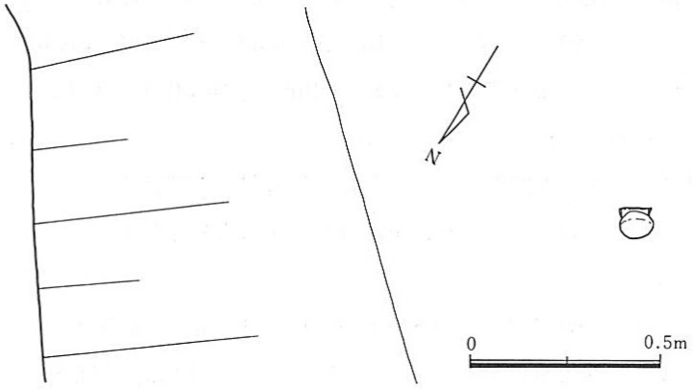
土は精良である。口径15.4cm。裾部径13.2cm。器高14.6cm。4はⅡ$B_1$類で、$A_2$類の脚部が付く。全体に器壁が厚く6～8mmを測る。坏部外面の段は丸味を持ち、内面底部と口縁部の境は不明瞭である。口縁端部は舌状におさめる。坏部と脚部外面のヘラミガキは粗く、雑に施される。筒部内面にはしぼり目をそのまま残す。灰褐色を呈し、胎土は精良である。口径13.4cm。残存高11cm。6はⅡ$B_1$類で、$A_2$類の脚部が付く。坏部は口径に比して深く、外面底部と口縁部との境は凹線状に窪む。口縁部は外傾して開き、端部は舌状におさめる。口縁部と裾部をヨコナデ、底部と脚筒部外面ヘラケズリの後、口縁部と底部と脚部の外面にヘラミガキを施す。ヘラミガキは粗く雑で、施す方向も一定していない。4のヘラミガキと共通する。灰褐色を呈し、胎土は精良である。口径15.4cm。裾部径11.5cm。器高13.2cm。

**鉢**（3）　Ⅱ$A_1$類である。平底から内弯して開き、そのまま端部に至る。上半はヨコナデ調整によって器壁が薄くなり、外面の境は、僅かに窪む。端部は丸くおさめる。内面ヘラナデ、外面下半は未調整で、内面と外面上半にはヘラミガキを粗く、雑に施す。灰褐色を呈し、胎土は精良である。口径18.7cm。器高5.8cm。

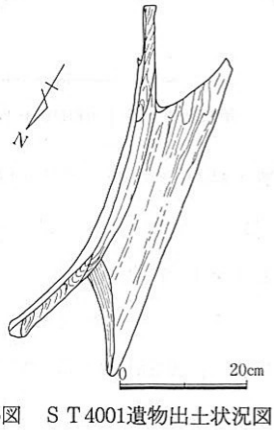
**小型丸底壺**（1・2）　1は$B_1$類、2は$A_1$類である。1は、口縁部と肩部上半外面ヨコナデ、体部中央以下をヘラケズリの後口縁部と体部中央付近にヘラミガキを施す。外面肩部下半には、縦方向のハケメが残る。茶褐色を呈し、胎土は精良である。口径9.2cm。体部最大径7.6cm。器高7.7cm。2の口縁部は、内弯して外上方へ大きく開き、端部は薄く舌状におさめる。体部外面上半をハケメ、下半をヘラケズリの後、全体にヘラミガキを丁寧に施す。口径11.3cm。体部最大径6.8cm。残存高6.8cm。

SK4012（第153図、図版37）

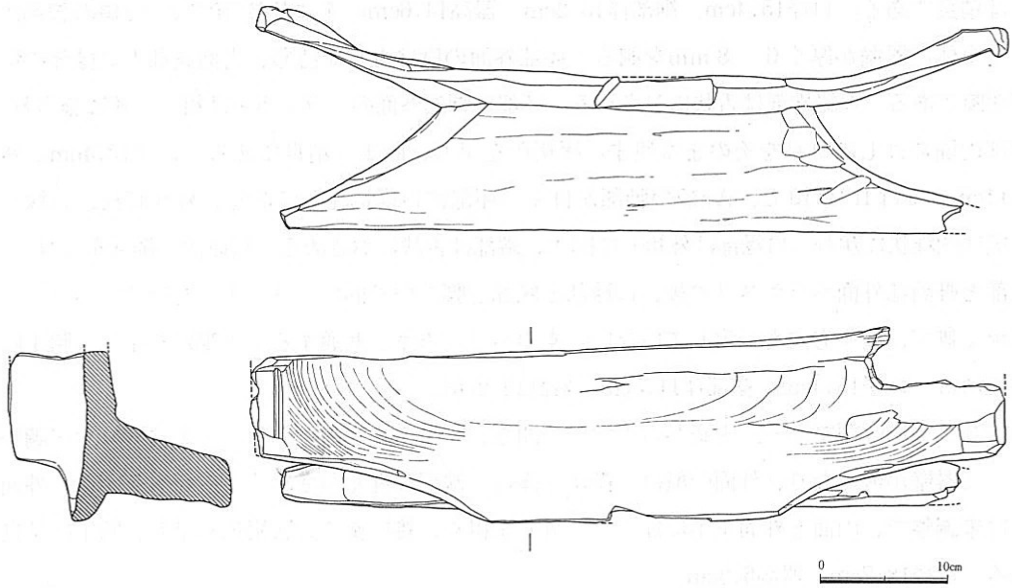
第2遺構面、Fトレンチ、G－117地区で検出した。SB4002の南隅に隣接して位置する。長径1.4m、短径1.15mの楕円形を呈する土坑で、深さ0.2mを測る。底面は平坦で、壁との境は不明瞭で、壁はゆるく立ち上がる。底面で、径20cm、深さ30cm前後のピットが計6個、不規則に検出された。埋土は、赤土粒を含む炭層を挟んで、2層に大別される。遺物は、各層から少量出土



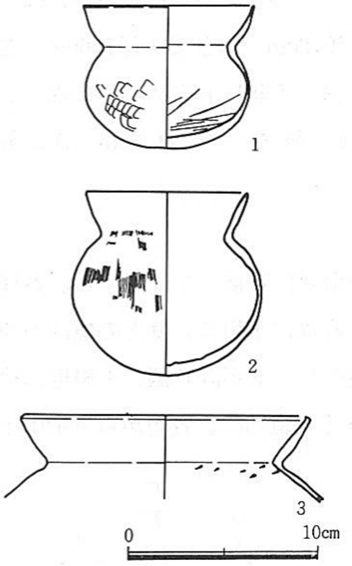

第154図　ST4001遺物出土状況図（1）




第155図　ST4001遺物出土状況図（2）




第156図　ＳＴ4001出土遺物実測図（１）




第157図　ＳＴ4001出土遺物実測図（２）

しているが、図示できるものはなかった。

ＳＴ4001（付図13、図版38・39）

弥生時代遺物包含層（第15層）上面において、３条の大畦畔と、そのうちの１条から延びる４条の畦畔からなる水田を検出した。記述の都合上大畦畔は北から第１、第２と呼称する。

第１畦畔は、Ａ・Ａ－５・Ａ－６トレンチ（20～22ライン）間において検出された。畦畔上面Ｔ．Ｐ．＋5.25～5.4m。上端幅1.0～1.5m、下端幅3.2～7.9m、高さ0.44mを測る。第２畦畔は、Ａ－７トレンチ25ラインからＡ－８トレンチ24ラインへ弓状に延びる。上面Ｔ．Ｐ．＋5.05～5.3m。上端幅1.2m、下端幅2.6～2.9m、高さ0.35mを測る。第３畦畔は、Ａトレンチ29ラインからＡ－10トレンチ30ライン方向へ直線的に延びる。上面Ｔ．Ｐ．＋4.8～4.9m。上端幅0.83～1.4m、下端幅2.7m、高さ0.1mを測る。

第１畦畔北斜面から平坦部にかけては、この水田面のベースとなる包含層の堆積はみられず、下層の青灰色シルトが拡がる。このシルト上面Ｔ．Ｐ．＋4.15m付近で椅子形木製品が出土した。（第155図、図版40）

Ａ－７トレンチ第２畦畔から延びる４条の畦畔はいずれも上面Ｔ．Ｐ．＋4.8m。上端幅0.15～0.3m、下端幅0.65～1.2mを測る。第１・第２畦畔間は、ほぼ平坦でＴ．Ｐ．＋4.8m。第２畦畔南側平坦部Ｔ．Ｐ．＋4.4～4.9m。第３畦畔北側平坦部Ｔ．Ｐ．＋4.7～4.8m。第３畦畔から南にも

緩やかに下がり、Aトレンチ35ラインではT.P.+4.5m前後にある。第2畦畔南斜面から平坦部に遺構するあたりで小型丸底壺が1点出土している。（第154図）

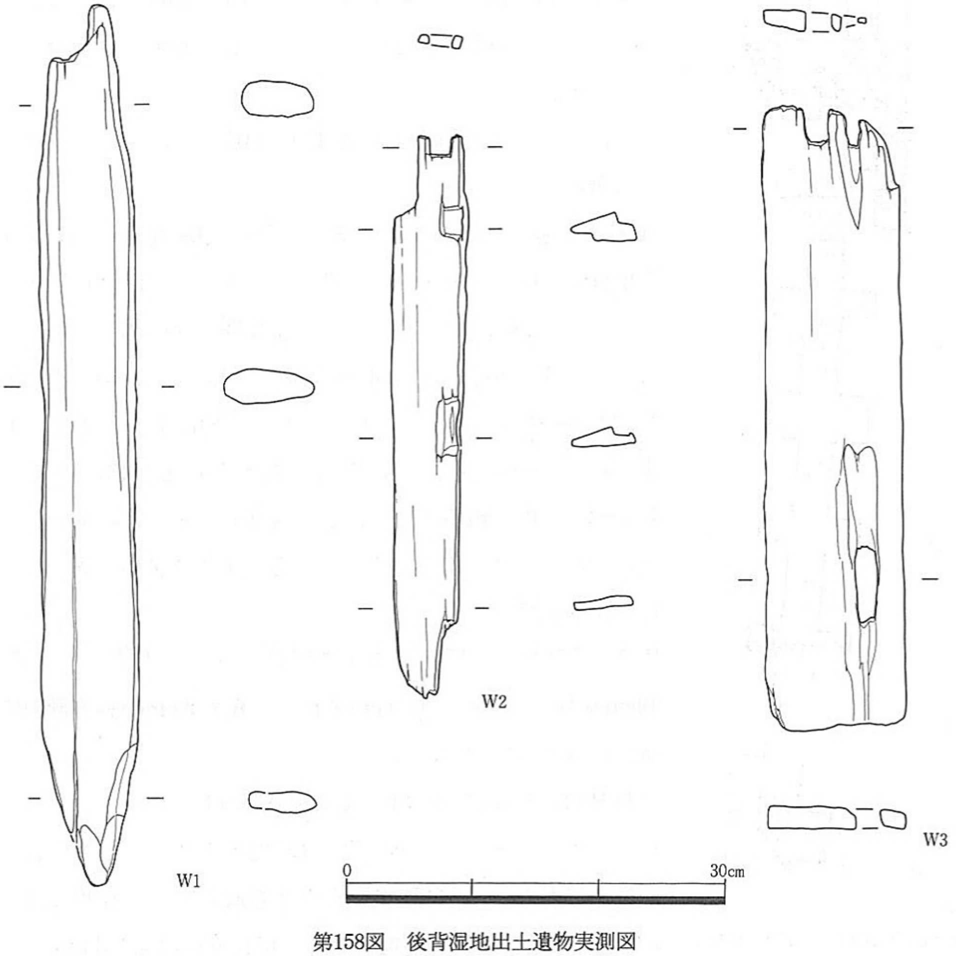
畦畔の盛り土は、第1、第2畦畔で認められたが、第3と第2から延びる4条については確認できなかった。

出土遺物（第156・157図、図版107）

土師器

**小型丸底壺**（1・2）　1は、復元口径9.0cm、高さ7.7cmのC類である。体部外面は横方向のヘラケズリ、口縁部の内外面はナデ調整を施す。第2畦畔の南斜面から平坦部に移行する部分で出土した。2は、復元口径8.5cm、器高9.8cmを測る。D類である。体部外面はハケメ、内面はナデ調整を施す。第1畦畔北斜面で出土した。

**甕**（3）　口縁から体部の破片である。復元口径14.3cm、現存高4.6cmを図る。体部から「く」の字に屈曲して、口縁端部を上方へつまみあげる。体部外面は磨滅し不明、内面ヘラケズリ調整を施す。第1畦畔の盛り土中から出土した。




第158図　後背湿地出土遺物実測図

木製品

椅子形木製品である。弓状にそる腰掛部に台形の脚部がつく。腰掛部の長さ59.5cm、現存幅15.2cm、全高17.5cmを測る。腰掛部端部は、削り出して下方に肥厚させ、もう一方は、上面に１条の溝を掘る。腰掛部の一部と、脚部の一方が欠損する。

後背湿地（付図14、図版40）

Ａトレンチ南半からＣトレンチ北半、Ａ～Ｉ－26～58地区に拡がる。59ライン付近から徐々に低くなり、47～50ライン付近では、Ｔ．Ｐ．＋3.8ｍと最も低い。これより北東へは徐々に高度を増して水田畦畔面へ続く。底面は、暗身通り灰色シルト及びシルト質粘土で、炭酸第１鉄、植物遺体を多く含む暗緑灰色粘土、黒色有機物の薄層を多数挟在する暗灰色粘土、黄褐色中砂・細砂、青灰色シルトのラミナなどが複雑に堆積していた。Ｃ－13トレンチ、Ｈ・Ｉ－48～49地区の底面直上に堆積する細砂中からは、貝化石が出土した。土器の出土は少なく、一部炭化した加工材などが数本出土したのみであった。

出土遺物（第158図、図版114～116）

木製品

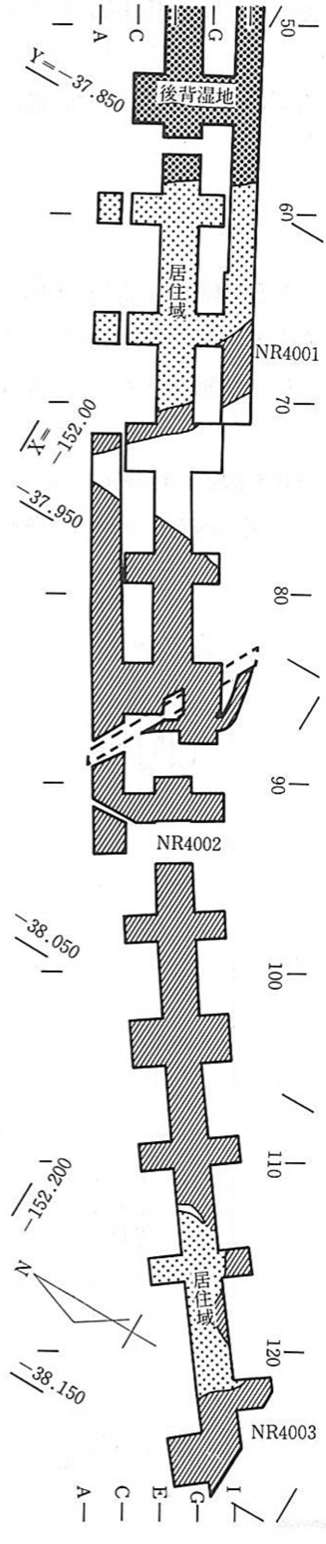
Ｗ１　用途不明の木製品である。現存長69.8cm、幅7.5cm、厚さ2.8cmの板材である。角を落として丸くし、断面楕円形に仕上げる。先端12cm付近の所から杭先状に細く削っている。

Ｗ２　幅5.6cm、厚さ2.4cmの板材を加工したもので、現存長44.7cmを測る。一端は、側辺よりに凹形に造りだされ、もう一端は厚さ１cmに薄く削る。凹部先端から６cmと21cmの所の角を1.4×4.8×0.8cmの長方形に切り落とし、更にこの部分から約　度の勾配で表面を削り落としている。全体に腐朽が著しく、加工痕は不明瞭である。

Ｗ３　幅11cm、厚さ1.6cmの板材を加工したもので、現存長49cmを測る。中心より３cmずれて、６×２cmの長方形の穴が２個所に貫通して設けられている。

ＮＲ4001～4003（第159図、図版41～43）

Ｃ～Ｆトレンチ、Ａ～Ｈ－70～123地区では、計３本の自然河川が検出された。（第159図）そのうち最も広いＮＲ4002は、川幅約150ｍにも及び、その規模から、現在遺跡の北約300ｍを北流す




第159図　ＮＲ4001～4003全体図

る長瀬川の前身河川と考えられる。ＮＲ4001・4002は、調査区外において合流すると思われる自然河川である。これら自然河川からは、縄文式土器から土師器までの土器をはじめ、多くの遺物が出土した。

ＮＲ4001　Ｃ・Ｃ－５・６・12・13トレンチ、Ａ～Ｉ－66～73地区で検出された。ほぼ東西方向に延びる。Ｃ－12トレンチ外では、ＮＲ4002に合流するものと思われる。肩部幅は、７～15ｍを測り、Ｃ－13トレンチ、Ｈ～Ｉ地区で最も広い。深さは、流路中心部で1.0～1.5ｍを測り、河床面は、Ｔ.Ｐ.＋3.6～4.0ｍにある。河床面は、Ａ～Ｅ－71・72地区では青灰色粘土、Ｈ・Ｉ－65～70地区では粗砂、礫となる。右岸部では砂、左岸部では粘土、シルトを肩とする。Ｈ・Ｉ－65地区では、壁面に沿って包含層が流失、堆積しており、径15～20cmの擬礫の堆積が認められた。Ｃ－12トレンチ肩部では、舟型木製品が、また、Ｃ－13トレンチ右岸部直下では木剣型木製品が出土している。（付図14、図版42）特に舟型木製品は、多年生草木類で編んだ敷物の直上から出土しており、河川（水）に対する祭祀的行為によるものと考えられる。また、木剣型木製品は、Ｈ－66地区の、河床面から岸に移行する地点で、砂層中から出土した。

ＮＲ4002　Ａ～Ｇ－74～119地区で検出した。ＮＲ5001と重複して、南⇒方向に流れる。78～105ラインの間では、ＮＲ5001によって河床面まで削平されている。河幅は150ｍにも及ぶが、実際の流路は、これよりも狭く、この間を移動を繰り返しながら幾筋にも分かれて流れていたものと思われる。遺構面からの深さは、Ｃ－12トレンチ右岸部付近では1.2ｍ、Ｆトレンチ左岸部では0.6～1.0ｍで、流路中心部では、1.6ｍを図る。河床面は、Ｔ.Ｐ.＋3.2～3.6ｍにあり、青灰色粘土層を河床面とする。右岸部では、河床面からの立ち上がりは急で、Ｃ－12トレンチでは、径20～40cm大の擬礫の堆積や、浸食によって岸がえぐれている個所が認められる。土層断面の観察から、ＮＲ4002は、徐々に河床面を上昇しながら、南へ移動させ、ＮＲ5001に続いていったものと考えられる。

ＮＲ4003－１Ｆトレンチ、Ｉ～Ｇ－112～114地区で検出した。南東⇒北西方向に流れる。総延長9.5ｍを検出した。Ｇ－113・114地区で、ＮＲ4002と分流する。河幅5.5～7.0ｍ、深さ0.8ｍを測り、河床面は、Ｔ.Ｐ.＋4.4～4.6ｍにある。

ＮＲ4003－２　Ｆ・Ｆ－56トレンチ、Ｆ～Ｉ－121～126地区で検出した。ほぼ東西方向に流れる。Ｆ・Ｆ－６トレンチ、Ｆ～Ｈ－121・122地区ではＳＤ4031と重複し、ＳＤ4031の肩部を流失させる。南側肩部は調査区外にあり、河幅は25ｍを超える。河床面は、Ｔ.Ｐ.＋4.5ｍにあり、深さ0.8ｍを測る。暗青灰色粘土を河床面とする。北側肩部は、Ｆ－６トレンチ、Ｉ－121地区で東側へ向きを変えはじめており、この付近でＮＲ4002と合流し、ＮＲ4002は、一度調査区外へ出た後蛇行して、Ｇ・Ｈ－116～119地区で再び調査区をかすめ、Ｆ－４トレンチ、Ｈ－114・115地区へ続く。

出土遺物（第160～166図、図版108～115）

土師器と木製品の一部を抽出した。各河川ごとに概述する。

－ＮＲ4001－（第160図）

**甕**（１～４）　１～３はＡ２類である。頸部内面の稜には鋭さがなく、１・２の口縁端部は上方へ小さく肥厚して終わる。３の口縁部は短く屈曲し、肩部は下がる。

**高坏**（５）　ⅡＣ２類の高坏で、中空の脚Ｂ類が付く。坏部は口径に比して深く、口縁部は内彎気味に開き、端部は舌状におさめる。脚筒部は中位でやや膨らみ、裾部は器壁が薄くなって外反して開く。裾端部は薄く舌状におさめる。淡橙色を呈し、胎土は粗い。口径14.4cm。裾部径9.4cm。器高12.3cm。

**鉢**（８・10）　８は、口縁部の約６分の１の破片で、底部を欠く。内彎して立ち上がる体部と僅かに外反して開く口縁部とからなる。灰黄褐色を呈し、胎土は粗い。９は大型の鉢ⅠＢ２類である。口縁部外面の段は小さく、内面の段も不明瞭である。口縁部は内彎気味に開き、端部は上端に平坦な面を持つ断面四角形におさめられる。体部は、内外面ともにハケメ調整が施される。灰黄褐色を呈し、１～２mm大の砂粒を多量に含む。口径28.3cm。残存高11.3cm。

**小型丸底壺**（９）　Ｄ類である。口縁部は内彎して開き、端部は薄く舌状におさめる。口縁部内面ヘラミガキ、体部外面ハケメとヘラケズリの後粗くヘラミガキを施す。暗灰黄色を呈し、胎土は粗い。口径9.0cm。体部最大径8.9cm。器高7.9cm。

**器台**（６・７）　６はＢ類、７はＡ類である。６の受け部は浅く、端部は断面四角形をなす。受け部内面ヘラミガキ、外面ナデ調整を施す。にぶい橙色を呈し、胎土は粗い。口径8.6cm。残存高4.3cm。７は受け部を欠く。受け部との接合部内面には丸味を持つ。脚部はやや内彎気味に開き、端部は外下方に薄くひきだし、内面に浅い段をつくる。にぶい褐色を呈し、胎土は精良である。脚部径11.5cm。残存高5.5cm。

木製品

Ｗ１　舟型木製品である。平面二等辺三角形を呈し、舷側と船首の境は不明瞭である。一木作りで、年輪に対して直角の木取りである。全長61.8cm。船尾幅28.8cm。高さ5.8cm。船底は厚さ１cmで、ゆるく彎曲している。加工は丁寧で、加工痕は明瞭に残る。全体に重厚で、当該期の舟型木製品としては、類例がみられないものである。

Ｗ２　鏃型の木製品と思われる。全体に腐朽が進み、遺存状態は悪い。現存長13cm、幅6.1cm、厚さ0.3cmを測る。

Ｗ３　無茎の平根鏃を模したものと思われるが、火を受けて炭化している部分もあって遺存状態は悪く、詳細は明らかでない。現存長9.1cm。幅5.6cm。厚さ0.9cmを測る。

Ｗ４　剣型木製品である。剣先を欠く。現存長45.3cm、幅4.5～8.7cm、厚さ1.5cmを測る。木目に対して平行の木取りである。茎は径3cm、長さ4.5cmで、中心よりずれて削り出されている。また、茎の延長上には、鎬を表現したと思われる稜が削り出されている。剣の基部には２個所に径２～３mmの穴が穿孔され、更に0.3×1.8cmの長方形の穴が２個所に穿孔される。石製模造品に見られるように鞘に収められた状態を表現したものと考えられる。

－ＮＲ4002－（第161・162図）

**二重口縁壺**（１）　Ｆ類である。口縁部の段には丸味を持ち、口縁部は僅かに内弯する。体部外面のハケメ調整は粗く、内面には、体部中央と底部に指頭圧痕が顕著に残る。黄褐色を呈し、胎土は粗い。口径17.7cm。器高32.9cm。

**甕**（２～４）　２・３はＣⅢ類の甕である。３の口縁部は器壁が厚く、型部内面には縦方向の指ナデ調整が施される。口縁端部は、いずれも$a_1$で上端は僅かに内傾する。４は、卵形の体部と短く上方へ内弯して開く口縁部とからなる小型の甕である。口縁端部は$b_4$である。体部外面は左上がりの細筋タタキの後、体部下半以下に縦方向のハケメを施す。体部内面はヘラケズリの後ナデ調整が強く施される。口径11.2cm。器高19cm。

**高坏**（５～８）　全てⅡ$B_2$類である。２の口縁部は、中位で更に大きく外反して開き、端部は薄く舌状におさめる。口径18cm。残存高5.0cm。７・８の坏部には、中空の脚が付く。８の脚部には２方に円形の透し穴が穿孔されている。

**小型丸底壺**（９～14）　９・12・13は$B_2$類、10・11はＣ類、14はＤ類である。13は、全体に器壁が厚く、調整も粗雑で、外面は粗くヘラケズリを施す。10・11の体部は偏平で、口縁部は外傾して開く。11は、体部外面上半をナデ調整、下半をヘラケズリ調整を施す。14の体部は器壁が厚く、口縁部は内弯して開く。体部内面は、上半と下半に縦方向のナデ調整を施す。

**小型器台**（15・16）　Ｂ類の受け部と脚部である。15の口縁端部は、上方へ薄くひきだし、体部との境に浅い段をなす。内面は、放射状に細かなヘラミガキを施し、外反して開き、ヘラケズリの後ヘラミガキを施す。口径9.1cm。残存高2.6cm。16の脚部には、４方に円形の透し穴が穿孔される。内面にはハケメが認められる。灰黄色を呈し、胎土は精良である。脚部径10.2cm。残存高5.5cm。

　木製品

Ｗ５　杵である。搗部の一端のみが残存する。現存長44cm、径6.5cm。加工は雑で、樹皮を剝いだままで、加工痕は認められなかった。

Ｗ６　用途不明の木製品である。長さ27.3cm、幅11.5cm、厚さ1.6cmの長方形を呈す。裏面は、四辺の角を落とし丸く仕上げ、一面は内寸法20.8×8.5×2.0cmに刳り抜かれている。更に長辺側の中央両端には、2.0×0.5mの穴が２個１対で設けられている。加工は丁寧で、何等かの蓋とも考えられるが定かでない。

Ｗ７　四脚付の槽である。縦方向に約２分１が残存する。長さ40cm、現存幅11cm。高さ11.2cm。脚は約７cmと高い。内寸法は、縦30cm、深さ３cmで、横７cmが残る。木目に平行の木取りで、加工痕は不明瞭である。

Ｗ８　用途不明の木製品である。現存長32.7cm、幅2.7～3.5cm、厚さ1.8cm。先端は、鬼頭状に削りだしている。鬼頭部の片面はやや膨みを持つ。

Ｗ９　２脚付きの盤である。脚の一方を欠損する。縦31cm、横19cm、高さ8.5cmが残存する。

欠損部は焼けて炭化している。現存する内寸法は、縦26cm、横16cm、深さ2.6cmを測る。木取りは、木目に平行で、加工痕は不明瞭である。

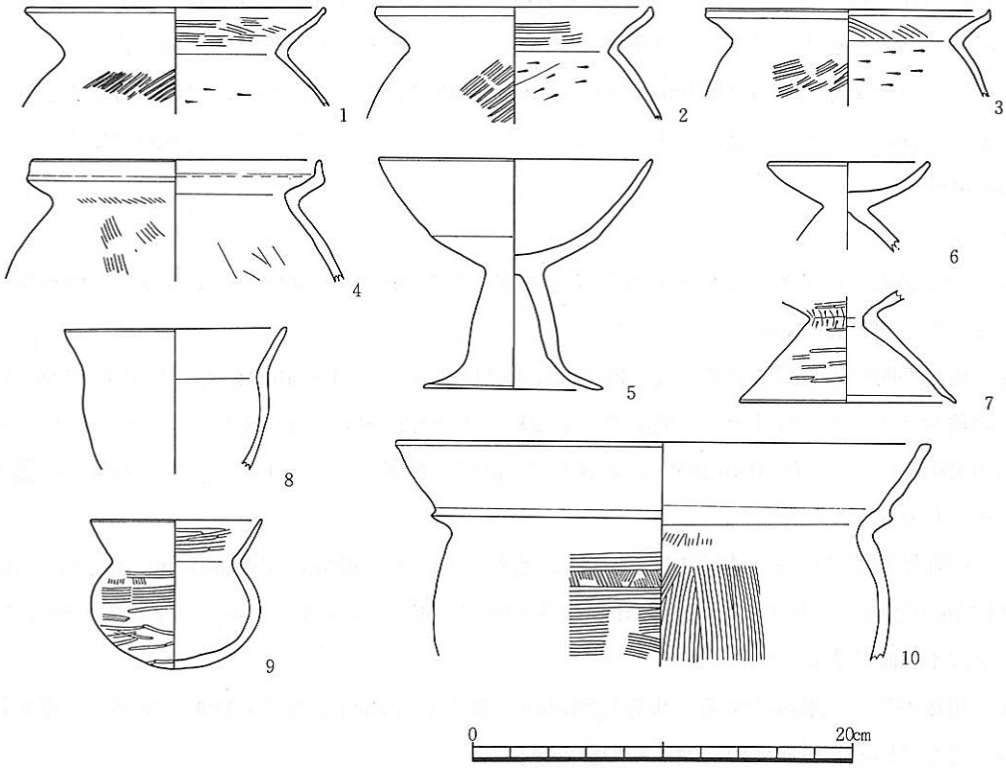
W10　四脚付きの槽である。縦44cm、横29.5cm、高さ9.2cmが残存する。裏面の４角には、幅10.5cm、厚さ３cmの逆台形の脚が付く。裏面は、僅かに丸味をつけて仕上げられる。内寸法は、縦31cm、横19.5cmで、深さ４cm以上である。木取りは、木目に平行である。

W11　梯子である。現存長92cm、幅25cm、厚さ2.4～7.8cm。足かけ部は２段が残る。足かけ部上面は平坦で36cmの間隔につくられる。下の足かけ部直下には、5.8×7.8cmの方形に刳り抜かれた穴がある。

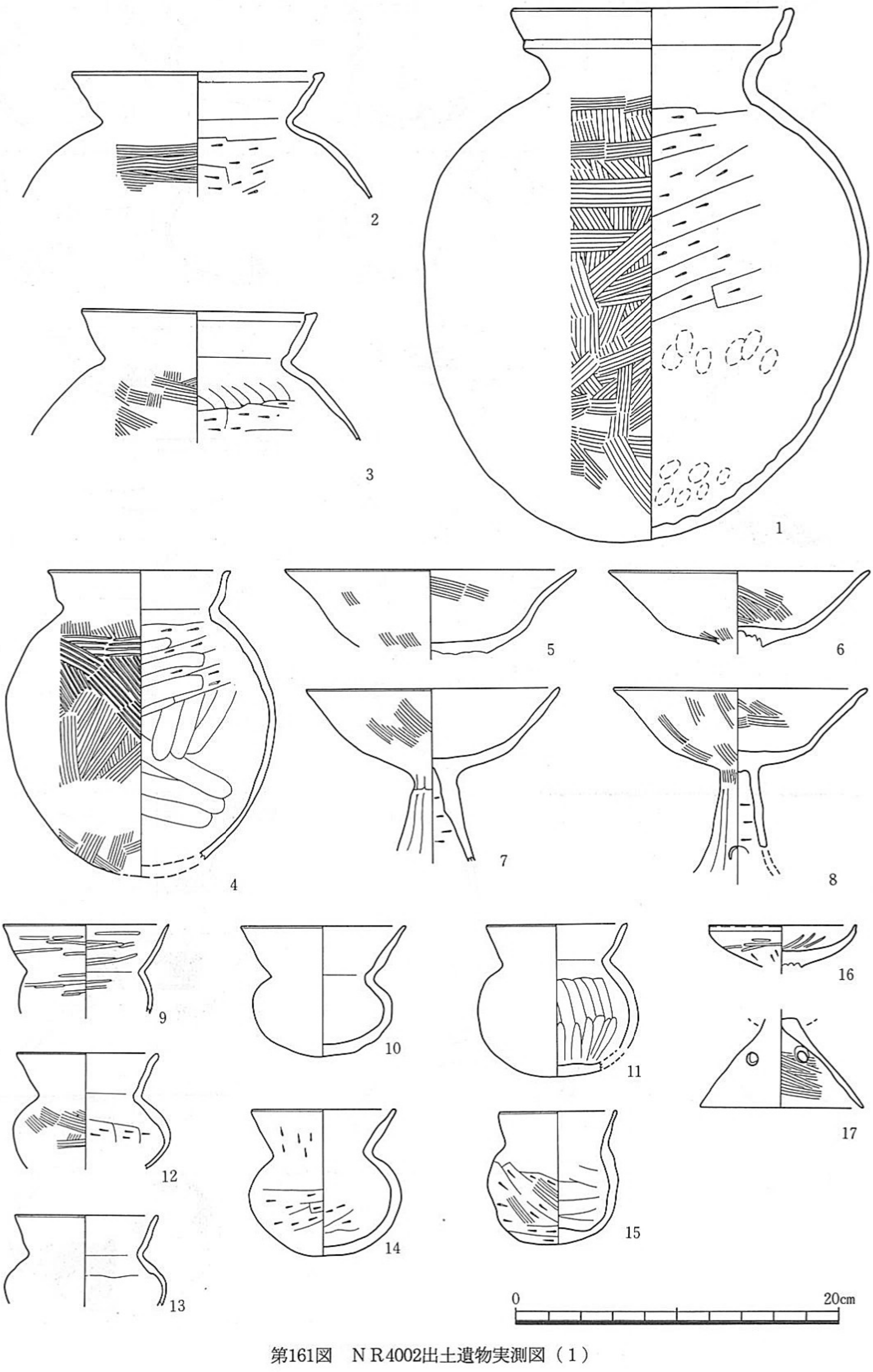
W12　脚付の容器と思われるが、遺存状態が悪く全形については明らかでない。現存長30.8cm、幅13cm、高さ6.2cmを測る。脚は、内側に付き、長さ13.4cm、幅3.4cm、高さ4.2cmが残存する。

－ＮＲ4003－（第162図）

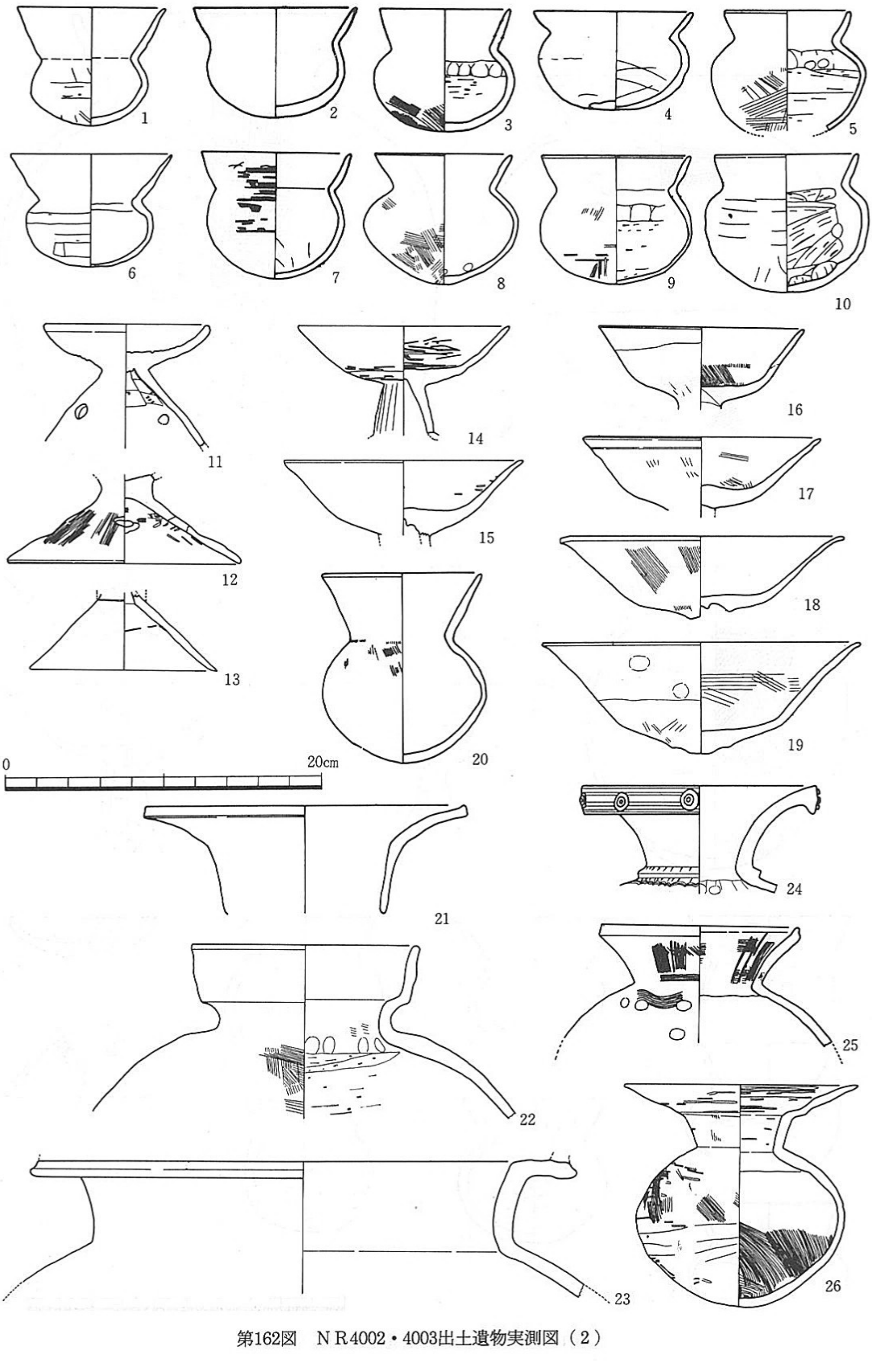
**二重口縁壺**（22・23・26）　22・23は、Ｆ類、26はＡ類である。24の口縁部内外面の段には、丸味を持ち、頸部へのヨコナデはきつく肩部は狭い平坦面をなして下がる。口径14.5cm、残存高11.2cm、23は大型の壺で、体部と口縁部上半を欠く。淡黄褐色を呈し、胎土は粗い。26の口縁部内外面の段は浅く、口縁部は大きく外傾して開き、端部は薄く舌状におさめる。体部外面上半



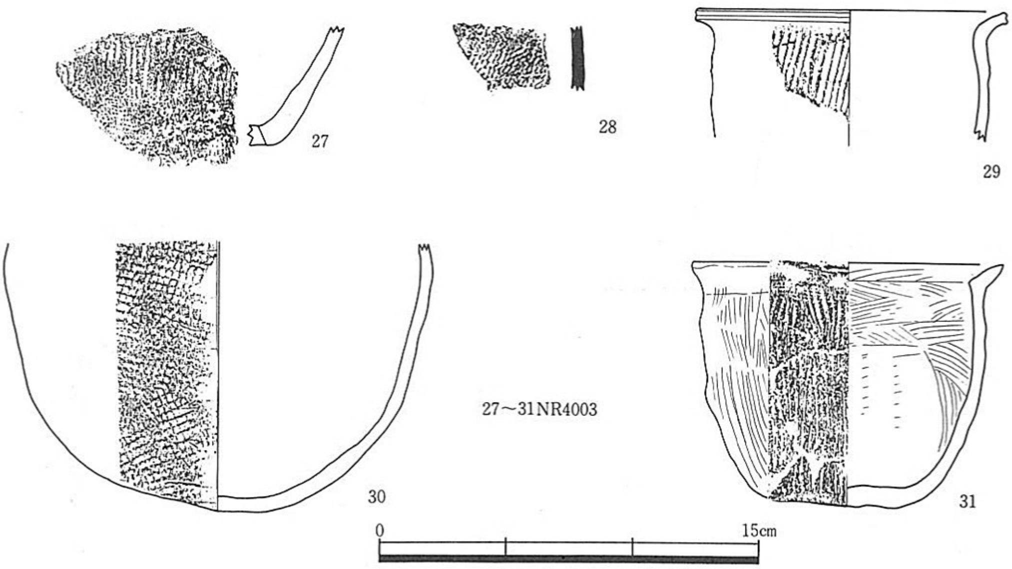

第160図　ＮＲ4001出土遺物実測図

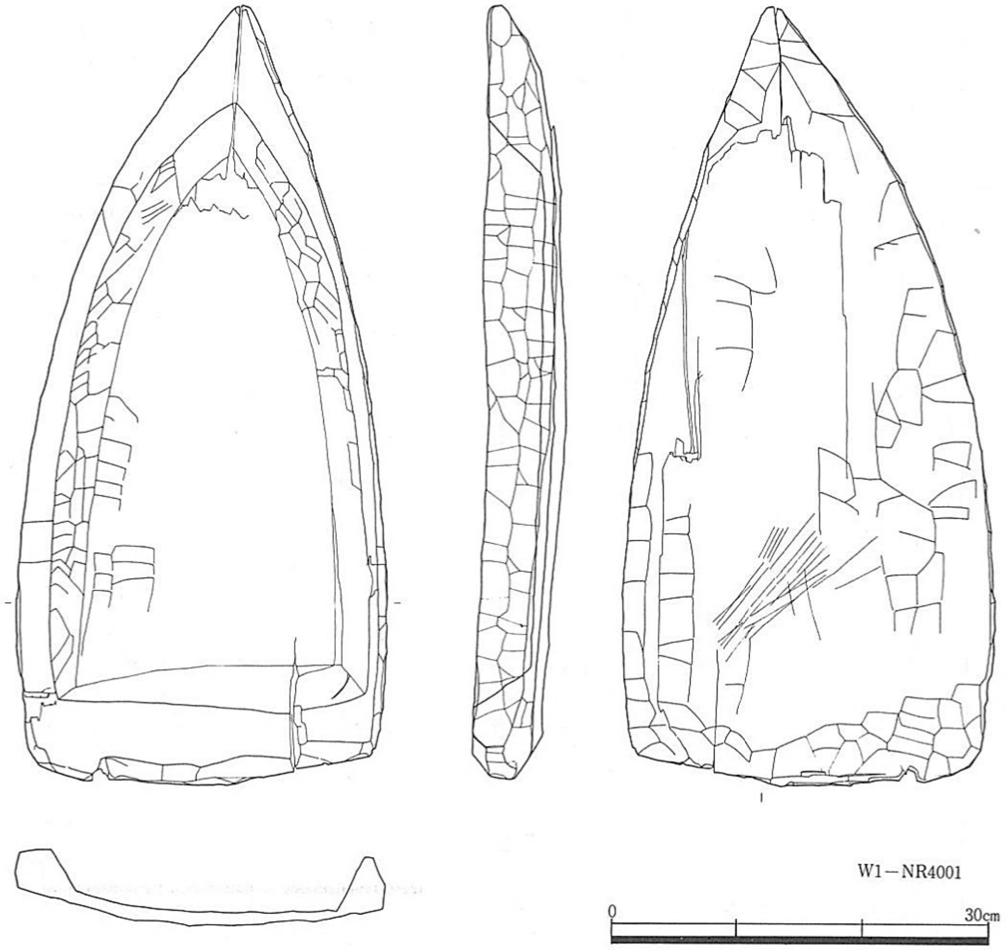



第161図　ＮＲ4002出土遺物実測図（１）

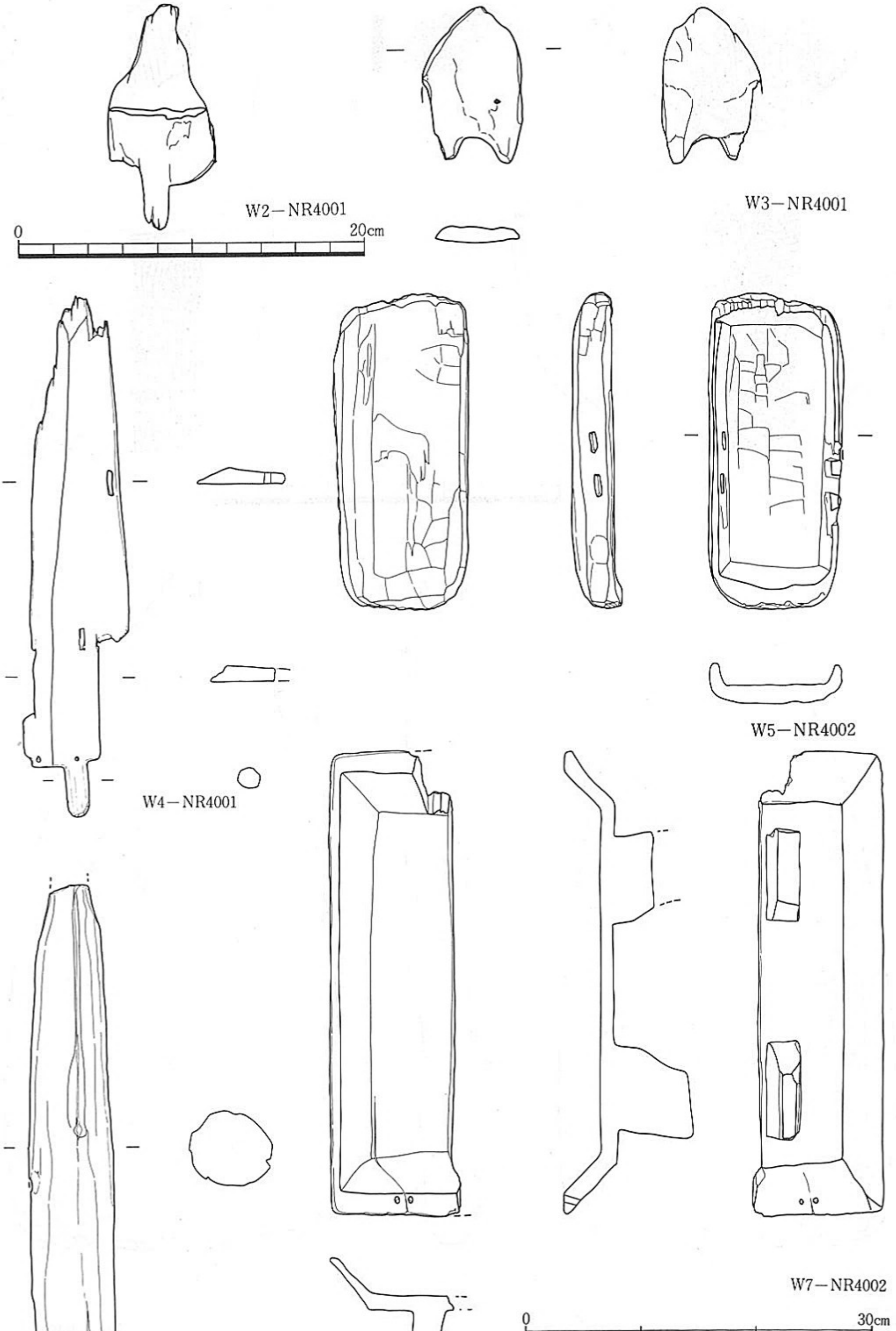



第162図　ＮＲ4002・4003出土遺物実測図（２）

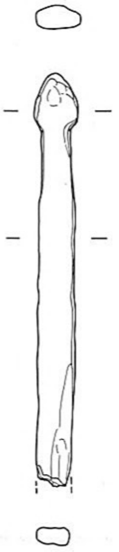


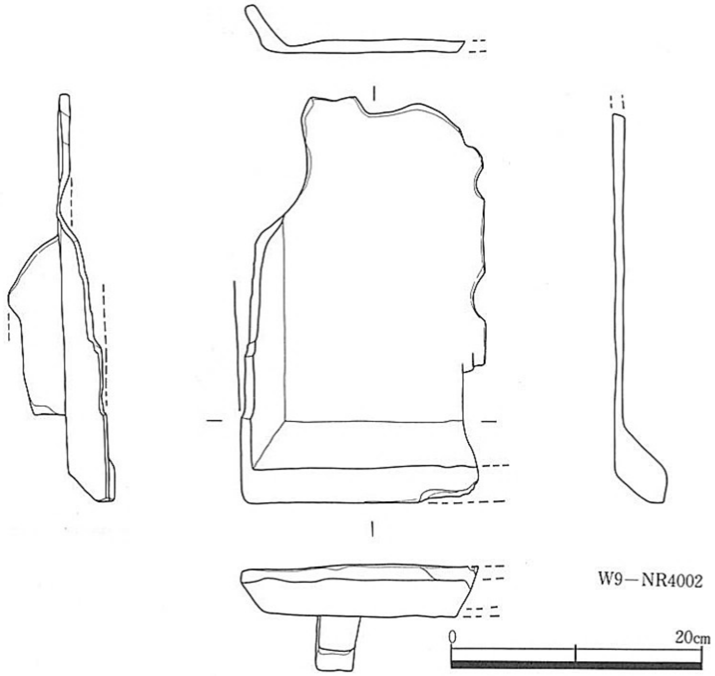

第163図　ＮＲ4002・4003出土遺物実測図（３）



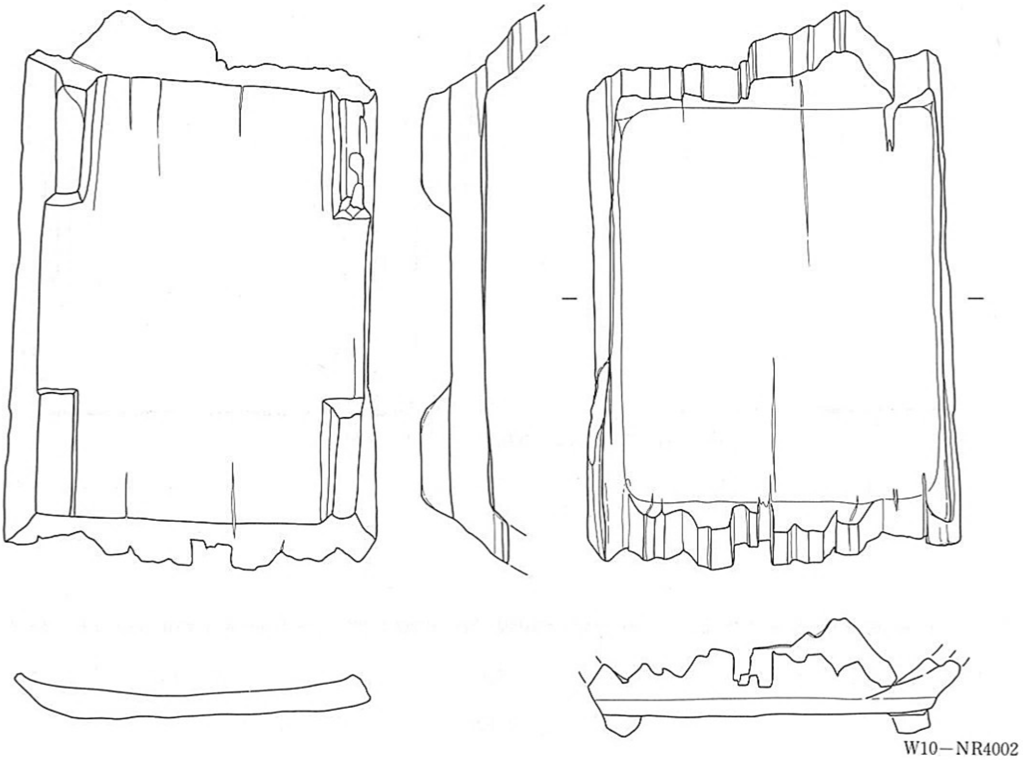

第164図　ＮＲ4002・4003出土遺物実測図（４）



W8－NR4002

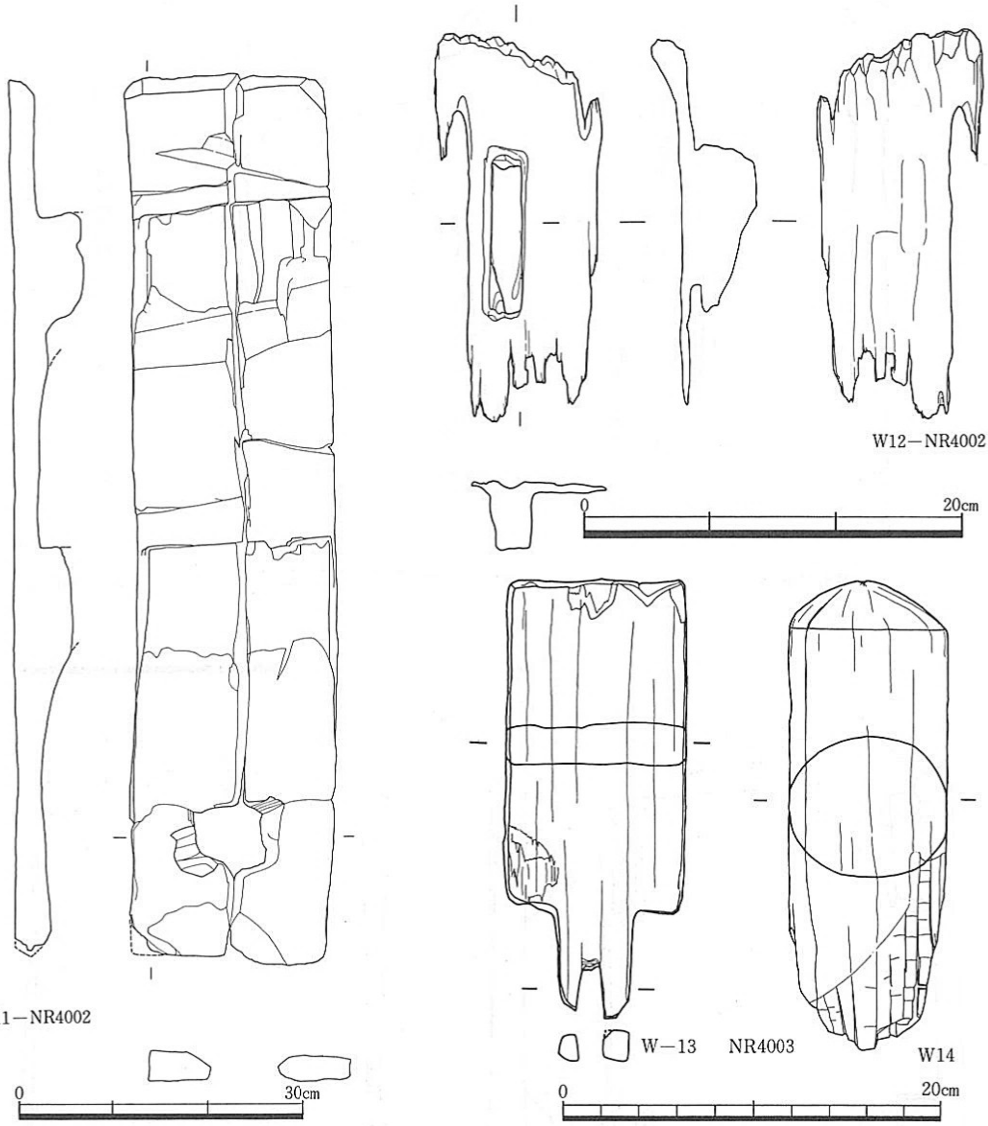



W9－NR4002




W10－NR4002

第165図　ＮＲ4002・4003出土遺物実測図（５）



第166図　ＮＲ4002・4003出土遺物実測図（６）

と体部内面下半にハケメを残す。口縁部と体部外面にヘラミガキを施す。口径14.8cm。器高14.1cm。

**広口壺**（21・24・25）　24は、庄内式期の加飾された壺である。頸部には烈点文を施された突帯が付く。口縁端部は下方に拡張し、外面には凹線状の沈線を巡らせ円形浮文を貼り付けて飾る。口径14.9cm。残存高6.8cm。21の口縁部は、外傾して立ち上り更に外反して開く。端部は内傾する面を持ち、上方へ小さくひきだす。口径20.2cm。残存高6.7cm。25の口縁部は「く」の字に外反して開き、端部を上方へひきだす。口縁部ハケメの後縦方向の細かなヘラミガキを施す。口縁部外面の一部には赤色顔料の付着が認められる。口径12.6cm。残存高7.3cm。

**直口壺**（20）　球形の体部と外方へ外傾して開く口縁部とからとなる。口縁端部は舌状におさめ

る。口縁部はヨコナデ調整、体部は外面ハケメの後内外面ナデ調整を施す。口径10.3cm。器高12cm。

**高坏**（12・14～19）　14は$B_1$類15～18は$B_2$類である。12は庄内式期に特徴的な椀形の坏部が付くもので坏部を欠く。脚部外面と内面上端にはハケメが認められる。３方に円形の透し穴が穿孔される。14には太目の中穴の脚部が付く。口縁部内面と底部外面にはヘラミガキが認められる。19の坏部は大きく、口径20.3cm、残存高7.1cmを測る。口縁部は大きく外反して開き、端部は舌状におさめる。口縁部外面には指頭圧痕が認められる。

**小型丸底壺**（１～10）　１・６は$B_1$類、２・７は$B_2$である。７は、球形の体部と短かく内弯して開く口縁部とからなるもので、端部は僅かに外方へひきだし舌状におさめる。口縁部外面と体部外面上半にヘラミガキを施す。口径9.5cm。体部最大径8.8cm。器高8.0cm。４は、偏球形の体部と短かく「く」の字に外傾する口縁部とからなるもので、端部は舌状におさめる。頸部内面には鋭い稜をなす。鉢に分類すべきかもしれない。内外面ナデ調整を施す。口径10.2cm、体部最大径9.6cm、器高6.2cm。

**小型器台**（11～13）　11はＢ類、13はＡ類である。11は、脚部に４個の円形の透し穴が穿孔される。脚部内面上半にはヘラケズリが施される。口径10.5cm、残存高7.4cmは受部を欠く。受部との境は貫通する。端部は外下方へひきだし舌状におさめ、内面には浅い段をなす。内面には、ハケメ、ヘラミガキの跡が僅かに認められる。脚部径11.8cm、残存高5.0cm。

**韓式系土器**（27～31）　27は甑、29・31は平底鉢、30は甕である。28は、条綧文土器である。詳細については、第Ⅵ章第２節で触れる事とする。

木製品

W13　用途不明の木製品である。長さ23.1cm、幅9.4cm、厚さ2.1cm。端から約６cmの所から凸形に作り出し、更に突起部の中央を幅1.0～1.5cm、深さ2.5cmにニヌ状に切り込んでいる。

W14　杵もしくは槌の一部と思われる。現在長24.6cm、径8.5cmを測る。端は丸く半球形に仕上げている。もう一端の欠損部は焼けて炭化している。

**第５層－包含層－出土遺物**

第１・第２居住域、Ａ～Ｉ－58～68地区とＦ～Ｉ115～125地区には、良好な包含層が形成されており、層上面、層中より多くの遺物が出土した。層の様相については既に述べた通りである。ここでは、遺物の出土状況と出土遺物について、各地区ごとに説明を行なう事とする。その前に、まず、改めて全体の層の様相、堆積状況について、簡単に整理しておく事とする。

**層相及び堆積状況**　基本的には、包含層は、炭炭化物を多く含む黒灰色粘土と中砂、細砂で構成されている。第１居住域の包含層が、粗砂、中砂を主体とするのに対して、第２居住域のそれは、砂粒の粒径も小さく、砂粒の混入も少ない粘土質で、層も比較的均質である。両包含層の共通するのは、層中に焼土粒あるいは焼土のブロックを含む炭の拡がりや薄層が認められる点で、第１居住域包含層では土器群が出土している。これらの事から、包含層が主として、人々が生活を営

み続ける事によって徐々に形成されていったものと考えられる。包含層は、遺構面の中でも比較的遺構の集中する範囲に厚く堆積し、その周辺地域の自然河川近くや溝の肩部では、浸食作用によって遺構内へたれ込むように堆積する様子が窺えた。また、第1居住域の包含層の上位では、黄褐色の粗砂のブロックが混入している地区があり、洪水あるいは溝のオーバーフローによって流水に洗われた時期があったものと推察される。包含層上面には、自然河川（NR4001～4004）の堆積作用による青灰色粘土が堆積する。第1居住域包含層上面はT.P.+5.0～5.4m、層厚10～20cm。第2居住域包含層はT.P.+5.2～5.4m、層厚5～15cm。遺物の出土は、出土位置および出土状況によって、（2）－包含層の上面に幾つかのブロックと破片が散乱した状態で炭とともに出土するもの。（3）－層中において複数個体が集合した状態（土器群）で出土するもの。（4）－層中において破片で出土するものに大別され、これに従って出土遺物と出土状況について説明していくが、（2）－層上面で出土したものの中には、明らかに面から浮いているもの、原位置を失い遺構内に上層粘土と伴に流入しているものがあり、これらを（1）－上層粘土層出土遺物として扱った。

**（1） 包含層上層粘土層出土遺物**（第167～169図、図版166～120）

第1居住域、A～I－58～68地区において多く出土し。包含層上面には、主に青灰色粘土層が堆積するが、H・I－62～66地区では青灰色シルトや黄褐色微砂の薄層（層厚5cm前後）の堆積が認められる。本来は包含層上面にあった土器は、何等かの要因によって原位置を失い、この粘土、シルト層中に埋没したものと考えられる。全体に遺存状態は良好で、完形に復元されるものが多い。

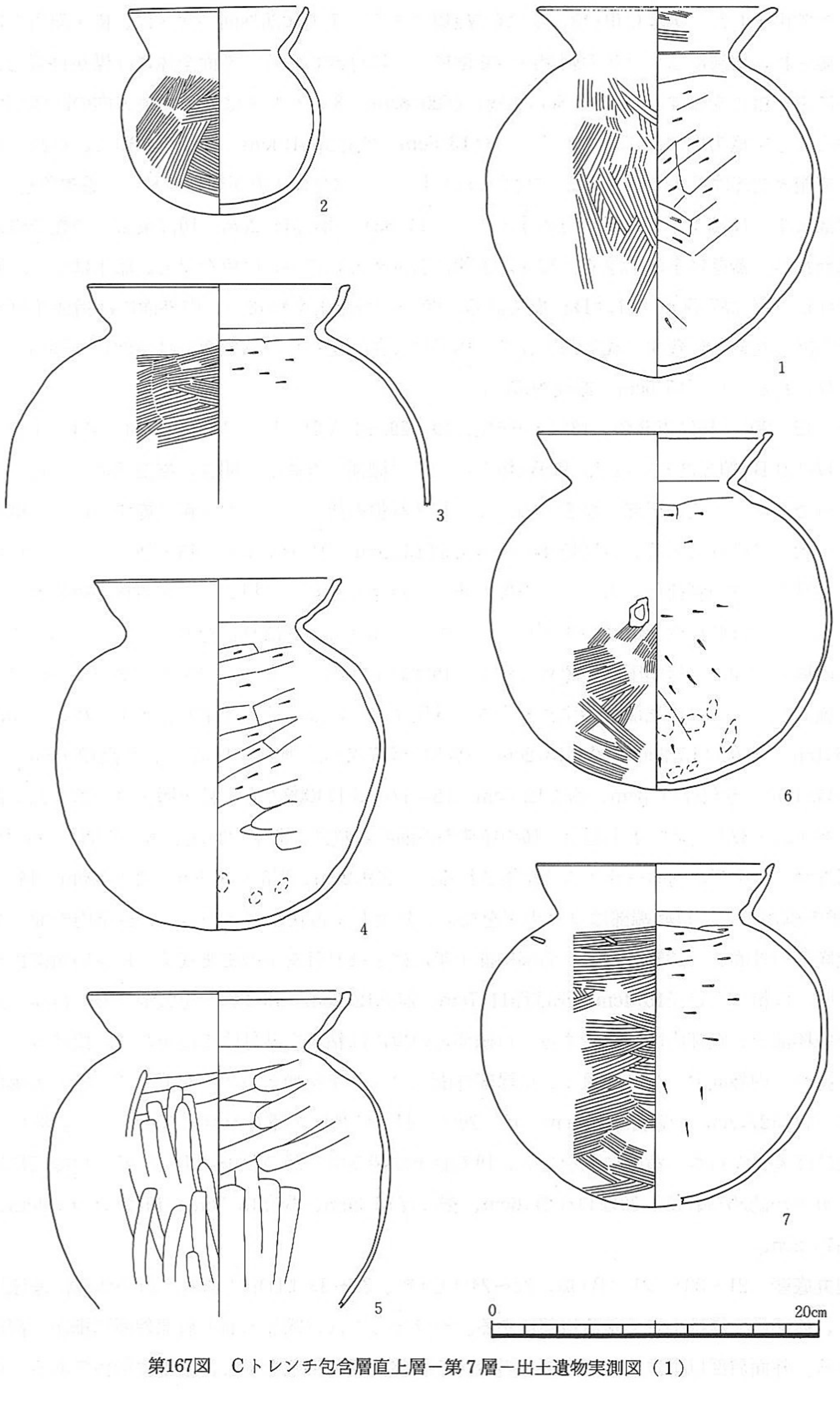
**広口壺（1）** B類である。C－1トレンチで出土した。口縁部で器壁を増し、端部は外傾する面を持つ。体部外面には縦方向の粗いハケメ調整が施される。外面肩部より下の一部には煤が付着する。灰白色を呈し、胎土は粗い。口径14.8cm。器高22.8cm。

**甕（2～11）** 2は、口径10.9cm、器高12.8cmの小型の甕で、体部外面には煤が付着する。全体に器壁が厚く、体部外面のハケメも粗い。にぶい褐色を呈す。H－63地区のシルト層中から小型有段鉢34と伴に出土した。3はCⅡ$_3$類で、内弯して開く短い口縁部が付く。口縁端部はb$_4$で、外方へ小さくひきだす。外面には全体に煤が付着し、内面は茶褐色を呈する。口径16cm。残存高13.7cm。4・5はD$_3$類で、口縁部は内弯して開く。4の体部外面ナデ調整は、肩部から体部上半を横方向、以下を縦方向に施され、内面はヘラケズリの跡ナデ調整が施される。茶褐色を呈す。口径15.2cm。器高21.5cm。5の頸部内面の稜はやや鋭く、口縁端部は上方へ立ち上がり平坦な面をなす。外面ナデ調整は、肩部に横方向の後縦方向に施される。内面は、体部下半縦方向、上半斜方向のヘラケズリが頸部直下まで施される。茶褐色を呈し、胎土は粗い。口径16.1cm。残存高19.4cm。6はCⅢ$_1$類で、口縁部は「く」の字に外傾して開き、口縁端部はa$_2$類である。体部中央には、焼成後に穿孔される。外面ハケメ調整は、縦・斜方向に施され体部上半は横方向のナデ調整によって消されている。淡赤褐色を呈す。口径14.3cm。器高22cm。C－2ト

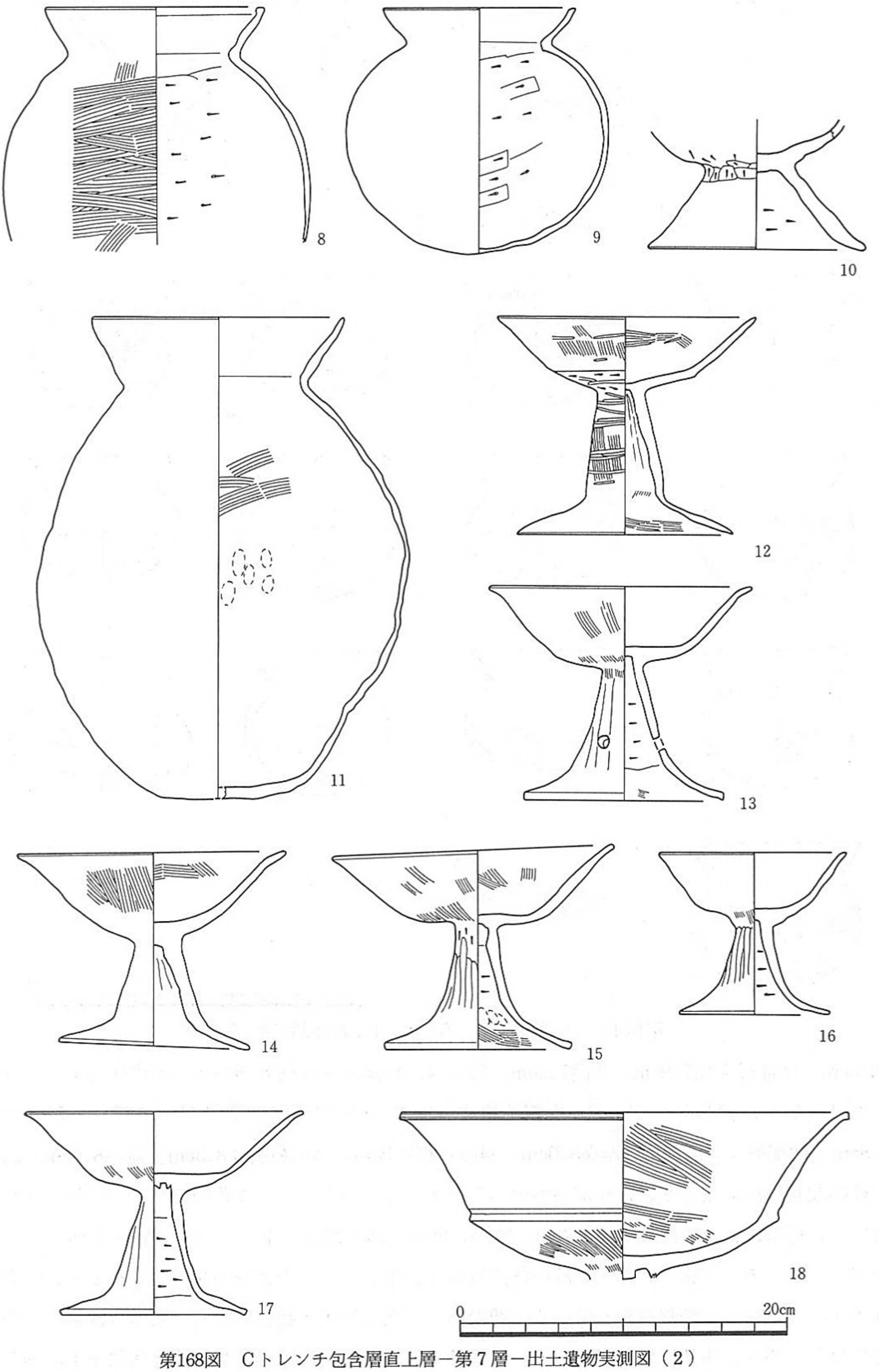
レンチで出土した。7はCⅢ1類、8はCⅣ2類である。7の体部外面ハケメは、横・斜方向に丁寧に施され、肩部にはヘラ状の刺突痕が6個横方向に付けられる。外面全体には煤が付着し、内面はにぶい橙色を呈す。口径13.5cm。残存高20.8cm。8のハケメは粗く、縦方向の跡体部中央を中心として横方向に雑に施される。口径13.5cm。残存高14.4cm。9はD4 類で、口縁部は内弯して開き端部は舌状におさめる。体部外面下半以下には指頭圧痕が認められる。茶褐色を呈し、口縁部上半と体部下半には煤が付着する。口径11.8cm。器高16.2cm。10は東海系の甕の脚部とも思われる。器壁は全体に厚く、端部は舌状におさめる。にぶい橙色を呈し、胎土は粗い。底径12.7cm。残存高7.5cm。11はD4 類である。胎土、調整とも粗雑で、内外面には指頭圧痕や粘土紐の継目を顕著に残す。底部は平底で、体部は長卵形をなす。器壁面には気泡状の細かな穴が多数見られる。口径15.5cm。器高29.7cm。

**高坏**（12～20）　16はⅢB類、18はⅠB2類、19・20はⅠA類、12はⅡB1類、14はⅡC2類、13・15・17はⅡB2類である。12は、脚B2類が付く。口縁部は外傾して開き、端部は薄く舌状におさめ、口径に比して浅い坏部となる。細かなハケメ調整の後ヘラミガキを粗く施す。にぶい橙色を呈し、胎土は精良である。口径15.8cm。裾部径13.3cm。器高13.4cm。13・15・17には、C類の脚部が付く。13の脚筒部下半には、円形の透し穴が穿孔される。粗いハケメ調整の後軽くナデ調整を加える。脚筒部内面にはいずれもヘラケズリを加えて、しぼり目を消している。15の筒部と裾部の境の内面には指頭圧痕が認められる。15は筒部外面ヘラケズリの後太い縦方向のヘラミガキを施している。口縁端部はいずれも小さく外反する。にぶい橙色を呈し、胎土は粗い。13は口径16.1cm。裾部径12.2cm。器高13.2cm。15は口径17.2cm、裾部径11.4cm、器高12.6cm。17は口径17.1cm、裾部径11.3cm、器高12.6cm。15・17はSD4002の直上粘土層より小型丸底壺22・26・30・31・32と一括で出土した。16の坏部内外面の調整は、器壁の磨滅が著しく明らかでない。筒部外面ヘラナデ、内面ヘラケズリが施される。口径9.2cm。裾部径9.2cm。器高10cm。14には、A2類の脚がつく。口縁端部はヨコナデを加え、外反して舌状におさめる。口縁部内外面ハケメの後底部内外面ナデ調整を施す。筒部内面上半にはしぼり目をそのまま残す。にぶい黄橙色を呈し、胎土は粗い。口径16.4cm。裾部径11.7cm。器高12.2cm。18は脚部を欠損する。口径に比して深い坏部で、底部内面は内弯する。口縁部との境には粘土を貼付けて段をなす。段は低く、丸味を持つ。内外面のハケメは粗く、口縁部外面はヨコナデを加えハケメを消している。灰褐色を呈す。口径27.2cm。残存高10.3cm。19・20は、H－60地区で重なり合って出土した。坏部外面の段には丸味を持つ。黄灰白色を呈し、19の胎土は精良で、20の胎土は粗い。20の口縁部にはヘラミガキが認められる。20は口径21.6cm、裾部径15.3cm、器高13.3cm。19は口径18.4cm、残存高13.2cm。

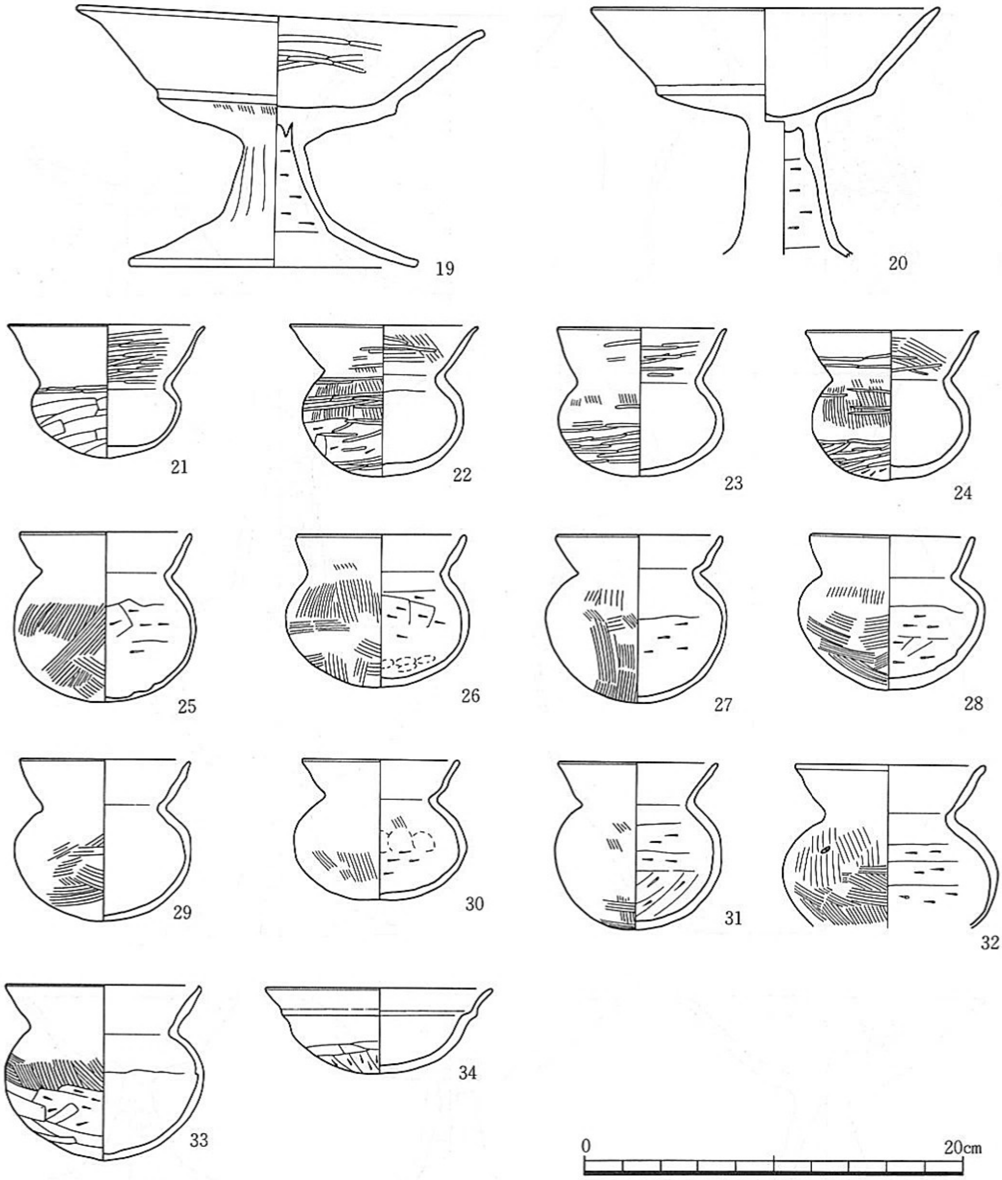
**小型丸底壺**（21～33）　21はB1類、22～24はC1類、25～33はD類である。21の体部は偏球形をなし、体部最大径は小さく張る肩部にある。ヘラミガキは口縁部内面と肩部外面に細かく密に施される。外面肩部以下は、ヘラケズリの後ナデ調整。淡黄褐色を呈し、胎土は精良である。口径




第167図　Cトレンチ包含層直上層－第７層－出土遺物実測図（１）




第168図　Cトレンチ包含層直上層－第7層－出土遺物実測図（2）




第169図　包含層直上層－第７層－出土遺物実測図（３）

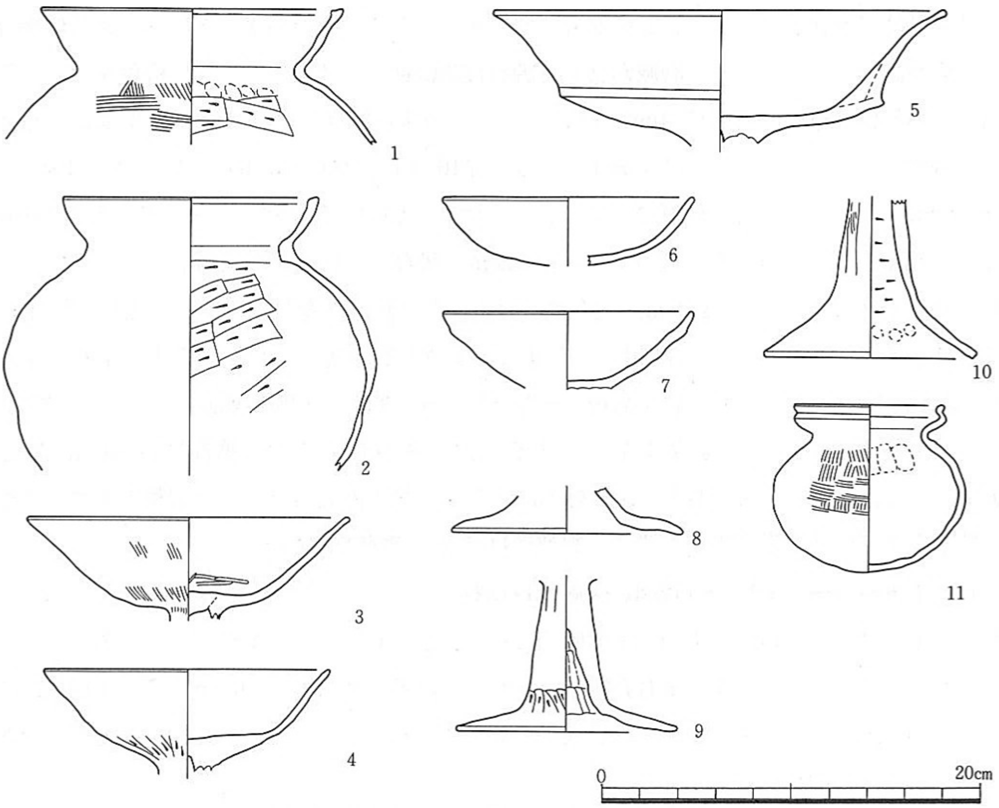
10.5cm。体部最大径7.9cm。器高7.0cm。22・24は口縁部と体部外面ハケメの後体部下半にヘラケズリを加え、細かなヘラミガキを粗く施す。にぶい橙色を呈し、胎土はやや粗い。22は口径9.8cm。体部最大径8.5cm。器高8.0cm。24は口径9.0cm。体部最大径8.3cm。器高8.0cm。23も同様の調整技法によるが、口縁部外面のヘラミガキは認めらない。浅黄橙色を呈し、胎土はやや粗い。口径8.9cm、体部最大径8.7cm、器高7.9cm。25～33は、全てハケメ調整を主体とするもので、ヘラミガキは施されない。27の体部外面は、粗いハケメの後細かなハケメを施し、内面体部上半には雑なナデ調整を施している。29の体部内面は指ナデ調整による。32の口縁部はやや長く外反して開き、体部は偏球形となる。体部外面は、縦方向に有りハケメの後体部下半に細かな

ハケメを縦方向に施す。灰黄色を呈し、胎土は粗い。口径10cm。体部最大径11.3cm。残存高8.6cm33はやや大きめの偏球形の体部と外傾する口縁部とからなる。32と伴に小型壷に含めるべきかもしれない。外面肩部以下は、、ハケメの後体部下半以下にヘラケズリを施し、更にナデ調整を加える。淡黄褐色を呈し、胎土は粗い。口径9.8cm。体部最大径10.5cm。器高9.3cm。

**小型有段鉢**（34）　B類である。口縁部の屈曲も弱く、口縁部も短い。外面底部付近にヘラケズリを加え、ナデ調整を施す。１～３mm大の砂粒を多く含み、胎土は粗い。口径12.1cm。器高4.5cm。

（２）　**包含層上面出土遺物**（付図９～12、図版19・20）

両居住域の包含層上面で遺物が検出されたが、特に第１居住域、A～Ⅰ－56～68地区では細片を含め多くの遺物が出土した。A～Ⅰ－58～68地区では、包含層と上層粘土層との層相が全く異なり、このため、包含層の検出は容易で、細片においても比較的原位置を保つ事ができた。この中でも特に遺物が集中するのは、ＳＤ4001とＳＤ4004の間で、11×42mの範囲に及び、北西方向へは更に調査区外へ拡がるものと思われる。遺物の出土状況には、（１）細片が散乱した状態にあるもの。（２）１個体のみでほぼ完形に復元されるもの。（３）複数個体が集合した状態にあるものに分けられる。（２）、(3) の場合、位置関係、組成には特に、共通した、傾向は認められなかった（３）の場合、炭、灰を伴う例が見られた。各地区ごとに出土遺物の説明を行なう。




第170図　C10トレンチ包含層上面出土遺物実測図

１．Ｃ－10トレンチ（第170図、図版120）

包含層上位に黄褐色粗砂のブロックの混入が認められる。包含層上面は、トレンチ西コーナー部分で高くなり、徐々に東方向へ向かって低くなる。層上面はＴ．Ｐ．＋5.0～5.2mにある。層上面での遺物の出土は少なく、主にＳＤ4001の東側に集中していた。複数の個体が集合した状態は見られなかったが、北西端と南東端に比較的まとまって出土した。（付図９）

**小型壺**（11）　Ａ$_2$類である。口縁端部は丸く肥厚し、上端は僅かに内傾する面をなし、外方へ小さくひきだされる。体部外面のハケメはやや粗く施される。淡橙色を呈し、１～３mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径7.8cm。器高8.9cm。

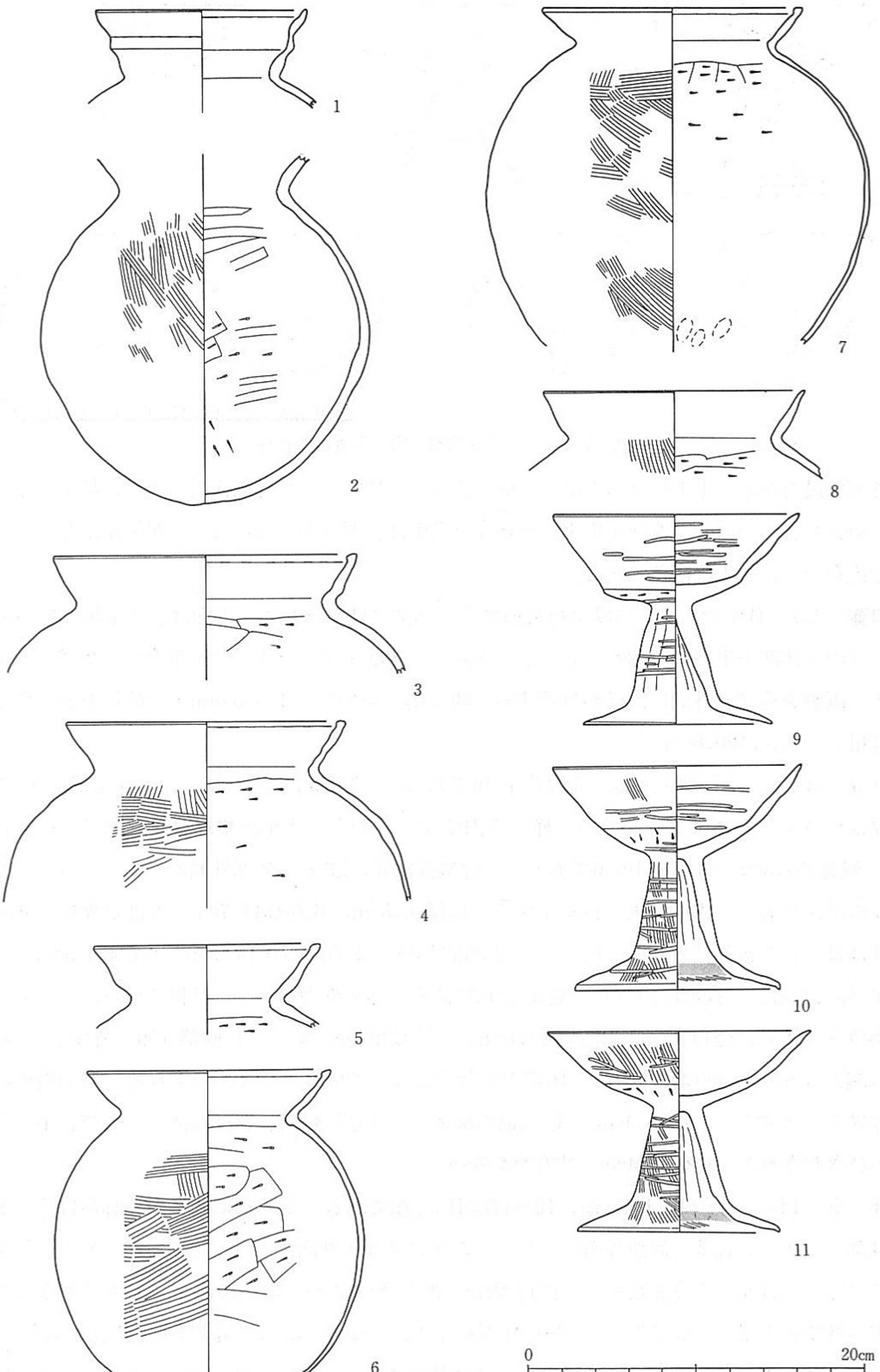
**甕**（１・２）　１はＣⅡ類、２はＤ$_3$類である。１の口縁部は長く外傾して開き、口縁端部はａ$_2$である。僅かに内傾する面は中央が窪み、端部の肥厚は小さい。内面頸部直下には指頭圧痕が残る。外面全体に煤が付着し、内面はにぶい橙色を呈す。口径15.8cm。残存高7.1cm。２の口縁部は短く内弯して開き、端部は肥厚することなく、内傾する面を持つ。内面ヘラケズリは、頸部直下から強く施され、頸部直下に段ができる。体部外面は、指ナデ調整による。外面全体に煤が付着し、内面はにぶい黄褐色を呈す。３mm大の砂粒が多く含まれ胎土は粗い。口径13.4cm。残存高14.5cm。

**高坏**（３～10）　５はⅠＡ類、３・４はⅡＢ$_2$類である。５は、口縁部と底部との接合部内面に粘土を貼り付けて補強している為、この部分で器壁が厚くなる。また、接合部には、底部側接合面にヘラ痕が認められた。器壁の磨滅が著しく調整技法は明らかでない。にぶい橙色を呈し、胎土は粗い。口径23.4cm。残存高7.1cm。３は、ハケメの後口縁部ヨコナデ調整、４は、口縁部ヨコナデ調整、底部外面ヘラケズリを施す。３は口径16.8cm。残存高5.4cm。4は、口径15cm。残存高5.6cm。６・７は、浅い椀形の坏部で、７には８の脚部が付くⅢＣ類である。6は内外面を粗くナデ調整を施す。赤灰色を呈す。口径13.2cm。残存高3.6cm。７の調整は、器壁の磨滅が著しく明らかでない。口径13.2cm。残存高4.1cm。８は脚筒部を欠損する。７と同じ胎土、色調である。裾部は低く水平方向に開く。内外面に指頭圧痕が残る。にぶい橙色を呈し、１～３mm大の砂粒を多く含む。裾部径13.2cm。残存高4.1cm。９は、Ａ類の脚部である。筒部外面は、ヘラケズリの後中央にナデ調整を施し、内面にはしぼり目を残す。裾部径11.6cm。残存高7.9cm。10は、Ｂ類の脚部である。筒部外面はハケメの後内外面ヘラケズリ調整を施す。裾部内面、筒部との境には、指頭圧痕を残す。裾部径11.2cm。残存高8.4cm。

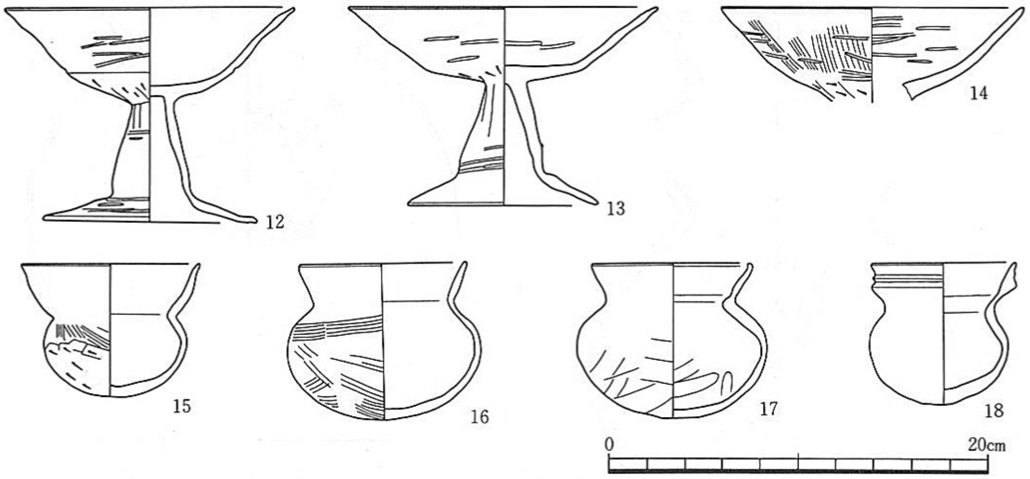
２．Ｃ－１トレンチ（第171・172図、図版121・122）

包含層上面はほぼ平坦で、Ｔ．Ｐ．＋5.0～5.2mにある。Ｃ－２トレンチとともに多くの遺物が出土した。数箇所で複数土器の集合が認められた。主にＳＤ4001の西側に集中する傾向にある。トレンチ南東部分Ｄ－59・60地区では、炭層の拡がりが検出され、これに伴って土器の集合が出土している。（付図10）

**二重口縁壺**（１）　口縁部の約４分の１の破片で、肩部以下を欠損する。体部から外反した後、




第171図　Ｃ１トレンチ包含層上面出土遺物実測図（１）




第172図　C１トレンチ包含層上面出土遺物実測図（２）

内外面に段をなして上方へ立ち上がり、更に肥厚して外反する。外面体部との境に粘土を貼り付けて補強し、この部分で器壁が増す。内外面の調整は、器壁の磨滅によって明らか出ない。にぶい橙色を呈し、胎土は精良である。

**広口壺**（２）　B類である。口縁部を欠損する。体部は卵形をなす。外面は、やや粗い縦方向のハケメの後体部下半にナデ調整を加える。内面は、体部上半ヘラナデ、下半をヘラケズリの後ヘラナデ調整を施す。外面には煤が付着する。明赤褐色を呈し、１～５mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。残存高20.8cm。

**甕**（３～８）　全てC類である。３はCⅠ$_3$類である。口縁部は短く外傾し、口縁端部はa$_1$で、肥厚は小さく、上端は丸味を持って僅かに内傾す。外面ヨコナデ調整は肩部に及ぶ。口径17.6cm。残存高7.3cm。４はCⅡ$_3$類である。口縁端部はb$_3$である。体部外面のハケメは粗い。外面全体に煤が付着し、内面は灰黄色を呈する。口径16.6cm。残存高11.7cm。５はCⅣ類である。頸部は細く、口縁部は外傾して開く。口縁端部はa$_1$である。口径13.2cm。残存高4.9cm。６はCⅢ$_2$類である。口縁部は内彎し、端部はa$_3$である。体部外面のハケメは粗く施される。にぶい赤褐色を呈す。口径14.6cm。残存高18.1cm。７はCⅢ$_3$類である。口縁部は短く外傾して開く。口縁端部はa$_2$で、肥厚は小さい。体部中央付近には、焼成後に穿孔がなされる。外面肩部以下には煤が付着する。口径15.4cm。残存高19.8cm。８はCⅢ類で、口縁端部はb$_4$で、小さく外方へひきだされる。口径15.4cm。残存高4.7cm。

**高坏**（９～14）　９・13はⅡB$_1$類、10～12はⅡC$_1$類である。９・13にはB類の脚が付く。９は口縁部ヨコナデ、底部と筒部外面ヘラケズリの後口縁部と外面にヘラミガキを粗く施し、筒部内面にはしぼり目をそのまま残す。口径14.2cm。裾部径11.3cm。器高12.5cm。13の口縁部はやや外方へ外傾して開き、口径に比して浅い坏部をなす。口縁部と裾部の端部は薄く舌状におさめる。口縁部と外面のヘラミガキは粗く施され、底部外面にはヘラケズリ痕が認められる。にぶい橙色を呈し、胎土は精良である。口径16cm。裾部径10cm。器高10.5cm。10～12は、口縁部ヨコナデ、

底部外面ヘラケズリの後外面ハケメを施し、更に口縁部と外面に粗くヘラミガキを加える。10・11にはA2類の脚部が付く。裾端部は下方へ小さくひきだし舌状におさめ、接地面とする。筒部との境は器壁が薄く、内面には布目の圧痕が認められる。10の坏部は、内面に平坦な面をなさず、深い坏部となる。にぶい橙色を呈し、胎土は精良である。口径14.6cm。裾部径12.1cm。器高13.3cm。11は、口径15.2cm。裾部径12cm。器高12cm。12は口径15.8cm、残存高4.9cm。12にはB類の脚部が付く。坏部は椀形に開いた後口縁部上半で外反し、端部は舌状におさめる。外面底部との境には、浅い沈線が巡る。器壁の磨滅によって調整技法の詳細は明らかでないが、口縁部外面と脚部外面にはヘラミガキ、底部外面にはヘラケズリ痕が認められる。橙色を呈し、胎土はやや粗い。口径15.2cm、裾部径11.2cm、器高11.4cm。

**小型丸底壺**（15～17）　15はB2類、16・17はD類である。15の口縁部は内弯した後端部で小さく外反し、舌状におさめる。口縁部ヨコナデ調整、体部外面ハケメの後下半以下にヘラケズリ調整を施す。褐色を呈し、胎土はやや粗い。口径9.2cm、体部最大径7.5cm、器高7.2cm。17は体部外面ナデ調整、16は体部外面ハケメ調整による。17は、にぶい橙色を呈し、1～4mm大の砂粒を多く含み胎土は粗い。口径8.2cm、体部最大径10cm、器高8.2cm。16は、にぶい橙色を呈し、胎土は精良である。口径8.6cm、体部最大径10.1cm、器高8.3cm。

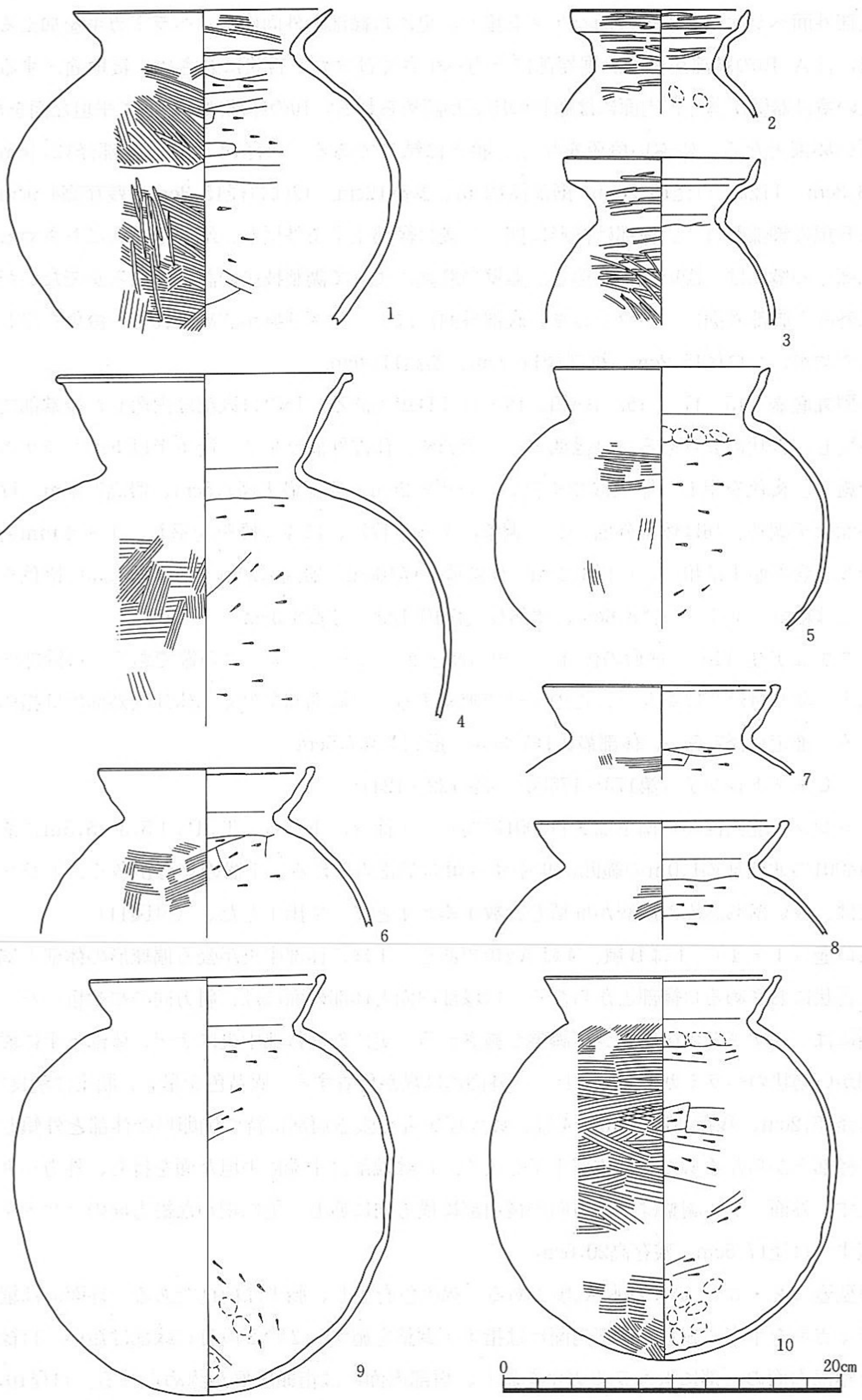
**ミニチュア壺**（18）　球形の体部と二重口縁とからなるミニチュアの壺である。口縁部外面には粘土を貼り付けて段をなし、この部分で肥厚する。口縁端部を欠く。体部内外面には指頭圧痕が残る。推定口径7.5cm、体部最大径7.3cm、推定器高7.5cm。

3．C－2トレンチ（第173～175図、図版122～124）

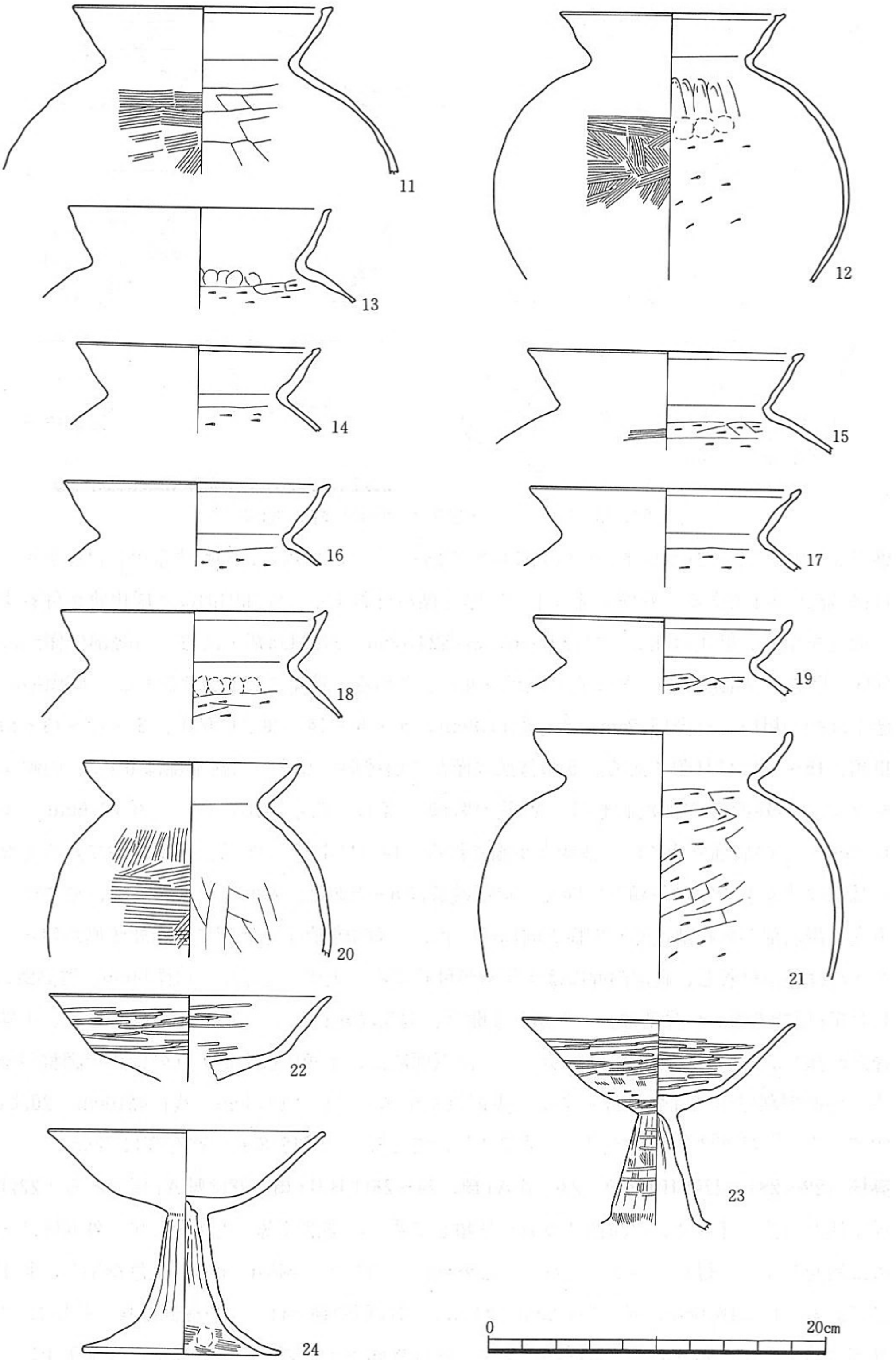
トレンチ北西部から南東部SD4001に向かって徐々に下がる。T．P．+5.3～5.5mにある。SD4001の北西部約1.0mの範囲に集中する傾向が認められる。土器の集合が多く、トレンチ北側では、浅い落ち込みに炭層が堆積し、数土器がまとまって出土した。（付図11）

**広口壺**（1・4）　1はB類、4はA2類である。1は、体部中央が張る偏球形の体部と端部を薄く舌状におさめる口縁部とからなる。口縁部内面と体部外面には、斜方向のやや粗いハケメ、内面にはヘラケズリの後ヘラナデ調整が施される。更に外面体部中央にナデ、体部下半に縦方向の細かい筋状のヘラミガキが施される。外面には煤が付着する。灰黄色を呈し、胎土は精良である。口径15.2cm、残存高18.7cm。4は、最大径を丸く張る肩部に持つ倒卵形の体部と外傾して開く口縁部とからなるもので、体部下半を欠く。口縁端部は上端に平坦な面を持ち、外方へ丸くひきだす。外面ハケメ調整は、縦方向の後肩部に横方向に施し、更に細かな縦方向のハケメを肩部に施す。口径17.5cm、残存高20.6cm。

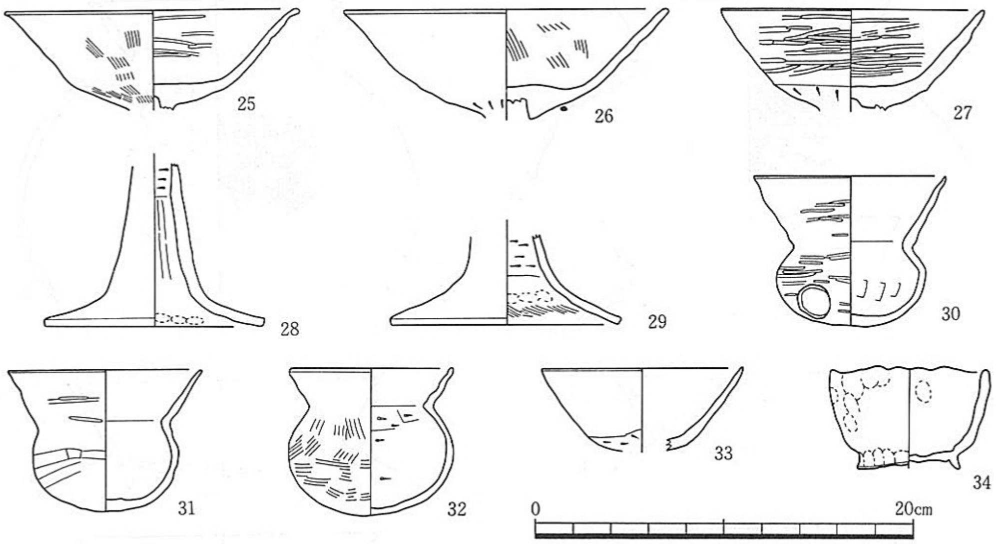
**小型壺**（2・3）　いずれもA1類である。褐灰色を呈し、胎土は精良である。外面には細かなヘラミガキを丁寧に施し、体部内面には指ナデ調整を施す。2の2段目口縁部は短い。口縁部内面と頸部内面の一部にもヘラミガキを施し、肩部内面には指頭圧痕が認められる。口径10.5cm、残存高6.0cm。3は、口縁部と頸部の内面にナデ調整を施す。口径11.6cm、残存高9.9cm。




第173図　Ｃ２トレンチ包含層上面出土遺物実測図（１）




第174図　Ｃ２トレンチ包含層上面出土遺物実測図（２）




第175図　C２トレンチ包含層上面出土遺物実測図（３）

**甕**（５〜21）　９・21はD類、その他はC類である。９は$D_3$類で、外傾する短い口縁部が付く。口縁端部は$a_1$である。外面肩部以下には厚く煤が付着する。底部内面には炭化物が付着する。赤褐色を呈し、胎土は粗い。口径14cm、器高24.8cm。21は$D_3$類である。口縁部は僅かに内弯気味に開き、端部は上方へ短く立ち上がり丸くおさめる。外面には煤が付着する。赤褐色を呈し、胎土はやや粗い。口径15.2cm、残存高14.8cm。５・６・14・20はCⅣ類、８・10〜13・19はCⅢ類、15〜18はCⅡ類である。５の体部は僅かに偏球形となる。口縁端部は$b_3$で、内傾する面をなす。内外面の詳細な調整は、器壁の磨滅が著しく明らか出ない。口径12.6cm、残存高15.4cm。８の肩部外面には、波状文が施される。10は$CⅢ_2$類である。体部はやや長めとなる。口縁部は「く」の字に外傾して開く。口縁端部は$a_2$である。外面ハケメ調整は、やや粗く、縦方向の後肩部から底部近くまで横方向に施され、内面頸部直下と底部には指頭圧痕が残る。外面全体には煤が付着し、底部内面には炭化物が付着する。灰褐色を呈す。口径14cm、器高22.5cm。12$CⅢ_1$類である。口縁部は長く外傾して開き、端部は$a_2$で、内方への肥厚は小さく、上端面は僅かに窪む。外面ハケメ調整は細かい。肩部内面には、指頭圧痕と縦方向の指ナデ調整が施される。外面肩部以下には煤が付着する。浅黄色を呈する。口径13.4cm、残存高16cm。20は$CⅣ_2$類である。口縁部は内弯して開き、端部は$b_4$ である。口径12.8cm、残存高11.6cm。

**高坏**（22〜28）　22はⅡ$B_1$類、23はⅡ$A_1$類、24〜26はBⅡ$_2$類、28は脚$A_1$類である。22は、口径に比して浅い坏部で、口縁部は外方へ外傾して開き、端部は薄く舌状をなす。外面底部との境には稜をなす。口縁部はヘラミガキ、底部外面はヘラケズリ調整による。橙色を呈し、胎土は精良である。口径16.6cm、残存高5.2cm。23には、$B_1$類の脚が付く。口縁部は長く外傾して開き、端部は薄く舌状におさめる。口縁部ハケメ、底部外面ヘラケズリの後口縁部と底部下半にヘラミガキ調整を密に施す。脚筒部は、内面にしぼり目をそのまま残し、外面はヘラナデの後細かなハ

ケメを施し、更にヘラミガキを粗く施す。にぶい橙色を呈し、胎土は精良である口径16.1cm、残存高12.3cm。27の器壁は厚い。口縁部にはヘラミガキを密に施し、底部外面はヘラケズリを施す。灰白色を呈し、胎土は精良である。口径13.9cm、残存高5.3cm。24には$C_2$類の脚部が付く。坏部の調整は器壁の磨滅によって明らかでない。筒部外面はヘラナデ、内面は軽くヘラケズリを施し、しぼり目が残る。裾部内面はハケメを施すが、指頭圧痕が残る。浅い橙色を呈し、胎土はやや粗い。口径16.2cm、裾部径11.2cm、器高13.5cm。25・26は灰白色を呈し、胎土は粗い。貴壁の磨滅によって調整技法の詳細は明らかでない。25には、内外面ハケメ、26には口縁部内面ハケメ、底部外面ヘラケズリ痕が認められる。口径15.2cm・16.8cm、残存高5.4cm・5.8cm。

**小型丸底壺**（30～32）　30は$B_1$類、31は$B_2$類、32はD類である。31の体部下半には、焼成後に穿孔がなされる。外面は、細かなヘラミガキが粗く施され、体部にはヘラケズリ痕が認められる。内面はナデ調整による。にぶい橙色を呈し、胎土は精良である。口径10cm、体部最大径7.8cm、器高8.0cm。31は、口縁部と体部内面ナデ調整、体部外面ヘラケズリ調整を施す。明赤褐色を呈し、胎土は精良である。口径10.1cm、体部最大径7.6cm、器高7.5cm。32の口縁部は、外傾して開き、端部は上方へ小さくひきだし、舌状におさめる。体部外面はハケメ調整を施す。灰白色を呈す。口径8.4cm、体部最大径8.7cm、器高7.8cm。

**鉢**（33）　小型の鉢$B_2$である。小さな丸底とやや内弯気味に開く口縁部とからなる。口縁端部は舌状におさめる。口縁部はナデ調整、体部外面はヘラケズリを施す。灰黄褐色を呈し、胎土はやや粗い。口径10.6cm、残存高4.5cm。

**ミニチュア土器**（34）　「ハ」の字に開く低い高台が付く。平底の底部から真っすぐ立ち上がり、そのまま口縁端部に至る。1～3mm大の砂粒を多く含む。口径8.3cm、器高5.7cm。

### 4．C－13トレンチ（第176・177図、図版124・125）

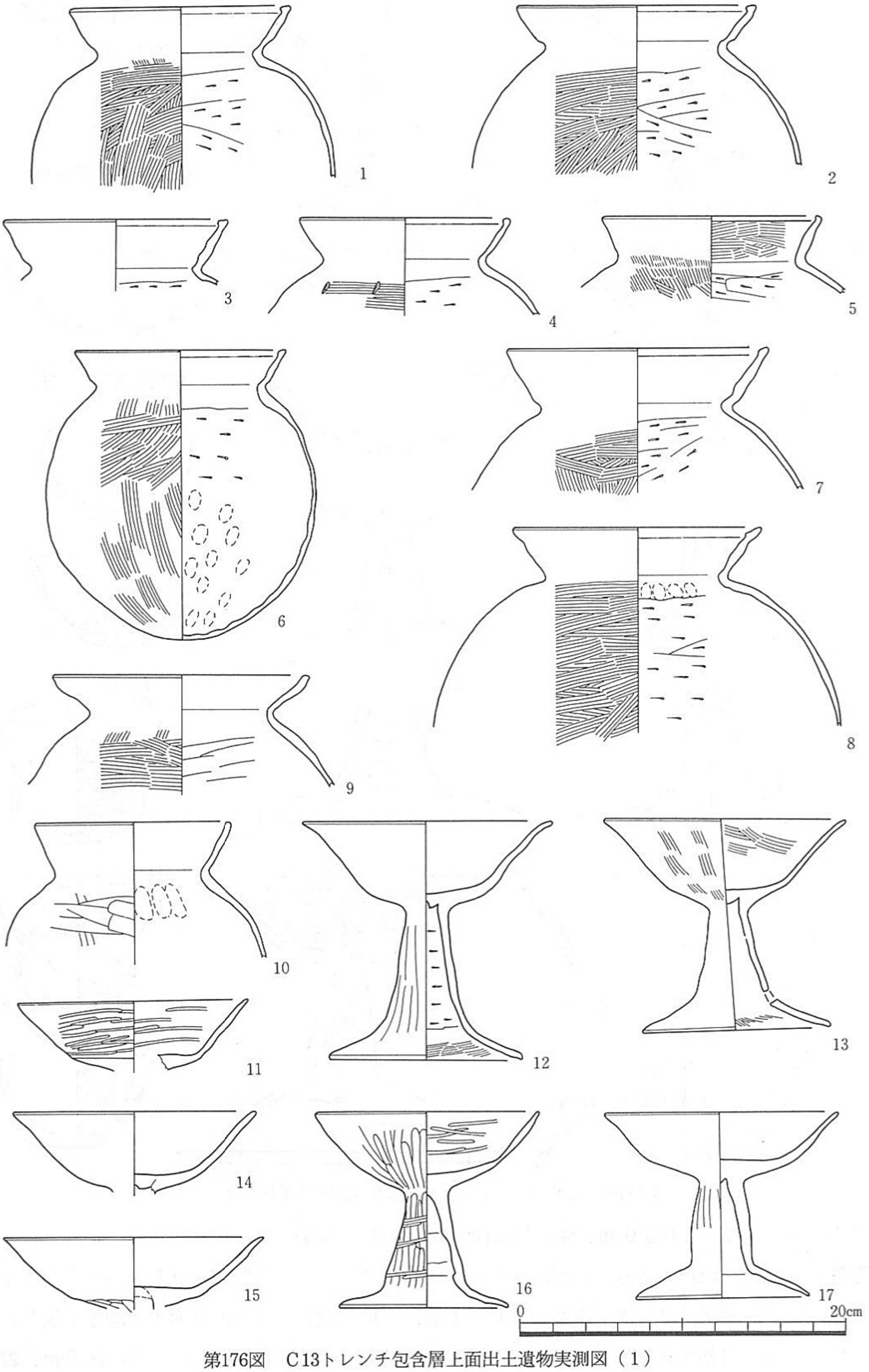
H・I－59～62地区、SD4001の西側からSD4004の間に分布する。包含層上面は、南東方向へ僅かに下がり、T.P.＋5.2～5.4mの間にある。SD4004の最上層には、層厚1cm前後の炭層が広がり、このSD4004とSD4003の間に集中する傾向が窺えた。C－1・2トレンチで見られた複数土器の集合する状態は、C－13トレンチでは見られなかった。（付図12）

**甕**（1～10）　10は、若干肩部が丸味を持って張る体部と、長く内弯気味に開く口縁部とからなるもので、体部外面には、タタキメが施された後強いナデ調整が施され、体部内面はナデ調整が施され、肩部内面には指頭圧痕が認められる。口縁部はヨコナデ調整を施すが、内面には、ハケメがかすかに残る。口縁端部は丸くおさめる。灰黄褐色を呈し、胎土はやや粗い。口径12cm、残存高8.5cm。5は$A_1$類で、口縁部の約5分の1の破片である。口縁部内面と体部外面には細かなハケメを施し、内面ヘラケズリは頸部直下に及び、頸部はナデ調整によって丸味を持つ。全体に器壁が厚い。口径13.5cm、残存高4.8cm。1～4・6・9はC類である。7はC$Ⅱ_2$類、2・8・9はCⅢ類、1・3・4・6はCⅣ類である。1はC$Ⅳ_3$類である。外面のハケメは粗く施される。内面ヘラケズリは頸部直下に及び、肩部内面には指頭圧痕が残る。口径13.5cm、残存

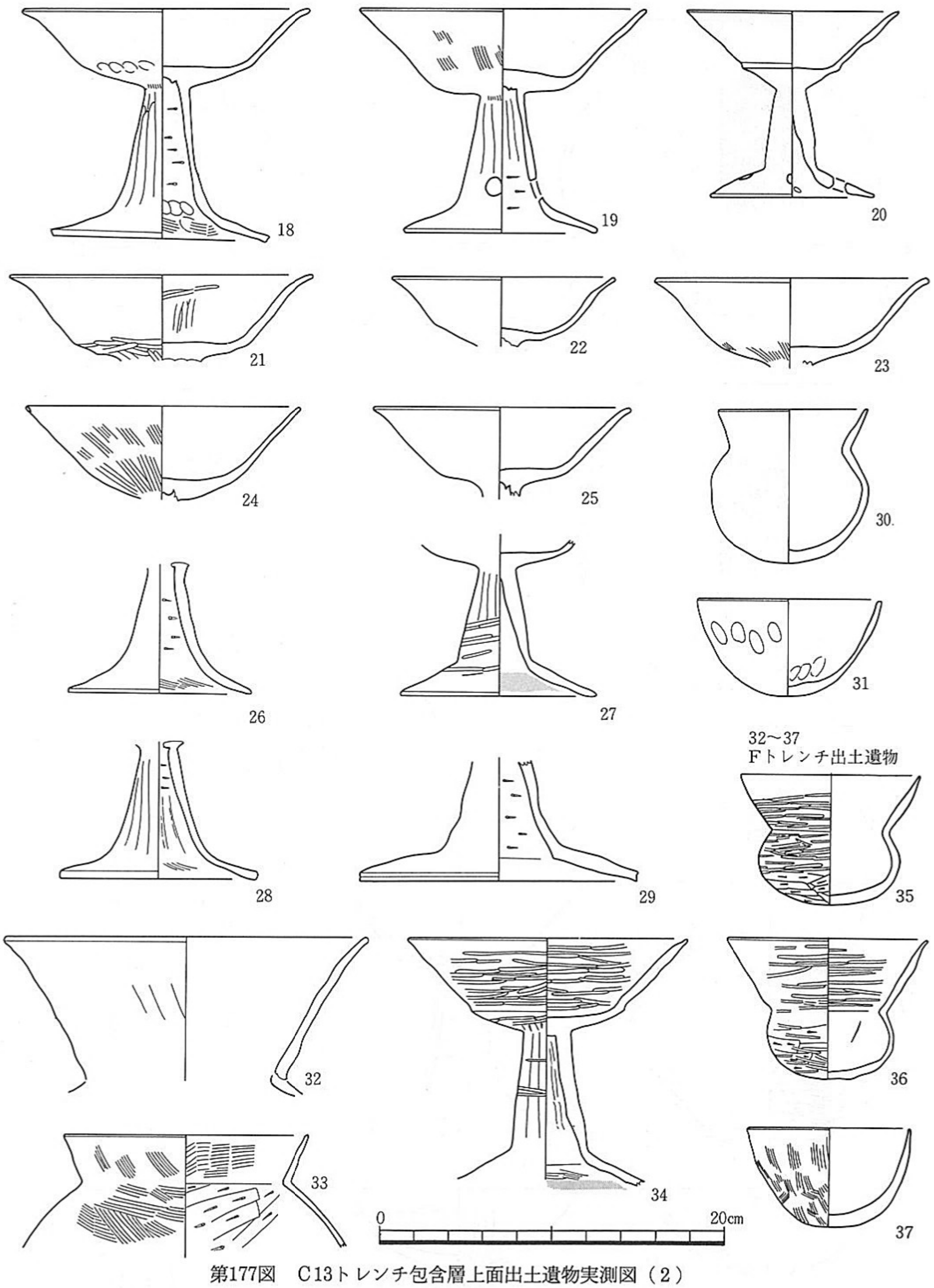
高10.8cm。2はCⅢ$_2$類である。口縁部は内彎して開き端部はａ$_2$である。内方への肥厚は小さく、上端は平坦な面をなす。口径14.3cm、残存高11cm。4の肩部外面にはヘラ状の工具による刺突痕が横方向に並ぶ。6はCⅣ$_2$類で、体部はやや長めとなる。口縁部は外傾して開き、端部はａ$_1$で、内方への肥厚は小さい。外面のハケメは縦方向に粗く施され、内面体部下半には指頭圧痕が顕著に残る。口径12.7cm、器高17.8cm。8の体部は、肩部で大きく張り、口縁部は「く」の字に外傾して開く。端部はａ$_3$である。外面ハケメは、横方向に粗く施される。口径15.2cm、残存高12.3cm。9の口縁部は内彎した後端部で上方へ開く。口縁端部はｂ$_4$で、上端は平坦な面をなす。口径15.6cm、残存高7.2cm。

**高坏**（11～29）　11・15・21はⅡＢ$_1$類で、脚部を欠く。口縁部は外傾して開き、端部は薄く舌状におさめる。11はヘラミガキをやや粗く施す。口径14.1cm。残存高4.4cm。15は、内外面丁寧なナデ調整で、底部外面のヘラナデは強く施され、外面に稜をつくる。口径に比して浅い坏部である。口径15.9cm、残存高4.3cm。12・13はⅡＡ$_2$類、14・18・19・23・25はⅡＢ$_2$類で、12・13・18・19にはＣ$_3$類の脚部が付く。13・19の脚部には、裾部と筒部の境に円形の透し穴が2方向に穿孔される。口縁部は、ハケメの後丁寧なヨコナデ調整が施される。筒部は、外面ヘラナデ、内面ヘラケズリが加えられ、13・19は上半にしぼり目を残す。裾部は、外面ナデ調整、内面ハケメ調整が施される。18には、坏部外面の底部と口縁部の境と、脚部内面の筒部と裾部の境に、それぞれ指頭圧痕が顕著に残る。12は、口径15.3cm、裾部径11.8cm、器高14.7cm。13は、口径14.9cm、裾部径11.2cm、器高13cm。18は、口径16.8cm、裾部径12.6cm、器高12.4cm。19は、口径16.5cm、裾部径11.2cm、器高13cm。21は、口縁端部が強く外反する。口径に比して浅い坏部である。内外面丁寧なナデ調整によって、器壁は平滑となる。灰黄色を呈し、胎土は精良である。口径17.7cm、残存高4.8cm。16はⅢＣ類で、Ｂ$_2$類の脚がつく。口縁部は内彎して開き、底部との境は器壁が薄くなる。外面縦方向のヘラナデを丁寧に施した後筒部に横方向のヘラミガキを粗く施す。口縁部内面は粗いヘラミガキ調整、裾部内面ナデ調整を施し、筒部内面にはしぼり目をそのまま残す。口径13.7cm、裾部径10.3cm、器高12cm。17はⅢＢ類で、Ｂ類の脚が付く。全体に器壁の磨滅が著しく、調整は明らかでない。口径14.3cm、裾部径10.7cm、器高11.4cm。20は、脚部より外傾して開き、薄く舌状の端部に至る坏部とＢ類の脚部とからなるもので、坏部の底部と口縁部には段をなす。筒部は細く、上半は中実となる。裾端部は薄く舌状におさめる。裾部には、円形の透し穴が4方に施す。内外面は丁寧なナデ調整を施し、器壁は平滑となる。灰黄褐色を呈し、胎土は精良である。口径12.3cm、裾部径9.5cm、器高10.8cm。29の筒部は円錐状に開き、屈曲して低く「ハ」の字に開く裾部へ移行する。裾部は器壁が厚く、端部は外方へ小さくひきだす。外面と裾部内面はナデ調整を施す。にぶい黄褐色を呈し、胎土は粗い。裾部径16.2cm、残存高7.0cm。

**小型丸底壺**（30）　Ｄ類である。外面は2次的な加熱によって器表面の剥離が著しく、詳細な調整については明らかでない。口縁端部を欠損する。灰黄色を呈し、1～4mm大の砂粒を多く含




第176図　C13トレンチ包含層上面出土遺物実測図（1）




第177図　C13トレンチ包含層上面出土遺物実測図（2）

み胎土は粗い。推定口径8.6cm、体部最大径9.1cm、推定器高９cm。

**小型鉢**（31）　IIB$_2$類である。底部は僅かに平底気味で、体部は内弯して立ち上がりそのまま口縁端部に至る。端部はヨコナデ調整を施し、上端に平坦な面をなす。内外面ナデ調整を施し、外面と底部内面には指頭圧痕が認められる。内面暗灰色、外面灰白色を呈す。口径10.7cm、器高